

---

# 義勇艦隊奮戦録

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

義勇艦隊奮戦録

### 【Zコード】

Z4806C

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

日本海軍退役士官白根幹夫は満州で造船所を建設。そしてそこで艦隊の編成に着手する。そして彼が作り上げた義勇海軍は、過酷な歴史の流れへと身を投じていく事となる。中国、ソ連軍による満州への攻撃。そして日本とともに、アメリカとも戦火を交える彼らの行く先は?

## 会社設立

1910年3月12日日本租借地遼東半島旅順

「「」が満洲か！！」

この日、1人の日本人がこの地に降り立つた。男の名は白根幹夫。  
帝国海軍の退役少佐  
で、歳は32歳であった。

彼は海軍兵学校と海軍大학교を優秀な成績で卒業し、将来を嘱望  
されていた。しかし、軍という組織に見切りをつけた彼は、エリー  
トコースを捨てて海軍を退役した。

彼の生まれは愛知で、実家は地主階級の農家であり、その3人兄  
弟の末っ子であった。

二人の兄のうち1人は幼くして死んだが、最終的に家督は長男が  
継ぐ事となつたため、彼は食うに困らない軍人に道を進めた。しかし、半年前父と兄が相次いで結核で死亡するという事態が発生した。折しもそれは彼が退役して直ぐのことと、彼はそのまま実家を継ぐ  
ことも出来た。

だが、彼は農家になるつもりは毛頭なかつた。そこで、彼は実家の資産を全て売り、新天地満洲で事業を起こすことにした。

この時期、日本は日露戦争後露西亜から満州と呼ばれる地域の一部である、中国遼東半島の租借権を引き継ぎ、また南満洲鉄道の経営と、その付属地の管理も行っていた。

さて彼がこの地で起業した事業、それは造船業であった。その名も大亞細亞造船。

この時期彼は、まだまだ海運は発展が見込める事業と思っていたのだ。そこで、持ってきた全財産と銀行や友人からの借款により、旅順に1万t級ドッグとその他造船施設を建設したのだ。

旅順はかつての露西亞太平洋艦隊の拠点であり、湾口が狭いことから機雷などで封鎖されやすいという欠点があつたが、それに目さえつぶれば良港といえた。彼がこの地に建設場所を選んだのはそこによるところが大きかった。そして、1914年待ち構えていたようく歐州で大戦が勃発、日本はその特需の恩恵にあずかることとなり。造船業も例外でなかつた。

わずか1年半で会社は全ての借款を清算し、さらに造船施設の拡張に入った。

もつとも、白根は不思議と感が良かつたらしい、1917年に入ると新規建造を手控えるようになつたのだ。

「あなた一体どうしたのですか？」

突然の社の方針転換に、経理部長である妻のマツは困惑した。

その彼女に対し、白根は一言ひづった。

「この大戦はもう直ぐ終わる。そうなつたら不景気が来る。それに備えてのことだ」

この言葉どおり、1年後には第一次世界大戦は終結し、そしてそれとともに戦争特需も終わり、変わつて戦後不景気が始まつた。さらに、29年には後に第一次大戦の遠因ともいえる世界大恐慌がヨーロークで発生することとなる。

あらかじめ大亞細亞造船はこのことを予想し防衛作を立てていたこともあり、倒産ということは避けられた。

さて、大東亜造船では現地人の雇用も行つていた。ただし、白根社長は他の日本企業のように一方的な搾取は行つてはいなかつた。日本人、朝鮮人、中国人、人種に関係なく基本最低賃金は同じで、また工員食堂での食事も全職員に同じ物が出された。

会社の一部管理職からはこのような施策に対し、予算の無駄使いという指摘もあつたが、白根はそういう声には耳を貸さなかつた。

「彼らとて言葉こそ違うが同じ人間。下手に差をつけてストライキを起こされたり、反日感情を持たれたりするよりは数倍マシと私は思うのだが。それに比べれば安い投資と思うよ。」

こう言い切つて彼は施策を断行した。また、工員同士の日常会話ではそれぞれの母語を自由に話すことを許可している。

これに対しても、スパイが入り込むのではという不安の声が上がつたが、これも白根は無視した。

「自分の会社の社員を信用出来んどうする。それよりも、こちらも中国語や朝鮮語を勉強するいい機会ではないか。」

白根は自ら朝鮮、中国語の勉強を行い、さらに社員にも奨励した。

いつ言ったこともあり、朝鮮系や中国系を含めた社員によるストライキなども起きる「ひとはほとんど無く、社の経営は安泰であった。

しかし、そんな白根にも野望があった。それは。

「軍艦をいつか作りたい。」

であった。

## 会社設立（後書き）

御意見・御感想おまちしております。

## 社長の野望

白根社長の野望。それは軍艦を作ることであった。しかし、当たり前のことだがそれは簡単なことではない。

まず、軍艦とは海軍の持ち物である。つまり、海軍が造船所に艦艇の建造を依頼しなければならない。だが、この時点（1931年）において、大亞細亞造船には軍からの造船依頼は全く無かつた。

この時期日本の軍艦の建造は、大手で日本国内にある石川播磨や川崎等が引き受けており、新興の会社で外地に本社があるような会社に依頼が回ることなど無きに等しい。おまけに、この時期海軍軍縮条約による海軍休日のため、各国は軍艦建造を手控えており、旧式艦の代替建造を除けば小型艦艇さえ作れる余地は無かつた。もちろん日本もご多分に漏れず、その状況下にあった。

そんな状況下であつたが、白根は軍艦建造に固執した。かつての軍人としての憧れが未だにあつたのも事実だったが、目的の中に多分に含まれていたのが、経験を積むことだった。

だが、どんなに想いを募らせてても、依頼が来なければ船は作れない。しかしそんな中で、白根はある大それた考えを思いついた。

「依頼が来ないなら自分で作ってしまえばいいんだー！」

はつきり言つて、最初は言つた本人自身馬鹿げた考え方だと思つていた。ところが、それに社内で賛同した人物がいた。

「出来る出来ないはともかく、設計だけでもしてみるとことは大きな

「歩だと思います。」

そう言つたのは、2年前に就職した設計家の北上晴信であった。彼は、帝大をトップの成績で卒業しながら、軍や大手企業で採用されず、この辺境の会社に就職した変り種である。

「この彼の一言が、白根を勢いづかせる」となる。そして、考えてこらう間に白根もある点に気付いた。

「平時は民間船。戦時は軍艦として戦える船ならどうだらうか？」

最初彼が考えたのは、俗に言つ特設艦船の新規設計であった。

特設艦船とは、戦時に不足する艦艇を民間船の改造によって補う考え方から生まれた物で、特設巡洋艦や特設空母がある。かの日本海海戦で最初にバルチック艦隊を見つけたのも特設巡洋艦「信濃丸」であった。

通常、こつした艦船は戦争が始まつたら急いで改装されるのが筋だが、今回の場合だと逆になる。だが例が無いといえば嘘になる。後のことだが、日本郵船の豪華客船「春日丸」もあらかじめ空母化改造を前提に設計された。

この特設艦船なら平時でも需要が見込める。もちろん、戦争が起らなければ商船としてのみ使われるだろうが、それならそれで白根は構わなかつた。軍艦もどきであろうと、全く軍艦ではない船を建造しないよりはマシであった。

ひつして、白根社長の野望は動き始めた。彼が設計を依頼したのは先程の北上技師であった。

「平時は民間船。戦時は戦闘艦として使える船を設計して欲しい。細かいことは全て君に一任する。」

他の技師を差し置いて、彼が一番若い技師である北上に設計を依頼したのは、自分の意見に唯一賛成したからと、彼の能力を試すためであった。

数日後、社長室にやつて来た彼は簡単な設計概略図を白根に提出した。

「駆逐艦か・・・・」

予想に反し、北上が提出したのは駆逐艦の設計図であった。ちなみに、駆逐艦は日本海軍では軍艦ではない。菊の御紋章がないからだ。一応漸減戦術では重要な地位にはあるが、あくまで、補助艦艇に過ぎない。

「どうして駆逐艦にしたのかね？」

巡洋艦の設計図でも出してくる物と期待していただけに、その言葉には刺があった。しかし、北上は平然と説明しだした。

「まず我が社の建造施設の能力です。我が社のドックは1万t級1基と1万5千t級1基のみです。この施設で巡洋艦クラスの建造に入つたら、どちらかのドックをしばらく塞いでしまいます。それでは社の経営が成り立ちません。」

これには白根は驚いた。しつかり経営面からの意見を言ったからである。しかも、理に叶っている。

「なるほど。他には？」

「他には乗員の問題です。乗員を確保するあてとしては、現状においては我が社の運航部門から連れてくるしかありません。しかし、巡洋艦では5～600人の乗員が必要です。そのような余裕はありません。それに加えて、巡洋艦では予算面でも高くなります。ですから妥当な線で駆逐艦を選んだのです。」

「ここまで言われ、白根は北上が本氣で作るつもりだとことを理解した。

ちなみに、運航部門といつのは、遼東半島、朝鮮半島、台灣、日本本土の近海航路を運航する、大亞細亞造船の子会社、大亞細亞通運のことである。

「わかった。駆逐艦にした理由については理解した。では、この艦の概略を話してくれ。」

ソヘンヒュプロジェクトは大きく動き出した。

## 社長の野望（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

北上は白根社長に、設計した駆逐艦の説明を始めた。

「取り敢えず全長は100m強。排水量は1200tから1300tを考えています」

「100m強？小さいな。確かに友人に聞いた話だと、海軍の特型駆逐艦は全長が120m前後だと言つし。それに排水量も2000tはあるらしいぞ」

白根は北上の設計案に疑問を呈した。

「確かに、艦隊決戦に特化したならばそれでも良いでしょう。しかし、その様な設計では造りが複雑になります。そうなると量産も利きませんし、費用も膨らみます。我が社の現状にはとても合っていないとは思えません」

北上が自分の考えを示す。

「なるほど。では、この駆逐艦はどのような用途で使うのかな？まさか船団護衛のみと言うのではないよな？私は船団護衛の重要性はわかっているつもりだが、今の帝国海軍では恐らく受け入れられまい」

この時期、日本海軍では駆逐艦は多数の魚雷を積んで敵艦に肉薄し、場合によつては戦艦をも葬り去る艦隊決戦の一員とみなしていた。そのため、量産は難しいが多数の魚雷を積み込んだ大型の特型駆逐艦を重点的に建造していた。

しかし、北上の設計案ではそれに逆行する形となる。特に船団護衛は帝国海軍では軽視されがちな仕事である。白根自身は第一次大戦時のイギリスに対するじボートの話や、日露戦争での「常盤丸」の例から、船団護衛に対して理解はあった。だが彼も元帝国海軍軍人、その考えが海軍では殆ど受け入れられないことぐらい予想できた。

「確かにそうです。ですから自分はこの艦を多用途艦として設計したいと考えています」

「ほほう。それはどんな物かな?」

「ほほつ。それはどんな物かな?」

「まず考えているのは敷設艦です。私の設計では爆雷の搭載数を90個と多めに設計しました。これなら簡単に機雷に搭載し直して敷設艦になります。また、同様に簡単な改裝で測量艦や掃海艦にも転用できるようにしたいと思っています」

「なるほど。確かにそれは便利だ」

「それにです。この艦は確かに特型に比べれば戦闘力は落ちますが、直線を多用した設計ですから起工から半年以内で完成するはずです。我が社のような小規模な設備の造船所でも、やり方に拘れば年に7、8隻は建造可能な設計になっています」

「簡単に言えば戦時急造艦か・・・」

「いいで、白根は少し渋い顔になる。戦時急造艦とは、戦時にその

名の通りマスプロされる艦艇の事で、大概造りが粗く、平時の艦艇に比べて性能も低い。ただ数が集められるのが売りで、はつきり言えば邪道な船だ。そのため、設計者や用兵からはいい田で見てはもうらえない。

「そうです。しかし、日本ではこのよつた艦艇の建造はあまり例が無いはずです。特に凡用性を高めたことはこれまでに無いことだと思います。また、生存率を上げるために機関の配置もシフト配置にしました。これなら片側の機関室がやられても、もう一方の機関室で動けるはずです」

元来、日本の艦艇は防御設計やダメージコントロールの面で他国に劣っていた。そう考へると、この駆逐艦はかなり先進的と言えた。

白根はこの艦の実現性や実用について、頭の中でしばらく考えていたが、ついに決断した。

「わかつた。君の設計案を採用しよう」

そう彼が言つと、北上の表情がこれ以上になくながら満足な物となつた。

「ありがとうござます」

「ああ。ところで、この艦は具体的な武装について書かれていませんか？」

「それは現状では、搭載する武器の重量が分からぬからです。たゞ、概算では5インチ程度の小口径砲を2～3門。それに魚雷発射管を1基積みたいと考えています」

「なるほど。よろしい、細部の計算などを行い設計を詰めてくれ。  
それが出来次第材料の発注と建造計画を練るぞ」

「わかりました社長」

「いひして、建造は本格的に始まることとなる。

## 建造計画（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 竣工

昭和6年初頭。この時期満洲は様々な軍閥や馬賊が存在している混沌とした地域であつた。その一角である遼東半島がある関東州の租借権を、日露戦争に勝利した日本は保有していたが、それと同時に満洲を走る南満洲鉄道の経営権も保有していた。

その満鉄沿線の鉄道付属地の支配権も日本の物で、徵税する権利さえあつた。

しかし、それさえも所詮は広大な満州に置いてはほんの一握りの土地に過ぎなかつた。

この時期、少数ではあつたが満洲各地には日本人が入り始めていた。しかし、父親の張作霖を日本軍に爆殺された息子の張学良を始めとする抗日派の宣伝もあって、日増しに満洲での排日運動が高まつていた。これに対し、日本政府はあくまで平和外交路線をとつた。

40年後なら世界に胸をはれる政策であつただろうが、この力こそが一番という考え方の時代に、それはあまりにも弱腰に見える政策であった。現に張学良は日本政府の弱腰の政策を批判している。それどころか、彼は日本がかつて清と結んだ条約を無視し、満鉄に对抗した新しい鉄道の建設さえ開始していた。

これら排日・抗日運動に対し、満洲在留日本人の中には、関東軍の出動を願う者もいたが、直接日本の権益を侵されない限り、それは土台無理な話だった。

そんな中、大亞細亞造船も自衛策を打ち出した。抗日派テロに備

えて、自警団の組織を行つたのだ。

当初、関東軍はこれに難色を示した。ただでさえ、外国人を多く雇う企業である。その外国人に銃を持たせるのには不安があつたからだ。しかし、白根社長は粘り強く交渉を続け、条件付ながら関東軍や各省庁に承諾させた。

条件とは、300名以内であること。小銃以下の武器のみ使用を認めること。非常時には関東軍の監督下に入るのこと。そして行動記録を逐一関東軍を始めとする各省庁に提出することであつた。

白根にしてみれば、これまでも憲兵が会社に外国人が多数働いていることで、スパイ容疑で社員をしおり引こうとした所を未然に阻止してきただけに、この交渉にも自身があつたようだ。

しかし、実はこれには裏があった。実は今回関東軍の中にこの妥協案を飲ませようと工作を行つた者がいたのだ。

その人物こそ、後に満州事変の際活躍する石原莞爾大佐であった。

実は石原大佐は以前にも大亞細亞造船を幾度か訪問しており、他民族を受け入れながら健全経営に成功している点から、特級の優良企業と褒め称えていた。

その彼は白根社長とも友好を深めていた。これが後に大いに歴史に影響することとなるのだが、この時点できれいなかつた。

そんな中、駆逐艦の建造も順調に進んでいた。北上技師はこの駆逐艦が実験艦的な色合いが濃いことをいい事に、様々な工夫をこら

していた。その一つに電気溶接の多用があった。

電気溶接はこの時期、まだまだ未熟な技術であった。鉛を使った建造に比べ、重量や予算を軽減できるという点があつたが、強度に不安が残っていたのだ。しかし昭和4年の独逸装甲艦はこの電気溶接で完成したし、また日本海軍でも使用を開始していた。

北上はこの技術を大胆に導入した。最終的に、予測された強度不足は起きず、重量軽減に成功することとなる。

また彼は一部艦上構造物のブロック化も行った。

これは幾つかの部品をあらかじめ地上で作り、それを積み木よろしく組み立てる工法である。今回は艦橋のみであつたが、こちらの試みも成功し、後に船自体のブロック工法化に繋がることとなる。

そして昭和6年2月に建造を開始した2隻は、4月中旬に進水した。その進水式は小規模な物であつたが、石原大佐もお忍びで参加したといつ。

ちなみに、当局に出した書類には、近海航路用小型貨物船と書いて誤魔化した。

そして2隻は同年7月1日。そろつて竣工した。船名（まだ艦ではない）は「流星丸」と「彗星丸」であつた。

2隻は乗員が配属されると早速、渤海で訓練に入った。この時点では、未だ武装は施されていなかつたが、2隻が戦闘行動に入るまでに残された時間は短かつた。



## 竣工（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 満州事変

昭和6年9月15日。満洲にて紛争が発生した。

ラストエンペラー溥儀を主席とする、清朝亡命政府を名乗る組織が突如として清朝再興をめざし、満洲各地の張学良軍に襲い掛かったのだ。世にいう満州事変の勃発である。

もちろん、この計画には関東軍の暗躍があった。

この時関東軍は、紛争から満鉄沿線の邦人保護することを目的に、満鉄沿線および租借地各方面へ出兵したが、その行動はほとんど清朝亡命政府の蜂起と同じ時であり、さらに出兵後は張学良軍が治安維持活動中の関東軍を攻撃したとして、張学良軍を攻撃し清朝政府軍を支援している。

戦後、この張学良軍の攻撃は虚偽であつたといふことがわかつている。また、蜂起をおこした清朝亡命政府軍も、実際は名ばかりで日本人が部隊の8割を占めていたとも言われている。

つまり、この事変は関東軍の謀略であつた。関東軍（石原莞爾）は、清朝政府の蜂起であれば日本の侵略行為とならないと踏んでの行動であった。そして自分たちがあたかも巻き込まれたように装つたのだ。そうすれば万が一国際連盟の調査団が来ても言い訳が聞くと思つたようだ。

実際、日本の証拠隠蔽や工作は完璧で、後のリットン調査団も、「関東軍はあくまで自衛行動を取つたのみ」と国際社会に公表している。

この時、張学良軍は29万という大軍勢であった。しかし所詮は寄せ集めの兵であり、次々と敗走し、清朝亡命政府はわずか3ヶ月で満洲全域の掌握を宣言することとなる。

さてそんな中、大臣細田造船の2隻の駆逐艦、「流星」と「彗星」（武装を施し戦闘艦となつたため丸をとつた）は渤海へ向けて出撃していた。

実は石原莞爾は事変勃発前に、2隻の駆逐艦の建造默認と武装の一部提供の見返りとして、白根に出撃を要請してきたのだ。

当初、白根は出撃に対し難色を示した。鍛度が足りないし、また乗員の中には朝鮮人や台湾人なども混じつており、出撃する理由といふ物がなかつた。しかし、石原との懇意や見返り条件のメリットも捨てがたい物であつた。

そこで彼は乗員にこうつ説明した。

「まもなく起つるであろう満州での独立紛争には、おそらく関東軍が関与するのはまず間違いない。そうなれば、満洲に出来る新しい国は日本の傀儡国家にさえなりかねない。諸君らが今回出撃し、戦果を上げることは、今後出来るであろう新国家に置いての諸君らの地位を高め、関東軍への抑止力になるはずである。それを信じて私についてきて欲しい。」

この演説が功をなしたかはわからないが、結果幸いにも乗員の脱落者は最低限度で済んだ。

そして9月14日夜、2隻は密かに旅順を出港していった。

さて、2隻にまつての時点で一応武装は施されていた。当初計画では5インチクラスの小口径砲2・3基。魚雷発射管1基に爆雷、そして機銃若干という予定であったが、まず主砲は入手ルートがなく、仕方なく石原大佐が回してくれた陸軍の10・5cmカノン砲をそれぞれ1門ずつを前部甲板に設置した。もちろんこれだけでは不足である。しかし元々火砲が不足している陸軍から提供されたのはこのカノン砲のみであった。

そこで、白根や北上らは極秘裏に欧米での武器購入を図った。もちろん、相手には怪しまれかねないが、他に方法がなかつた。

海賊退治用と称して、スウェーデンのボフォース社から40mm単装機関砲6基をなんとか買い込み、これをそれぞれ2基ずつ後部砲塔予定位置に設置した。

魚雷は高価で入手ができず今回は無しだ。爆雷も潜水艦が相手ではないので積んではいない。あとは若干数の機関銃のみである。

これらの急いでしりぞえ火器は出撃1ヶ月前に配備されたので、砲員の練度は最低ランクであり、また操船についても、貨物船からの引き抜き乗員が多いため、集団行動には不慣れであつた。船を扱えると、海戦が出来るというのはまったく違う問題なのだ。

そんな不安で一杯の戦隊指揮をとるのは、元海軍中尉で最近まで貨物船船長をしていた大貫小校（少佐）である。ちなみに階級は訓練や筆記試験の成果からあくまで暫定的に定めた物である。

彼らに与えられた任務。それは渤海から脱出する張学良軍の外洋

艦艇を撃滅することで  
あつた。

## 満州事変（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

なおこの作品で史実の歴史に似ている所はあっても全く関係ないことをお知らせします。

## 敵艦発見！！

この当時、張学良軍には小規模ながら艦艇を保有する部隊が存在した。その大部分は内陸部での使用を前提にされた河川用砲艦であったが、わずかではあるが外洋航行可能な艦艇も存在した。

今回、2隻に下命されたのは、これら張学良軍の艦船が渤海から脱出し蒋介石軍と合流することの阻止であった。つまり、渤海の封鎖である。

そんな中、臨時旗艦となつた「流星」では、大貫司令が先任仕官の黄上尉と話し合っていた。

ちなみに、黄は名前のとおり中国系で、日本領台湾の出身である。彼は志願兵として海軍に所属した経験があり、それを買われて今の役職についた。

現在、大亞細亞造船では社内共通語として日本語を採用している。これは社員の割合が未だ日本人の方が多いからだ。

ただし、中国語、朝鮮語の使用ももちろん認めているから同族同士の会話では普通にそういう言葉が使われている。また、社内では簡単な挨拶がお互い出来るよう、それぞれに簡単な会話を紹介する授業も行われている。

一方で、今回出撃した2隻の艦艇の乗員の9割が日本人である。

これは日本語で、しかも海上任務で必要な専門用語を喋れる人材が、外国人にはまだまだ少ないからだ。

「敵はいますかね？」

黄が大貫に聞いてくる。

「わからん。情報では渤海に何隻かいるのは間違いない。しかし、いくら渤海が狭いとはいえ、2隻で敵を探すには広すぎる。せめて航空索敵でもできればな。」

レーダーもないこの時代、敵を探すには見張り員の視力のみが頼りであった。しかし、それで敵艦を発見するのは中々難しい。艦隊ならともかく、相手は獨行の艦船である可能性が極めて高いからだ。

「まあ私としては敵を見つけられれば御の字と思つていてるがね。」

大貫がそんな事を言った。

彼は今回実は出撃するのには反対の立場であった。

戦隊の練度は極めて低く、戦闘などまだ無理だと彼は思っていたからだ。また、不足しているのはそれだけではない、武装を大して装備していないのもそうだが、何よりも士官クラスの乗員や、戦闘に関しての造詣を持つている者が圧倒的に不足している。これはもちろん、その手の人間は海軍で士官教育を受けたような者でないと勤まらない。しかし、そつそつ上手い具合に退役士官を雇えるわけがない。

大貫にしても、少尉にまで任官したものの、士官学校の教育は受

けていない叩き上げだ。

彼の歳が50という年齢を見てもわかる。

また、黄にしても経験は水兵のみであるから、作戦立案等の幹部としての能力は、大貫や白根が教えた急いでしらえの物しか持ち合っていない。

だからこそ、大貫としては今回戦闘には乗り気ではなかつた。

「せめて後3ヶ月は訓練が必要なのだ。」

それが彼の正直な感想であつた。

それでも、彼は雇われ身分であるから行かねばならない。

そして出撃後迎えた9月15日。無線室には次々と関東軍や清朝亡命政府軍の動きが伝わってきた。しかし案の定、張学良軍の動きに関する情報は陸上の物に限定された。

「情報はこないか。」

それを知つて、大貫はため息をついた。

今回の出撃期間は6日間である。燃料はなんとか手配したが、食料等の物資が間に合わなく、それだけしか行動できない。19日には帰還せねばならない。

もつとも大貫にはそれでも良いという考え方があつたが、経験を積むだけでも彼にしてみれば万々歳だ。

とにかく彼らはそれまで訓練を繰り返しつつ渤海で行動を続けた。

状況が大きく動いたのは、18日であった。

その日正午前、見張り員が船影を捉えた。

「船影発見。本艦前方。距離は18000から200000。数2。

」

## 渤海海戦 上

「機関両舷全速！－不明船に接近し国籍を確認せよ－－」

大貫の命令が飛ぶ。

機関室ではエンジンの出力が上げられ、それとともにスクリューの回転数と速度が上がっていく。ちなみに、「流星」の機関はレシプロではなくディーゼルエンジンだ。そしてそのエンジンは最高速力30ノットを叩き出す。

「距離22000！－！」

まだこの距離では正確には相手を判断できない。

「クソ、偵察機があれば！－！」

大貫が悪態をつく。この時期、航空機は発展途上の段階ではあつたが、偵察機としての価値は大きくなりつつあった。優秀な水上偵察機である90式水上偵察機が登場したのもこのころである。

「しかし司令、敵との距離はグングン縮まっています。どうやらあの船の最高速力は20ノットも出てないようです。」

黄が大貫を落ち着かせるように言つ。

「距離、20000！－！」

見張り所からの新たな報告が来る。

「総員戦闘配置！！」

「ここに来て、大貫は乗員に戦闘配置を命じた。

（命令と共に、艦内の乗員が一斉に戦闘用服装に身を包んで、各自の部署に走る。ちなみに、大日本造船義勇艦隊の服装は海軍との差別化を図つてかなり違うタイプの服となつていて、強いて言うなら現実世界の航空自衛隊のデザインに近い物である。

「距離180000！！」

「もつと近づくんだ！！」

今回積んで来た武器の中で最大の射程を誇るカノン砲の射程は15300mである。さらに、有効射撃をするためには10000以下に接近しなければならない。それ以下ではたとえ当てても有効弾にならない可能性がある。

「距離150000・不明艦船は小型船1、中型船1の模様。」

「ここに来て、ようやく敵に関する情報が入ってきた。

「主砲ならびに後部機関砲は射撃準備！！！」

まだ敵と決まつたわけではないが、大貫はいつでも戦闘できるようにしておく。

各砲では砲員たちが砲の仰角をあげ、旋回させる。

「距離12000・不明艦船は砲艦らしきもの1、輸送船らしき物  
1・速力12ノット！！」

「」の報告を聞いて、多くの乗員が安堵の表情をした。砲艦ならば勝てる自身があるからだ。

「距離10000・」

「主砲測距始めよ！」

「流星」には簡易ながら測距儀が搭載されている。

「距離8000！不明船急速転舵！あ、張学良軍の旗を確認。間違  
いありません。敵です！」

「主砲撃ち方用意！！マストに」の旗を掲げよ。それと発光信号で停戦を要求しろ！！」

「」の旗とは、国際船舶信号旗で、「我貴船に停戦を要求す」の意味を持つ。

艦橋横の信号所では、発光信号で停戦要請を打つ。中国語、続いで英語でそれぞれ2回づつ打たれる。しかし、敵は止まらない。

「敵艦船、停船の意思はない模様！！！」

見張り員の報告が来たと同時に、敵艦船が発砲するのが見えた。

「敵発砲！！」

渤海海戦の始まりであった。

## 渤海海戦 下

先に発砲したのはなんと張学良軍の砲艦であった。「ひらりの停戦要求を不当と考えたようだが、反論も一切なしで力に抵抗を行つてきた。

「先に撃つただとー！」

さすがに大貫も驚きを隠さない。

そして敵弾が着弾するが、それは見当違ひの位置であった。

それを見て、大貫は新たな命令をだす。

「どうやら敵の練度も低いようだな。よし先任士官、「彗星」に打電。貴艦は敵輸送船を追跡し拿捕せよと信号を送れ。敵砲艦は我が艦のみで仕留める。」

「了解です。」

黄上尉がすぐに信号所に命令を出す。

その間に、敵は第一射を行つたが、またしても遠弾であった。これは張学良軍の艦艇の練度不足を物語つていた。

「一いちも砲撃準備完了しています。距離は既に7200・

「よろしい。撃ち方始めー！」

大貫の命令が発令された数秒後、「流星」のカノン砲が初弾を発射した。そしてしばらくしてその砲弾が海面上に水柱を立てたのが確認された。

「遠弾です！！」

見張り所からの報告である。それに対し、大貫と黄は渋い顔をする。

「艦長。」

「やはり練度不足か……それに砲自体も陸軍の砲だからな。海上で撃つことなど配慮されておらんだろうじ。」

続く第一射は先程より敵に近いところで着弾したが、有効弾にはほど遠かった。

「貴様ら、もひとつひやんと撃たんか！！」

「はーー！」

カノン砲では、砲術長が砲術員に活を入れるが、どんなにがんばろうと精神力だけでは練度の不足はどうにもならない。何せ彼らはこの砲の実射訓練を一度だけ、しかも陸上目標にしか撃つたことがないのだ。また、射撃指揮装置も計算尺に毛の生えたような代物しかない。

「距離6800！！」

さらに敵との距離は詰まる。その間に両艦とも発砲し続けるが、

どちらも未だに有効弾を得ていない。しかし、砲艦の方は12cmクラスの砲を前後2箇所に載せているらしく、飛来する砲弾は敵の方が圧倒的に多い。

「クソ！…門数では敵のほうが有利だ。せめて魚雷があれば。」

いくら言つても無い物ねだりである。そして、その言葉に罰を付けるか如く、敵の砲弾の一発が至近弾となつた。

衝撃が艦を揺さぶる。

「ど！」をやられた？被害対策班はただちに作業にかかり…！」

元来、駆逐艦といつのはブリキ缶とか車引きと言われるよつに、敵の攻撃を受けたら沈みやすい。「流星」も一応機関をシフト配置にするなどの被害対策を行つてはいるが、装甲は全く無い。だから一発の砲弾でも打ち所が悪ければ致命的な打撃になりかねない。

「ただいまの砲弾は至近弾。艦体への被害はなし。ただし破片により2名が軽傷。」

どうやら大きな被害を出さずに済んだようだ。人的被害も最小限度で済んだ。

「距離5500…！」

「後部機銃群は有効射程に入り次第撃ち方始めよ。」

門数で劣る以上、ありとあらゆる方法をとらねばならない。

と、そこへ明るい一コースが入る。

「「」彼らの砲弾も至近弾を得ました。」

「ようし、その調子だ！！みんながんばれ！！」

その言葉が通じたのかわからないが、ついに命中弾が出た。敵艦の煙突にパッと爆発の炎が確認できた。

「命中弾！――！」

その途端、艦内各所で歓声が上がる。

「ようし、もう一息だ！！」

そして、機銃の射程にも入り、2基の40mm機関砲がそれぞれ火を噴いた。

機関砲といえど、40mmというのは対戦車砲なみの口径である。防御力の弱い小型艦には大きな脅威となる。

案の定、煙突への命中弾で動きが鈍った敵艦は、40mm機関砲弾が命中するとさらに動きが鈍り、速力を減じていく。それとともに、こちらのカノン砲弾も命中しだす。そして、5発目を受けたところで、燃料庫か弾薬庫に引火したのか、敵砲艦は大爆発を起こした。

「よし、撃ち方やめ！！敵艦の生存者救助を行つ。」

ついでつきまで殺し合いをおこなつていた相手を助ける。何か矛

盾しているようだが、それが戦争であり、戦いを行う上で矜持だつた。

「流星」は速度を落とし、内火艇を降ろす。

最終的に、沈没のスピードが速かつたため、生存者はわずか13名であった。

「生存者に対する国際法に則った扱いを行つよう。」

こうして、「流星」の初戦闘は終わったが、その結果は敵砲艦1を撃沈したものの、予想以上の弾薬と時間の浪費を招き、さらには命中弾2発、至近弾3発を受けた。さいわい命中弾が不発で済んだからよかつたが、破裂していればこちらも相応の打撃を受けていた。

「まだまだ課題が多いな。」

「ですね。」

大貫と黄がしみじみと語つたところで、「彗星」から入電が入る。

「我敵輸送船拿捕に成功せり。」

彼らは一応の作戦目標を達成した瞬間であった。

「では帰るか。これより本艦は「彗星」と合流し、旅順に帰還する。」

「了解……。」

じつして彼らの初戦闘は終わった。

## 渤海海戦 下(後書き)

御意見・御感想お待ちしています。

なお、戦闘シーンでは作者の研究不足な面があります。お許しください。

## 創設 義勇海軍

渤海海戦の3ヶ月後、長春、後の新京においてラストエンペラー溥儀が満洲帝国の独立と、清朝の復活を全世界へ向けて宣言した。

日本はこれを支持し、ただちに日満協約を結んだ。

一方、蒋介石の中国国民党政府は、これを日本による中国への内政干渉と国際連盟に提訴した。だが、その後送り込まれたリットン調査団の調査では、「日本の謀略の可能性が高いものの、確實なる証拠は得られず。また、満州国政府については、民族自治を掲げての独立運動と認めざるえない」という結論で終わった。

そんな中、大亞細亞造船では白根社長が、今後の2隻の駆逐艦の処遇について考えていた。

「参ったな、社の独立採算では2隻を駆逐艦として維持できまい。しかし、満洲政府の言つことを前部聞き入れると2隻と乗員を完全に明渡すこととなつてしまつ。困つた。」

満洲帝国政府からは2隻をただちに新生満州国軍へ編入したいという要請が来ていた。しかし、それとともに、社員の軍への編入も求められていた。

これについては、白根社長は反対だった。自社の優秀な社員を、好き勝手に軍へ引っ張られることはかなわないからだ。さらに、彼としては軍という硬直した組織が嫌いだったのも、除隊した理由の一つだった。

その後、関東軍の石原少将が仲介にあたり、幾度かの交渉の末、

最終的に決まつた処遇は以下のようないわ物であった。

まず、艦2隻については新設される満州国義勇海軍の所属となる。これは正規の海軍ではなく、大亞細亞造船といふ民間会社が、有事に満洲防衛のため働く組織である。平時の行動は満州国との協議のうえ、大亞細亞造船が主体となって動かすといつ広い裁量権が会社側に認められ、逆に有事には満州国の命令を絶対とするといふ物である。ただし、実際は義勇海軍が戦時でも作戦を立案、実行した。

乗員については仮階級を正式な階級として認め、義勇海軍の所属とする。ただし、その人事に関しても大幅な裁量権を会社側に認める物であつた。

これによつて、白根は2艦の所有権と行動権をなんとか守りきつた。ただし、維持費については政府との折半ということとなつた。これは痛い出費である。ただし、戦時は全額政府が出すが。

さて、そういうわけで、白根は大亞細亞造船の方は会長といふ名譽職について現役を退き、満州国義勇海軍司令へと就任した。階級は少将である。

昭和7年2月1日。満州国義勇海軍の結成式が旅順港にて行われた。

満州国義勇海軍の編成は第一戦隊「流星」「彗星」、第一補給戦隊「黄海」の3隻であつた。

「黄海」は先の渤海海戦で捕獲した、張学良軍の3000t級貨物船の改造艦である。

「よつやく、ここまでこぎつけたな。」

白根司令官は式場でそうしみじみと語ったと言われている。

しかし、やることは山ほどあった。

まず、組織の拡充である。現状では兵員を自社の運航部門から集めているが、今後もその体制が続けば人員不足が起きる。それに加えて、あくまで急ごしらえの乗員であるから有事には不安が大きい。渤海海戦でもそれが顕著であった。

そこで、4月に白根は港そばの入江に、旅順海洋学院という水兵養成学校を創設した。

第一期生には定員100人に対しても400人が応募してきた。その多くが貧しい家庭の子供たちであった。

第一期生の教育は試行錯誤の連続となつた。まず、言語 자체が大きく違うことが問題となり、続いては教材の不足であった。

前者は北京官話での教育に統一した。この時期には、白根らの中国語も大分上達していたから、彼らも自ら教鞭をとつたりした。後者は日本海軍に教範の譲渡を頼んだが、結局軍事機密のため、かなり古いタイプの物しか渡してもらえず、白根らはそれを改定して使用した。

しかし、さらに大きな問題もあった。实物教材の不足であった。

## 新装、義勇艦隊

義勇艦隊の悩みの種となつたのは、教材、特に実技教材の不足であつた。軍隊ではない彼らはそれゆえに、購入するのが難しい物がたくさんあつた。特に、高価であり扱いも難しい魚雷はその筆頭といえた。

この時代、魚雷一本家一軒と言える時代である。ようするに、数十年後のミサイルとほぼ同じと考えてよい。そして、その扱いにも熟練の技が要求された。

結局、水雷科目の勉強は学科のみで、実技は艦艇配備後とされた。

また、練習生用の練習艦がないのも問題であった。戦時のみに必要な魚雷や砲撃の実技演習を急ぐ必要なこの時点ではあまりなかつたが、航海術、機関等の勉強は学科と同時に実技も行わないと両立できない物である。そのため、義勇艦隊では早急な実技演習可能な練習用艦艇の整備が求められた。

練習艦については当初、白根は日本海軍から中古艦艇の購入を考えた。しかし、義勇艦隊所属の2隻はディーゼル機関装備のため、既在艦では教育がしにくいという問題となつた。そのため、最終的に自前で造ることとなつた。

ベースとなつたのは、先に竣工した「流星」級の駆逐艦で、これの武装を練習用最低限度まで取つ払い、そこへ練習生居室や教室等を設置した物とした。

じつして昭和7年12月に竣工したのが練習艦「大洋」であった。

武装は12・7cm砲1門、40mm機関砲1基に爆雷12個で、あいたスペースには50名の練習生が乗艦可能なよう居室や講堂が増設された。

練習生の総数は100人だが、航海、機関科練習生のみでそらく、ローテーションを組んで乗り込むのであればこれで充分過ぎるほどであった。

一方、先に竣工した「流星」と「彗星」の2隻はようやく手に入つた本格的な武装を設置するため、改装に入つていた。

改装の内容はまず、艦前方に設置されていた陸軍の10・5cmカノン砲が撤去、陸軍に返還され、変わりに日本でようやく購入許可が降りた特型駆逐艦と同型の12・7cm砲を単装にしたうえで、前後に1門ずつ搭載した。当初は3門搭載の予定であったが、先日の渤海海戦で、急いでつけた40mm機銃が意外と扱いやすい兵器とわり、これの連装タイプを2基、2番砲予定地に据え付けた。

ちなみに、この40mm機銃の性能を聞きつけた陸海軍も大慌てで購入している。前者は95式、後者は97式でそれぞれ採用している。海軍が送れたのはビッカーズ社のものと性能比較していたからだ。

また、魚雷もようやく搭載された。これも日本からの輸入製品で、61cm魚雷発射管3連装1基3門が艦中央部に搭載された。

この時期、世界各国海軍の使用魚雷の標準口径は53・3cmであった。そのため、61cm魚雷は空氣魚雷といえども、各国の物よりも炸薬量や航続距離の点で優位に立っていた。

ちなみに、後年太平洋戦役で米海軍を震撼させた酸素魚雷を、義勇艦隊はしばらく装備させてもらえなかつた。高価で取り扱いが難しいことと、何より海軍の最高機密であつたからだ。さすがに日本企業相手でも最高機密を売るほど日本海軍も甘くは無い。

じつして、取り敢えず戦える体制となつた義勇艦隊は、渤海での国境警備任務や、時折出没する密輸船や海賊船の警戒を主任務として働いた。

**新装、義勇艦隊（後書き）**

御意見・御感想お待ちしています。

## 満州防衛体制

建国直後から、満州国軍では日本から軍事顧問を招いて、軍の建設に力をいれていた。

一時期、日本陸軍内部では、関東軍の大規模な増強を画策する派閥もあつたが、それでは満州国をせっかくここまで独立国として見てきた努力が水の泡になる可能性があつた。けつきよく、この案は満州国が自國軍隊の整備完了までの5年間のみ2万名の増員を認めるという相互協定が結ばれることで決着した。

實際には、さらに軍事顧問団といふ名目でプラス1万名が送られている。

さて、そんな満州国軍が軍の整備を急いだ理由が、隣接する中華民国の動きであつた。

蒋介石が満州事変後から共産党への攻撃を緩め、満洲から脱出した張学良と共に満洲帝国の打倒を狙っているという噂がまことしかに流れていた。

さいわい、建国から1年半の間は特に何もなかつた。これは幸運というべきだつた。なぜなら、建国当初の満州国軍はそれまで満州内にいた馬賊や軍閥の集まり的な面が強く、加えて質的・量的な面で圧倒的に中華民国軍に対して劣つていた。

満州国は建国後から、海外の顧問団を招聘したが、一部に英国人が混じつた以外はほとんど日本からの顧問団だつた。この時期独逸、アメリカは中華民国との関係が強かつたし、フランスは不介入方針

であったからだ。

ただし、この英國からの軍事顧問団も昭和10年までに全て撤退している。ヨーロッパでの独逸の動きがきな臭くなつたからだ。

ちなみに、この時期満州国は積極的な海外企業の誘致を行つたが、結局誘致できたのは独逸のポルシェ社の子会社と英國のロールスロイス社の子会社のみであつた。この時期、満洲の治安はあまり良好ではなかつたのだ。

満洲での外國系企業が増えるのは、皮肉にも独逸のユダヤ排斥による、ユダヤ人移民の流入が進んでからのこととなつた。

さて、そんな中、満洲国では海軍の整備も行つていった。主力は、ソ連との国境である黒龍江を守る河川艦隊で、多数の新鋭艦が建造された。ちなみに、この艦隊は河が凍る時期には乗員は陸戦隊として陸に上るという面白い艦隊であつた。そういうわけか、後にこの艦隊は陸軍に吸収され、江防軍となつてゐる。

一方、外洋艦隊はもともと領海が少ないと、義勇海軍がその任務の多くを担つてゐるため、積極的な整備は進められなかつた。代わりに、司法権を持つ沿岸警備隊的な色合いが濃い海辺警察の整備が行われた。これには、日本から750t級旧式駆逐艦の「櫻」級1隻が供与された。また、少数の軍事顧問もやつて來ている。

ちなみに、實際のところ海辺警察の規模は義勇艦隊よりも小さかつた。そのため、海辺警察で整備されたのは人のみで、艦艇の整備は上記の1隻と少数の小型船に留まつた。事実、海辺警察の人間が出向という形で義勇艦隊に乗り込み、共同で国境警備や漁業保護の任務に就く事もあつた。

こうして、満洲の防衛体制は強化されていったが、その満州国を震撼させる情報が、昭和8年に入ってきた。それは、蒋介石がアメリカやドイツ、ソ連から武器を購入し陸海空軍の早期整備を行い、満州国への侵攻を行うという物であった。

## 満州防衛体制（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 決戦前夜

昭和8年2月1日。この日、義勇海軍と海辺警察共同による初めての観艦式が挙行された。参加艦艇は駆逐艦3隻に漁業保護船4隻であつた。各艦は満艦飾の単縦陣で旅順沖にて公募抽選での上、大亞細亞通運の貨物船に乗り込んだ一般市民600人との日特別に足を運んだ満州国重臣、関東軍幹部の前を進んだ。

この行事の意味は、国民の意思統一を早めることや乗員の士気上げの意味も込められていたが、それに加えて中華民国への圧力もあつた。

中華民国が満洲を狙っているという情報が入ったのは昭和8年1月中旬のことであった。この情報に、満州国政府首脳陣は凍りついた。この時期、満州国の防衛体制は未だ整っていなかつた。それどころか、兵隊を含む全国民にさえ、満州国への帰属意識が固まつてはいない時期であつた。そんな時に攻められてはたまらない。そのため、満洲国内では整備された一部部隊によるこうした式典や示威行動が行われた。

しかし、中華民国は確実に戦力を増強していた。3月には、アメリカやドイツから少數ではあるが艦艇の購入契約を行つたという情報が飛び込んできた。

陸上戦力のみならず、海上戦力でも凌駕されることは、満州国にとって死活問題であつた。しかし、逆にこれをチャンスとした物がいた。誰あろう、白根義勇海軍司令官だった。

「中華民国が海軍を増強するのなら、」ひらも海軍を増強できる良

い機会となる。」

部下の前で白根は笑いながら話した。

この時期、義勇海軍はさらなる拡張に挑んでいた。

例えば、漁業保護船4隻が建造されたのもその一つであった。

この船は有事に際して小型護衛艦として使えるよう設計されていた。設計したのはあの北上技師で、排水量は500t、武装は独逸クルップ社から輸入した8・8cm高角砲1門に、40mm連装機關砲1基であった。4隻のうち、1隻が義勇海軍所属であった。

その他の装備面では、「流星」級駆逐艦を新たに2隻建造することとなつたし、さらに入員の教育設備も拡充された。

あらたな教育の場とされたのは、台湾のホウ諸島であった。

この時期、大亞細亞造船は社の規模拡大を行つており、造船所も新たに日本の豊橋や鹿島、そして台湾の基隆に設けられていた。ちなみに、基隆の造船所ではタイ向けの駆逐艦4隻を建造している。

ホウ諸島に設けられた施設は元々大亞細亞通運の船員養成学校として作られたが、その一部を義勇海軍の教育施設とした。

その設立に、当初台灣總督府は難色を示したが、日滿融和という外交面での利益重視と、大亞細亞造船はあくまで民間会社ということで、最終的に許可を取り付けた。

そのため、第一期、第一期生徒は定員がそれぞれ100、120名であつたが、第3期からは200名に増員されている。

義勇海軍の教育カリキュラムは、まず3ヶ月の地上での講義・座学等の基礎教育を行い、続いて練習艦を使っての実地演習の上、全員見習水兵として配属され、3ヶ月で正式に2等水兵として採用される。

ただし、おもしろいのは例えば地上訓練、及び実地演習などで必要以上の成績をおさめ、そしてテストに合格すると、飛び級で教育を受けられたりもした。こうした生徒は採用が早められたり、昇級が早いなどの特典に預かった。士官学校の無い義勇海軍ならではの制度だった。

そうして、義勇海軍の人員面での拡張が着々と行われた。

さて、対する中華民国軍は昭和8年3月にまずアメリカから平甲板型駆逐艦6隻を購入している。

この駆逐艦は第一次大戦中に275隻が建造されたクラスで、そのほとんどは大戦に間に合わず、五大湖でモスボールされていた。

主砲は10・2cm砲4基と弱いが、水雷兵装は12門と強力だった。しかし、これだけなら充分義勇海軍でも対処できると判断されただろう。しかし、間もなく白根らを慌てさせる情報が飛び込んできた。

## 決戦前夜（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

満州国を震撼させたニュース。それは中華民国海軍が米国と独逸から戦艦ならびに巡洋艦を手に入れたという物であった。

その後、さらに具体的な情報が入り、戦艦は誤報と判明したが、巡洋艦は事実であった。蒋介石が新たに入手したの艦艇とは、まずアメリカから重巡「ペンサコラ」と軽巡「オマハ」。そして独逸からは軽巡「エムデン」であった。

「ペンサコラ」は、アメリカの条約型重巡の1隻で、20cm砲10門を持つ。アメリカでは最古参の重巡であったが、義勇海軍からみれば強力な戦闘艦艇である。また、「オマハ」はオマハ級軽巡のネームシップで、世代的には日本の5500t級軽巡に近いが、15・20m砲を10門持ち、やはり強力な艦艇といった。

ちなみに、この「オマハ」に対抗して、日本は重巡「古鷹」を建造している。

そして「エムデン」は独逸が第一次大戦後に始めて造った大型艦艇である。しかし、ベルサイユ条約下での厳しい条件から、戦闘艦艇としては性能が今ひとつであった。ただし、やはり小形艦艇のみの義勇海軍にとつては脅威に違いない。

これらが戦力化されれば、義勇海軍、ひいては満州国は蒋介石軍に大きく遅れをとり、さらに青島に軍港を作られれば、それこそ黄

海の制海権を奪われかねない。

義勇海軍ではさつそく対策会議が開かれたが、戦力増強と情報収集による敵動静の徹底研究以外、方策はなかつた。

義勇海軍ではただちに戦力増強策が協議された。

艦隊司令の白根少将。教育隊司令の尾張上尉。戦隊司令の大貫中校に各艦の艦長。大亞細亞造船の北上技師ともう一人、満州国軍の将校が集まり対策が協議された。

「艦艇の戦力増強についてはどうなつてゐる？」

会議が始まると直ぐに白根は北上に問う。

「まず後4ヶ月もすれば「流星」級3・4番艦が竣工します。また、新たに5・6番艦の建造も承認され、既に資材の発注に移っています。この他に漁業保護船、つまり対潜艦についても新たに2隻が配備されますが、こちらは艦隊戦には数としては含まれません。」

北上が書類をめぐりながら現況を話す。

「わかつた。では人事面ではどうか、尾張上尉？」

尾張上尉も海軍からの流れ組であるが、6年ほど海軍兵学校で教官をしていたので現在教育隊司令である。彼の訓練は厳しいの一言であるが、反面をヨーモアもわかる人物で、生徒からも評判の良い人物である。

「人事面では、現在の建艦計画であるなら、乗員に不足は生じませ

ん。むしろ余裕があるくらいです。さらに、教育教範も整備しつつあるので採用枠を大きくするのも不可能では有りません。」

これは満足すべき報告である。

「わかつた。では北上技師。早急に中国海軍の艦艇を凌駕できる艦艇を設計、量産できるかな？」

白根は視線を北上に向ける。

「残念ながら無理です。時間無制限なら可能でしょうが、時間が限られていると考えるなら不可能です。」

中国海軍の購入艦艇を凌駕する性能となると、最低限重巡クラスの船を作らねばならない。しかし、そうなると設計や建造の手間は駆逐艦の比ではない。加えて、乗員の育成も急がねばならない。

「王少尉。中国海軍の艦艇がこちりに回航されるのはいつかな？」

今回ただ一人出席している正規軍人、満洲国軍の王情報将校であった。滿州國軍は、中華民国やソ連の侵略を警戒しているので、早いうちから情報収集組織を作っている。もちろん、日本軍の肝いりだ。

「最初の艦艇が回航されるのは2ヶ月後と見られています。少なくともその4カ月後には最後の艦艇が青島に到着するでしょう。」

王少尉の情報が正しければ、その後艦艇の乗員育成に1年と見積もつても16カ月後には戦力化されてしまう可能性が高い。それに對し、義勇海軍は少なくとも同等の戦力を揃える必要があった。



## 対策会議（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

結局、義勇海軍最高幹部会議の結果は、予算内で出来うる限りの部隊装備拡充となつた。

しかし、この会議は面白い物で、参加者の多くは日本人であるが、中には王情報将校のように中国系や台湾系も混じついていた。そのため、白根をはじめ、日本人も出来うる限りの中国語を使おうとした。しかし、王たちの多くは日本語を解するものばかりで、大貫のようないつしも中国語で喋つた後に、王に綺麗な日本語で答えられるという場面が幾度も合つた。

いつした言語が「ちや まぜ」になる状況は、大亞細亞造船や義勇海軍内では当たり前になっていた。言葉も文化である。そして文化は、常に変容するといつて事実が見られる場面である。

閑話休題。

会議の翌日、北上技師が司令官室に呼ばれた。

「巡洋艦ですか？」

白根が北上に命令したのは巡洋艦の建造だった。

「そうだ。「流星」級駆逐艦と同じく、短期で量産可能な船だ。もちろん、安価にして欲しい。難しいだろうががんばってくれ。成功したらボーナスもちゃんと出すぞ。」

中華民国海軍が巡洋艦を持つことから、対抗しての計画であらう

が、また厳しい要求である。

巡洋艦と駆逐艦は確かに同じ戦闘艦ではあるが、大きさを比べるだけで、3倍から6倍ある。加えて乗員の数も5倍になるし、主砲の威力も上がるから強度も強くしなければならない。加えて、建造期間も大幅に伸びる。

「一応帝国海軍に図つて、軽巡「夕張」の概観図を譲渡されるとなっている。それを参考にしても良いということだから、とにかく短期間で作り上げて欲しい。それと、台湾の方は別の人間を派遣するから心配しないでくれ。」

「つして、北上技師はこの日から部下の若い技師たちと相談して新型巡洋艦の設計、建造に取り組むこととなつた。

ちなみに、台湾というのは、基隆にある台湾支社の方である。現在台湾支社では、台湾海上警備隊の創設のための準備が行われていた。

この台湾海上警備隊というのは、この時期増えつづいた中国からの密入国者と密輸物資を摘発するために立ち上げられた警察組織で、その巡視船を亜細亞造船が建造中なのだ。もちろん元となつているのは「流星」級だ。そして、この組織も有事には日本軍に協力する準軍事組織である。

中華民国ではこの時期政情が不安定で、職をもとめて台湾、満洲に流入する人間が多い。加えて、日本などへのアヘンの供給基地ともなりつつあり、それらが日本などに持ち込まれていた。日本としてはそれを断ち切る必要があった。もちろん、それらの任務には義勇海軍も、満洲海辺警察も加わっている。

それはそうとして、北上技師は数日間、徹底的に「夕張」の概観図を研究した。

「夕張」は平賀中将の設計した艦の中でも有名な艦である。3000t程度の船体に、5500t級軽巡に近い武装を施したのだ。その秘密は、全ての武装を中心線上に集めた点にあった。

武装を中心線上に集めたことで、武装による重心の分散が避けられ、コンパクト化が可能となつたのである。もちろん、デメリットもあるが、この時点ではメリットがデメリットを大きく上回っていた。

北上は、じつに注目した。

**新型艦建造（後書き）**

御意見・御感想お待ちしています。

北上技師は「夕張」を参考に新型軽巡の設計を開始した。ただし、「夕張」の全てを参考にするわけではない。どんな優秀な設計でも、万能という設計はありえない。実は「夕張」も致命的な欠点を抱えていた。

実は「夕張」を設計した平賀造船中将は保守的な設計家で、電気溶接は全く採用していなかつた。だから、電気溶接で造る大亞細亞造船でそのまま模倣するだけでも、鋳の分の重さを考えて、再設計が必要となる。もつとも、今回は完全模倣ではないのでこれは特に問題ではない。問題となるのは、「夕張」の余裕のない設計であった。

平賀中将の設計艦艇はいずれも排水量限界の装備が施されており、その後の改装で新たな装備を施すことが難しかつた。技術が日進月歩の時代にそれでは直ぐに艦が使い物にならなくなる可能性が高い。

北上はこの点を考慮して設計しなければ成らない。

結局、「夕張」のみならず、ジェーン海軍年鑑で見たイタリアやフランス、オランダなどといった海外の艦艇も考慮しながら、北上は新型艦の設計を行つた。

とりあえず基準排水量5 000t。全長145m。速力30ノット。武装15cm連装砲3基に水偵1機を搭載するというコンセプトで設計を詰め、最終的に1ヶ月で終わらせた。もちろん、高い量産性を持たせるために電気溶接やブロッサム工法を用いた建造を前提に設計した事は言つまでもない。

そして設計完了の翌月には起工式が行われるという超スピードで建造は進められた。それだけ彼らも追い詰められていたのだ。

建造開始から13カ月後の昭和9年7月、新型軽巡「海龍」と「神龍」はそろつて竣工した。

同艦の性能は、全長144m、排水量5120t。速力30・3ノット。主武装は日本海軍から購入した15・5cm連装砲3基6門。その他に8・8cm単装高角砲2基2門。40mm連装機関砲4基8門。61cm3連装魚雷発射管1基3門。水偵1機。爆雷投射器ならびに爆雷投下軌条。乗員450名であった。

15・5cm砲は「最上」型軽巡に搭載されたものと同型であった。設計した日本海軍側は当初は新型砲の輸出を渋つたが、海軍の力を義勇海軍に及ぼしておきたいという思惑もあつてか、最終的に譲渡している。

8・8cm高角砲はあのドイツ製88mm砲の模倣砲である。後に4基に増強されたが、この時点では2基のみである。水偵は日本から輸入した90式水偵が搭載され、カタパルト発進する方式だつた。61cm魚雷は今回も空氣魚雷である。

また、この2隻と同時に新たに駆逐艦2隻も建造、配備されたことにより、義勇海軍の戦力は軽巡2、駆逐艦6、補給艦1、漁業保

護船1となつた。

この2隻の竣工によつてかは分からぬが、その後しばらくの間、中華民国海軍は大規模な行動を起こさなかつた。

しかし、それは嵐の前の静けさであつた。

## 軽巡「海龍」（後書き）

評価・感想・意見お待ちしています。また、こんなキャラクターを出してほしいや、組織や艦艇に対する意見も受け付けています。

## 束の間の平穏

新型軽巡「海龍」が竣工したことにより、一息ついた北上技師は久々に家へと帰る。彼には妻と4歳になる一人の子供がいた。

「ただいま！－！」

玄関の扉を開けると、そこに一週間会つていなかつた妻の美麗がいた。

「あら、おかえり。」

「ただいま美麗。」

彼の妻は中国人。彼が8年前大阪に住んでいた時に結婚した。1つ年下で、芯の強い女性である。彼女も働いており、造船所の電話交換手をしている。

「子供たちは？」

「もう寝てる。託児所でずっと遊んでいたらしいから。」

彼らの子供、麗と忠は双子で、今が一番無邪気な年頃である。

「これから。手開いてるなら手伝つて。」

「そうか。飯は？」

二人は夕飯を作り、久しぶりに夫婦水入らずで会話する。

「美麗。今度の休日、大連の百貨店でも行こうか？」

「どうしたんだい？一緒に出かけるなんて？」

北上は忙しい身で、年末年始を除いて休みはあまりなく、造船所に泊まることも珍しいことではなつた。

「いや、今日から一週間の休みが貰えたから。それに、ボーナスも出たし。子供たちとも遊んでやりたいし。」

彼はチラツと眠っている子供たちに視線を移す。可愛い寝顔を見ていると、仕事のことなど一切忘れてしまつ。

「じゃあ今度の日曜日出かけようか。」

そんな平和な光景が旅順の一角で見られる中で、世界は混沌としていた。平和な光景は嵐の前の静けさに過ぎなかつた。

この時期、ヨーロッパの独逸ではヒトラー率いるナチスが勢力を大きくしつつあり、またイタリアではムッソリーニ率いるファシスト党が台頭していた。

また、日本とアメリカの間でも中国権益をめぐって、その関係に暗雲が垂れ込めつつあつた。

緊張高まる世界に置いて、満州国、その中でも特に日本租借地は平和そのものだつた。治安は安定し、旅順や大連の都市計画も順調に進みつつあつた。

建国から4年経つ満州国全体でみれば、奉天や新京といった大都

市では開発が進み、また法制度や教育制度、国民登録も進められつつあった。

加えて、日本をはじめ、少数ではあるが欧米系の企業も進出し、徐々に国としての体裁を整えつつあった。

かつて一時期日本は大規模な農業移民を計画したが、結局未開根地の不足から少数の派遣団の派遣に留まっている。

以前の日本なら満洲の属領化を考えたであろうが、国際的な目がそれを許さなかつた。満州事変の際も、現関東軍司令となつた石原莞爾が苦心したのもこの点につきた。

だから、満州事変後も関東軍の増強は行われず、未だに租借地警備軍の規模を脱してはいなかつた。行動にしても、日滿安全保障条約によつて、平時はその行動を大きく制限されていた。

以前だつたら全く気にしなかつた事を、日本は警戒するようになつていた。ちなみに、その知恵を与えたのは白根とも言われているが、眞実はわからない。

とにかくそういうわけで、もしかしたらただ日本の傀儡地国家になつていたかもしれない満州国は、急速に発展していく。特に工業面での分野では、石炭や鉄鉱石といった豊富な資源を元に順調にその業績を伸ばしていた。

ちなみに、石油も後に出たが、満州で出るのはいづれも重質油で、航空ガソリンなどへの精製が難しい部類の物であつた。

一方で、もちろん元々の所有者である中国はこの状況が面白いは

すがない。満洲奪回のため、幾度か満州国への侵攻を企てていた。しかし、華南、華中の平定という国内問題が思つたように進まず、これまで計画は頓挫続きであった。しかし、昭和10年ごろにはそれら地域も一定の治安回復に成功しつつあり、蒋介石は着々と満洲への侵攻準備を進めていた。

アメリカ、ドイツ、イギリス、フランス、さらにはソ連からも兵器を購入し、戦力の忠実を図つていた。そして、嵐は昭和11年2月26日にやってくることとなる。

## 束の間の平穏（後書き）

御意見・御感想・キャラクターに関する意見お待ちしています。

## 中国侵攻！！

1936年2月26日未明。中満国境線において、中華民国軍による砲撃が始まった。後に第一次中満戦争と呼ばれる戦いの始まりであった。

最初にそれを通報したのは、国境警備隊所属の陸軍少尉、陳青英であった。

彼は砲撃が始まると、直ぐに後方基地につながる電話に飛びついた。

「こちら第42国境警備所、中華民国側からの砲撃を受けている！大規模な侵攻行動であると認む！！」

「了解！！以後はマニュアル通りに、後方基地まで後退せよ！！！」

このように、満州国側が中華民国の侵攻を国境警備隊が確認すると、それらの部隊に退させる光景が各地で見られた。

これは、この時点における満洲陸軍が中華民国侵攻を前提にした行動マニュアルで、国境警備隊は侵攻の確認後は直ちに撤退することを明記していたからだ。勝ち目のない戦闘での戦力の消耗を防ぐためである。

中華民国軍は、各地の国境警備隊の詰め所や駐屯地を砲、爆撃した後、満州国内になだれこんだ。

中華民国は、独逸やソ連、イギリスなどから輸入した戦車で攻勢

した虎の子の機械化師団、第200師団を始めとする精銳部隊を今回 の作戦に充てていた。

6個師団12万名、戦車・装甲車100両。火砲1000門を動員していた。

一方、事前に中国軍の侵攻を予期していた満州國軍は、国境線から一歩下がった基地で反撃の用意を行い。それに伴い、住民の後送を行つ。

この時点で、中華民国と接する熱河省に駐屯する満州國軍と日本軍の兵力は総勢4万名、戦車などは日本から輸入した89式中戦車、94式装甲車、イギリス製のヴィッカース6t戦車、そして日本陸軍が秘密裏に投入していた97式中戦車等計42両。火砲120門であつた。その他に空軍機30機であつた。

中満国境で戦闘が始まつた頃、旅順の義勇艦隊でも非常呼集が行われ、各艦艇は出撃準備を行つていた。

旗艦である軽巡「海龍」では、艦隊司令である大貫少将以下幕僚が揃い、総司令部からの出撃準備を今か今かと待ち構えていた。

「陸上では陸軍や空軍が戦闘を行つているのに、我々だけが何も出来ないなんて、歯がゆい想いです。」

参謀長の長野中校がぼやく。

彼は日本海軍からの転籍者である。一等兵から入ったものの、中々昇進の機会に恵まれず、また階級差が激しいのを嫌つて、義勇海軍に入っている。学業、実技ともに優秀な男ではあるが、性格は強氣で、扱いの難しい男である。

「参謀長。そうほやくな、敵が出てこなければ我々には出る幕がない。」

大貫少将が宥めるよつて言つた。

「そつはいいますが、だつたらこちらから出て行くぐらうしないと。じゃなければ我々は本当の役立たずです。」

長野が強気の発言をするが、もちろん義勇海軍にそのような実力はない。長野自身もそれくらいはわかっている。だが、彼としては友軍が戦っているのに、自分が何も出来ないことが嫌でしちゃうがなかつた。

しかし、この10分後、長野を喜ばす情報が入ってきた。発信源は、中華民国の有力海軍基地であり、黄海方面艦隊の母港でもある青島に潜入していた工作員からだつた。

「中華民国黄海艦隊出撃す。巡洋艦2、駆逐艦5・進路は不明なり。」

## 中国侵攻！！（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 敵艦隊見つ！

中華民国海軍出撃す、の報告を受け、義勇艦隊もただちに出撃した。

艦隊は軽巡の「海龍」を旗艦に、同「天龍」、そして「流星」級駆逐艦6隻といつ編成であった。黄海上という比較的近距離での任務であるため、補給艦はつかない。

これらの艦隊を、義勇海軍総司令である白根以下居残りの将兵たちが見送った。

「ついに出撃ですね、腕がなります。」

参謀長の長野が待つてましたと言わんばかりの表情で言つ。

「そうだな。」

大貫は勤めて冷静にそう言つが、彼自身も前回の戦いと違つてフル装備で一級の艦隊と手合わせができることに内心喜んでいた。

艦隊は巡航速力12ノットで南下した。

同時刻、遼東半島の義勇海軍航空基地と、満州海軍航空基地からは続々と偵察機が黄海上空に出撃しつつあった。

義勇海軍航空隊は、1935年の8月に設立された組織で、渤海海戦で航空機の重要性が認められたために創設された。ただし、設立当初はパイロット育成に重点が置かれたために、保有していたの

は日本から輸入した93式中間練習機、通称赤とんぼの水上機仕様6機のみであった。

そしてパイロットの確保が出来た今年1月になつてようやく90式艦上偵察機2機と90式水上偵察機4機が取得できた。

今回飛び立ったのは艦上偵察機の方である。また、海軍航空隊の方は、奉天にある滿州航空機製造公司でロールアウトしたばかりである3機の94式偵察機が発進した。

計5機といふのは心細い数ではあるが、ないよにマシである。

しかし、結局この日は口が暮れてしまつて発見するに至らなかつた。

翌朝、今度は艦載の偵察機が出撃することとなつた。

「海龍」と「天龍」に搭載されていた90式水上偵察機が射出される。

「頼んだぞ……」

「がんばれ……」

多くの乗員の期待を胸に、2機は艦隊の臣となるべく黄海上空へ舞つた。

その内の「天龍」搭載機の乗員は義勇海軍内でも話題のペアであった。なぜなら、その乗員は女性であったからだ。

「雪江、なにか見える?」

「だめよ五十鈴、全見つからない。」

2人の搭乗員のうち、パイロットは大杉五十鈴、20歳。偵察員が同じ年の衣笠雪江であった。

義勇艦隊では、募集のさいに性に関する制限を課してはいない。しかし、今まで女性が申し込んでくることは殆どなかつた。

そんな中、航空兵第一期生に彼女らが申し込んできたのだ。

彼女らは満州在住で、女学校にあつた飛行クラブで空に憧れ応募してきたのだ。

航空兵は今回募集12人に對して国内外から実に200人近い応募があつた。つまり彼女らは17倍の関門を突破したのだ。その後、練習機により実技訓練においても優秀な成績を収め、この度めでたく艦隊勤務となつた。

しかし、どんなに優秀でも今回が初出撃となつたのには変わりはなかつた。二人とも相当緊張しており、いつもどおりとはいかなかつた。

しかし、幸運とはどこで手に入るかわからない。

突如、近くの空で爆発が起きた。

「キヤーーー！」

「対空砲！？」

彼女らはいつのまにか敵艦隊上空に迷い込んでいたのだ。彼女らだけだったら見つからなかつたも知れないが、中国艦が不注意に発砲したため、見つけることが出来た。

「すぐに艦隊に打電して……」

「やつてるわよ……」

しかし、義勇艦隊は敵の所在を知ることとなつた。

後日、帰還した一人には勳章が授与されることとなる。

## 敵艦隊見つけた（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 沸騰――黄海

中華民国艦隊発見から数時間後、ついに両艦隊は接触した。

「敵艦隊、先頭は巡洋艦「蘭州」。2番艦は同じく巡洋艦「福州」。そして残る5艦は平甲板型の駆逐艦です。単縦陣でやつてきます。」

艦橋上部に設置された櫓から、見張り員が報告してきた。単縦陣とは艦隊が1本の列の用に並んで進む陣形である。

「参謀長、確か「蘭州」は「ペニンサコラ」で、「福州」は「オマハ」だつたな。」

司令官席に座る大貫が長野に問う。ちなみに、既に総員戦闘配置が命令され、一人とも戦闘に備えてヘルメットを被っている。

「はい、確かにそうでした。」

長野は艦形表をバラバラとめぐりながら答える。

「となると敵の口径はこちより大きいな。」

「ペニンサコラ」は重巡であるから主砲が軽巡の「海龍」より4,5cm大きい20cmである。主砲が大きいと威力や射程に格段の差が生じる。

「艦長、敵が発砲しだい速力を上げて回避運動。距離を一気につけ、射程に入り次第攻撃開始。」

「は！！」

大貫の命令に対し、艦長の日向大佐が復唱する。

しかし、予想した敵の射程に距離を詰めても発砲する気配は全くなかつた。

「撃つてこないな？」

「撃つてきませんね。」

大貫も長野も拍子抜けしてしまつ。

そんな折、信号所から連絡が入る。

「司令、後続の駆逐戦隊が突撃許可を求めています。」

今回引き連れてきた駆逐艦は計6隻だが、これらは3隻ずつで戦隊を組んでいる。そして第一戦隊司令の岡本庄治大佐、第一戦隊司令の対馬雄一、大佐の二人とも、条約の煽りを受けて予備役に編入された元帝国海軍の軍人である。そして二人とも水雷艇の出身だった。

「どうします？」

そう言つて長野も突撃したくてうずうずしているのが、大貫にはわかつた。

彼は決断した。

「いいだろ？。」これより各戦隊は個別に突撃、敵艦隊を各個撃破せよ！！」

命令とともに一気に艦が慌しくなる。

通信長の鄭中尉が命令を各艦に伝えると、戦隊は各個に突撃を開始した。

各個に突撃することは、こちら側が各個撃破される可能性がある。しかし、大貫は部下の練度に自信があった。だから敢えて突撃命令を下した。特に今回は動きが優れている中小型艦が主力である。それも決断への要素となつた。

「機関黒一杯だ！！最大船速に增速せよ！！」

黒とはプロペラの回転数上昇を意味する。ちなみにその逆は赤となる。

機関の出力が上げられ、艦速も上昇する。

「駆逐戦隊突撃します！！」「天龍」本艦に追従します！！」

「主砲戦用意！！目標敵一番艦、弾種徹甲弾！！」

戦闘への動きが一気に加速する。各艦は突撃し、そしてその主砲では発砲の準備が進められる。

そんな中、敵艦隊で複数の閃光がきらめいた。

「敵艦発砲！！」

「回避、いや、そのままだ。」

日向艦長は大貫の命令である回避運動をやめ、艦を直進させた。これは一種の命令違反になりかねないが、大貫は何も言わなかつた。初弾がめつたに当たらない事と、ひからが増速中であり狙いにくいことがわかつたからだ。

案の定、敵の砲弾は明後日の方向に着弾した。

「おいおい、敵はちゃんと狙つてゐるのか？遙かかなただぞ！…！」

長野が呆れ返る。それほどまでに酷い砲撃だつた。

「まさかとは思つたが、日清戦争中と同じで練度が不足してゐるのか？」

実はそのまさかであつた。中国は日清戦争以来まともな海軍を持つとはいひない。艦こそ揃えたが、人間の方が追いついていなかつた。アメリカ軍は少数の軍事顧問を派遣してはいたが、とても間に合わなかつたのだ。これに対し、義勇艦隊は帝国海軍の退役軍人らによつて乗員に対する積極的な教育を行つていた。

その結果がどう出るか、ほどなく証明される。

「どうやら連中は戦争を知らんようだな、我々が教育してやらんとな。」

そう漏らしたのは、駆逐艦「流星」座乗の岡本大佐だった。

「全艦砲雷撃戦用意！…」

黄海に、鉄の暴風が吹き荒れようとしていた。

**沸騰――黄海（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。

## 突撃！！

突撃を開始した駆逐戦隊は、一気に間合いを詰める。

岡本大佐率いる第一駆逐戦隊は右に、対馬大佐率いる第二駆逐戦隊は左にそれぞれ展開する。

それに対し、中国艦隊は特に回避運動もせず、少しばかり増速し、隊列を単縦陣から3列縦隊に変えただけで直進を続けている。

「司令、主砲砲撃準備完了。」

大貫のもとに報告が来る。

「砲撃しばしまで、これより第一戦隊は左90度回頭せよ。砲撃開始は回頭終了後から始めよ。」

「え！…司令、それは丁字戦法では？あれは既に使い古した戦法では？」

長野が驚きの目で大貫を見る。

丁字戦法とは、その昔、日本海海戦において東郷元帥がバルチック艦隊を破るために使つたとされている戦法で、反航戦において、直進する敵に対し直前で回頭し、進路を塞ぐようにして展開。そして全火力を持つて個艦撃破する戦法である。敵が正面の砲のみしか使えないのに対し、全砲門が使える利点があり、さらには敵の逃げ道も奪える。海軍軍人なら一度は使いたい戦法だ。

ただし、回頭中は集中射撃を受けることとなり、さらには敵が逆に回頭すると逃げられるという欠点もある。現に、東郷元帥も一回目に使つた黄海海戦で失敗している。

それを大貫は使おうとしている。

「何、失敗しても敵の力量を確かめるいい機会になる。」

「了解しました。艦長！」

「ヨウソロウ。取り舵一杯！」「天龍」にも伝達！』

命令とともに、操舵室では操舵手が舵輪を左一杯に回す。しばらくして、艦が左に傾く。その間にも敵の発砲が続く。しかし、いずれも遠弾だ。

「敵2番艦の「福州」も発砲しているようですが、全く当たりませんね。狭叉にも程遠いぞ。あれでは弾を浪費しているのと同じだ。」

長野がそう言った時、回頭が終わった。

「主砲打ち方始めよ！…」

ついに大貫が砲撃許可を出した。

「了解。打ち方始め！…」

十数秒後、三基の砲塔が一斉に雄たけびを上げた。

「海龍」から計6発の15·5cm砲弾が放たれた瞬間であった。

一方、駆逐戦隊のうち、岡本の第一駆逐戦隊は敵に衝突せんばかりの勢いで突っ込んでいた。

「とにかく肉薄せよ。砲弾の回避運動をしながらでも良い……とにかく距離を詰めよ……！」

岡本大佐の叫びが旗艦「流星」の艦橋にこだます。

艦は激しい操艦を行い、右に左に揺れる。そんな中でも乗員たちは必死に戦う。

一方、それを見ている中国艦隊駆逐戦隊は、10·2cm砲で攻撃を開始するが、もともとが練度不足であるのに、さらに第一駆逐戦隊が異常なまでに激しい動きをするので全くその動きについていけない。

「距離5000! !

「撃ち方始め! !

そこまで距離が詰まつた所で、岡本は攻撃許可を出した。2門の12・7cm砲が火を噴く。

そして、その砲弾は見事初弾から命中を果たした。奇跡である。

砲撃を受けた中国駆逐艦「長治」は当たり所が悪かつたのか、火災を起こし、盛大に煙を吐き出す。

2・3番艦の「彗星」「蒼星」はさすがに初弾命中という幸運には恵まれなかつたが、それぞれ2斉射以降続々と目標に命中弾を浴びせた。

第一駆逐戦隊はさうぞ距離を詰め、40mm機銃まで使って敵を攻撃した。

15分で、中国駆逐艦の半分（3列縦隊移行後左側を走つていた3隻）が浮かぶスクランプに変わってしまった。

火災を起こし、もはや反撃も出来ず、速力も数ノットまで落ちていた。

岡本はそれでも砲撃を続けさせたが、ついに敵艦のマストにシールシュルと白い旗が上がった。

「敵駆逐艦に白旗が上がりました！－あ、乗員がカッターを降ろしています－！」

3隻はいずれももうもたないらしく、乗員が慌しく退艦を始めている。さすがにこれ以上砲撃する必要はない。

「砲撃やめ！！カッター降ろしかた用意！！敵艦の乗員を救助する。」

しかし、第一駆逐戦隊は勝利した。だが、戦闘の混乱によって他の隊から離れてしまっていた。

もはや他艦の戦闘には間に合わないと判断した岡本は、敵乗員の救助に専念することにした。

そのころ、巡洋艦同士と、第一駆逐戦隊と残存駆逐艦同士の戦いも佳境を迎えていた。

## 突撃！（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

旗艦である巡洋艦「海龍」の砲撃は初弾から近弾、第一斉射では狭叉を出している。

「いいぞーー！」

長野がその様子を褒め、その後に発射された第三斉射は見事命中弾を2発得た。

「命中だーー！」

乗員達が小躍りする。

砲弾が命中したのは重巡「蘭州」の水上機用カタパルトと、その後方の機銃座だった。もつとも、この時水上機は乗せていなかつたため、被害は小規模な火災が起きたに留まつた。

一方、この一分後によつやく「蘭州」も近弾を出したが、さらに5発の15·5cm砲弾を受け、後部3番砲塔が使用不能になつた。

圧倒的に「海龍」が有利であった。そして「天龍」と「福州」の戦闘も似たような物であった。

「福州」も15・2cm砲で「天龍」を撃ちまくつたが、命中弾は中々得られず、逆に4発の命中弾を受け、悪いことにこれが砲弾弾薬の一部に引火し、盛大な爆発を起こし機関室に被害が生じたため、速力が半減していた。

最終的に、「福州」は一発の命中弾も得られぬまま、戦闘開始後20分で、12発の砲弾と、「天龍」から発射された魚雷2本を受け、沈没した。

しかし、戦闘開始後30分。粘り強く戦う中国艦隊もようやく戦果らしい戦果を上げた。

巡洋艦「蘭州」の20cm砲弾1発が「海龍」に直撃した。

命中箇所は後部の3番砲塔で、幸い弾薬への誘爆は起らなかつたが、3番砲塔の砲塔要員は全員戦死した。砲塔天蓋の装甲は日本時代（25mm）より厚くなっていたとはいえ、それでも45mmしかなく、20cm砲弾を防ぎきれなかつたのだ。

さらに一発が直撃こそしなかつたものの、かすつたことにより後部マストがへし折られた。

この被害は乗員達を憤慨させた。

「やりやがったなー！」

この命中弾は、「海龍」乗員の戦意を皮肉にも高揚させた。

続く斉射ではなんと「海龍」は4発全弾を命中させた。この命中弾によつて、1番を除く全ての砲塔、ならびに甲板上の武器が使用

不能となつた。さうに速力が12ノットまで下がつた。

そしてそこへ、駆逐戦隊が突っ込んできた。

それは対馬大佐率いる第一駆逐戦隊で、その時まで敵駆逐艦2隻と戦闘を行つてゐたが、ようやく片付け終えて、「海龍」の支援に入つた。

その光景を見て、恐怖したのは巡洋艦「蘭州」の乗員たちである。

既に自分たちはまともな反撃手段を持つていない。つまり駆逐艦の接近を止めることは出来ない。このままでは魚雷を撃たれてしまう。しかし、逃げようにもすでに艦速は12ノットしか出せない。つまり、自分たちはもはやただの的でしかないと悟つたのだ。

結局、「蘭州」艦長は「これ以上の戦闘は無意味として降伏を決断し、ただちにそれを発光信号で義勇海軍に知らせ、くわえてマストに白旗が揚げられた。その30分後、巡洋艦「海龍」から長野参謀長が移乗し、正式な降伏手続きが取られた。

こうして、黄海海戦は義勇海軍側の勝利で幕を閉じた。

中華民国海軍側は7隻の艦隊の内巡洋艦2隻、駆逐艦4隻を失う（巡洋艦1隻は捕獲、駆逐艦1隻は遁走）といつぱ全滅に近い損害を受けた。

一方の義勇海軍は巡洋艦「海龍」と第一駆逐戦隊の駆逐艦「麗星」がそれぞれ一発ずつの直撃弾で小破し、「海龍」の水上機が砲弾の破片で全損したのみであった。戦死者を出すという痛ましいことはあつたが、数のみで言えば勝利であつた。

この海戦によって、蒋介石率いる中華民国海軍は保有艦艇の殆どを失い、黄海の制海権を完全に失つた。

さらに、衝撃はそれ以外にもあつた。特に、各国海軍は、義勇海軍がたんなる海賊退治・密輸摘発業者ではなく、一級の戦闘力を備えた組織であることを、改めて認める事となつた。そしてそれが、大きく義勇海軍に影響していく事となる。

海戦の終焉（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 東洋のスペイン内戦

中国海軍に大勝した義勇海軍の艦艇は翌日、捕獲した巡洋艦「蘭州」を土産に旅順に帰港した。

「蘭州」はその後仮修理がなされ、義勇海軍では用途なしということで、帝国海軍に売却され、重巡「鈴鹿」として編入されている。そして後の対米戦に参加することとなる。

今回の海戦で敵を逸早く見つけだし活躍した2名の女性パイロットや勇猛果敢に部隊を指揮した駆逐戦隊司令の岡本大佐には、皇帝名での勲章が授与された。

市民も歓呼して艦隊を出迎えた。

一方で、今回の海戦で戦死したものの追悼式も行われた。

総司令の白根は、大勝利したとはいえ、犠牲者をだしてしまったことに、改めて現実・戦争の厳しさを思い知らされた。

さて、じつして海の戦いは満州側の一方的勝利で終了したが、陸の戦いはいまだ激しく続いていた。

満州陸軍側は少ない戦力の消耗を恐れ、戦略的に撤退を繰り返し、中国軍の戦線が延びきるのを待つた。

そして、日本からの義勇部隊が到着するのを待つて、反撃に移つ

た。

日本からの義勇部隊で特に大きな戦力となつたのは、帝国海軍が派遣した新鋭の96式艦戦や96式陸攻といった航空戦力であつた。また、陸軍も複葉ではあつたが、95式戦闘機などを派遣した。

これらの機体は、制空権をあつといつまに掌握し、中国軍の後方基地を攻撃し、兵站戦を脅かした。

96式艦戦はいかなる中国戦闘機の性能を圧倒し、96陸攻は中國奥深くまで侵攻が可能であつたからだ。また、陸海軍の搭乗員はいずれもベテランぞろいであつた。

ちなみに、これら日本軍は国籍から制服に至るまで全て満州国軍の物へ変更していた。

結局、その後半年に渡る激戦の末、滿州國軍（實際は日滿連合軍）は中国軍を国境線の向こう側に押し戻した。

その後、中国国内での治安、国民感情悪化、さらには共産党の規模拡大を受け、蒋介石は戦争を終わらせる必要に迫られ、満州側の出した講和条件を受け入れざる得なかつた。

満州側が示した条件は、満州國の承認ただ一つであつた。蒋介石はそれを飲んだ。

条約とは所詮紙切れ、いずれ力押しで再び奪回できるとも考えたらしい。しかし、中国が満州へ再び牙を向ける、かなり後のことである。

一方、この戦いを宣伝することによって、満州国は国民の意識統一運動に弾みをつけこととなる。今回の戦いで、あらためて満州国政府は国民特に軍の意識統一の重要性を知ったのだ。実は、今回の戦いでは一部の兵士が戦わずして遁走する事態が多発したのだ。いずれも、もと軍閥系の軍隊出身者であった。彼らには、国、最低でも故郷を守るというこの時代の兵隊としての基礎的な考えが欠如していたのだ。

また、義勇軍を派遣した日本軍も様々な戦訓を得ることとなつた。特に、海軍は96式陸攻の脆弱性を思い知られ、また陸軍は試作段階に関わらず投入した中戦車が中華民国のソ連製T-26や独逸製2号戦車等の戦車に敗北したことにより、戦車の設計を改めることとなる。

また、この時ごく少数だが参加していたソ連やアメリカの中国軍義勇兵たちも、戦闘のレポートを本国に持ち帰っている。

この戦いは、後に東洋のスペイン内戦とも呼ばれるようになる。

## 東洋のスペイン内戦（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

中国との戦争を五分五分に終わらせた満州国では、その後も国内の開発が急ピッチで進められた。日、英、独やヨーロッパから脱出したユダヤ人等の資本が投入された満州国の景気は非常に良かつた。また、関東州や関東軍も租借地や鉄道付属地での税収入がよくなるという効果も現れていた。

一方で、その満州国を事実上打ち立てたと言つても過言ではない大日本帝国は、世界恐慌後の不況から脱出できずにいた。

明治以降、日本は富国強兵をスローガンに近代化を推し進めたが、実際のところは貧国強兵だった。軍隊こそかなり近代化できたものの、国自体はまだまだ貧しかった。特に、農村ではほとんど明治期と変わらないような状況があった。

農村では未だに小作人制度が存在し、農民は貧困層から全く抜け出せずにいた。

その状況下で不況であるのだから、田も当てられないような状況になつたのも必然である。昭和11年2月26日には青年将校によるクーデター未遂がおきた。この日、満中開戦による満州からの援助要請のための臨時の御前会議が召集されたことで、結局失敗に終わつたが、これはこの時期の日本の不安定を象徴する事態となつた。

その解消を目指して、政府は一時期満州国への、農民の大規模疎開を考えたが、現地の耕作面積限界と気候の問題から、最初に小規模な現地調査隊が送られ、続いて数千規模の集団移民に留まつた。

国内情勢がそのように混沌としていたのに加え、日本の植民地朝鮮でも問題が起きた。満州国建国以降高まっていた朝鮮独立の気運がついに爆発したのである。

3月1日に起きた第二次3・1独立運動は前回の比ではなかつた。しかも、今回は軍や憲兵隊の、武器庫などを襲い武器を奪い取るというやり方でかかつてきただめ、軍や警察、憲兵隊に大混乱が起きた。

最終的に日本人に5000、朝鮮人に10000近い犠牲者が出るという、もはや内戦のような事態となつた。

結局、最終的に日本政府が総督府の官僚の半分を朝鮮人とし、さらに5年後を目処に独立の是非に関する総選挙を実施し、段階的に皇民化政策を撤廃するという政策を公表し、事態を沈静化させた。

日本側がここまで譲歩したのは、ソ連が朝鮮独立組織を支援して朝鮮の赤化を狙っているという情報を得たからであった。

これにともない、日本で人質として暮らしていた李王殿下が家族ともども帰国を果たしている。

また、朝鮮の独自の治安組織として朝鮮陸上警備隊（後韓国陸軍）と朝鮮海上警備隊（後韓国海軍）が創設されている。

この組織は当初は総督府下の管轄であったが、7年後の独立の際は大韓帝国政府下に指揮権が移譲されている。

ちなみに、これらの部隊には日本の余剰兵器が譲渡されたため、日本陸海軍はそれにともなつて兵器の更新を進めた。

例えば海軍は「球磨」型軽巡2隻を始め、複数の「神風」型や「樅」型駆逐艦を譲渡し、その代替艦の予算を獲得している。

同じように陸軍も旧式の89式戦車や38式歩兵銃で同じようなことをしている。

これによつて、帝国海軍は「阿賀野」型軽巡建造の前倒しや、「綾瀬」型対空巡洋艦の建造に着手しているし、陸軍は98式戦車の開発を進めることが出来た。

しかし、もちろんこの程度で帝国全体が良くなるはずがない。

そこで、帝国政府は大博打に打つて出た。それはアメリカのニューディル政策やナチス・ドイツの政策を基にした、大規模公共事業であった。

具体的には、東海道線の輸送力強化のために、新東海道線（後の新幹線）の建設、そして国道一号線の拡張と舗装化や中小都市間道路の輸送力強化であった。

これは後に日本が東京オリンピック誘致に成功するとより早く進められることになる。

ただし、後に昭和16年に12月8日に太平洋戦争が始まることにより、新幹線は東京・名古屋間で建設がストップ。国道一号線は軍事輸送に有利といつことで昭和17年2月に完成することとなる。

大日本帝国の憂鬱（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 新たなる計画

さて、満中戦争が終わった直後の昭和12年2月。義勇海軍に日本の朝鮮総督府（昭和15年からは朝鮮自治政府）から珍妙な依頼が入つた。それは黄海、北緯38度線より北側の朝鮮（日本）領海の警備任務の一時委託であつた。

これは創設したばかりの朝鮮海上警備隊が未だ実用任務につける状態でなかつたからだ。しかし、帝国海軍を派遣することは朝鮮人の感情をさらに悪化する可能性もあり、さらに海軍としても密輸取締り等のノウハウはなく、そこで義勇海軍にお鉢が回ってきたのである。

しかし、これに関しては白根以下幹部達が難色を示した。

義勇海軍は平時（実際には戦時も）、確かに大幅な自由裁量が認められているが、一応満州国政府からも維持費を出資してもらつている、いわば満州を守るための半官半民組織である。その義勇海軍が満州政府に断りなしに独断で他国への派遣を行うのは、義勇海軍と満州国政府の間で結ばれた協定にも違反する。

ただし、より実践訓練を積めるという点では、今回の依頼は非常に魅力的ではある。それに加えて、朝鮮警備隊の新規建造艦艇の一部の建造を日本側が包わせたのも、この後白根が艦艇派遣に心引かれた要因のひとつだった。

結局、最終的に朝鮮総督府から帝国政府、そして満州国政府とう具合に出動要請が行われた。

いかにもお役所仕事的な手続きではあったが、何はともあれ、昭和12年4月。第一陣として「流星」級駆逐艦の一隻である駆逐艦「轟星」と漁業保護船1隻が派遣されている。

さらに、半年間の間に漁業保護船3隻が新規建造で派遣され、昭和15年5月まで黄海の国境・沿岸警備任務についた。

これら派遣された艦艇プラス駆逐艦1隻がその後朝鮮海上警備隊に売却されている。

そんな中、白根が社で新たに研究させている船があった。高速艇、具体的には魚雷艇である。これは、この時期アヘンなどを中華民国や満州から日本や朝鮮半島に持ち込む密輸団が、高速船で義勇海軍や、満州海辺警察の艦艇による追尾を巻いてしまうという事態が頻繁に起きていたことに対抗するための物であった。

今回その研究を命じられたのは、「流星」や「海龍」を設計した北上ではなく、小型漁船や内火艇建造の経験があつた大下杉夫技師であった。

海上で砲戦を行う大型船と、海上を40ノット以上で素早く動く小型艇では設計が違つてくる。そこで、今回は小型艇建造経験の大下が設計を行うこととなつた。

しかし、白根の理念といようか、計画書には「丁寧にも、戦時には魚雷艇に改装できることを前提とするといつ条件が付けられていた。

これには大下も頭を抱えた。これがたんなる巡視艇なら設置する武器は機銃、行つても爆雷程度だ。また、エンジンに関しても、制約が少なくてすむ。

しかし、もしこれが魚雷艇となると、機構が複雑で発射管を搭載せねばならないし、エンジンも騒音がないことや戦場での酷使に耐えられるように等の絶対条件が付加されてしまう。これは魚雷艇の建造経験がない日本では致命的な問題だ。

実は日本にはモーター・ボートに魚雷を積んだ魚雷艇を建造した経験は全く無かつた。これは広い大洋である太平洋では小型艇が役に立たないとされていたからだ。逆に内海のバルト海に面したドイツやイタリア等の地中海沿岸諸国は第一次大戦時から建造経験がある。

結局、大下は資料を集めて海外の魚雷艇の研究から始めることがなった。

## 新たなる計画（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 魚雷艇

大下技師はヨーロッパから文献や写真を取り寄せ、さらにジュー  
ン海軍年鑑にも目を通した。

そして設計・建造が終了し、試作艇が完成したのは4カ月後であ  
つた。

船体は木造、排水量は100t。40mm機銃1門に45cm魚  
雷発射管2門4発搭載であった。

苦心して設計しただけあって、復元性、耐波性は良好であった。  
しかし、エンジンは帝国海軍の92式艦上攻撃機用の水冷を搭載し  
たのだが、騒音と故障に悩まされた。騒音はプロペラシャフトや船  
体の改修である程度抑えられたが、故障はどうにもならず、さらに  
出力が低いこともあって、最高速力は29ノットという低速であつ  
た。

結局、1号艇は武装を減らして沿岸救助艇1号となつた。しかし  
最後の最後までエンジンの不調がたたつて、2年後には退役となっ  
ている。

大下は、1号の不調は心臓部のエンジンにあると断定した。そこで、次の艇には思い切つて外国製のエンジンを採用することとした。

この次期、満州には英國や独逸企業が進出しており、大亞細亞造船はこれらの企業とも交流があった。そこで、これらの企業経由で  
水冷エンジンの購入を図った。

こうして、予備を含めイギリスのマリーンエンジン12基、独逸のダイムラーベンツ10基の購入に成功した。

実際にはもつと多かつたが、数基が奉天航空機製造公司に引き渡されたため、この数になった。

ちなみに、奉天航空機製造公司というのは、中島や川西等の複数の航空会社が出資して作った航空機製造工場で、その規模はボーイング社のシアトル工場に匹敵するほどの物であった。

エンジンを手に入れた大下は、早速マリーンを2号艇に、ベンツを3号艇に搭載した。結果、どちらともすばらしい性能を發揮し、速力は40ノットに迫るものを見出した。最終的には、整備性で優れるマリーンエンジンの採用が決まった。ちょうど同じころ、奉天製航空機製造公司でも、マリーンのライセンス生産が決定し、早速ライセンス権が購入された。

その後、燃料タンクの増設等の小改修を行い、最終的に性能は40mm機関砲1門。12・7mm連装機関銃1門。53・3cm魚雷発射管2基、2発。排水量120t。速力37ノットに落ち着いた。

平時には、機関銃以外の装備を取り外して、速力は39ノット近くで名行動できた。

その後、これらの魚雷艇を指揮するために強力な無線機を搭載した、排水量160tの指揮艇も建造されている。

戦前、義勇海軍は指揮艇と併せて、このタイプの高速艇を合わせ

て8隻建造した。この他に、海辺警察に引き渡された艇も2隻あった。これらは高速艇を操る密輸団の摘発、行動妨害に多大なる貢献を行うこととなる。

帝国海軍もこの艇の成功に引き付けられたのか、試験的に2隻を購入し、「国東」「渥美」として運用している。また、台湾海上警備隊や朝鮮海上警備隊にも複数引き渡されている。これら引き渡された艇もそれ多大なる功績を残している。特に、帝国海軍では、中部太平洋の諸島防衛作戦に有効という判断を下し、戦略の一部見直しまで行っている。

一方、この時期世界は大きく動きつつあった。独逸ではナチスが勢力を伸ばし、イタリアではムッソリーニ率いるファシスト党が政権を握っていた。時代は混迷の度を深めていた。

その間、亜細亜も混沌としていた。満州奪回に失敗した中国では中華民国が支持を失い、変わって共産党が勢力を広げつつあり、蒋介石をいらだたせた。そして、ついに昭和12年7月7日に両軍は再び衝突することとなる。

この中國内戦は長期化し、結局中華民国が北半分を、共産中国が南半分を分割占領することとなるのは1947年になつてからである。

そして、満州方面でも再び戦火が上がるうとしていた。

## 魚雷艇（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

昭和13年（1938年）。世界情勢は混沌としていたが、そんな中で日本は大きく動いていた。

この時期、帝国海軍は軍縮条約の期限切れから艦艇の整備を急いでいた。

例えば、「大和」級戦艦4隻の建造はその象徴ともいえる物であった。世界最大の46cm砲を9門備え、自艦の主砲にも耐えうる装甲を持つ、この時期文字通り世界最強の戦艦であった。

また、「瑞鶴」を中心とする新型空母や巡洋艦、駆逐艦の整備も行われた。

それに併せるように、台湾海上警備隊や朝鮮海上警備隊にも動きがあった。

台灣海上警備隊には軽巡「天龍」型2隻が移管されているし、朝鮮海上警備隊にも新たに「神風」型駆逐艦4隻が移管されている。

こうした帝国海軍からの艦艇譲渡は、帝国海軍の艦艇の更新と、海軍の補助組織とも言える上記組織の増強にあつた。これら組織には、戦時の際は沿岸警備や近海通商路警備の任務の一部が割り当てられる予定になっていた。

義勇海軍でも、動きがあった。

まず艦艇については、前話にあつた魚雷艇の配備が一つ。もう一

つとして、新鋭補給艦「中積」が竣工したことであった。この艦は既在艦の能力不足から建造された。

性能は排水量8500t。全長140m。速力18・5ノット。自衛用火器として88mm対空砲2門に、40mm連装機銃4基を備え、魚雷艇母艦としての能力も有していた。

さらに、より大きな動きといえるのが、潜水艦の配備であった。

義勇艦隊では戦時の通商路保護も任務に加えられていた。しかし、この任務をする上で必要な訓練をしようにも、標的となるべき潜水艦が存在しなかつた。

そこで、帝国海軍からまず退役寸前であつた「伊51」潜水艦を購入し、「S1」号として運用したが、元々が旧式かつエンジントラブルが絶えなかつたため、新規建造に挑むこととなつた。

設計・建造には大亞細亞造船には専門家がいなかつたため、川崎神戸造船所が担当した。発注は昭和12年に行われた。

この時、義勇海軍が要求したのは、全長60m。排水量5000t前後で魚雷発射管を2・3門であつた。

白根司令はライバル社への発注には乗り気でなかつたが、こればかりは仕方がなかつた。ライバル社の技術が手に入るということでお妥協したらしい。

当初川崎は、この当時建造中だつたタイ海軍潜水艦と同じ物（性能要求前段階）を作ろうと考えたが、義勇海軍が具体的な性能要求後に新規建造に切り替えていた。この時、義勇海軍はある注文を付

け加えていた。それは、静粛性を保つことであった。

日本の潜水艦は、大型で攻撃力ならびに水上航行能力は優れていが、静粛性や可潜深度に問題を抱えていた。

海外からは「日本の潜水艦は楽団を乗せている」とさえ揶揄された。

この問題に対し、川崎造船所は、スクリュー軸の改良や、機関室に防音ゴムを設置することでなんとか解決した。

また、近海での訓練、ならびに沿岸防御用であつたから、航続力は削減され、その分を強力な電池の搭載と艦体の強化に充てた。

そして出来上がったのが、「S2」型潜水艦であった。

全長61m。排水量610t。水上速力14ノット。水中12ノット。53cm魚雷発射管3門。魚雷8発搭載。88mm砲1門。安全潜航深度130m。（通常安全深度の1・5倍が圧壊危険深度）。

この艦は回航、そして慣熟訓練終了とともに実戦配備され、対戦訓練の標的艦として働いた。特に川崎が苦心した静粛性に優っていた。この艦との訓練結果から、義勇海軍では日本製の93式聴音器の性能不足が判明し、義勇海軍は独自に零式聴音器を開発することとなる。

**深海の脅威（後書き）**

御意見・御感想お待ちしています。

## 勃発！ノモンハン事件

昭和14（1939）年5月。満州国をまたもや戦火が襲つた。満蒙国境で満州国軍とモンゴル軍の国境警備部隊の小競り合いからそれは始まつた。

当該地区は、国境線が未確定の地域であり、これまでもこうした小規模な衝突は頻発していた。新京の満州国軍総司令部でも、当初は事態を重大視していなかつた。

ところが、翌日から大きく状況が変わる。なんどこの小競り合いにソ連が介入し、大規模な部隊を動かし始めたのだ。

これは緊迫するヨーロッパに戦力を集中するため、この時点での亞細亞方面でのソ連の実権を確保しておこうというスターリンの思惑が多分に含まれていた。

満州国軍は直ちに現地部隊の増強と、日本への応援要請を行つた。

この時期、満州国はようやく国の経営が軌道に乗り始めていた。インフラや教育、法律、国籍等が定められ、国としての体裁が整いつつあつた。

そんな新興国の満州は、義勇海軍の存在により海防は整つていたが、陸軍は頭数こそ揃つていたが、この時ソ連がつぎ込んだ機械化部隊に抗しえる部隊はまだなかつた。

唯一の機械化部隊も、日本陸軍払い下げの94式、97式軽装甲車、ヴィッカーズ6t戦車という軽装甲車両にトラックの組み合わ

せであった。

空軍も、機体こそ97式、95式戦闘機等を備えていたが、パイロットの不足から、ノモンハン戦に投入できるのは40機足らずであった。

日本軍は今回も義勇軍派遣という形で援軍を出した。

陸軍は陸上部隊に加えて、最新鋭の97式戦闘機に97式重爆を投入し、海軍も陸軍には劣るが96式艦戦や96陸攻を派遣した。

これはもはや国境紛争のレベルを超えていたが、実際にはどこの国も宣戦布告をしていないおかしな戦争であった。

日本陸軍は満鉄線を使って部隊を移動させ、なんとかソ連軍の集結と同時に部隊を到着させられた。

今回の日本陸軍の派遣車両には、最新鋭の97式改中戦車があつた。

これは前回の満中戦争でその脆さを露呈した97式戦車の改造版であった。車体は溶接方式での製造となり、装甲厚も25mmから35mmに増強された。さらに砲も短砲身57mm砲から長砲身47mm砲に切り替えられた。エンジン出力も強化されている。

ちなみにこの新型戦車は全車満州国製であった。

実は、建国後少数ではあるが外国企業を誘致した満州国では、一部の部門で日本よりも優れた分野があった。特に日本では外国企業の締め出しで研究が鈍くなつた自動車のエンジン技術やヨーロッパ

からの技術流入で発展した重工業における金属加工技術がそれにあたる。そう言う事情であるから、ハルピン近郊には日本軍の銃砲研究所まで設置されている。

余談だが、日本軍は秘密裏に満州に細菌戦研究所を建設しようとしが、予算不足と国際法違反への懸念から断念し、代わりにこの施設を作つたとされている。

#### 閑話休題。

とにかく、そういうわけでもし満州国の工業力が無かつたら、この新型戦車は2・3年以上は実戦配備が遅れていたとされている。もし、そうなついたら悲惨であつただろう。

この新鋭戦車はノモンハン戦に36両が投入され、内9両が撃破されたが、逆に40両近いソ連軍車両を撃破したとされている。

さすがに45mm砲を持つBT7型やT26型戦車には一方的優位とは行かなかつたが、それでも同程度の主砲性能で10mmの装甲厚の差は大いに役に立つた。また、ソ連軍の装甲車には一方的優位に立てた。

そして、この戦いは補給というものを改めて日本軍に認識させる物となつた。ノモンハンではそれまで日本軍が行つた自給自活が不可能な土地であつたからだ。この際、大活躍したのが、満州国の奉天汽車製造のトラックで、その数は日満連合軍のトラックの4割を占めたとされている。ちなみに、この会社はアメリカのフォードからライセンス権を購入した会社で、戦場では同じくソ連がライセンスした車両とかなりの互換性であり、お互に修理、使用したとされている。

陸の戦いが始まる一方で、ノモンハン事件は海にも戦いを波及させていた。

## **勃発！ノモンハン事件（後書き）**

御意見・御感想お待ちしています。

## 竹島沖海戦

陸上で戦闘が始まったころ、義勇海軍や日本海軍、朝鮮海上警備隊も臨戦態勢に入っていた。

これは、日本から満州へ運ばれる軍需物資や資材をソ連潜水艦が攻撃する可能性があつたからだ。

案の定、事件発生翌日には対馬海峡で国籍不明潜水艦の発見報告があり、さりに、その後数日間の間に日本海や黄海で正体不明の潜水艦の発見報告が相次いだ。

これに対し、帝国海軍は船団に護衛艦を付け、加えて対潜パトロールを強化した。

そして事件が起きたのは、ノモンハン事件発生2週間後の日本海であった。

その日、駆逐艦3隻に護衛された輸送船7隻の船団が敦賀から旅順へ向けて航行中であつた。夜間、対潜警戒を厳重にして、各艦は臨戦態勢に入つていた。

しかし、乗員には楽観的な空氣があつた。もともとソ連海軍はどちらかというと三流海軍であるし、また自分たちの乗つている艦の性能に自信もあつた。加えて、潜水艦を見下していたようだ。

この時の駆逐艦は「初雪」他2艦で、3艦はいずれも所謂特型駆逐艦であった。

深夜、最初にそれを発見したのは駆逐艦「深雪」であった。

艦橋左舷側の見張り員が突如叫んだ。

「雷跡見ユ！－！数4、右舷近い！－！」

直ちに艦長は回避運動を命令した。

「取り舵一杯！－！」

「ヨウソロウ！－！取り舵一杯！－！」

操舵員が必死に舵輪を回した。

マストに魚雷注意の旗が掲げられ、発光信号で他艦に報告がなされる。

船団は一斉に舵を切る。しかし、徴用船ばかりであるため、輸送船の性能はマチマチであった。そのため、僚船の運動に追従出来ない船が一部あり、船団の陣形が一部乱れた。だが、幸いにもそれに敵潜水艦がつけ込む事はなかった。

けれども、最初に魚雷を発見した「深雪」は船団程幸運ではなかつた。

4本中3本はなんとか避け切つたが、やはり発見が遅すぎたらしい。一本が命中してしまった。さらに悪いことに、これが艦尾に命中してスクリュー軸をまず吹き飛ばし、さらに両舷の機関室に大浸水をもたらした。これによつて航行不能に加えて発電機もお釈迦になつた。これらに加えて、艦尾に積んでいた爆雷が衝撃で誘爆。艦

尾切断といつ大被害となつてしまつた。

これが致命傷となり、「深雪」は「」の後沈没している。

「深雪がやられた！..！」

僚艦の惨状は輸送船団と、残る2隻の駆逐艦からも見て取れた。

「深雪の敵討ちだ！..！」

2隻の駆逐艦が早速行動を起こした。

輸送船の一隻に「深雪」の救援を要請（命令）すると直ちに魚雷が発射されたと思しき地点に全速で急行した。

「」の時、両艦は敵が全速で遁走中と思っていた。ところが、なんと潜水艦は2艦に向けて再び雷撃を仕掛けてきた。

「」の内発見の早かつた「初雪」は回避できたが、後方を走っていた「綾波」は発見が遅れたため艦首近くに魚雷が命中した。

悪い事に、全速力で走っていたため、自らの力で魚雷の命中箇所の傷を広げることとなつた。幸い、沈没はしなかつたが、前進での航行が不可能になつた。

世界最強を自負していた特型駆逐艦3隻の内2隻まであつさりとやられてしまい、残る「初雪」乗員の怒りは頂点に達した。

そしてこの時潜水艦は致命的なミスを犯した。戦果確認のため長い時間潜望鏡を海面に出していたのだ。

この時期、帝国海軍の見張り員の視力は世界レベルの遙か上を行っていた。その内の一人がこの潜望鏡を発見した。

「初雪」は潜望鏡めがけて、主砲の砲撃と爆雷攻撃を行った。

「初雪」の主砲は榴弾を20発近く打ち込み、さらに搭載していた36発の爆雷を全て撃ち尽くした。結果、潜水艦は艦体に甚大な損傷を受けやむなく浮上。乗員が脱出を行つた後日本海深く沈んでいった。

その後、乗員を救助したことでの艦の所属はソ連海軍と判明した。

結局この戦闘でソ連軍は潜水艦1隻を損失した代わりに、駆逐艦1隻撃沈（深雪）、1隻大破（綾波）に加え、船団は護衛艦艇の再配置のため、門司に緊急入港する羽目になり、予定より到着が5日近く遅れた。

この海戦（日本名竹島沖海戦）で日本海軍は特型駆逐艦の対潜性能の貧弱さを思い知られ、以後の戦略に、多少なりとも影響することとなる。

**竹島沖海戦（後書き）**

御意見・御感想お待ちしています。

## 海軍航空隊出撃！

ノモンハン事件の戦闘は、当初航空戦は日本側有利、陸上戦はソ連側有利で展開した。

日本側が航空戦で有利となつたのは、投入された陸軍の97式戦闘機の性能もさることながら、パイロットの多くが満中戦争で義勇軍として派遣された者が数多く送り込まれていたからだ。

一方のソ連軍は、この時期スター・リンによる相次ぐ肅清でパイロットを初め熟練の兵士が不足していたため、数で有利であつても日本側戦闘機に一方的に撃墜されるという事態が続発した。

これはこの直後に起きたソフィン戦争でも同様であつた。ソ連軍は数で有利に立つたに関わらず、フィンランド軍に苦戦している。

ただし、陸上戦ではソ連軍は日本、満州側を上回る数の兵力、砲、戦車を投入したため、日満側に対し有利に立つた。

ソ連側の多数の重砲による一斉射撃は日満側兵士の恐怖を大いに誘つた。また、戦車や多数の装甲車による攻撃も、日満側兵士を驚かせた。

もちろん日満陸軍も揃えられるだけの重砲を投入したが、数はソ連側に比べ圧倒的に劣り、加えて日本側陣地がソ連側陣地より低い場所にあり、丸見えであつたため、日満側は大苦戦した。

この状況に変化が生じるのは、海軍航空隊の参加が始まつてからである。

海軍航空隊はノモンハンに到着すると、航続距離の長い96式陸攻を使っての敵兵站線攻撃を開始した。

シベリア鉄道や補給基地、後方の飛行場。さらには物資輸送中のトラック部隊も襲撃を行った。これによつて、ソ連側は慢性的な物資の不足に陥つた。特に、食料や飲料水の欠乏はその行動を大きく制限した。

ソ連軍得意である多数の兵力を投入したことが逆に仇となつた。

もちろん、燃料や弾薬も不足した。砲や戦車があつても、撃つ弾や動かすための燃料が不足してしまつた。これでは戦えない。ついには戦場でこれら装備が放棄され、日満側に鹵獲されてしまつケースまであつた。

当初96陸攻の爆撃は夜間に行つていたため、ソ連側に対し不意を付くこととなつた。しかし、さすがにソ連側も中盤になるとこれに気付き、96陸攻を目の敵にするようになる。逆襲とばかりに、陸攻が発進する夕方に、高速爆撃機SB2を使って飛行場を襲うようになった。

また、ソ連軍はSB2を改造した夜間戦闘機をも投入し、96陸攻の夜間遠距離爆撃を一時的に中止するところまで追い込んだ。

これによつて、海軍はノモンハン事件終盤には、まだ試作段階であつた零式艦上戦闘機を30機投入し、爆撃を昼間強襲攻撃に変更した。

この零戦の投入は絶大で、12機で27機のソ連軍戦闘機を全滅

させると、この輝かしい戦果をも打ち立てた。

ただし、この戦闘の最中にソ連軍戦闘機を追つて急降下した零戦が空中分解したり、わずかな被弾で発火したりするということもあり、これらは貴重な戦訓となり、改良型の開発を促進する事になる。

また、SB2の高速奇襲爆撃に手を焼いた陸海軍は新型迎撃戦闘機の開発を急ぐこととなる。

この他にも、海軍は97式艦攻や零戦と同じくまだ試作段階の99艦爆を投入している。97艦攻の水平爆撃や、99艦爆の急降下精密爆撃は、そのパイロットの技量と共に、ソ連軍を苦しめた。

陸軍は航空戦当初こそ活躍したが、97式戦闘機以外の新型機の投入の積極性を欠いた。新型の97重爆や99双軽、99襲撃機が投入されたのは本当に終盤以降であった。それでも、海軍側が長距離爆撃や零戦の華々しい活躍を極力秘匿したため、脚光を浴びたのは篠原准尉を始めとする陸軍航空隊の活躍であった。

このノモンハン航空戦で陸海軍共に、パイロットの技量向上に大いに役に立つ。特に先ほどの篠原准尉は、この後の太平洋戦争でさらに撃墜数を伸ばし、最終的に154機の個人撃墜という記録を打ち立てる。

また、海軍航空隊も西沢、坂井、と言った後にラバウルで活躍することとなる下士官搭乗員がこの戦闘で大いに活躍した。

ところで、日本側は多数の新型戦車を投入したが、それら部隊は事件初期に戦線に到着したにも関わらず、積極的な戦闘を手控えていた。



海軍航空隊出撃一（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## ノモンハン戦車戦

日本戦車隊が攻撃を控えたわけ。それは先に戦っていた部隊からの報告にあった。

新型戦車の部隊が着く以前に、日満は対歩兵戦、対陣地戦においては旧式戦車を投入し戦っていた。

歩兵を随伴させることで、最初はそれなりの効果があった。しかし、積極的に敵陣地に突入した車両が罠にはまつた。

ソ連軍は自軍陣地に、ピアノ線で作った罠を仕掛けていたのだ。

日満の戦車兵は。

「そんな物が役に立つか！」

と馬鹿にしていたが、実際これがキャタピラに絡まつて身動きが取れなくなつた所を撃破される車両が相次いだ。さらに、まもなくソ連側が有力なT26やBT7型戦車を戦線に投入した。

これ以後、日満の戦車は積極的な攻撃を控えた。

ソ連側が積極攻撃に出た際、全力で迎え撃つ方針に変えたのだ。さらに、これは偶然にも航空戦力が拡充時期と一致した。

一方のソ連軍は時間がなかつた。歐州では独逸がポーランドに侵攻する寸前であつたし、フィンランドとの戦争も計画されていたため、侵攻を急ぐ必要があつた。

度重なる日本軍の補給線攻撃で物資は不足していたが、なんとか一回戦分ギリギリの量が揃つたといひで攻撃することを、ソ連軍司令のジコ・コフは決断した。

そして、事件勃発からちょうど3ヶ月目からのその日、ついにソ連軍は総攻撃に打つて出た。

戦車、重砲、歩兵、航空機、その全てを出しての総力戦であった。戦力的には日本側の3倍近いもので、一気に日満防衛線を崩壊させるのが狙いであった。

しかし、この内航空機は日本側と拮抗するギリギリの数であったが、性能的に劣る機体もかなりあつた。そのため、航空戦における優位は日本側にたつた。戦車戦では日ソ最新鋭戦車の攻防となつた。

戦車数ではソ連側が勝つていた。しかし、日本の新型98式中戦車は長砲身47mm砲と、溶接30mm厚の装甲で、ソ連軍戦車に勝る性能を持っていた。それに、日本側にはもう一つの切り札があつた。オープントップの砲塔に90式野砲を載せた、試製98式自走砲である。

この車両はこの戦闘に2両が投入された。オープントップであつたが正面の装甲は50mmであり、また75mm野砲はソ連軍戦車の全てを撃破できた。

ただし、今回の戦闘では初期故障が目立ち、またオープントップが炎して、1両が敵歩兵の手榴弾攻撃で撃破された。それでも多数の敵車両を撃破したため、その有効性が明らかになつた。

また、ソ連軍側は上空支援が皆無であったのに対し、日本側は少數ではあるが、海軍の97艦攻や96艦爆、96陸攻が支援についた。

陸戦においてもエア・カバーがあるかないかでは、天と地ほどの差がでる。

当初は互角に戦っていたソ連戦車は、それら日満連合軍の優位に押されていった。

しかも、この時ソ連側は致命的な欠点を抱えていた。相次ぐ日本軍の補給線攻撃で、ギリギリの燃料弾薬しか持ち合わせていなかつたのだ。そのため、戦闘が長引いた地域では燃料や弾薬が切れる車両が続出した。

この戦いで日満側に捕獲されたソ連軍装甲車両は実に79両に上った。ちなみに、この内56両が修理後満州陸軍に編入されている。また、今回の戦闘では、ソ連軍自慢の重砲も弾薬不足で、これまでのようすに盛大に砲撃が出来ず、攻撃の徹底差を欠いてしまった。

しかし、その兵力に物を言わせてソ連軍は遮一無二進撃した。日本軍の防衛線を突破した部隊さえあつた。しかし、それら部隊も結局は食料や弾薬等が尽きて孤立し、降伏することとなつた。

結局、ソ連軍が満を持して行つた総攻撃は、日満軍にそれなりの出血を強いたものの、最終目標達成には至らなかつた。

ソ連軍司令ジュ・コフとしては、この時期日本側の後方補給線への爆撃が止んでいたため、今一度物資を補給し戦力を建て直し、攻

撃したかった。だが、まもなくナチス・独逸がポーランドに侵攻し、さらにフィンランド攻略の為に航空機や戦車が必要となつたため、ジユ・コフの願いは叶わなかつた。

彼は後にノモンハンでの失敗から閑職に回されるが、歐州戦線でのソ連軍の苦境から、歐州へ呼び戻されることとなる。

一方の日満軍はソ連軍による総攻撃をなんとか凌ぎきり、その後の休戦協定でソ連に自国の提案を呑ますことに成功する。しかし、今回の戦いで日満軍も相応の打撃を被つた。特に、日本陸軍が自信を持って投入した戦車隊の損害も意外に多く、その後の軍備計画に影響を「えることになる。

また、陸海軍とも戦闘機や爆撃機の計画に影響が出た。それは新型局地戦闘機や、大型爆撃機の開発という形になる。

## ノモンハン戦車戦（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

なお、ソ連軍がノモンハンでピアノ線を使い、日本戦車を罠にかけたのは事実です。

## 黄海対潜作戦一（前書き）

今回から若干文体を変更します。読みにくくなるの意見もありましたが  
したがお寄せください。

## 黄海対潜作戦！

ノモンハン事件は最終的に日本の勝利で終わつたが、その間に義勇艦隊も戦闘を行つていた。

ソ連軍潜水艦は対馬海峡を突破し、黄海にまで潜入していた。数こそ少なかつたが、もちろん看破できる問題ではない。現に満州国籍や日本国籍の潜水艦が襲撃を受けている。ただし、黄海には英國や独逸船籍の船舶もいないことはなかつたので、日本海ほど思い切った行動は取らなかつた。

さて、義勇海軍は帝国海軍ならびに朝鮮海上警備隊と協力して黄海における潜水艦狩りを行つている。

潜水艦狩りでは、文字通り相手が小型で単獨行動を行つている潜水艦が相手なので艦隊を組んだりはしない。単獨、もしくは2隻程度の戦隊単位で行動した。

ただし、この潜水艦狩りで確實に撃沈戦果を上げられたのは義勇海軍のみであつた。

これは、もともと進入した敵潜水艦の数が少なかつたのも原因だが、帝国海軍とその帝国海軍をお手本にした朝鮮海上警備隊の対潜能力の低さにあつた。特に93式聴音器の性能が低かつたのが大きな原因だった。

ところが、義勇海軍では独自に兵器の改良を行い、一部の兵器は子会社を作つて独自生産さえ行つていた。彼らが使用していたのは39式聴音器であった。

39というものは西暦1939の事で、つまり開発されたばかりの新兵器であった。開発されたばかりの兵器を全ての艦艇に設置できたのも、艦艇数が少ない義勇海軍ゆえだつた。

また、対潜哨戒に航空機も多用した。ただし、これは義勇海軍のみではなく、帝国海軍も朝鮮海上警備隊も同様である。特に、帝国海軍の97式飛行艇や96陸攻、陸上基地配備の艦攻や艦爆も幾度か哨戒任務に使われた。

ノモンハン戦終了直前のその日、不審な潜水艦を最初に発見したのは朝鮮海上警備隊所属の水上機であった。

「平壤の西90kmに潜水艦と見られる不審な艦影を発見。爆撃を加えるも効果不明。」

この報告によって、付近の艦船に警報が発せられた。

ちょうどこの時、警戒中だった義勇海軍所属の漁業保護船「蒼洋」「大洋」の2隻がたちに現場に急行した。

この2隻は朝鮮総督府から黄海の沿岸警備任務を委託されていて、この時一番近くにいた。

この2隻は500t級漁業保護船で、8cm砲1門。40mm機関砲2門。爆雷48個を搭載し、最高速力は22ノットだった。後に英國が建造する「ルベット」やスループ、漁業トロールに近い船であった。

この時、2隻を指揮していたのは「大洋」船長の永島英輔少校（

少佐）だった。まだ若干28歳の若い艦長だった。彼は元帝国海軍元中尉で、海軍兵学校時代から成績は優秀であったが、専攻したのは潜水艦と対潜戦術で、研究会の発表で日本駆逐艦の対潜能力の低さを指摘したことで同級生と喧嘩となり、それがもとで除隊し義勇海軍に入っている。

義勇海軍に入つてからも対潜戦術や対潜兵器の研究に関するレポートを上官に提出している。本人は駆逐艦艦長の職を望んでいたが、洋上勤務の経験が浅かつたため、現在の職に就けられた。

さて、彼らが現場海域に着いたのは通報から3時間後だった。

もちろん、敵潜水艦は既に潜っているのかいない。

「聴音器の感度を上げ、速力を下げる。見張り厳重にせよー！」「蒼洋」にも伝達。「

永島が最初に下した命令がそれだった。

聴音器の感度を上げたのはもちろん潜水中の敵潜水艦の音を補足しやすくするためで、また速力を下げたのは自艦の雑音を極力下げるためだ。それに伴い敵潜水艦に攻撃を受けやすくなるので、見張りを厳重にした。

それからしばらくの間、大きな動きはなかつた。

潜水艦狩りは根気がいる作業である。例えばこの後の第二次世界大戦では連合国が独逸のジボートと死闘を繰り広げたが、その際連合国護衛艦艇はジボート一隻を撃沈するのに、長いと1日近い時間かけている。

つまり、潜水艦を撃沈するにはそれだけの長い時間相手を追い詰めるだけの忍耐力が必要となつてくる。

永島はその忍耐力を持つ帝国海軍では数少ない男だった。

今回も、聴音手が相手の尻尾を掴むまでの間、じつとブリッジで待つていた。

これに対し、航海長の沢村中尉は落ちつかない人間だった。

「聴音手！ 敵はまだ発見できんのか？」

しきりに聴音手や見張りの兵に尋ねて回る。

その行動に、永島は諭すよつに言った。

「航海長、そんなに焦つても敵がいないのだから仕方あるまい。兵を焦らせるだけだ。」

「はあ。」

航海長は一応わかつてはいるようだが、氣の無い返事を返してきた。と言つよりも、沢村はあまり年下であるせいか、永島の事を好いてはいないようだった。

沢村中尉は32歳で、元は帝国陸軍の船舶工兵だった。上層との折り合いが悪く、除隊。しかし船が好きで流れてきた人間である。

小型船の操船技術が高く、また学科試験もそれなりに優秀な成績

を収めたので、今の地位に就いている。

ちなみに、元軍人の場合、入隊すると軍隊当時の階級が尊重され、能力に秀でている者はそれに1から2階級上の階級が渡される。

永島は除隊時中尉。沢村は少尉だった。

閑話休題。

さて、動きがあったのはさらに2時間後の事だった。

## 黄海対潜作戦！（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 潜水艦狩り！

聴音室から報告が入る。

「…から聴音室。本艦左舷方向に潜水艦の推進器音らしきものを捕らえました。」

伝声管から聽音用である朴中井（軍艦に相当）の声かした。

詳しい方位、敵速はわかるか?」

すかさず永島は伝声管に向かつて聞きかえした。

「まだ無理です。遠いのか、そこまではわかりません。」

「了解、そのまま聽音を続けよ。」

聴音室との会話を終わらせると、すぐに彼は命令を出す。

「信号兵！「蒼洋」に信号、向こうも発見できたか問い合わせろ！」  
それと、敵の魚雷攻撃に警戒しろ。」

ただちに発光信号で「蒼洋」と連絡がなされ、さらに見張りの兵隊たちは警戒をより厳重にする。

一方、沢村はそれに対し少し不満そうだ。

「船長。敵潜水艦の方位はだいだいわかつて いるのですから、近づいて撃破した方が良くありませんか？」

積極的な攻勢を進言する。しかし、永島は首を振った。

「あの程度の情報で仕掛けてはこちらが喰われる可能性もある。向こには潜望鏡を上げてこちらの位置を掴んでいるかもしれない。対しこちらがおおまかな位置しかわからんようでは話にならん。敵を早急に撃滅するべきだろ？が、不用意に手を出すのも危険だ。しばし辛抱したまえ。」

「わかりました。」

沢村は不満そうにしながらも、一応は納得した。彼は確かに積極的ではあるが、馬鹿ではない。論理的に説明されれば一応は納得する。この点、永島は彼の性格をありがたく思っていた。

その間に、「蒼洋」が報告を返してきた。

「「蒼洋」より信号。我が艦の聴音も敵推進器りしき物を捕捉。しかし、詳細は不明。とのことです。」

残念ながら「蒼洋」も敵の存在は捉えたが、相手の具体的な情報を拾うまでには至っていなかつた。

しかし、潜水艦の水中速力は10ノット以下である。対し、2隻は15ノットで走っているから、見つけられるのも時間の問題と永島は考えていた。

ちなみに、最高速力までスピードを上げるのは、エンジンの騒音を上げることで聴音器の効率を悪くすることを恐れたからである。そしてもう一つの理由もあった。

しかし、敵潜水艦は水中での停止を行つたりしているのか、その後は中々尻尾を捕まえることが出来ない。

時間がどんどん過ぎていく。

「まあいいな。」

永島が時計を見ながら呟いた。

彼が時間を気にするのは、2隻の燃料の問題だつた。実は2隻とも翌日に港に戻る予定だったので燃料があまり心もとない。戦闘を開始すると燃料を一気に消費する可能性があるからなるべく余裕を持ちたい。

永島は潜水艦の水中行動能力の低さから、相手が直ぐに尻尾を出すと考えていた。しかし、相手は運が良いのか中々見つからない。

と、ここで沢村が意見具申をする。

「船長。今回積み込んだ新兵器を試してみますか？」

「対潜砲をか？」

「この時期、まだ各海軍には水中の潜水艦を攻撃する前方攻撃型の兵器は無かつた。後に連合国はスキッドやヘッジホッグを採用して大きな効果を上げた。

永島は対潜戦を研究し、前方攻撃兵器を開発する必要性があると感じていた。

そこで、艦隊上層部に意見具申したわけだが、何分未知の領域にある兵器だから上層部も困った。一応研究を開始したが、永島は黄海での対潜戦が始まると早急な配備を望んだ。そこで、簡便に取り扱えて、重量も軽い迫撃砲を積み込んでみた。

対潜砲は迫撃砲そのままで、砲座が完全固定型で砲身が180度回る以外は陸軍の物と変わりない。

永島はこれを無いよりマシと考えていた。射程が短く、おまけに深度調整が出来ないからだ。

しかし、他に兵器が無い以上仕方ない。それにもしかしたら爆発音に相手が混乱を起こすかもしれない。永島は使用を許可した。

「対潜砲用意！！」

すでに2名の砲員が発射準備を終わらせていた。

「目標は前方海上だ！狙う必要は無い。敵潜を炙り出せ。発射始め！」

ポンッ！！

通常の砲より遙かに軽い音と共に弾が発射される。

続いて「蒼洋」も撃ち始めた。

20発ほどを広範囲の方向にばら撒いてみた。しかし、何も変わらない。

「だめかな？」

そう思い始めたとき、聴音室から報告が入った。

「艦長！敵は痺れを切らしたようです。全速で動き始めました。方位左舷2時方向、距離は900から1200程度！」

「了解！！機関最大船速！後部爆雷戦用意！！水上砲戦用意！！！」

艦内が慌しくなった。

だが、敵も黙つてはいなかつた。

「2時方向に雷跡！！！」

敵は反撃に出た。

「回避運動！！」

その魚雷は発見が早かつたおかげで回避できた。

「よつし、お返しだ。爆雷調停深度30から60にセッティ――」

命令に従い、後部の爆雷班の兵士が深度をあわせる。そして、敵艦のいるとおぼしき海域まで進み、永島は命令を下した。

「用意、撃てえ！！」

投射機から爆雷が発射され、軌条から次々と爆雷が落とされる。

数十秒後、何本もの水柱が出現した。

「やつたか！？」

沢村が窓に駆け寄る。

これで、大量の燃料や浮遊物、乗員の死体などがあがつたら撃沈確実である。

しかし、中々その発見報告はこない。

「だめか？」

しかし、すぐに見張りが叫んだ。

「敵潜浮上！！」

「！！」

見ると、敵潜が鯨のごとく海上に出た。

「砲戦用意！！」

80m砲と40m機銃が敵に照準を合わせた。だが、敵潜水艦から次々と乗員が脱出し始めた。どうやら艦には致命傷を与えたようだ。

そして、しばらくすると敵潜水艦は大きく傾き、最後はブクブクと黄海深く沈んでいった。

「やりましたよ船長！撃沈です！」

その光景を見て、沢村が小躍りしながら喜ぶ。

だが、永島は冷静だった。

「ああ。だが、その前にやるべきことがある。敵潜水艦の乗員を救助する。救助用意！カッター降ろし方用意！－！」

こうして戦いは終わった。永島は捕虜を戦いを終えた勇士として格別の待遇を行つた

後に潜水艦の乗員の証言から、ソ連艦であることが判明した。この時期、スターリンの肅清が激しかったことから、乗員の半分、特に幹部は後に満州国に亡命申請した。

彼らは永島の戦いと、人道的配慮を賞賛した。

この功績により、3ヶ月後永島は駆逐艦艦長に栄転した。また沢村は「大洋」艦長に就任している。彼らはこの時の戦いから多くを学んだと、後に手記で記している。

潜水艦狩り！（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

なお、この戦いで対潜砲を活躍させていますが、実際はあまり役に立たなかつたと言われています。他に前方攻撃可能な兵器がなかつたので、この作品では敢えて使っています。

義勇海軍組織表（1939年12月時点）

義勇海軍総司令部（旅順）

総司令官・・・白根幹夫中将

副司令官・・・木村昌福中将

\* 総司令官は艦隊を含む全ての組織を統括する。副指令は第一艦隊總司令官と兼任。

第一艦隊（戦時のみ編成）

第一戦隊。第一、第二、第三、第四駆逐隊よりなる。

司令長官・・・木村昌福中将

\* 木村中將は帝国海軍からの移籍者。白根中將が教官として当初はスカウト。平時は艦隊が編成されないので、訓練時以外は總司令部付き。

第一戦隊

軽巡「海龍」「天龍」

旗艦「海龍」

司令官・・・大貫喜一少将

副司令官（參謀長）・・・黃成一上校

\* 現在の義勇艦隊が保有する唯一の大型戦闘艦艇部隊。日本やタイへの親善航海のさいも使用される。なお、副司令官は次席指揮官職。また、その意味で帝国海軍との參謀長とは一線を画する職。

第一駆逐戦隊

駆逐艦「流星」「彗星」

旗艦「流星」

司令官・・・岡本貞一上校

\* 第一駆逐戦隊は竣工から8年経つ一番古株の部隊。現時点ではドック入りし、電子、水測兵器の改修工事中。

#### 第一駆逐戦隊

駆逐艦「麗星」「蒼星」

旗艦「麗星」

司令官・・・対馬和久上校

\* 第2駆逐戦隊は対空火器、爆雷搭載数を増強の工事を実施。他戦隊も順次改装予定。

#### 第二駆逐戦隊

駆逐艦「飛星」「紅星」

旗艦「飛星」

総司令官・・・周防信幸中校

\* 司令官は「飛星」艦長と兼任。

#### 第四駆逐戦隊

駆逐艦「回星」「銀星」

旗艦「回星」

司令官・・・石見圭介中校

\* 総司令官は「回星」艦長と兼任。2番艦「銀星」は、朝鮮海上警備隊に売却された「轟星」の代艦。

#### 第一潜水戦隊

潜水艦「S2」

司令官・・・大瀬幸男少校

\* 潜水戦隊は攻撃部隊ではなく、局地防衛ならびに対潜攻撃訓練時の標的が任務。司令官の大瀬少佐は帝国海軍の退役大尉。

### 第一魚雷艇隊

魚雷艇 8 隻

司令官・・・金秀哲少校

\* 金少佐は海洋学院の一期生。魚雷艇隊は局地防衛部隊。平時は密輸取締りおよび沿岸警備任務を行う。

### 第一補給戦隊

補給艦「中積」

司令官・・・東公男中校

\* 老朽化した旧式補給艦の「黃海」は退役し非武装化の上、大亞細亞通運に転籍。

### 第一沿岸警備部隊

漁業保護船「蒼洋」「大洋」「3号」「4号」

司令官・・・永島英輔中校

\* 漁業保護船は運用の柔軟性を与えるため一括の戦隊の指揮下の元、単独運用がメイン。「3号」からは固有名を廃し番号制となる。

### 第一練習戦隊

練習艦「雛鳥」

司令官・・・南野宗也上尉

\* 練習艦「雛鳥」は旧名「大洋」。漁業保護船に名を譲つたため改名。

### 第一練習潜水戦隊

「S1」

司令官・・・大瀬幸男少校

\* 司令官は第一潜水戦隊と兼任。「S1」は元日本海軍潜水艦「

伊51」

第一航空部隊（旅順）

戦闘機8機（基地防空用） 艦爆6機 艦攻6機 陸偵3機。偵

察兼輸送機8機。

司令官・・・名古屋昭中校

\* 戦闘機は95式艦戦。艦爆は96艦爆。艦攻は97艦攻。陸偵は97陸偵。いずれも日本より輸入。輸送機はアメリカから購入したDC3。操縦方式は海軍式。今後拡大予定

第二航空部隊（旅順）

水上機10機

司令官・・・長野満中校

\* 機材は95式、90式水偵。いずれも日本より輸入。必要に置いては艦載機となる。今後拡大予定。

第三航空部隊（台湾）

\* 編成途中。予定では水上機部隊。

第一練習航空隊（旅順）

練習機9機 艦攻5機

司令官・・・江藤新一少校

\* 機材は93式中間練習機。90式機上作業練習機。96艦攻。

いずれも日本より輸入。今後拡大予定。

基地警備隊（旅順）

歩兵600名

司令官・・・綾崎疾風少校

\* 満州事変時に編成した自警団。

この他に基地補給部隊。通信隊。海洋学院。衛生部隊等があり。

艦艇は今のところ拡張予定は無い。ただし、ソ連海軍ならびに中國海軍が増強する場合は可能な範囲で戦力を整理する予定。

航空部隊は順次拡大予定。基地航空隊の戦闘機は近いうちに新型機へ変更予定。

**組織編制 1939（後書き）**

御意見・御感想・評価・批判お待ちしています。どんな些細なものでもかまいません。

## 日米緊張！！

昭和15年。日本とアメリカの外交関係は日増しに悪くなっていた。

後の歴史家の中には、「ルーズベルト政権はニューディル政策の失敗による国内経済の冷え込みを、戦争によって打開しようとした。その目標となつた日本との外交関係を故意に悪くしたのだ。」と唱える者もいた。実際、日本に対するアメリカの貿易政策では、関税面等でかなりの強硬策に出ていた。

しかし、日本としては国力が30倍のアメリカに戦争を吹っかける等、無謀以外の何者でもない。一時期、日本では精神力によつて何ともなるという考えが、軍を中心に出たが、それも昭和11年のクーデターの防止や、一度に渡る大陸への派兵で鳴りを潜めた。

日本は外務省を中心にアメリカとの交渉も幾度も重ね、戦争回避に奔走した。

だが、その努力が水泡に帰してしまった事態が発生した。

この年の9月。フランスのドイツへの降伏に便乗する形で、タイ王国が突如としてフランスに宣戦布告し、仏印（後のベトナム）に侵攻した。

タイ王国は、亞細亞でも数少ない独立国で、近代化も推し進めていた。

この時期には、日本との友好をより深めており、日本から95式

軽戦車50両に、97式戦闘機30機。そして97式重爆撃機20機を購入するなどしていた。これら新兵器を使ってタイ国は仏印に攻撃を仕掛けた。

もともと植民地軍という一線級の部隊であり、しかも新型兵器をほとんど持ち合わせていなかつた仏印軍は、勇猛果敢に戦うタイ軍に各所で敗北した。

しかし、フランス軍は最終的な勝利は自分たちにあると確信していた。

この時、サイゴンにはフランス極東艦隊が駐屯していた。その戦力は重巡「コールベル」、軽巡「ラモット・ピケ」、水雷艇6隻からなり、これらの総合戦力はタイ王国海軍を圧倒できると仏印総督府は見ていた。

この時点で、タイ王国海軍が保有していた最有力艦艇は、日本に発注した海防艦の「トンブリ」で、20cm砲を4門と武装はそれなりであったが、速力や防御力は著しく劣つており、充分2隻の巡洋艦で対処できる敵と見られていた。

フランス海軍は極東艦隊によりタイ海軍を殲滅し制海権を確保。そのままバンコクへの直接攻撃を行う、もしくはそれを交渉に使うという計画を立てていた。

陸軍や空軍はタイ軍の前に次々と敗れ去つたが、海軍なら負けないといふ自負がフランス軍にはあつたのだ。

タイの宣戦布告から4日後、極東艦隊はサイゴンを出港。一路バンコクを目指し南下した。

しかし、この動きは既に察知されていて、極東艦隊は予想より早くタイ艦隊と接触し、戦闘状態に入った。

フランス艦隊は先頭を進んでいた2隻の海防艦に集中攻撃を加え、「トンブリ」を大破後自沈させ、もう1隻にも戦線離脱させるほど打撃を『えた。

しかし、その2隻に後続する4隻の駆逐艦が一斉に突撃してきた。実はこの4隻は亞細亞造船に発注された準「流星」級駆逐艦であつた。「流星」と違い、対空機関砲は20mm機関砲2門のみであったが、12・7cm砲は3門と対艦攻撃能力が強化されていた。

フランス海軍は突撃してきたこの4隻を攻撃したが、緩慢な動きしかしかつた「トンブリ」と違い、4隻は見事な操艦を行い砲弾をかわした。

「どうなっているのだ！？」

フランス艦隊の誰もが、その動きを信じられない眼差しで見つめた。

実は4隻には日本海軍の軍事顧問が乗り合っていたのだ。このタイ仏戦争では、日本はタイ軍に多数の軍事顧問を送り、兵器の扱いから戦場での指導まで行つてゐる。この駆逐艦もそうだった。しかも派遣されたのは長年駆逐艦艦長を務めたベテラン車引きで、その技をタイ海軍の将兵にみっちり教え込んでいた。その成果がこれであつた。

彼らは教えを忠実に守り、フランス艦隊に切り込んだ。

本来これを阻止すべき6隻の水雷艇は、タイ海軍の水雷艇と交戦しており、とても2隻の重巡を救援している余裕はなかつた。

4隻の駆逐艦は12・7cm砲を乱射しつつ魚雷の必中距離にまで迫つた。

さすがに近距離に接近すると主砲以外の攻撃も受けるので、4隻も打撃を負つたが、いずれも致命傷とはならず、逆に4隻は16本の魚雷を発射した。

距離3000という近距離で、しかも高性能の61cm空気魚雷で攻撃を受けたフランス巡洋艦の末路は哀れであった。

「コールベル」は3本を船体中央部に喰らつて、真つ一つに割れて轟沈した。「ラモット・ピケ」は魚雷の発見が早く殆どを交わしたが、1本が推進器と舵を破壊し航行不能となつた。タイ海軍に包囲された彼女には、降伏以外の選択肢はなかつた。

この海戦でタイ海軍は海防艦1隻、水雷艇3隻を失つたが、巡洋艦1隻、水雷艇2隻撃沈。巡洋艦1隻拿捕という戦果を上げ、仏印総督府の目論見を粉々に打ち碎いた。

結局、タイ仏戦争は、仏印総督府がタイ政府側の和平提案を全て飲むという、タイ王国の勝利で終わつた。

しかし、ここで日本にとつては予想外の事態が起きてしまつた。アメリカの新聞が、フランス軍に対し、日本軍がタイ軍とともに戦つたと報じたのだ。

この記事は、日本の軍事顧問がタイ海軍の艦艇から降りるところ  
[写した写真付きで載つてしまつた。

日本政府は、あくまで少數の軍事顧問を派遣したのみで、戦争中  
は観戦者に徹したと発表したが、アメリカはその声明を無視し、「  
民主主義への挑戦！」と日本を非難した。そして、日本へのくず鉄  
の輸出を禁止したのであった。

口米緊張！－（後書き）

御意見、御感想お待ちしています。批判でもかまいません。次回の貴重な参考になるのでお願いします。

## 開戦への坂道

日米の緊張の高まりは、満州国にも影響を与えていた。アメリカ政府は満州国を承認しておらず、あくまで日本の保護国という見解を示していた。アメリカが日本に宣戦布告、またその逆を日本が行つた場合、満州国も戦争に巻き込まれる可能性があった。

義勇海軍では、万が一に備え艦艇の増産準備が行われていた。また、かねてから日本海軍から依頼があつた場合に備え、船団護衛マニュアルや航路マニュアルの作成もされていた。

そして、自社の兵器開発部門（奉天兵器製造公司）では、戦時に備え、艦載用の砲や機関砲に加えて、商船に搭載する兵装の生産にも取り掛かっていた。

大亞細亞通運の所属船舶は、全て英國の造船方式を真似て船首、船尾の甲板強度を戦時の砲座設置の為に強化してある。また、一部の高速船は補給艦として転用できるようになっていた。

これら大亞細亞通運の船舶の中でも後年有名になるのは「白虎」級10000t貨物船であろう。この船は竣工が昭和14年からであつたが、全長が150mと大きく、速力も24ノットの高速を誇っていた。そのため、建造された4隻全てが後に航空母艦に改造されている。ただし、日本の様な本格的な改造は施されず、どちらかというと後に貨物船に戻すことを前提にしたイギリスやアメリカの護衛空母に似ていた。この艦の活躍は後々に語ることとなるだろう。

一方、日本海軍でも竹島沖海戦の教訓から、対潜兵器や対潜攻撃の見直しが行われていた。

例えば、特型駆逐艦では爆雷の定数を36から48に増強している。また、沈降速度を速めた爆弾型爆雷の開発も行った。それに加えて、義勇海軍開発の99式聴音器を購入し、改良の上零式聴音器として採用している。

そうした既在艦の改良や装備の更新を行う一方で、新型護衛艦の建造も始まっていた。

この新型護衛艦は後に海防艦と呼ばれる艦種で、当初は北方水域における漁業保護を目的に建造され、さらに当初の増備計画でも、あくまでウラジオストスクから出撃するソ連太平洋艦隊の潜水艦を敵とみなしていたため、北方水域での使用が念頭に置かれていた。

この計画が変更されたのは、米国に宣戦し中部太平洋や南方との海域を結ぶ通商路護衛の必要性が出た昭和15年12月になつてからで、その月から建造された海防艦は北方水域での活動に必要な装備を取り去り、加えて大亞細亞造船からの技術供与を受けて、大量建造可能な方式に設計変更されている。

当初、大亞細亞造船や義勇海軍からの装備や設計技術の供与は、艦政本部等を激怒させたと言われているが、日満親善とさらに若手技師の要望により実現したとされている。

もつとも、技術供与が成功した背景には、上記以外にも上層部の無関心があつたからとも言われている。竹島沖海戦での潜水艦の脅威を知りながらも、上層部の頭を切り替えるのは容易ではなかつた。

船団護衛の準備が進められる一方で、帝国海軍では主力艦隊の装備更新も行われていた。

世界最強の46cm主砲を搭載した「大和」級戦艦1番艦の「大和」は昭和16年8月に竣工予定であった。また、最新鋭の「翔鶴」級空母2隻も建造が急ピッチで進められていた。

「大和」級戦艦はさらに3隻が竣工予定であり、空母も新たに改裝空母2隻（「瑞鳳」と「祥鳳」）が計画されていた。また、巡洋艦以下の建造や陸上基地航空隊の増設も予定されていた。

こうした新型艦艇や装備は既在の物と代替されるということで予算を得ていた。日中戦争もなく、数回の紛争のみしか経験しなかつた日本の軍事予算は、平時より僅かばかりしか増していなかつた。

大和級戦艦にしても、3、4番艦は「扶桑」級戦艦の代替。改造空母2隻も旧式化した「鳳祥」の代替として予算を申請していた。また、20・30m三連装砲を始めて採用した「伊吹」級は「青葉」級の代替。軽巡「綾瀬」「大淀」等も5500t級軽巡の初期型の代替として計画されていた。

対する米国は新たに艦艇大増備のヴィンソン計画を発動し、新型の「サウスダコタ」級戦艦や「エセックス」級正規空母他多数の艦艇の建造に取り掛かっていた。

しかし、日米の戦争準備は進行しつつあった。

## 開戦への坂道（後書き）

御意見・御評価・御批判お待ちしています。

昭和16年に入ると、日米の外交関係悪化は目に見える物になった。

その要因となつたのが、ハワイにおけるエヴァ海兵隊飛行場へのテロ攻撃であつた。

6月1日早朝、何者かがエヴァ海兵隊飛行場に侵入し、駐機されていた戦闘機や偵察機5機を破壊した。これに対し、飛行場の海兵隊員が応戦し、結局犯人グループは全滅。海兵隊にも3人の死者が出た。

事件数日後の記者会見において、海兵隊当局は犯人が全員日系人であり、しかもこの内の一人の自宅から、日本海軍と内通する文書を発見したと発表された。

これによつて、アメリカ国内における対日感情は一気に悪化した。西海岸やハワイでは日系人やアジア系住民に対する暴行や襲撃事件が多発した。新聞もそれらの行為に賛同する形の記事を書きたて、それがさらに反日感情を増幅させた。

アメリカ政府は、日本政府に謝罪と損害賠償を請求したが、もちろん日本政府も海軍も見に覚えの無い事に謝罪も損害賠償もするはずがない。

戦後の調査では、この事件は失業していた日系人たちを軍の工作員が唆しやらせたと判明している。

しかし、それがわかつたのはこの事件から実に4年後の事である。

アメリカ政府は日本政府が謝罪、損害賠償を行うまで、在米資産の凍結と石油ならびにくず鉄の輸出の全面禁止を打ち出した。

これらアメリカ政府の政策に対し、日本でもアメリカへの国民感情が一気に悪化した。

「許すまじアメリカ！！」

「野蛮大国アメリカ！！」

こういった言葉が市中にあふれ返った。

もつとも、日本政府とて馬鹿ではない。これがアメリカからの挑発行為であることをしつかり見抜いていた。

この時の首相は公家出身の近衛文麿であったが、このアメリカとの外交関係に神経をすり減らし、体調を崩したため7月1日を持つて総辞職し、後任には海軍大臣であつた米内光政が親補された。

後任海軍大臣には掘梯吉海軍中将が大將に昇進の上就き、陸軍大臣は下村定大將が就いた。

この内閣は、実質上の戦争準備内閣であった。ただし、米内、堀、そして下村も対米参戦反対派だった。このような内閣が簡単に組閣できたのには理由があった。

ところで、実は昭和11年2月に陸軍皇道派がクーデターを企てる事件が起きた。幸いクーデターは未遂で終わり、容疑者は全員逮

捕されたが、この後軍の中央部を統制派と呼ばれる派閥が牛耳った。

そしてその統制派が暴走したのが、昭和12年7月7日の北京事件であった。

これは北京近郊租界駐屯の日本軍が、内閣の中国内戦不介入方針を無視して、独断で戦闘に参加した事件である。首謀者は辻陸軍少佐であった。

ところが、戦場での混乱から日本軍部隊は中国国民党ならびに共产党両軍から攻撃され、参加した連隊がほぼ全滅に近い損害を被つた。辻少佐も戦死した。

この後、日本は満州ならびに沿岸地域租界外の中国駐屯部隊を全て撤兵させた。また、辻少佐の暴走を食い止められなかつた牟田口大佐も辞任の上予備役編入に追い込まれた。

もちろん、軍内部だけの問題ではすまなかつた。昭和天皇も独断の上で動き、加えて大損害の発生に大いにお怒りとなり、結局これが契機となつて、統帥権が内閣に委譲されるという、明治以来の大改革へと繋がつた。

これは後々に、軍部の独走を食い止める有効な手段となる。

また戦後には現役武官の内閣への参入も禁止されることとなる。

とにかく、米内内閣組閣の影には、このような動きがあつた。

一方で、満州国もこの日米の動きに注視していた。

日本と満州は日満安全保障条約を結んでおり、どちらかが侵略を受けた場合は支援するという規約があった。

万が一、日本がアメリカから宣戦布告を受けた場合、満州国は日本側に立つてアメリカと戦う必要があった。

そして1941年8月。満州国の首都新京に軍ならびに政府要人が集まり、極秘裏に対米戦争を想定した重要会議が行われた。

首相や陸軍、空軍大臣。在満日本軍総司令官。そして、義勇艦隊総司令官の白根中将の姿もあつた。

**新内閣（後書き）**

御意見・御感想・御批判お待ちしています。

新京に集まつた政府・軍幹部は早速、今後日米戦勃発に備えての満州国の方針について話し合つた。

「私としては、満州国が直接戦争による打撃を國土に受けないかが心配です。」

そう最初に発言したのは、満州国首相の張宗恵だ。

彼の心配はもつともな事である。これまで満州を含む中国大陆では、幾多の戦乱によつて何度も國土が荒廃してきた。その度に、多くの国が倒れる要因となつた。

しかし、それに対し満州国軍參謀總長の石原莞爾大将が発言する。「首相。確かに國土が荒廃することを心配されるのは、もつともです。しかし、私としてはソ連と中国の動きが気になります。」

その発言に、駐満日本軍司令官の星野哲郎中将が同調した。

「私も石原大將の意見に賛成です。日米戦が起き、日本が介入できないことを良い事に、ソ連軍が独逸軍との対決を前にして、東の資源地帯であるこの満州に侵攻しないとも限りません。」

一時期、独逸はソ連方面の侵攻を考えたようだが、部下の進言を受け、アフリカならびに西部戦線にケリが着き次第侵攻を行うという方針に転換していた。

これに伴いソ連は歐州方面において、一時的とはいえ戦力の余裕が出来た。これらの戦力が極東に移動しているという情報も入ってきていた。

「それにです。米軍が直接我が満州国を襲うということは、その手前の日本本土を飛び越えるしかありません。アリューシャン列島からの長距離爆撃も考えられなくはありませんが、米軍の現有の爆撃機では不可能であり、今後配備されたにしてもそれまで2・3年の猶予があるでしょう。」

石原大将が報告する。

満州国では、中ソからの侵攻に備えて早いうちから情報機関の整備を行つてきた。その機関が対米諜報任務にも威力を発揮しだしていた。

「では石原閣下にお伺いしますが。現状でソ連軍が我が国に侵攻した場合、戦力的に優位に立てますかな？」

張首相が聞く。しかし、石原は首を横に振った。

「残念ながら、それは難しいと思われます。現在も我が満州国軍は建国以来南北国境を守るために戦力を増強してきました。質的にはかなりの向上を見ています。しかしながら、ソ連軍が本気を出せば、ノモンハン事件以上の戦力を出してくるでしょう。」

この時点では、満州国は自国の工業化の進展に伴い、かなりの装備が自国製で賄えていた。しかし、それは平時の話であつて、戦時になつたら心許ない。

例えば、空軍は奉天に完成した航空機製造公司や、新京郊外の満州飛行機で航空機を製造していた。しかし、この工場は日本と企業との合弁会社のため、製造された機の多くは日本に納入されていた。

だから、中島飛行機がキ43として設計中だつた機体を改修した四十式戦闘機の「飛龍」は、この時点で実戦配備されていたのはわずか96機であつた。この他に存在するのは日本から購入した97式戦闘機や、義勇艦隊所属の96、95式戦闘機ぐらいであつた。

また、戦車も日本陸軍と共に75mm野砲搭載で装甲厚50mmの零式中戦車の製造が始まつてはいたが、現時点で満州陸軍に配備されたのはわずか8両であつた。

今後日米戦が始まれば、さらに満州國軍への納入が遅れる可能性もあつた。

さらに、石原の言葉を引き継ぐ形で、白根中将が発言した。

「おまけにです。有利であつた海軍力もソ連軍が戦艦を保有した事により、一気に劣勢に立たされてしましました。」

ソ連軍が保有した戦艦というのは、去る1月にアメリカから購入した「ネヴァダ」と「オクラホマ」の2戦艦で、売却後は「ウラジオストク」と「アルハンゲリスク」と改名されていた。これ以外にも、スターリンは巡洋艦や駆逐艦を複数買い込んでいた。

現在この新ソ連太平洋艦隊はペトロパブロフスク・カムチャツキーに在泊しており、その南下が警戒されていた。

ちなみに、ルーズベルトがこれら艦艇の売却に同意したのは、北

方に日本海軍の目を向けさせるためで、ソ連による満州侵攻を後押しするためではなかつた。もとより、アメリカ政府は、満州をあまり重要視してはいなかつたのだ。

「日本がアメリカと戦争状態に入つた場合、関東軍が総撤退する可能性はありますか？」

張首相が星野中将に問う。

「総撤退はありません。日本にとって租借地ならびに満鉄線の警備は必要不可欠です。ただし、現在の部隊を、本土で待機中の予備部隊に代える計画はあります。」

つまり、実戦経験も現地の情勢にもござい、一線級部隊に代えてしまつといふことだ。

「憂慮すべき事態ですね。」

誰かがそう漏らした。

「とにかく、日本がアメリカと戦争に入るのは速くとも今年の12月ごろと見込まれています。それまでに出来うる限りの策を練りましょう。諜報活動ならびに国境の警戒を厳にします。ただし、万が一に備え全軍に臨戦態勢を取らせましょ。」

石原が言つ。

「私も石原大将の意見に賛成です。」

白根も同調した。

最終的に、会議はさうじて教育等の民政問題に移つた。そつした内容などを若干行つた後解散した。

白根は会議が終わると、亞細亞号に飛び乗つて旅順にへと戻つた。

重臣会議（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

なお、この作品中では、満州国は兵器に西暦の年号を使っています。

旅順に戻った白根は、一日休んだ後、各部隊の視察を行つた。

まず最初に向かつたのは郊外に設けられた飛行場である。

現在義勇艦隊が保有している機体は、2年前に比べ大幅に増えていた。

この時点では、第一、第二航空隊に配備されていたのは、戦闘機が96式艦上戦闘機が28機、95式艦戦が20機。そして、ノモンハン戦の際捕獲したソ連のイ16戦闘機が10機の計58機であった。

攻撃機は、97式艦上攻撃機2型30機、96式艦攻12機。そして、フェアリー・アルバコア攻撃機16機の計58機である。

アルバコア攻撃機はイギリス製の複葉攻撃機で、満英貿易融和策の一貫として購入された。本来なら、この機体はそれ以前使われていたソードフィッシュの後継機であつたが、パイロットから不評だつたため、早々と引退したという曰くつきの機体だ。

まあそういう機体だから売つてくれたとも言えた。

これらの機体以外に、偵察機として97式軍司令部偵察機8機と、100式司令部偵察機も2機保有していた。計10機。

そして水上機が、95式水偵12機と、90式水偵6機に加えて、99式双発飛行艇5機の計23機である。

」の他に練習機も保有しているが、それについては割愛する。また、台湾に展開している航空部隊についても今回は割愛する。

基地に突然、総司令官の白根がやつてきたので、航空部隊総司令官の名古屋大校は大いに驚いた。

「白根司令官。どうしたのですか、數から棒に。」

「いや、ちょっとこのあたりで各部隊の様子を確認しておこうと思つてな。・・・・・どうかな、各部隊の練度は？」

「はい。どの部隊も大いに練度は向上しています。初期のころは機材や言語関係で苦労しましたが、今は機材も充分。要員も、中国語をマスターしているので、かなり改善しています。」

その報告に、取りあえず一安心する白根。

「そうか、大いに結構だ。」

「はい。しかし、もし噂になつてゐるアメリカやソ連との戦いが始まつたら、自分としても実戦経験のない彼らがどこまでやれるかは未知数です。」

義勇艦隊のパイロットは、海難救助や洋上捜索任務を何度も行つたことはあるが、実戦経験をもつてゐる者はほとんどいない。だが、これは致し方ない問題である。

名古屋大校との会話を終えると、航空部隊の視察に入った。

まずは戦闘機隊である。丁度上空では4機の編隊が、編隊旋回を鮮やかに行っている所であった。

「上手いな。」

その光景に、一言そつ漏らす白根。

「あれは戦闘機隊隊長の真下大尉の小隊です。彼は非常に有能です。もと帝国海軍母艦航空隊の戦闘機乗りです。」

同行していた参謀の大月少佐が言つ。

「母艦戦闘機乗りだと。だつたら腕が上手いはずだ。しかし、何で我が軍に来たんだ？」

自分のような物好きはそつそついないと思つていただけに、白根には驚きである。

「彼は帝国海軍在籍中に上官への命令不服従と暴行事件を起こしたのですよ。軍法会議では、相手の上官も理不尽だつたことと、部下からの嘆願でなんとか懲役は免れたのですが、結局除隊に追い込まれてしまいましてね。そこで我が部隊に移ってきたわけです。ちなみに、その時の部下だつた者も2、3人我が軍に移籍しています。彼らのおかげで戦闘機部隊の練度は大いに向上しました。」

その言葉に、少しばかり苦笑してしまつ。

(我が軍は本当に様々な人間が集まつているのだな。)

次に向かつたのは練習航空部隊である。この日、攻撃部隊は予備

機と哨戒任務の機体を覗いて、全て満州陸軍との合同演習に出動中であり、あいにく見ることは出来なかつた。

練習部隊は、日本製の赤とんぼを使って訓練中の部隊である。隊員は教官を除けば、殆どが17・8の若者である。

白根が行くと、整備実習中で合つたらしい。全員が機体に取り付けて訓練を行つていた。

「あー！白根司令官。総員敬礼！！」

白根に気付いた教官の一人が敬礼をする。それに対し、白根は手を小さく振つて言つた。

「いいよ諸君。今日はたんなる視察だ。いつもどおり訓練を続けたまえ。」

「はー！全員訓練を続けよ。」

「「「了解ーーー」」

全員そのまま訓練を続ける。

その中には、明らかに女性とわかる隊員が複数混じつている。

黄海の海戦で女子飛行隊員が活躍して以降、女性志願者が飛躍的に増えた。まだ軍艦には乗つていないが、航空部隊や高射砲部隊には広く浸透している。

「搭乗員の養成は進んでいるのかね？」

再び大月参謀に問う白根。

「はい。先ほどの教官は吳上尉とのことです、中満戦争後に亡命してきた元中華民国空軍のパイロットです。部下の人当たりもよく、面倒見も良いので非常に有能です。」

練習部隊も高いレベルを維持できているようだ。

白根は練習生の女子兵の一人に声を掛けてみる。

「おい、きみ。」

こきなり声をかけられた女子兵は仰天してしまった。

「えー、あ、はい。」

すぐ緊張した敬礼をする。それに対し、白根は笑いながら言つた。

「ハハハ・・・・、楽にしましたまえ。」

その言葉で、その女子兵は少しばかり緊張を解いた。

「君は飛行機が好きなのかな?」

「はい。大好きです。」

その女子兵は元気良く答える。その瞳を見て、白根は満足した。ひたむきな真剣さと、未来への希望を持った良い眼をしている。

「名前は？」

「加古芳江です。」

「加古飛行兵。しつかりがんばれよ。」

「はい。」

白根は会話を終えると、今度は奥上尉の側に行き言つた。

「奥上尉。若人たちをしつかり頼むぞ。」

「はい、お任せください。必ず一人前のパイロットに育てて見せます。」

しきりして、航空部隊の視察を午前中一杯行い、満足した後、白根は港へと向かつた。

## 視察（後書き）

御意見・御感想・御批判・質問お待ちしております。



## 昼下がり

港に向かつた白根は、今度は魚雷艇隊や潜水艦部隊の視察を行つた。

しかし、魚雷艇は一番出動率の高い部隊で、この日も港に残つていたのは1隻のみだつた。そのため、魚雷艇部隊の視察は早々と終わり、次に潜水艦部隊の視察に出向く。

潜水艦は以前は1隻しかなかつたが、ソ連軍の増強を受けて義勇海軍も新たに「S3」型潜水艦3隻の建造に入つてゐる。

「S3」型は「S2」型の拡大発展型で、魚雷発射管が4門に増強され、艦体も一回り程大きくなつてゐる。また、航続距離延長のために燃料タンクを拡大したため、排水量が100tも増加している。しかし、性能の低下はエンジンの出力アップにより相殺された。また、戦時には急速量産可能な設計となつてゐる。

この新型艦の内、既に一番艦の「S3」は竣工し、乗員の慣熟訓練に入つてゐる。

白根は潜水艦部隊司令官である大瀬少校の下を訪ねた。

「白根司令官。そろそろうちの部隊に来るころかと思い、お待ちしております。」

大瀬は帝国海軍退役大尉である。帝国海軍時代は将来を有望視されてゐたが、友人が2・26テロ未遂事件に関わつていたために彼も取調べを受けた。それによって閑職に左遷されたため、そのまま

退役した。

退役後しばらくは民間企業を転々としていたらしいが、そこを義勇海軍にスカウトされている。

義勇海軍配属後少しの間は、中国語の取得に苦労したらしいが、今は日常会話と艦内の指示語程度ならしっかりとしゃべれる。

「歓迎ありがとうございます大瀬少校。早速だが、潜水艦部隊の現状を知りたい。もちろん、一応報告は受けているが、君の率直な意見を言ってくれ。」

白根は、潜水艦部隊からの報告には一応目を通していた。しかし、書類だけではわからないこともある。大瀬の率直な意見もそうであるし、部隊の士気なども直接尋ねてみなければわからないことは多い。

「私からの意見としましては、ほとんどは御覧になつた報告書のとおりです。ただ強いて言つならば、訓練不足の点があります。」

この言葉に、白根は意外だと思った。潜水艦部隊は航海時間では充分な訓練を行つてているはずである。訓練不足など考えられなかつた。

「訓練不足だと?しかし提出された書類には充分に訓練しているように書かれていたように見えたが、それでも不足なのかな?」

「はあ。いえ、確かに今までの任務でしたら充分な訓練時間を行つてきました。しかし、今後起こると予想されている対米、対ソ戦では必要になると思われる訓練が不足しているのです。それは私にも

「つまり、君は遠洋航海訓練を行いたいと言つのだな？」

その言葉に、白根は大瀬の言いたいことが頭に浮かんだ。

「つまり、君は遠洋航海訓練を行いたいと言つのだな？」

義勇海軍における遠洋航海訓練はよく行われている。もちろん、もともと艦艇の数が少ないのであるから、頻繁とまでは行かないが、それでも練習戦隊では必須であるから行うし、日本や台湾までの航路防衛や、航路上における人命救助の際は出動するから、各水上戦隊も年に一、二度は台湾や日本本土ぐらいなら出かけていく。

しかし、潜水艦部隊は元々が近海防衛と対潜訓練の標的が主任務だから、そのような遠距離航海は行わない。行つても黄海の中ほどだ。

しかし、対米、対ソ戦では日本海軍と共同で遠方の戦線まで出動する可能性は高い。そうなると、確かに遠洋航海訓練は必要である。しかし、他国との了解に入る可能性もあるから、日本政府や朝鮮政府準備委員会、台湾総督府に許可を仰がねばならない。

「はい。つきましては、司令に外交筋への要請を行つていただきたいのですが。」

これに対し、白根は笑つて答えた。

「ああ。やれるだけやる。まかせておきたまえ。しかし、書類に書いてくれれば良かつたのこ。」

「いえ。直に要請した方が良いと思いました。もし司令官がこなかつたら自分から出向こうと思つていました。ところで、これから食事でもどうですか？」

白根は飯食をまだ取つていなかつたので、いただくことにした。

「では、お言葉に甘えてもらおつか。」

義勇海軍では基本的に兵から士官に到るまで同じ物を食する。基本的に義勇海軍では、給与と住居面以外の平等性を高めている。だから、例えば衣服の支給回数も同じであるし、艦内や官舎の人当たりのトイレの数も同じである。

「この日の食事は、麦飯に高粱入りの味噌汁、そして豚の生姜焼きであった。」

義勇艦隊では食事には極力、肉や魚を出すことを行つている。

給料もよく、飯も上手くおまけに平等性の高い環境が整つているので、貧困層出身の者たちからは大いに歓迎され、そしてそれを積極的に行つてゐる白根は支持されていた。

大瀬等の帝国海軍出身者たちは、それが新興国における準軍事組織の義勇艦隊が高い士気を保つてゐる秘訣であると感じていた。

白根は潜水艦部隊の視察を終えると、艦隊司令部に戻つた。

「この2週間後、潜水艦部隊に遠洋航海訓練の許可が出され、部隊は日本の横須賀までの往復航海を行つた。しかし、これが結局戦前

最後の遠洋航海訓練となつた。

時に、開戦の3ヶ月前のことであった。

## 暁下がり（後書き）

御意見・御感想・御批判お待ちしています。

今回は若干義勇艦隊の待遇面のことを書きました。それに関する意見も受け付けています。

日本と米国との関係の悪化は、昭和16年の10月に米政府が日本人強制移住を決定したことによつて、ついに取り返しのつかない物となつた。

これにより、日本国内の世論も反米一色に染まつてしまつた。また米国世論の反日感情にも拍車がかかつた。

そして同年10月10日。外務大臣から日本の来栖大使に対し、米国へのテロ謝罪を行わない場合、12月8日をもつて日本帝国、ならびにその保護国（朝鮮、満州帝国）に対し宣戦布告を行う通知がなされた。俗に言うハルノートである。

こうして、日本とアメリカの戦争は避けえない物となつた。

そんな状況下で、既に日米両軍は戦闘準備に入つていた。

アメリカ軍はミッードウェーヤウホーキといった島々の航空隊を増強し、さらに太平洋艦隊に40cm砲を搭載した最新鋭戦艦の「ノース・カロライナ」と「ワシントン」を配備し、日本連合艦隊に対し、砲戦力で優位に立とつとした。

また、開戦したならば真っ先に最前線となるフィリピンには最新鋭戦闘機のP40や最新鋭爆撃機のB17に加えて、限定旋回可能なM3リー戦車を続々と投入し、日本軍の侵攻に備えた。

一方の日本海軍は、6月に竣工した「瑞鶴」とその姉妹艦である「翔鶴」で組む第五航空戦隊や9月に竣工した46cm搭載艦の「

大和」と、潜水母艦を改装した軽空母「祥鳳」を戦力化し、米太平洋艦隊に対し航空戦力ではやや優位。砲戦力でもほぼ同等の戦力を有すまでに戦力を強化していた。

そして、我らが義勇艦隊も対米戦への準備を進めつつあった。

9月下旬。旅順港、大亞細亞造船の3万t大型ドッグでは、昼夜兼行での突貫工事が行われていた。

そのドッグに、新たに新設される第一航空護衛戦隊司令官の八島文幸少将がやってきた。彼は今年32歳という若い將軍である。15歳から8年間日本海軍で働き、パイロットとして活躍していくが、事故で部下を3人失つてしまい辞職。しかし、空と海への憧れを捨てられずに義勇艦隊に入っている。入隊時の階級は兵曹長であったが、半年後には昇進テストをパスして少尉。さらには、航空部隊での高い働きとその後の昇進テストによって、去年暮れには大佐となり、そして1週間前に現職の拝命とともに昇進した、まさにエリートである。

「改装の具合はどうかね？」

彼は技師詰め所までやってくると、主任設計士である高良明技術中佐に声をかけた。

「あ、八島少将。順調です。予定では後2日で工事が終了。異常が

なれば、その3日後にはドックから出せます。」

その報告に、八島は満足そうな顔をする。

「それは結構だ。しかし、わずか3ヶ月でここまで立派な空母に仕立て上げられるとは思わなかつただ。」

そう言いながら、八島はドック内の船を見る。

その船は最上甲板に一切の構造物がない、平甲板を有していた。そしてその甲板にはカタパルトとエレベーターが設置されている。そう、この船は航空母艦であった。

「元々が空母への改装を前提に設計されていましたから。それに加えて、スponソnや格納庫側面、無線塔等は我が社お得意のブロッケ工法が行えるよう、あらかじめ陸の工場で作つてありました。それをたんに上部構造物を取つ払つて、積み木よろしく組み上げたにすぎません。」

高良が自慢顔で説明した。

彼らの目の前にある空母は、アメリカやイギリスの「護衛空母」、そして日本の「大鷦」級と同じ貨物船改造空母であった。もととなつたのは大亞細亞通運の「白虎」級貨物船である。

改装が終了し、義勇艦隊に編入される時も、そのまま貨物船時代の名前が受け継がれる予定となつていて。全長約200m、飛行甲板長190m。武装は88mm連装高角砲4基に、40mm連装機銃4基、25mm連装機銃10基。そして搭載機は36機プラス予備機6機で、最高速力は25ノットである。

上記の性能だけ見れば、後の日本海軍の「準鷹」級に若干劣る程度で、かなり有力な艦に見える。しかし、カタログデータだけで全てを判断してはいけない。

例えば、先ほど高良が言つたとおり、この艦は3ヶ月で改装されている。これは米護衛空母の改装時間とほぼ同レベルであり、日本の改装空母の半分ほどである。つまり、日本空母のようにかなり大規模な改装を施したわけではなく、アメリカ空母のように、比較的簡便な改装ですましたといふことだ。

そのため、防御力は無きに等しいから、1発の爆弾で戦闘不能になる。その代わりに、容易に修理できるように設計されていた。また、ダメージコントロールにも気を遣つた設計となつていた。

加えて魚雷搭載庫に魚雷調整室も設けられていたが、その搭載本数は6本（後に10本）と少なく、あまり対艦戦闘を考えていらない設計であることがわかる。

しかし、艦隊戦での価値は低いが、船団護衛には充分すぎるほどに戦闘能力を持つていた。これには、ある疑惑があつたからである。その疑惑は、いざれ分かる事となるだろう。

「しかし、船団護衛用に設計されたのに、まさかこの艦の初陣予定が攻撃任務とは、なんたる皮肉かな。」

「そうですね。」

八島と高良がそんな会話をしたことを見ている者はいなかつた。

## 改装空函（後書き）

御意見・御感想おまちしています。またキャラクターへの意見など、どうぞお寄せください。

## 決戦のとき迫る

日本の対米通告期限の迫った11月20日。義勇海軍の母港である旅順には、艦隊の主力艦艇が集結していた。

改装を終えた航空母艦「白虎」、「紅虎」。創設以来の主力艦である「流星」級駆逐艦。開戦を間近にして武装を強化した「大洋」級コルベット。竣工して間もない「奉天」級フリゲート。そして3隻の潜水艦や沿岸警備の魚雷艇も勢揃いしていた。

艦隊や部隊、戦隊司令官、そして各艦艇の艦長や艇長が、この日桟橋の側に建てられている義勇艦隊総司令部の大会議室に集まっていた。彼らの視線は総司令官である白根に注がれていた。

この数日前、白根総司令官は正式に大将に就任し、義勇艦隊独自の物である空色の制服の肩章と襟章には大将を表す3つの星マークが誇らしく付けられていた。

「諸君。いよいよ戦いの時が来た。12月8日までに大日本帝国がハル・ノートに対する対米通告を行わない場合、安全保障条約を結んでいる我が満州国も同時にアメリカと戦争状態に入る。米国を仮想敵にしての作戦計画については、かねてより日本海軍と協議してきたが、我々はその作戦計画に沿つて行動を起こすこととなるだろう。」

この一言で、場はざわめく。ちなみに、安全保障条約とは、日満協約の翌年に結ばれた物である。

「なお、艦隊編成については、戦時体制へ移行するため第一艦隊を

編成する。司令官には木村中将に就いてもううつ。木村中将。ようじく頼むぞ。」

髭のショーフクと部下たちから親しまれている木村中将が立ち上がり、そして白根に向かつて敬礼した。

「はー全身全靈をこめて働く所存であります。」

平時、義勇艦隊の任務は国境警備や密輸取締り、行つても他国からの要請に従つての人命救助や海賊退治であるから戦隊や個艦単位での行動はあっても、艦隊単位で動くことは稀である。かつて日本海軍の連合艦隊が戦時のみに編成されていたのと似ている。

もつとも、あくまで艦隊を組むのは指揮上のことであつて、実際には船団護衛任務などを主任務にするので、臨機応変に戦隊や単艦での行動も考えられている。

「それでは諸君。手元の書類を見て欲しい。それぞれの行動計画が書かれているはずだ。よく確認しておいて欲しい。」

会議出席者が、手元に置かれている封筒を開き書類を取り出す。

これら書類は、もちろんそれ内容は違う。ほとんど平時と同じ事が記されていて、内容がないのは魚雷艇部隊と基地警備部隊だ。

司令官である金少校と綾崎少校もあらかじめそれを予想していたから、特に不満などはない。この2部隊は防衛用部隊であるから、外に出て行く任務などはない。強いて言つなら、スパイや工作員への対策を強化するぐらいだ。もつとも、それは開戦時だけになるのだが。

一方、それとは対照的に深刻な顔をしているのは第一艦隊司令官の木村中将と、第一航空戦隊司令官の八島少将だ。

この二人がそのような顔つきになつたのは、後々判明することとなるだろう。

また、一人ほど深刻ではないものの、それなりに顔をしかめた者もいた。各練習部隊司令や補給担当部隊の司令官である。彼らは戦時になつたら、必然的に忙しくなる。練習部隊は短期間に多数の兵士を育てねばいけないし、補給部隊も大量消費する物資の輸送を請け負うこととなるからだ。

「なお、質問がある者は今のうちにするよ。」

白根のその言葉に反応するように、複数の人間が手を上げた。

「大貫大校。」

最初に発言を許されたのは第一戦隊司令官の大貫大校であつた。

「私は、日本海軍との共同任務を行うこととなりましようが、その場合、指揮系統はしつかり守つてもらえるのでしょうか？日本海軍内では、我々を敵視し見下していると聞きますが。」

彼の言葉に、他の人間も頷いた。

義勇海軍はこれまでに幾つかの戦果を上げてきたが、それでも日本海軍はあくまで彼らは見掛け海軍であるという見方をしていた。もちろん、全員が全員そういうわけではないが、大方の見方はそう

であるとされていた。

協定上義勇艦隊と日本海軍が共同任務を行つ場合は、どちらの軍にも関わらず、先任指揮官が指揮を執ることとなつてゐる。しかし、それが守られないのではという不安が義勇艦隊内には存在していた。

「私としては、一応豊田海軍大臣や山本連合艦隊司令長官のお墨付きを取り付けてあるだけ言つておこう。だが万が一そのような事態に陥つた場合はその場の臨機応変な指揮を執つてもらう以外にない」としか答えようはない。」

この2週間前、白根は日本へと飛び、直接豊田副武海軍大臣や山本五十六連合艦隊司令長官と話をつけてはいた。だが、前線指揮官一人一人がそれを遵守するかは彼自身、甚だ疑問であった。

だが、彼らとしてはそんなこと起きて欲しくはなかつた。仲間を疑うようでは、戦争は覚束ないと考えていたからだ。

白根はその後幾つかの疑問に受け答え、それを終えると会議を締めくくる形で「つづけた。

「それでは諸君の健闘を祈る。だが、決して死んではいかんぞ……。」

## 決戦のさわぎ（後書き）

御意見等を募集しています。どんな面白いなじともかまいませんので、よろしくお願いします。

## 出撃前夜

義勇艦隊各部隊がいよいよ出撃する2日前、白根の元を訪れた一人の若者がいた。義勇艦隊中尉の制服を着た20歳半ばのその青年を見て、白根は嬉しさを含んだ声を上げた。

「おおー！護じやないか！」

彼の元を訪れたのは、四男の白根護だつた。今年25歳になる彼は、海洋学院を次席で卒業後義勇艦隊で働き、3ヶ月前から空母「白虎」乗り組みの航海士となつていた。それに加えて、この3ヶ月ほどは白根自身も忙しかつたため、会つていなかつた。その彼が突然彼の前に現れた。

「久しぶり。父さん。」

「うん。それにしてもどうしたんだ、數から某に。そう言えればお前も2日後出撃だつたな。」

白根がそう言つと、途端に護の表情が固くなつた。

「わう。それで、ちょっと話があつて来たんだ。」

「何だ？話つて？」

一体どんな話を彼が持つてきたのか、白根には疑問だつた。

「その、・・・・・・ 実は好きな人が出来たんだ。それで、戦争が始まる前に婚約しておこうと思つて。」

それを聞いて少しばかり白根は驚いた。この時代、結婚は恋愛結婚よりも見合い結婚の方が格段に高かったからだ。もつとも、だからといって白根は別に恋愛結婚に反対というわけではなかった。むしろ、彼がどんな女性に恋したかの方が気になつた。

「ほつ。別に俺はお前が、特に問題ないならどんな女性に恋しそうと文句は言わんぞ。それで一体どんな女性なんだ？」

その言葉に、今度は護の表情が少しばかり和らいだよつに見えた。

「その、3ヶ月前に「白虎」艦内であった飛行兵なんだけど。歳は6つ下の19歳。性格はすぐ良いいんだ。ただ・・・・・・」

そこから少しばかり言葉に詰まる護。

「ただなんだ？」

「その、その人は両親が早いうちに死んで、孤児院出身なんだ。」

白根は護が表情を崩さなかつた意味を悟つた。確かに出身が不確かな人間は、この時期結婚されるのを嫌がられる傾向にあつた。こうした差別は他にも部落差別や沖縄、北海道、朝鮮人への差別などといった形で存在した。

しかしながら、白根はそういう差別には反対の立場だつた。別にどこの生まれであろうが、どんな過去を持つていようが、今しつかりした人間なら差別する必要などないというのが彼の持論だつた。

「なんだ、そんなことか。別に俺は生まれがどんな人間だろうと、

今しつかり生きている人なら反対しないぞ。」

「本当、父さん？」

その言葉に頷く白根。それを見て、護の表情が一気に和らいだ。

「ただしだ。」

「えー! ただし? 何?」

「明日その人を連れてこい。お前がどんな人に惚れたか知りたい。それに、正式に婚約しておいた方がいいだろ。俺が証人になるよ。」

翌日夕方。

「何やつてるんだ俺は?」

白根はぼやきながら、タクシーに乗って家へと急いでいた。

彼自身が護に家へ来る時間を指定したのに、彼自身が会議が長引いてその時間に遅れてしまったのだ。

「運転手。急いでくれ。」

彼はタクシーの運転手をせかした。

この時期、満州国や日本ではアメリカの石油輸出禁止後も、蘭印

や中東の石油が入つてくるので、ガソリン車がちゃんと動いていた。もつとも、値段はかなり割高になつたが。

彼が家に着いたのは約束した時間の30分後だった。

料金を払い、家の中へと入る。

「こりゃ着替えている時間はないな。」

玄関の戸を開くと、妻がそわそわしながら待つていた。

「あなた！ 一体何してたんだい！ 一人とももつお待ちかねよ。」

「いやすまん。会議が長引いてな。すぐに会つよ。」

「急いで、二人は客間にいますから。」

妻に鞄を渡して、彼は客間へと急いだ。そして扉を開けた。

「いやすまない。会議が長引い「ええーー！」

白根がいい終わらない内に、若い女性の声が響いた。

「護さんのお父さん、司令官だったんですか？」

白根にはその声に聞き覚えがあつた。

ソファーに座つてゐるその女性を見てみる。

女性用下士官服を着たその人物を見た途端、白根の脳裏によみが

える物があった。

「君は確か、飛行練習生の加古芳江さんだったな？」

その言葉に、今度は護が仰天した。

「えー、父さん芳江さんのこと知つてたの？」

人とはどこで繋がっているかわからないものである。

その後話を聞いた結果、事実はこうであった。

白根の視察を受けた数日後、彼女は成績優秀者として「白虎」乗り組みとなり、乗艦した。そして乗艦後に艦内で迷った際に、護と出会い、それが元で付き合いが始まったそうだ。

「けじまちか、護さんのお父さんが司令官だったなんて。私でつきりただの同姓だと思っていて。」

彼女が恐縮する。

白根はそれに対し、笑いながら言った。

「そんな縮こまらんでいいよ。しかし護、いい人を見つけてきたな。

」

その言葉に、芳江はキヨトンとした顔になる。

「あの、司令官は私達の婚約を認めてくれるんですか？」

「もちろんだとも。君の人柄は飛行場で一目見てわかった。出身を気にしているようだが、私はそんなこと気にはしないよ。」

その言葉に、芳江の顔は緊張から、一気に明るい物となつた。

出撃前夜（後書き）

御意見・御評価お待ちしています。

## 出撃――

11月30日早朝。義勇艦隊各艦艇は故郷である旅順の港を後に、戦地へと赴いていった。極秘行動のため、軍楽隊や留守隊員による派手な見送りもない寂しい出撃であった。

総司令官の白根は、桟橋へ行き敬礼をしながら出撃していく艦艇を見送った。

「しっかり戦つて來い。そして・・・・・」

彼の脳裏に航海士として乗り込んだ護と、晴れてその婚約者となつた芳江の顔が浮かんだ。

昨日の夜、正式に彼らの婚約を白根は認めた。だが、それとともに白根の心は重くなつた。

彼は艦隊を、つまりはそれを操る乗員を死地へ送り出す身なのだ。父として、義父として、そして司令官として彼らの幸福をただ祈るばかりの身であるにも関わらず、彼は逆のことをしていた。

今の彼に出来ることは、艦隊の無事を願い、いつづけであつた。

「ちゃんと戻つて來い。」

その言葉を聞いた者はいなかつた。

義勇艦隊は出撃後黄海を南下、一路台湾のポンツー諸島（日本名

ホウコ諸島（）を目指した。ポンフー諸島には、義勇海軍台湾訓練場と台湾海上警備隊ポンフー基地が設置されている。

台湾海上警備隊は、植民地警備軍みたいな組織で、艦艇は海軍の物に引けをとらず、航空隊も持っている。そして大亞細亞造船台湾支社が設置の際に多大な協力をを行っている。その時台湾総督府にその設置を強く訴えたのは、台湾にやってきていた白根とも言わ正在といふ。

そういうわけで、台湾海上警備隊は台湾版義勇海軍の側面も持つていた。

12月3日、艦隊は予定通りポンフー諸島台湾海上警備隊基地に入港した。

義勇艦隊各艦艇はここで燃料や物資を補給し、そして翌12月3日後今回護衛する日本陸軍の輸送船団と合流した。

今回護衛する輸送船団は計8隻で、全船徴用貨物船である。大きさはどの船も700t前後の中型船が集められているが、速力や運動性能はまちまちである。

義勇艦隊ではこうした性能にばらつきのある船で組まれた船団の護衛も考慮されていた。

早速、旗艦である軽巡「海龍」に船長や日本陸軍の輸送指揮官が集められ、会議が行われた。

ここで通達されたのは、護衛艦の配置と非常時の運動についてであつた。非常時には、対艦、対空、対潜の3つの状況が定められ、

それぞれ独自の対応方法が説明された。

例えば、対空の場合は陣形を極力維持しつつ速度を上げ、衝突の危険性を排除して間隔を詰め、対空砲の密度を上げるという物である。

いつした船団の非常時対応は船団の規模や護衛戦力の規模ごとに違う。今回の場合は、空母2隻がつくから、比較的余裕のある護衛が出来る。

航空機の威力は対潜、対空に対しても絶大である。特に今回は戦闘機60機、攻撃機24機、水上機2機の率があるので。制空権の有無は天と地ほどの差がある。

船長たちとの会議が終わった後、艦隊司令官の木村昌福中将は、司令官席に座つて安堵の息をついた。

「なんとか無事に終わったな。」

席につくなり彼がいったセリフである。

木村中将は日本海軍からの流れ組で、元々の専門は水雷であった。そのため、船団護衛には全く造詣がないわけではないが、義勇艦隊に入つてから勉強しただけなので深い所まではいってはいない。

もつとも、実際の所義勇艦隊内で船団護衛の経験があるのは、以前イギリスの要請によつてマラッカ海峡へ海賊対策として貨物船警護の為に出動した駆逐艦部隊ぐらいである。

そう、今回の戦いこそ始めての本格的船団護衛任務なのだ。

しかし、木村中将の懸案はそれだけではなかつた。今回、日本陸軍の指揮官や輸送船の船長が自分たちの指示にひやんといつて来るかといつ心配もあつた。

しかし、これについては幸い顔をしかめる者はいたが、露骨に反対する者はいなかつた。彼らにしてみれば、満州国の民間海軍とは言つても、今まで中國海軍との戦いで勝ちを収めたという実績を持つ義勇艦隊にある程度の信頼を置く氣にはなつっていたようだ。

とにかく、いつして第一の不安材料は払拭することが出来た。だが、戦いの本番はこれからである。

そして12月7日深夜。艦隊と船団は次々と錨を上げて出港した。

今回の戦争は米国側からの参戦であるから、当然日本軍によるフィリピン上陸も考えていいはずだ。もしかしたらアジア艦隊の待ち伏せがあるかもしれない。

艦隊の将兵達の緊張は極限まで高まつていた。そして、運命の12月8日午前零時を迎えた。

## 開戦！フィリピン攻撃開始！！

昭和16年（1941年）12月8日午前零時。ついに日米は戦争状態に入った。

日本と安全保障条約を締結していた満州国も自動的に参戦することとなる。

この時点では、戦争はヨーロッパのみだった。独逸第三帝国はバトル・オブ・ブリテンの敗退後は積極的な行動を控えていたが、今年に入り再びその動きを活発化させ、英本土への空襲を再開させていた。また、北アフリカでは名将ロンメル将軍率いる機械化師団が破竹の勢いで進撃を行っていた。

しかし、北の共産主義大国ソ連、資本主義大国アメリカ、そして世界3位の海軍力を誇る東洋の国日本のがこの戦争には参加していなかつた。

独逸は幾度も日本への同盟締結を促したが、結局日本がその提案を飲むことはなかつた。ナチス政権を危険視していたからだ。

また、英國もアメリカのドイツに対する参戦を望んでいたが、結局他国の戦争には介入しないというルーズベルト大統領の方針により、武器援助に留めていた。

だが、アメリカは戦争を望んでいたと言われている。ニコーディール政策の行き詰まりから、なんとしても大きな消費が見込める何かが必要であった。

それが戦争であった。もつとも、ルーズベルトは本当は独逸との戦争を行いたかったようだが、日本との単独戦争という形になつた。

もつとも、米国は半年後、大西洋で駆逐艦がレバーポートに沈められたとして対独宣戦布告もすることとなるが。

しかし、ここでは米国には誤算があつた。それは日本軍の実力を明らかに見誤っていたことである。そしてそれはまた、満州国に対しても言えることだった。

開戦と同時に、まず行動に出たのは日本軍であつた。

台湾から飛び立つた零戦と陸攻の大編隊がフィリピンへと向けて出撃したのだ。

零戦だけで120機。陸攻は180機という大編隊であつた。また、陸軍からも「隼」（零戦の陸軍仕様）54機、重爆90機が参加した。合計444機の大編隊であつた。

この時期の零戦は、ノモンハン戦の戦訓から防弾や無線機、エンジンを改修した22型であつた。エンジンは初期型の2割増の出力を誇る「栄」21型。無線機は改良によつて感度を高め、重量を減らした零式無線機。主武装はベルト式、長銃身の20mm99式2号機関砲であつた。

「Jの零戦22型は初めての本格的陸海軍共用機であった。そしてこの機体は台湾南部の基地とフィリピンを往復できるだけの航続能力があった。

もつとも、実際は若干不足しており、万が一に備えて海軍は台湾海峡に竣工したばかりである軽空母の「祥鳳」を待機させ、また陸軍は徴用船や途中の小島に救助部隊を待機させていた。

一方、米軍側も少し遅れて台湾への攻撃を開始した。しかし、この時点でもともに台湾へ渡洋攻撃ができる重爆撃機のB17は合計40機のみであった。その他には中型爆撃機のB25やB18もいたが、これらは船団攻撃のために待機した。また、配備されたばかりのP38は練度不足に加えて、初期故障が頻発したため出撃を見合わせた。

「Jの開戦1日目の空の戦いは、日本側に軍配が上がった。

日本側は来襲したB17に対し、恒春陸軍基地に試験配備されていた重戦闘機の「しうき」12機と、複座戦闘機の「屠龍」16機、それに加えて台南基地所属の海軍局地戦闘機「迅雷」12機や旧式戦闘機42機で迎撃。結果は一部の基地に打撃を被り、3機が撃墜されたもののB17を11機撃墜し、3機を修理不能な程損傷させた。

一方の日本側はクラークフィールド、イバ等の在比米軍の主要航空基地を攻撃。迎撃に出撃した米軍側のP36、P40戦闘機200機あまりと交戦し、戦闘機29（内空戦によるもの15）、陸攻・重爆17機を失いながらも撃墜89、地上撃破234機という大打撃を与えた。

また、キャビテ海軍基地を攻撃した部隊は潜水艦2隻に小艇艇数隻を撃破、さらには200本以上の魚雷を爆碎した。

これによつて、米軍は慢性的な魚雷の不足に悩むこととなる。一方して、この日の内に日本軍はフイリピン方面における絶対優勢を確保した。

一方、義勇艦隊もこの日初戦闘を行つた。早朝、米軍の哨戒機、PBYカタリナの接触を受けた。

そして昼前、「白虎」の哨戒レーダーが敵を捉えた。

「敵編隊。艦隊11時方向より接近。数約30・距離約50・」

レーダー室からの報告が、旗艦「海龍」の座乗の木村中将に伝えられた。

彼は一言ひと言つた。

「迎撃戦闘機隊、発進せよ……。」

**開戦！フィリピン攻撃開始！！（後書き）**

ショウキの字が中途半端であることをお詫びします。変換しても出なかつたので。申し訳ない。

## 迎撃開始！

船団護衛の航空機は、既に6機が上がっていた。

義勇艦隊の艦載機は、三機種で、うち一機種は満州国空軍の制式戦闘機である40式戦闘機「飛龍」である。

「J」の機体は元々奉天にある、奉天航空機製造公司の親会社である中島飛行機が、次期日本陸軍主力戦闘機として開発していた機体である。

しかし、陸海軍の航空機一本化の煽りを受けて、結局不採用となつた。だが、その時点で設計は既に澄み、試作機の開発に入つていた。

そこで、零戦を輸出できない代わりとして満州国やタイ等への輸出用戦闘機として転用された。

そして、エンジンや機体の強化などの改修の上、満州国では満州國空軍40式戦闘機「飛龍」として制式採用された。

義勇艦隊が使用しているのはその艦載版で、空軍機との違いがいくつかあった。

まず、翼はフロート構造となり、また外付け式の機銃ポットが装備可能となつていた。

「J」の機銃ポットは、空気抵抗を増やすが、正規の武装が12・7mm機銃2基のみの「飛龍」にとつてはまさに必殺兵器となつた。

また、海上飛行に必要な計器も搭載された。

しかし、こうした改修に時間を喰い、製造は今年の4月からで、結局全部隊に行き渡る分の生産は間に合わなかつた。

そのため、今回「飛龍」を搭載できたのは「白虎」のみで、同型艦の「蒼虎」には日本海軍から急遽購入した96式艦上戦闘機が搭載されていた。

すでに発艦していたのは「白虎」の「飛龍」で、木村中将の命令によりさうに「白虎」から9機の「飛龍」、「蒼虎」から12機の96艦戦が発艦した。

船団護衛機は計27機となつた。

一方で、各艦艇に加えて輸送船でも対空戦闘用意の命令が出された。

「いよいよアメリカ軍との初陣だ。」

「白虎」艦長の八島が嬉しそうに言つ。

そんな中で、航海士の護はじつと発艦していく戦闘機を見つめていた。

「どうした航海士？ そんなに戦闘機隊が心配か？」

「えー、いえ、その。」

艦長からの質問に、じじりもじりになつてしまつ護に代わって、同僚の一人が言つた。

「そいつの恋人は戦闘機隊のパイロットなんです。」

「そう言われた途端、顔が真っ赤になる護。」

「ハハハ、そうか。確かにそれなり心配になるわな。しかし、白根中尉！」

「はーはーーー！」

「他人の心配ではなく、自分の心配をしり。彼らがも敵を止められなかつたら、我々も戦うんだぞ。しっかりしてもらわんと困るーーー。」

「もうしづけあつませんーーー！」

艦長に叱責され、シュンと萎んでしまつ護。

「まあ心配するな。彼らは絶対に帰つてくれるよ。」

特に根拠は無かつたが、八島はそう言つた。

「しかし、世の中上手くはいかんな。」

「」の八島のセリフの意味とは？

実は義勇艦隊の艦載機は、当初フィリピンキャビテ軍港への爆撃任務を割り当てられていた。かつて、八島が最初にする任務が攻撃任務とぼやいたのはこのためである。（第40話参考。）

ところが、陸軍の参加により充分な機数が揃つたため、結局この計画は幻となつた。まあもともとが予想外の任務であつたから、これはこれで良かったと言えよう。

#### 閑話休題。

さて、ハ島と護がそんな会話をしていたころ、先発した6機の戦闘機は敵と接触していた。

「敵機発見！！真正面、同高度！！」

編隊内でもつとも目が良い、孫恵貴准尉が無線で知らせてくる。

編隊長の佐伯氷室少尉にも、確認できた。

「いたつらも視認した。全機へ、高度もつ500上げるぞ、付いて来い！！」

「「「「」」解」「」「」」

空戦の常識として、敵より上位を確保することとこつものがある。彼はそれを実践した。

そして、上昇を終えたころには、敵機の機首まで確認できる所となつた。戦闘機は見えない。全て爆撃機のよつだ。彼は敵と識別表の記憶とを照らし合わせる。

しかし、その機首を確認して、佐伯は吹き出しそうになつた。

(B10だと……あこつら何考へてゐるんだ!?)

B10は、マーチン社が開発した双発爆撃機で、開発された当初はイギリスのブレニムやドイツのハインケルHe111爆撃機と同じく戦闘機より速い高速爆撃機として脚光を浴びたが、今となつては旧式の一線級機である。

そのB10がおよそ15機。つまり半分だ。残り半分は。

(B18だ!—)

B18ボロ爆撃機だつた。この飛行機はDC2型旅客機の部品を流用した格安爆撃機であつた。

予算が削られる平時に数を揃えられる爆撃機である。しかし、旅客機改造に近いため防弾性能は低く、おまけと来て防御火器は7mm機銃3挺のみであつた。これは1式陸攻よりも貧弱である。つまり、戦時に使うには性能が心許ない機体だつた。

(アメさんやる氣あるのかな?だが、これはこれで好都合だ。)

相手が旧式や低性能で、しかも護衛なしならこれほどやりやすい相手は無い。なにより、義勇艦隊のパイロットも今回が初陣だから、良い訓練となる。

「よつしー全機へ、敵は旧式爆撃機の鴨だ!一機たりとも船団に近づけるな!!」

「「「「解!—」」」

「か  
か  
れ  
！  
！」

**迎撃開始！（後書き）**

人物、メカなんでも良いです。御意見や評価をお待ちしています。

## 米爆撃隊壊滅――

「上空より敵機――数6――」

機銃員であるウォーレス曹長が伝声管越しに報告してくる。B-18を操縦する爆撃隊隊長のトマス・A・ポート中佐はそれに對し、余裕の表情で答えた。

「落ち着け！ ジャップの飛行機など紙飛行機だ！ 返り討ちにしてやれ！！」

この時期、アメリカを始めとする欧米諸国は日本側の兵器を過小評価していた。特に空軍力はその筆頭であった。中には、「日本の飛行機は竹と木で出来ている」と言つて冗談みたいな言葉を信じてゐる人間までいた。

さすがに、軍上層部はそこまで見下してはいなかつたが、それでも機体の性能は歐米の機体と7割程度でいい所イタリアと同等と見ている人間が多かつた。また、人種的に日本人はパイロットに不適格とも考えていた。

ポート中佐も今自分たちを襲つてくる敵機も識別帳に乗つてゐる96式戦闘機、クラウドだと考えていた。

彼はその96式艦戦をオランダのフォッカーのコピーで、原型機の性能にさえ違していないと信じていた。

だから、今となつては旧式となつたB-10や性能的に劣るB-18

でも大丈夫と考えていた。

しばらくして、7・62mm機銃の発砲音が響き渡った。

(これで何機かは打ち落としたな。)

しかし彼の予想を裏切り、ウォーレス曹長の絶叫が伝声管から響いてきた。

「5・7番機がやられた！！」

「何！？」

信じられなかつた。

「馬鹿な日本機にやられたのか！？」

すると、ウォーレスから意外な報告が入ってきた。

「敵機は引き込み脚でスマート。主翼には20mmクラスの機関砲を積んでいる模様。7番機は木つ端微塵に吹き飛びました！！それに、国籍マークはミートボールじゃない。見たことも無い奴だ！！」

アメリカは満州をまだ承認していなかつた。そのため、充分な情報をお士たちに渡していなかつた。そのツケを、最前線の兵士たちが払わされることとなつた。

「隊長機から全機へ、編隊を密集させ機銃の密度を上げるんだ！！敵機はたつた6機だ！！焦るんじゃない！！」

しかし、やはり防御火器の少なさがあだになつた。密集しても防御に穴が開いているし、さらに敵機はその穴をついてきた。

「8番やられた！…あ！…13番も煙を噴いてる…」

そして、さらに悪いことは続く。

「前方に新たな敵機！！」

副操縦士のエドワード少尉が叫んだ。

ウォーレスにも、前方から接近していく6機の敵戦闘機が視認できた。

「くーー！」

操縦桿を左に回して回避運動に入つたが、爆弾を積んでいるためそこまで機敏な動作は出来ない。そういうじていうつむけ、敵機の発砲音が響き渡つた。

ガンガンガン・・・・・

着弾の衝撃が伝わる。

敵機とすれ違つた瞬間、彼は見た。敵の主翼に描かれた5色の国籍マークを。

「クソ！…どこをやられた！？」

「左エンジン被弾！停止！火災発生！もう長くは持ちません！…！」

エドワードの言つたとおり、左エンジンは凄まじい炎を吹き上げていた。燃料タンクに引火するのも時間の問題だ。

「やむえんな、全員機を捨てて脱出だー！」

ウォーレスたちは非常口から脱出する。

体が空中に投げ出され、しばらくしてパラシユートを開く。

空中を漂つ彼らが見たのは、次々と追い立てられ敵機に擊墜されていくB10やB18の姿だった。

「これじゃあまるで訓練飛行だ！」

「」の田三機田の戦果を上げた佐伯氷室少尉がつぶやいた。

米軍爆撃機は武装が貧弱で、しかも動きも鈍かつた。味方は次々と敵機を撃墜している。

「戦闘機がいたり、相手がB25やB17だったらこうはいかなかつただろうな。」

彼はそう言つたが、事実そうだった。

もし、これが武装もあり、動きもそれなりのB25や防御装甲に優れたB17では9・6式艦戦を含んだ義勇艦隊艦載機では苦戦していただろう。今回の勝ち戦は偶然による所が大きいと言つても過言

ではないだらう。

空戦は収束に向かいつつあった。敵機の多くは撃墜され、生き残った機体は爆弾をすべて遁走していた。

「全機へ、敵機は遁走した。深追いはするな、帰還せよ。」

彼は無線で命令すると、皿らも機首を艦隊へと向けた。

その命令を聞いていた中には、加古芳江伍長の姿もあった。

「お、終わった。」

彼女は今回が初陣であったが、戦果は敵爆撃機1、共同撃墜であつた。無事戦闘を切り抜け、ホッと安堵のため息をつく芳江。と、そこへ。

「加古！何している？帰還だぞーー！」

隊長の野乃原楓准尉の声が無線越しに伝わってきた。

「はーはーーー！」

「そう気張るな。今回は良べやつたぞーー！」

隊長に褒められ、彼女は嬉しくなった。

「ありがとうございます。」

「全機へ、帰還せよーーーー！」

この戦闘で、米軍側は爆撃機22機を失い事実上敗北を決した。対し、義勇艦隊は紛失0の被弾4であった。

この勝利によって、艦隊内の士気は大いに盛り上がった。また、芳江ら初陣のパイロットに貴重な実戦参加の機会を与えたのであった。

米爆撃隊壊滅！－（後書き）

御意見等をお待ちしています。

## 米艦隊発見！！

敵爆撃機に対して大勝を納めた戦闘機隊が帰還し、その戦果報告が旗艦「海龍」の木村中将の下へと送られてきた。

「来襲した爆撃機約30のうち、20機以上の撃墜確実か、幸先のいいスタートだな。」

「しかし、敵機は旧式の爆撃機で戦闘機の護衛なしでした。勝てる当然です。今後はより一層気を引き締めねばなりません。」

そう言つのは、副司令官の蜂谷遼平大佐だ。彼は34歳で、「白虎」座乗の第一航空戦隊司令官の八島と並ぶエリートだ。ただし、彼の場合には帝国海軍からの転籍者ではなく大亞細亞通運から、海洋学院に入っている。

「確かにな。」

木村中将は性格は毎行灯と呼ばれることが多い。停泊中に釣りをしていることが多く、普段はおつとりしているからだ。また、豪放磊落とも思える一面も持つている。しかし、いざ戦闘となれば果敢な士気と、優れた洞察力を發揮する。

「ところで、偵察機からの報告は何もないかな？」

「はい。現在の所偵察機、ならびに対潜哨戒機からの報告は既無です。」

「そつか・・・」

木村が気に掛けているのは、米アジア艦隊の動向であった。

「この艦隊はハート中将に率いられ、マニラを母港にしている部隊である。しかし、そのアジア艦隊はここ数日その行方がわからない。今日のキャビテ軍港の空襲でも発見されていない。」

「出来うることなら、先に航空機で一撃を掛けたいのだがな。」

義勇艦隊はアジア艦隊に対して、航空機を運用できると言う大きな利点があった。艦隊決戦を行えば、戦力としては同等だが、空母や輸送船を守っている義勇艦隊の方が不利になる可能性の方が遥かに高い。

その後潜水艦の襲撃も航空機の接触もなく、艦隊はフィリピンに接近した。

そして木村が望んだ情報が入ったのは、日没3時間半前だった。

「日本海軍の偵察機より入電。本艦隊の南200kmの海域に敵艦隊。巡洋艦3、駆逐艦7・速力20ノット。」

それは、高雄基地所属の零式陸上偵察機（100式司令部偵察機の海軍版）からの情報だった。

「南200kmか・・・。」

96式艦戦でも届く距離である。しかし、日没まで3時間半である。艦攻の巡航速300kmで飛ぶと片道40分。往復80分。これから雷装するのに60分。敵艦隊攻撃に30分とすると、余裕は

わずか10分しかない。

攻撃が長引いたりすれば夜間着艦になってしまふかも知れない。

「やるか…………」

そこへ、蜂谷が意見具申した。

「長官。今すぐなら間に合います。」

「よしやひつーー！」

直ちに、「白虎」に信号が出される。その命令は八島を喜ばせた。

「木村中将は決断したか。通信長、「蒼虎」にも転電！飛行長、何機出せる？」

すると、飛行長であるチエ大尉が整備長からの報告用紙をぱらぱらとめくらながらやって来た。

「使用できるのは、「飛龍」が11機。97艦攻が8機です。」

「よろしい。ただちに「飛龍」には爆装、97艦攻には雷装だ。「蒼虎」の方は何機だ？」

「96艦戦12機と、97艦攻9機だそうです。」

航空戦力は計40機だ。相手が護衛もない小規模艦隊なら充分な数だ。

「準備出来次第発艦せよ……！」

格納庫では、整備員たちが汗を流して走り回る。96艦戦と「飛龍」には60kg爆弾が。97艦攻には800kg魚雷と800kg爆弾が装備されていく。

魚雷と爆弾の混合編成であるのは、魚雷のストックが少ないからだ。

準備が出来た機体が次々とエレベーターで甲板に上げられる。

偵察機からの報告を受けた55分後、発艦が可能になった。整備員の努力で時間を縮められた。

「発艦準備完了！！」

「よろしく発艦だ！！」

「艦首風上へ……」

航空機を発進させるには揚力を生み出すために合成風力を起こさなければいけない。「白虎」と「蒼虎」は風上へ向けて最大速で走る。

そして全ての準備が整った。

「発艦始め！！」

信号旗が上げられる。

多くの乗員に見送られながら、一番機の「飛龍」が滑走を始めた。

「飛龍」は甲板を離れる一瞬沈み込んだが、その数秒後には上昇していく姿が見えた。

約10分で、全機の発進が完了した。

米艦隊発見――（後書き）

航空機の巡航速度は不正確です。申し訳ない。

## 空撃！—アジア艦隊

「日本機と思われる編隊、接近中！！」

装備されたばかりの対空レーダーが航空機の編隊を捉えた。

現在米アジア艦隊の司令官であるハート中将は真珠湾に呼ばれているため、艦隊の指揮は「ヒューストン」艦長のルックス大佐が兼任して執っていた。

彼はその後報告された敵機の方位から、午前中に陸軍爆撃隊が発見した敵機動部隊の艦載機と推測した。

「対空戦闘用意！おそらくそいつらは陸軍の爆撃隊を壊滅させた奴らだ。だが我々海軍にはそう簡単に手出しできないことを見せてやれ！！」

「オウ！…」

士気を上げるために言つた言葉に、乗員たちは力強く答えた。アジア艦隊の将兵の士気は高かつた。

(だが、我々の対空火力で大丈夫か？)

実のところルックス大佐は内心では不安だった。

この時、米アジア艦隊の陣容は重巡「ヒューストン」、軽巡「マーブルヘット」、「ミルウォーキー」、平甲板型駆逐艦7隻からなっていた。

しかし、これらの艦艇の対空兵装は後に針鼠とまで呼ばれた米軍艦艇の対空火器に比べると、お粗末なほどに貧弱だった。

どの艦も申し訳程度の対空砲や対空機銃しか装備していなかつた。旗艦である「ヒューストン」が一番忠実していたが、それでも少ない。この時期まだまだ航空機への評価は低かつたのだ。

もちろん、貧弱だから対空戦闘をしませんなどとは言つてはいけない。兵士たちは対空戦闘の命令が下つたからには、装備された対空砲や対空機銃に次々と仰角をかけて空を睨み、弾薬を装填する。

そして、凡そ10分後。北の空に航空機の編隊が現れた。

攻撃隊隊長の藤堂兵五郎大尉は前方洋上を走る艦艇を視認した。辺りを窺うが、情報どおり敵戦闘機の姿はない。

「隊長機から全機へ、艦攻隊の目標は敵巡洋艦だ！！戦闘機隊は露払いとして駆逐艦の動きを抑えろ！…各機突撃隊形作れ！！」

無線交信の後、彼は合図の信号弾を上げた。

合図と共に、各部隊は一斉に動いた。戦闘機隊は先陣を切つて敵艦隊に突っ込む。艦攻隊の内雷装した部隊は低空に舞い降り、爆装した部隊は綺麗にV字を作つて飛ぶ。

義勇艦隊では重視されるのは対潜攻撃や対地攻撃であるが、万が一に備えて対艦攻撃も訓練してきた。もちろん、訓練時間そのものは少ないから帝国海軍の航空隊に比べれば劣る。だが、現在の状況（相手が中小艦艇ばかりで数も少ない）で言えば充分な練度を維持していた。

「攻撃開始！！」

最初に攻撃を開始したのは「飛龍」戦闘機隊であった。

今回「飛龍」は20mm機銃のポッドではなく、250kg爆弾を2発もしくは60kg爆弾を4発装備していた。爆弾が違うのは予想される対地攻撃のために温存されているからだ。

「ファイアー！！」

一方、米艦艇も対空戦闘を開始したが、日本機の編隊は予想に反して単縦陣の後方を走る駆逐戦隊に襲い掛かった。

「何！？」

驚く米海軍将兵を尻目に、「飛龍」は爆撃を始めた。もつとも、まだこの時点では反跳爆撃機は開発されていなかつたので、普通に緩降下爆撃するだけである。しかも、相手は高速で走り旋回性能も高い駆逐艦であるから簡単には命中しない。

結局、「飛龍」隊の爆撃は全て空振りに終わった。

一方で、その後突っ込んだ96式艦戦の部隊も同様に緩降下爆撃を行つたが、このうち4発の60kg爆弾を2隻に命中させた。こ

の結果1隻は魚雷発射管が損壊。もう1隻は艦橋に直撃したため戦闘不能になつた。

戦闘機隊がそうした戦果を上げたころ、艦攻隊も巡洋艦への攻撃を開始した。

藤堂隊長機は今回爆装であるから、水平爆撃を行う。

照準主が照準器を除きながら、高速で走る「ヒューストン」に狙いを定める。時折機の周りで対空砲弾が炸裂するが、幸い直撃はない。

「用意！…撃て！…」

隊長機の合図と共に、後続する機体も投下する。

800kg爆弾が「ヒューストン」目掛け落下していく。

藤堂は機がその場から急速離脱するために直ぐには戦果を確認できなかつたが、数分後「ヒューストン」を見たとき、盛大に黒煙を吐いていたため、命中を確認できた。それとともに、97艦攻が1機欠けているのもわかつた。

水平爆撃隊は知らなかつたが、800kg爆弾は「ヒューストン」の前部砲塔を直撃していた。

1番砲塔は完全に損壊、2番砲も爆圧により砲身が変形し使用不能になつた。また艦橋ではガラスが吹き飛び、負傷者が出た。

弾薬に引火しなかつたのは不幸中の幸いであつた。しかし、火災

が後部に流れたため、対空砲は照準が出来なくなつた。

その隙を、艦攻隊に「ヒューストン」はつかれてしまい4本の魚雷を受けてしまつた。さすがに重巡といえど、4本も喰らつてはお終いである。

ルックス大佐は総員退艦を命令した。

だが、アジア艦隊への攻撃はこれだけでは終わらなかつた。義勇艦隊の編隊が去った直後、新たな航空機が北の空に出現した。

**空襲――アジア艦隊（後書き）**

御意見等をお待ちしています。

## 作戦完遂！！

米アジア艦隊上空に現れた新手の航空機群。それは台湾南部の基地を発進した台湾海上警備隊所属の96式陸攻と、99式双軽だった。

台湾海上警備隊は台湾総督府直轄（後に台湾自治政府に移管）の海上警察組織であるが、有事には第二軍の働きが出来るよう、装備は軍の使用する物に引けをとつてはいない。

今回飛び立つた航空機もそうである。これらの航空機は、台湾海上警備隊へ影響力を持たせる意味で、日本陸海軍が供与した機体である。

平時は救難、国境警備を主任務として働いているが、戦時には対潜、対艦攻撃が行えるよう常に訓練を行つてきた。そして今回それが試されようとしていた。

出撃機数は陸攻が雷装を施した12機。双軽は500kg徹甲爆弾を爆装した同じく12機であった。99式双軽は爆装出来る量こそ少ないが、操縦しやすく急降下爆撃も可能な優秀機である。

それら計24機が瀕死の米アジア艦隊に襲い掛かった。

「全機突撃せよ……」

隊長である鄭中尉の命令が出され、同時に各機は攻撃を開始した。

真っ先に狙われたのは、沈没した「ヒューストン」に次いで大型

である2隻の「オマハ」級軽巡だった。

鄭中尉率いる陸攻隊は6機ずつにわかれ、2艦を攻撃した。

両艦とも、義勇艦隊との戦闘では最小限の被害しか受けでなく、100パーセントに近い戦闘力を発揮できた。しかし、所詮は対空砲をあまりもたない第一大戦直後に計画された旧式軽巡である。結局96陸攻を一機も撃墜できぬまま、逆に魚雷の発射を許してしまった。

この魚雷攻撃に対し、「ミルウォーキー」はなんとかわしせたが、「マーブルヘッド」は2本が命中し、航行不能に陥った。

また、魚雷を避けた「ミルウォーキー」も数分後には99双軽の500kg爆弾1発を機関室に喰らって大破した。また、駆逐艦1隻も同様に爆撃で大破ししたため、事実上アジア艦隊は壊滅した。

艦隊司令官代行のルックス大佐はなんとか駆逐艦「スチュワート」に移乗する事は出来たが、もはや日本艦隊に戦闘を挑める状況ではなく、やむなく駆逐艦の魚雷で航行不能の「マーブルヘッド」を自沈処分し、残存艦艇を率いてダバオまで交代した。

もつとも、アジア艦隊はその後米軍制海権への脱出が困難となり、やむなくオランダ領のインドネシアのスラバヤに逃走し、そこで抑留されることとなる。

こうして、海戦一日にして日本軍はフィリピンの制海権、制空権をほぼ手中に治めたのであった。

だが、大勝利の影で義勇艦隊も未帰還機3機を出し今回の戦争で

の初めての犠牲を記録した。また、台湾海上警備隊も未帰還こそなかつたが、機上戦死者を出している。

いくら少ないとはいえ、やはり犠牲をだしてしまった。戦争の厳しさと残酷さを改めて思い知らされた場面であった。それでも、大勝利には違いなかつた。

この日、艦隊内では非直の乗員や航空隊搭乗員に對して特配の菓子や酒が振舞われ、また海戦の戦果も知らされたために兵士たちの士氣は大いに盛り上がつた。

翌日、上陸予定地点に到着した義勇艦隊は、早朝から航空隊による空爆と、艦艇の艦砲射撃を行つた。

もつとも、米軍主力は既にコレヒドールの要塞へと転進していたため、ほとんど無血上陸と同じであつた。

たつた一回だけB24爆撃機6機が飛んできたが、「飛龍」の迎撃を受け、爆弾を適当にばら撒いて撤退した。損害は皆無であつた。

こうして、義勇艦隊第一回目の任務は最小限の犠牲を出しただけで大成功の内に終わつた。

だが、空になつた輸送船を台湾へと戻すための準備に入つたとき、艦隊司令の木村中将のもとへと緊急信が届けられた。

それを一読して、木村は表情を厳しい物にした。

「何があつたのですか？」

副司令の蜂谷が怪訝な表情で尋ねた。

「マーシャル沖で日本の連合艦隊と、米太平洋艦隊の主力が激突した。」

米軍は開戦に合わせて、太平洋艦隊主力を投入して、日本の委任統治領のマーシャル諸島へと侵攻した。それに対し、日本側も全力で反撃した。その戦闘の結果が届いたのである。

「結果はどうなったのですか？」

蜂谷が恐る恐る聞いた。

「結果は・・・・・何と言えば良いのかな。」

海戦の結果は沈没艦艇の数だけみれば日本の勝利だった。

米軍は新鋭艦2隻を含む戦艦7、空母3、巡洋艦11、駆逐艦13を失った。対する、日本側は「扶桑」「山城」「伊勢」の3隻に空母「加賀」に巡洋艦5、駆逐艦8の損失だった。

これだけ見れば日本の勝利に見えるが、日本側も戦艦「大和」を始めとする多くの艦艇が損傷し、最低でも半年以上の戦力回復期間を必要とすることとなつた。

このため、当面動ける艦隊は今回フィリピン方面作戦へ投入された第2艦隊と、ウエーク島攻略を成功させた第4艦隊だけであつた。（加えて実際には無傷の空母4隻からなる第3艦隊がこの直後に編成されている。）

そして、義勇艦隊はこの時点で有力な戦力を持ちえて、かつ即戦力として使える艦隊となっていたのであつた。

## 作戦完遂！！（後書き）

連合艦隊が壊滅したかのように書きましたが、一時的に戦闘能力を失ったと考へていただければ結構です。また、詳しく書いていませんが、機動部隊も半数以上が健在です。

## 総解説 前編（前書き）

今回は50話記念の総解説です。そのため少し短いです。

## 世界観

基本的に第一次大戦までは史実と同じ。

作品内において、1910年に白根が満州の旅順に大亞細亞造船を開設した所から歴史が変わり始める。

1931年に満州事変が勃発するが、この事変を日本陸軍は謀略によって清朝復興の軍事紛争に転化し、満州国は正式な独立国として誕生した。そのため、史実になかった国籍法の導入や憲法の制定が行われている。また、関東軍は満州事変後若干増強されたのみになっている。

白根が秘密裏に設置した義勇海軍は事実上の満州国海軍として満州事変、満中戦争に参戦し、いずれの戦いでも勝利を収めている。

満州を保護国にしなかつた日本は、満中戦争勃発により未遂に終わった2・26事件を通して軍部の権限の弱体化が図られ、軍の増強ではなく、近代化のみが焦点となっている。代わりに失業対策を兼ねて国内の再開発を開始し、飛躍的に工業力や技術力を伸ばしている。そのため、「大和」を始めとする艦艇の建造は3・4ヶ月早いスケースで進んでいる。また、戦車や航空機の技術も加速している。

ヨーロッパ、アメリカではほぼ史実どおりに歴史は進んでいる。

ソ連も史実どおり1939年に満州国とモンゴル間で紛争が発生

したノモンハンへの侵攻を行つてゐる。しかし、日満軍に敗北し国境線は満州国の求めるラインで確定した。

また、日本は民族運動の高まりから朝鮮を独立国へ、台湾を自治国へと改組している。

1940年に起きたタイ・仏間の戦争において、日本は史実以上の支援を行い、戦争はタイの勝利に終わった。

日米間の関係悪化は仏印進駐ではなく、タイへの軍事介入と米国内のテロから來てゐる。

太平洋戦争の勃発は史実どおり12月8日であるが、アメリカから日本へとなされ、米国側が日本の委任統治領マーシャルへと侵攻することにより始まった。なお、英蘭は宣戦布告をしていない。

そして新たな太平洋戦争が始まった。

#### 主要兵器1

##### 駆逐艦「流星」級

排水量1200t、速力30ノットの小型駆逐艦。武装は12,7cm単装砲2基、40mm連装機関砲2基、61cm魚雷二連装発射管1基。爆雷48個。

昭和6年に大亞細亞造船で竣工した。小型で戦闘能力は低いが、短期間で多数の数が揃えられるブロック工法を採用し、生存率を上げるために機関をシフト配置にした。同型艦は輸出分を22隻。主砲を両用砲に換え、対空砲を増やした改「流星」級の建造も進んでいる。

### 軽巡「海龍」級

排水量 5120t、速力 30ノット。武装は 15・5cm 連装砲 3基 6門、8・8cm 単装高角砲 2基 2門、40mm 連装機関砲 4基 8門、61cm 三連装発射管 1基 3門。水上機 2機 搭載。

中国海軍の増強を受け建造。15・5cm 砲は日本海軍より購入した。主砲などの主武装を中心線上に配置している。同型艦に「天龍」がある。

### 航空母艦「白虎」級

全長 200m、速力 25ノット。武装 8・8cm 連装高角砲 8基 16門、40mm 連装機銃 8基 16門、25mm 連装機銃 10基 20挺。搭載機 36機。

大亞細亞通運の「白虎」級高速貨物船の改装空母。短期間の改装で空母から貨物船にもどせられる設計。また、新規建造も容易となつている。同型船 3隻。

## 新たなる戦（前書き）

総解説の後編は作品の進行とともに掲載します。

## 新たなる戦

フィリピンでの作戦を終え旅順に帰還した義勇艦隊は、艦隊を解き船団護衛任務のために戦隊単位での行動を行つよつになった。

日本海軍はマーシャルでの海戦で大打撃を負つたが、米軍もまた大打撃を負つていたためしばらくは動くことは出来ないと予想されていた。実際、日米両軍は大規模な作戦を控えていた。

そのため、義勇海軍も艦隊単位で動く必要がなくなり、専らの任務はフィリピンへの物資輸送船団や、南方からの資源輸送船団の護衛であった。

さて、この対米戦争を消耗戦になると睨んでいた日本満州両国では、兵器の量産が急ピッチで進められていた。特に、満州国における自國ならびに日本向けの陸戦、航空兵器の需要は高かつた。

鞍山の戦車工場で作られる最新鋭の1式砲戦車や、奉天航空機製造公司製造の100式重爆「呑龍」が次々とロールアウトし、戦場へ向けて運ばれていった。

そんな中、義勇海軍も戦力の増強を図っていた。それに伴つて艦隊創設以来の主力艦艇である「流星」級の改良型、「旅順」クラスが建造されつつあった。

「旅順」級は「流星」級の設計をほぼそのまま継いでいるが、魚雷発射管が一門と爆雷が12個プラスされている。そして、何よりも大きな違いは主砲を今までの平射砲から、対空と対艦戦闘両方に用いれる両用砲に交換したことだ。この砲は帝国海軍の89式12,

7cm高角砲を、大亞細亞造船の技術陣が独自に改良した新式砲で、装填スピードが上がっている。

ちなみに、名前がいきなり天体から地名になつたのは、最近増えてきた満州出身の乗員に郷土への愛着心を持つてもらおうという考えがあつたから。

この「旅順」級はさらに、「奉天」「満州里」「新京」が竣工間近で、加えて台湾海上警備隊向けと朝鮮海上警備隊向けに併せて5隻の建造も進んでいた。

駆逐艦の増強に加えて、潜水艦も新たに2隻が戦列に加わつているし、航空部隊の拡張も著しかつた。一時的な戦闘の空白期間は、義勇艦隊の戦力増強に大きく寄与したのであつた。

この日米共に大規模な戦闘が起きなかつた時期は、1942年の2月ごろまで続いた。しかし、その後は大西洋から回航した空母を使つてアメリカ軍は小規模な艦隊を編成してゲリラ的な反抗を開始した。

最初に攻撃を受けたのはウェーク島で、さらにマーシャル諸島各地や大胆にもサイパンにまで奇襲攻撃をかけている。これらの攻撃は飛び石戦法と呼ばれ、大きな戦果は見込めないが日本軍に混乱や戦力抽出をもたらすのが大きな目的だつた。

日本側の機動部隊や基地航空隊はこの米機動部隊を追い求めたが、結局捕捉するに到らず、いいように遊ばれ燃料を消耗したのみだつた。つまり、米軍の読みどおりの展開で終わつたわけだつた。

そんなこんなしている内に時間はあつという間に過ぎ、気付けば

4月になつていた。

4月になると開戦時損傷した艦艇も次々と戦線に復帰し、連合艦隊は戦力を取り戻しつつあつた。それはまた米軍も同じであるから、日本の首脳部はより一層米軍への警戒を強めた。しかし、その彼らにしても米軍の大胆不敵な行動には気付けなかつた。

一方で、我らが義勇艦隊は開戦時に建造中だつた艦艇全てが竣工していた。

この時点での稼動する戦力は空母4、軽巡2、駆逐艦13、フリゲート2、コルベット4隻、潜水艦4隻であつた。これに兄弟組織と言える台湾海上警備隊は軽巡2、駆逐艦8、フリゲート4、コルベット8を保有していた。また、両組織とも基地航空隊も忠実していた。

これによつてかなり大規模な航路警備が出来るようになつた。ただし、本職の対潜作戦は米潜水艦の動きがなかつたため、戦果零であつたが、護衛した船団の被害も1隻のみだつたからまずは上出来といえた。

そんな中、4月17日。この日、日本の横須賀からウエーキ島への輸送船団が出撃していた。

船団には現地で潜水艦基地として活動する潜水艦母艦や、守備隊ならびに航空隊への物資を満載した貨物船が6隻いた。

この船団護衛に、義勇艦隊が就く事となつた。空母「白虎」を旗艦に、駆逐艦4、フリゲート2という大規模な護衛戦力だつた。また、日本側も駆逐艦2隻をつけていた。

護衛艦隊指揮官は「白虎」座乗の八島少将であった。彼はフイリピン沖で大活躍した後も転属を拒み、「白虎」に座乗していた。そしてそれが、彼を再び戦場へといざなつた。



## 南鳥島沖海戦 遭遇編

「左舷30度船影！！日本の特設監視艇の「第23国東丸」と思われます。「国東丸」より信号。貴船団の安全を祈る！！」

見張りの兵士が左舷に現れた小型艇を見ながら言った。

「「第23国東丸」に返信。信号感謝す。貴艇の任務の安全を祈る！…直ちに信号」…」

八島少将の命令は直ちに信号所に伝えられ、「白虎」から「国東丸」に発光信号がなされる。

「日本の哨戒圏の一一番外側にまで来ましたね。」

航海士の白根護中尉が言つ。

「ああ。ここより先は我々にとつても未知の領域だ。気を引き締めていかねばな。」

義勇海軍ではこれまでにここより以西へと行ったことのある部隊、艦はない。彼らが初めてである。

「そうですね。しかし、まだ日本軍の聖域ですから潜水艦以外に脅威はないでしょう。」

しかし、そうやって八島が余裕を持つて話をしている時間はほんの20分ほどしかなかつた。

20分後、それを捉えたのは水上電探だった。

「中尉！水上電探に感あり。」

レーダー室で対水上用レーダーのスコープを覗いていた滝川兵曹長が報告してきた。

「何！？」

電探室室長のカン中尉は滝川兵曹長が除いているスコープを覗く。確かに、円形のスコープ上を回転する線が複数の光点を映し出していた。

亡命ユダヤ人科学者を優遇して採用している大亞細亞造船電氣部では、帝国海軍よりも優れた電探の開発、生産に入っていた。その結果彼らは最新鋭のレーダーを扱っている。

カン中尉は部下からの報告を自分の目でも確認すると直ぐに艦橋へ報告をあげた。

「何！？電探に反応だと！？」

「は！自分も確認しましたが間違いありません。確かに船団の前方45km先に複数の艦影らしき物を捉えました。」

電話をとった新任の副司令官、橘渡大佐は直ぐに八島司令に伝える。

「司令官。電探室より報告、船団前方45km地点に複数の艦影らしき物を確認したことです。」

「何！？おい白根航海士、今日この付近を通り日本艦隊、もしくは船団があつたか？」

八島が護に訊ねる。

「いいえ、それはないはずです。」

護はそんな報告を受けた覚えはなかつた。艦橋内のスタッフに、まさかとこゝう想いが走る。

「司令官、だつたら船団上空を飛んでいる対潜哨戒機に確認させましょ。飛行機なら40kmは田と鼻の先です。」

提案したのは飛行長のチエ少佐だつた。現在船団付近には対潜哨戒の97式2号艦攻が3機いた。

「よし、そうしてくれ。それと万が一に備えて艦隊ならびに船団に戦闘配置発令！…船団は一時進度を北へ向け離脱を図る。航空部隊は直ちに対艦兵装にて出撃準備せよ！…あと、戦闘機隊の内適当な数を直掩として上げてくれ！」

「――「了解――」」

命令と共にスタッフが動く。

発光信号で各艦に命令が伝えられる。命令を受けた艦船ではたちに乗員が戦闘配置に就き、変針する。艦上では将兵達がヘルメットを被り、救命胴衣を着け持ち場に就き砲を操作する。

続いて対艦攻撃準備が発令された。「白虎」でも整備員たちが急いで魚雷や徹甲爆弾を弾薬庫から引き出して台車で運び、97艦攻に装着する準備にかかる。

一方、前方索敵を命じられた97艦攻は直ちに指示された進路へと機首を向けた。

その搭乗員たちは命令をうけたものの半信半疑だった。まさかこんな所にアメリカの艦隊がいるとは思えなかつたからだ。

「機長、本当に敵がいるんでしょうかね？」

航法員の臼井兵長が伝声管越しに機長の巻田准尉に聞く。

巻田准尉としても、このまま突き進めば日本本土という海域に大胆にもアメリカ艦隊が出撃するとは信じがたかつた。

しかし、7分後。彼らは現実を見た。

「そんな馬鹿な・・・」

ありえないといつ表情をしながら巻田准尉は呟いた。

平甲板を持った2隻の大型軍艦を中心として、複数の巡洋艦と駆逐艦からなる艦隊が彼らの視界内にあつた。

2隻の大型艦は間違いなく空母だ。しかも、「白虎」のような改裝艦ではない。正規空母だ。おそらく「ヨークタウン」級だ。

「桜井！艦隊に緊急打電！！田標は敵艦隊、空母2、巡洋艦5、駆逐艦5以上見ユだ！！」

「了解！！」

無線主の桜井2等兵曹が急いで打電する。だが、打つている途中で田井が叫んだ。

「後方に敵機！！」

巻田が後ろを見ると、後ろに回りこんでくる敵機が見えた。アメリカ海軍の艦爆であるSBDドーントルレスのようだ。機首に7・62mm機銃を備え、このよりも優速で旋回性能も高い。このままではやられてしまう。

「回避するだーー！」

敵機を巻くためにエンジンをフルスロットルにして、彼は機を海面スレスレにまで降下させた。

ひつして、後に南鳥島沖海戦と呼ばれた戦いは始まった。

## 南鳥島沖海戦 衝突編

敵機動艦隊発見の方に、「白虎」の艦橋は一気に慌しくなった。

「敵空母2隻だと！！」

この続報に八島の表情が一気に厳しくなった。もし敵が正規空母が2隻いるなら、少なくとも160機から200機の艦載機を積んでいる可能性が高い。そうなると、42機しか搭載していない「白虎」では太刀打ちできない。それ以前に、敵の巡洋艦に捕まつて航空機を発艦させられまま撃沈されるといつ最悪の事態もありえる。輸送船団の足が遅いためだ。

「とにかく敵艦隊から離脱せよ！！！それと航空隊の発艦急げ！！！」

今はそれ以外言いようがなかった。しかし、八島達の危機感とは裏腹に、米機動部隊も大混乱に陥っていた。

この米機動部隊はドーリットル中佐率いる特命爆撃隊のB25爆撃機を搭載していて、日本本土へ奇襲爆撃する予定であった。

この時の米空母戦隊は「ホーネット」と「ヨークタウン」の大西洋艦隊から転属してきた2隻から編成されていたが、このうち「ホーネット」は日本本土爆撃用として搭載された16機のB25爆撃機を甲板に満載していたため艦載機の運用が不可能になっていた。

また、僚艦の「ヨークタウン」もまさか日本艦隊と接触するなんて考えていなかつたから即時発艦可能な機体は直援用のF4F「ワイルドキャット」と対潜哨戒用のSBD「ドーントレス」がそれぞ

れ数機ずつ以外なかつた。

艦隊司令官の一コートン中将は、一〇〇で致命的なミスを犯してしまつた。もしそのまま直進し突撃していたら戦力で圧倒する米軍が勝利していただろう。しかし、彼は奇襲の失敗を悟ると一応敵艦隊攻撃準備の命令こそ下令したが、そのまま撤退に移つてしまつた。

一コートンはあまりに慎重すぎた。もしこれが猛将と呼ばれたハルゼー中将なら躊躇することなく突撃していただろうが、彼はマーシャル諸島沖海戦で戦死していたため、そのようなことは実現しなかつた。

もし〇〇の時一コートン中将が偵察機を出し、日本艦隊が義勇艦隊と輸送船団であると確信していれば歴史は変わっていたかもしれない。

両軍ともお互いそのような事情はわからないまま、距離を大きく取るために針路を変更した。

そんな中で、最初に米機動艦隊を視認した巻田准尉の九七艦攻はSBD艦爆の追跡を逃れるために低空にあつた雲の中へと逃げ込んでいた。

「敵機見当たりません。」

最後尾の桜井二等兵曹が伝声管で報告してきた。

「なんとか撒けたな。」

SBDを撒いた事に安堵する巻田。

「ええ、敵機が近寄ってきた時は一瞬冷や汗をかきましたよ。」

後席の田井兵長も云々声管越しに言つ。

「よひし、雲から出たら母艦に一端帰投する。」

彼の機体には今爆雷しか積んでいなかつた。これでは敵艦を攻撃する事は出来ない。一端帰投して魚雷か爆弾を積みなおさねばならなかつた。

しかし、数秒後雲から出た彼らの田の前に現れたのは、撤退するために急速回頭中の敵空母であった。

「うわーーーじうじーーー？」

巻田が驚きの声を上げた。どうやら雲の中を飛行しているうひし針路を誤つたらしい。

一方驚いたのは米艦隊も同様である。突如として日本機が雲の間から現れたからだ。そして唖然とした彼らは対空砲を撃つ命令をしばし出せなかつた。

空白の時間が生まれた。

「ええい！一か八かだ！前方の米空母を攻撃する。」

巻田は偶然にもドンピシャで射線上にいた空母に狙いを定めた。それは「ホーネット」だった。そしてこの時、巻田は爆弾を捨て忘れていた事に気づいたのだった。

「よーい、撃て！！」

絶好のタイミングで投下レバーを引いた。

積まれていた60kg爆弾2発が投下される。そして2発とも甲板上にあつたB25に直撃した。命中しても爆雷であるから爆発しないはずであった。しかし、この時B25は長距離爆撃用に燃料タンクを増設していた。爆雷はそのタンクを破損させ、ガソリンが甲板上に流れ出した。

何が原因で発火したかはわからないが、数分後「ホーネット」の甲板は大火災となつた。もれたガソリンに加えて、残つたB25にも引火したからだ。

これによつて、「ホーネット」は最低3時間は航空機の運用が不可能となつた。

「敵空母炎上！！」

戦果確認した桜井が報告する。

「嘘だろ・・・」

攻撃した本人さえ信じられない大幸運だった。

こうして巻田の一か八かの攻撃は大成功を収めた。しかし、巻田機の幸運もここまでで、その後敵艦からの猛烈な対空砲火を受け撃墜されている。

乗員の内2名は後に救助されたが、その中に機長である巻田の姿はなかつた。

**南鳥島沖海戦 衝突編（後書き）**

御意見などお待ちしています。

## 南鳥島沖海戦 激闘編

偵察機が米機動部隊に接触した1時間後、「白虎」艦載機の出撃態勢が整つた。

「全機発進！！」

八島少将の命令の下、爆装した「飛龍」戦闘機隊を先頭に、稼動する計30機の攻撃機が一路米機動部隊へ向けて発進した。

この時、義勇艦隊と米機動部隊の距離はお互いが全速離脱したため100km程まで離れていた。

既に義勇艦隊も米偵察機の接触を受けているから、航空攻撃を受ける可能性が高かつた。ここでどちらが先制攻撃をするかで勝敗はつく。

発進した攻撃隊の隊長は新たに着任した東康介少佐だった。

「全機へ、敵艦隊は田と鼻の先だ。敵戦闘機の襲撃に充分注意しろ！！」

100kmといつたら巡航速度で飛んでも20分あれば着いてしまう距離である。それだけに敵戦闘機と接触が早くなる。東はそれを警戒した。

しかし、天は義勇艦隊に味方した。

攻撃隊が襲い掛かる10分前まで米艦隊上空には12機のF4F

が待ち構えていた。しかし、この戦闘機隊は燃料補給のため着艦していた。そして新たな戦闘機隊を出そとした時、攻撃隊が襲い掛かつた。

東が周りを見回しても敵機の姿はどこにも見当たらない。

「天佑だ！！戦闘機はいないぞ！！全機へ、とにかく敵空母の甲板を潰せ！！飛行機さえ使えなくすればどうともなる。突撃せよ！！」

隊長機からの突撃命令に従い、攻撃隊は残る無事な空母である「ヨークタウン」に殺到した。

しかし、米艦隊もただやられているはずがなく、ただちに対空戦闘を開始した。開戦以来の教訓を元に、米艦隊は著しく対空兵装を強化していた。各艦に搭載された多数の12・7cm砲、40mm機関砲、28mm機関砲が攻撃隊に襲い掛けた。

凄まじい弾幕に絡め取られ、数機の「飛龍」や97艦攻が火を拭いて墜落していく。しかし、それにもめげず、攻撃隊は突撃する。

最初に攻撃を開始したのは「飛龍」戦闘機隊だった。

彼らは前回のフィリピン沖海戦での教訓を元に開発した新戦法を駆使する。後に米軍も多用する事になる反跳爆撃スキップ・ボミングだ。これは石の水きり遊びのように爆弾をスキップさせて敵艦にぶつける戦法だ。

「用意、撃て！！」

戦闘機隊長の佐伯中尉がまず攻撃を開始した。高度10mという

低高度へ降下しての攻撃である。

隊長機に続くように、他の「飛龍」も攻撃を開始した。しかし、まだ開発されたばかりの戦法であつたために搭乗員たちが不慣れだつたせいか、命中したのは佐伯中尉の一発だけで、しかも彼がこの時装備していたのは $60\text{kg}$ 爆弾を装備であつたため、効果は爆風で舷側の対空火器数門を沈黙させるに留まつた。

「クソ！こんな小型爆弾じゃ、大した損傷を与える事が出来ない。」

彼は操縦席で舌打ちした。

その後も空振りが相次いだが、最後の最後で突入した加古芳江軍曹が大金星を挙げた。

彼女はこの時 $250\text{kg}$ 爆弾を装備していたが、2発とも命中した。しかも、一発は格納庫のシャッターから格納庫内に飛び込んだ所で爆発した。これは彼女がギリギリまで近づいて投下したからであつた。

そして、この一発が「ヨークタウン」の運命を決めてしまった。

この時「ヨークタウン」艦内ではようやく義勇艦隊への攻撃準備が済んだ攻撃機群が甲板へとあげられようとしていた。つまり、格納庫内には燃料・弾薬をフル装備していた攻撃機が並んでいた。そこへ $250\text{kg}$ 爆弾が2発飛び込み炸裂したのだからただで済むはずがなかつた。

500ポンド爆弾を積んだ「ドーントレース」が、魚雷を積んだ「デバステーター」が次々と誘爆を起こし、そのエネルギーはエレベ

一 ターを突き破つて空中に吹き上げられた。

一瞬にして「ヨークタウン」は浮かぶ活火山へと変貌した。

「何なのってあり？」

これには攻撃した芳江だけでなく、その光景を見ていた全ての人間が唖然としてしまった。

まさかたつた一発で3万七近い空母が大破するなど誰も信じられなかつた。ただ火災こそ激しかつたが、さすがにダメコンが優れていただけあつて、この3時間後には消し止めた。しかし、その直後に急行してきた日本の「伊168」潜水艦に沈められる事になるのだが。

しかし、両軍兵士が唖然といられたのも短時間だつた。

空母2隻ともがこれで戦闘不能になつたため、東少佐は雷撃隊の目標を変更した。

「雷撃隊は敵巡洋艦に狙いを集中しろ！－！」

空母こそ潰したが、まだ巡洋艦や駆逐艦が残つており、その戦力は義勇艦隊を圧倒していた。

洋上に残る2隻の重巡と、1隻の軽巡に雷撃隊の矛先は向けられた。

しかし、やはり10機程度の雷撃機の攻撃では効果不十分だつた。しかも、半数近くは水平爆撃隊だつた。

結果は重巡「ポートランド」の艦首に一本命中、浸水により速力を5ノット低下させたのと、軽巡「ボイシ」に至近弾で小破させただけであった。

空母「ヨークタウン」大破から15分後、攻撃隊は弾薬を使い切ったため「白虎」に帰還した。

最終的に「飛龍」3機、97艦攻2機が対空砲火によつて失われ、4機が被弾が激しいため帰還後破棄となつた。

**南鳥島沖海戦 激闘編（後書き）**

御意見などをお待ちしております。とくにキャラクター やメカなど  
の意見をお待ちしております。

## 南鳥島沖海戦 終焉編

敵艦隊攻撃を終えた航空機を、「白虎」が収容する。

その「白虎」に向かつて、後方にいた帝国海軍の2隻の駆逐艦が発光信号を行つ。

「司令、日本駆逐艦が敵機動部隊への追撃許可を求めております。」

いかに日本海軍といえど、八島が上官であり船団護衛の全権を握っている以上、逸脱した行動は取れない。だからお伺いを立てていた。

「残念ながら許可できない。敵にはまだ巡洋艦と駆逐艦が健在なんだ。たつた2隻で攻撃をかけても返り討ちになるだけだ。それに我々はウエーク島へこの輸送船団を送り届ける義務がある。追撃は許可できない。そう伝えてくれ。」

「了解……！」

通信兵が八島の言つたとおりの内容を返信する。

数分後、再び駆逐艦から信号がきた。

「了解。だそうです。」

八島はそれを聞いて内心ホッとした。血の氣の多い帝国海軍の水雷屋なら2流海軍と見下す自分たちを差し置いて独断専行するのではないかと心配していたからだ。

その不安は現実にならなくて済んだようだ。

また、敵機動部隊が自分たちに攻撃してくると言つ不安も、敵空母2隻とも戦闘不能と言つ戦果報告を受けたためになくなっていた。残存する艦艇もこちらに向かってくる兆候もないというので、ひとまず安心である。

「しかし、たつた30機でよくやつてくれたものだ。」

彼は何よりも航空隊の搭乗員に賞賛を送りたかった。彼らの決死の働きがなければ逆にこちらが壊滅的な打撃を被っていたかもしない。

まさに紙一重の戦いだった。

「船団は予定通りウエーク島へ向かう。敵艦隊の動向に注意しつつ、進路を予定の針路に戻る。戦闘配置解除、警戒配置へ。対潜警戒を厳にせよ。」

艦隊内の戦闘配置が解除され、乗員たちの間に存在した張り詰めた空気も和らぐ。

艦橋内のスタッフの表情にも笑みが戻る。そんな中、一人浮かない顔をした人間がいた。

「航海士、どうした？」

八島がその人間、航海士の白根護中尉に声をかけた。

「司令官！？ いえ、なんでもありません。」

と本人は言うが、何にもないということはないのは表情を見れば一目瞭然だった。八島には大体その理由がわかつた。

「恋人の飛行兵のことか？」

「ええ！ 司令官向で知つているんですか？」

図星のようだ。

「知つているも何も、フィリピンで言わなかつたか？ それに今艦内では専らの噂だよ。航海士と女子飛行兵が付き合つていろいろのは。」

軍隊という殺伐とした組織の中では娛樂は極端に少ない。恋愛話はそうした中で格好の暇つぶしの話題であつた。

本来なら個人を特定できるような話にはならないのだろうが、護が航海士という高い地位にあるから伝播が早かつたようだ。

「何だ。じゃあそつなんだな。」

「はい。」

護は正直に答えた。

「なるほど。大方出撃したので未帰還になつていなか心配しているところじだな。」

しかし、護は首を振った。

「いいえ。彼女はちゃんと帰つてきました。その、実は自分の相手は空母を大破させた加古飛行兵なんです。」

それには少しばかり八島も驚いた。

「何!? お前が・・・」

「はい。その、自分の心配の種は、彼女が今度こそ未帰還になるのではないかということです。今日は無事帰つてきましたが、戦場と言つ危険な場所において、一度と会えなくなるのではと思うと、気が気でないんです。ハハハ・・・自分は弱い人間です。旅順を出撃する前、お互ひ死んでも悔いは残さないと約束したのに。実際戦場に出てしまつと、心配で仕方がないんです。」

護は、この弱気な言葉に叱責が来る物と思つていた。しかし、八島は優しい口調で言つた。

「白根。人として誰かの心配をするのは当たり前だ。お前の気持ちは人としては正しいのだろう。だが、戦場では時に人が人でなくならねばいけない時も来る。その覚悟はお前にあるのか?」

「・・・」

「覚悟がないなら転属願いを出せ、陸上勤務か教官任務に回してやるぞ。」

「いいえ、自分は降りません!!」

「なら、もつと自分と彼女を強く思え。決して自信過剰になれとうわけではないが、ただお互い絶対にこの戦争を乗り越え幸せを掴む、そう強く信じろ。信じたら、戦に集中しろ。戦場において未練は死につながりかねんぞ。」

「はい！..」

護は直立不動で敬礼した。その目に、迷いは見られなかつた。

「よし、だつたら仕事をしろ。航海長が変針針路を計算中のはずだ、手伝つてやれ。」

「わかりました。では、失礼します。」

護は再び敬礼すると、艦橋から出て行つた。

一方の八島は司令官席に腰掛けた。

「ふう。司令官も樂じやないな。けど・・・恋人か。」

八島司令官。32歳にして一人身であつた。

米軍の日本本土空襲を未然に防いだ義勇艦隊であったが、対照的にその彼らを見る帝国海軍の人は冷ややかであった。元々、帝国の海の海防は自分たちだという誇りがある彼らにとって、今回の海戦の結果は面白くない事であった。

しかしどんなにひがんでも、彼らが義勇海軍に対して船舶の護衛を依存している比重は大きかった。竹島沖海戦以降、船団護衛や対潜哨戒能力の向上を図り始めた帝国海軍と言えど、たった3年で将兵全員の頭を切り替えるのは難しかつた。また、練度も追いついていなかつた。

現に、フィリピンを巡る海戦においては、米潜水艦により駆逐艦2隻が失われているのだ。

それでもこの時点においても、対潜哨戒等の任務を見下している將兵の数は相当数に上つた。やはり人の意識を変えるのは簡単ではない。

そんな状況であるから、日本と南方を結ぶシーレーンの安全を守るのは義勇海軍と台湾海上警備隊（1946年台湾の自治共和国化後に台湾海上警察と分離）や朝鮮海上警備隊（1944年に朝鮮海軍と朝鮮海上警備庁に改組）であつた。

5月時点で、南方の油田、資源地帯との交易は未だ続いており、そこから出る資源が、満州国から出る分とあわせて戦争を支えていた。

そんな彼らに帝国海軍が冷ややかである一方で、帝国陸軍や通信

省等はかなりの好感を持つていた。

陸軍から人気なのは義勇海軍は元々の任務の一つに、敵前上陸掩護があつたので、陸軍の作戦を幾度か支援し、また占領後の兵站を支える上でも重要な役割を果たしていたからだ。また、逓信省は彼らが戦時経済を支えているのに大きく貢献しているのに着目した。

その義勇海軍は、日本各地にも補給基地を設けていた。平時は大亞細亞通運の貨物船基地として使われている物を転用した物であった。横浜、室蘭、豊橋、鹿児島にそれらは置かれていた。

さて、義勇海軍の任務は戦線が延びるに従い膨らんでいったが、装備や人員の整備が間に合つていなかつた。

一応、開戦前から海洋学院の養成人数を増やすなどの努力は行つてゐたが、予想した以上に仕事が増え、許容範囲を越えていた。また、艦艇も造船所をフル回転させて造つていたが、他の方面からの受注をさばく必要もあり、こちらも限界ギリギリの所であった。

これは、本来帝国海軍がやるべき分の仕事も彼らがやつてゐるのに起因していた。

帝国海軍は緒戦に起きたマーシャル沖海戦による駆逐艦の損害が大きく、それ以上の消耗を恐れていた。

もつとも昨年中ごろから、日本の逓信省と陸軍の肝いで船団護衛専門組織を設置する動きが出ていた。

もちろん、海軍はこれに猛然と反発したが、日本にも満州や台湾のように沿岸警備隊的組織は必要であるとし、戦時は船団護衛、平

時はこれら専従の組織が必要と陸軍と遞信省は唱えた。

この組織、海上護衛總隊（後の海上保安庁）は昭和17年1月に正式発足し（実際の稼動開始は4月ごろから）、總司令部は横浜に設置された。一応海軍から独立した系統を持つ組織となつた。

これらに配置される艦艇は、義勇海軍で使用される艦艇がモデルとなり（創設時は海軍のお古が中心）、海軍や陸軍からの出向者、また独自採用者によつて構成された。

創設時の戦力は軽巡2隻、駆逐艦8隻、フリゲート海防艦12隻、ゴルベット対潜艦6隻から編成された。

軽巡は元帝國海軍の5500t級軽巡で、駆逐艦はフィリピンで拿捕した米国艦や「峰風」級駆逐艦であつた。海防艦と対潜艦は大亞細亞造船日本支社で竣工した新型であつた。これらが簡単に融通できたのも、僅か3ヶ月で建造可能と言つ義勇海軍ならではの艦艇であったからだ。

この海上護衛總隊初代總司令官は及川古四郎元海軍中将が就任した。

この組織に対して、義勇海軍からは複数の人間が出向している。対潜哨戒や上陸掩護のノウハウを教えるためだ。

この海上護衛總隊とも、義勇海軍は共同任務を繰り広げる事となる。

一方、米海軍も反撃の準備を着々と整えていた。大西洋艦隊から空母や戦艦を回し太平洋艦隊の戦力補充に努めた。

米国は5月に大西洋での駆逐艦撃沈を口実に独逸にも宣戦布告したが、海軍力で劣る独逸には2線級の艦艇と英國海軍のみで充分と判断したようだ。

そして、米海軍の反撃が始まる。昭和17年6月。米艦隊が千島を空襲した。

## 千島列島海空戦 上

米艦隊が千島に来寇した目的は、士氣高揚と日本軍部ならびに自國政府へのパフォーマンス的意味が多分に含まれていた。

4月に日本本土爆撃が失敗し、おまけと来て空母「ヨークタウン」まで失った米海軍はなんとしても汚名返上の必要があった。

しかし、この時点ではナチス・独逸へ米国が宣戦布告したため、予定していた大西洋艦隊からの空母「レンジャー」や新鋭戦艦「サウスダコタ」の太平洋回航が延期されてしまった。そのため、米太平洋艦隊に残された戦力は主力艦が空母「ホーネット」、「ワスプ」に戦艦「コロラド」のみというお寒い状況になってしまった。

もちろん、これだけの戦力でまともな侵攻作戦など立てられる筈がない。

そのため、新太平洋艦隊司令長官となつた二ミッソウ大将率いる米海軍は潜水艦による通商破壊を日論んだが、まだ潜水艦自体の数が少なく、また義勇艦隊や台湾海上警備隊の活発な活動と、基地から戦場まで非常に遠かつたため芳しい戦果を上げられなかつた。

しかし、日本海軍もマーシャル沖海戦の打撃から完全に立ち上がつていなかつた。この時点で動ける戦艦は金剛級の3隻と、「長門」のみ。空母も本土にいたのは修理中の「蒼龍」と軽空母のみでその他は遠く南方に出払つていた。

そこで太平洋艦隊で立案されたのが千島奇襲作戦だつた。この時期北方海域にはソ連太平洋艦隊の増強に併せて、第5艦隊が択捉島

单冠湾に配備されていたが空母はいない。また、千島の航空戦力も南方に比べて随分と弱小な戦力しかなかつた。

日本本土に近く、なおかつ戦力の薄い地域。今の米海軍に攻められる場所はここしかない。そう考えた二ミッシ太平洋艦隊司令長官は、スプルアーンス中将に、ダッヂハーバー駐屯の北太平洋方面部隊と合同での千島攻撃を命令した。

これに従い、スプルアーンス中将は5月下旬に真珠湾を出撃した。戦艦1、空母1、重巡3、軽巡2、駆逐艦11、給油艦2からなる機動部隊であつた。

艦隊はダッヂハーバー到着後北太平洋方面部隊から抽出した軽巡2、駆逐艦5を編入し、一路千島方面へと南下した。

スプルアーンス提督は艦隊の発見を避けるため、潜水艦を動員して日本の哨戒網を一時的に麻痺させた。米軍側も潜水艦3隻を失つたが、日本側の特設哨戒艇や漁船など11隻を沈めるか損傷させ戦線から離脱させた。

そして、6月5日。まず最初に单冠湾へ向けて攻撃隊を発進した。

この時点において、日本の電探配置は海軍が空母、戦艦と南方の主要基地、陸軍が首都近郊と南方の主要基地のみだったため、攻撃隊の発見が遅れた。そして、同地の天寧飛行場配備の陸軍戦闘機隊も、停泊中の船舶も大打撃を負つてしまつた。

小型貨物船2隻、漁船6隻が沈没、その他3隻大破炎上。天寧飛行場配備の陸軍の97式戦闘機12機は飛び立つ前に全滅した。

もちろん、日本側は直ちに北海道の基地を中心に索敵を行つたが、智将スプルアーンス提督は引き際をしつかりとわきまえていた。攻撃は一回のみで、終了すると直ぐに偵察機の航続圏外へと脱出した。

あまりに鮮やかな奇襲であつた。軍事施設への被害は僅少だつたが、それでも本土に間近い海域へ敵の接近を許し、さらには空襲を許したのは軍部にとって大きなショックとなつた。しかも、民間への被害が大きかつたことから、緘口令を敷く前に情報が漏れてしまつた。

海軍は直ちに米機動艦隊撃滅へ動いた。

命令に従い、幌筵に駐屯していた重巡「那智」を旗艦とする第5艦隊がただちに追跡を開始した。しかし、空母を持たない第5艦隊は偵察能力が低く、敵に接触することはなかつた。それどころか、米潜水艦の攻撃で駆逐艦1隻を失う失態を見せている。

これが元で、艦隊司令官細萱中將は後に更迭されている。

そして、日本側の努力をあざ笑うかのように、米艦隊は今度は千島列島最北端の占守島に来襲した。しかも、航空攻撃の後には戦艦「コロラド」率いる別働隊による艦砲射撃が加えられた。

この時、占守島には海軍と陸軍の航空隊が駐屯しており、それなりに米軍攻撃隊の迎撃に善戦した。しかし、その後やつて来た戦艦にはなすすべがなかつた。

この時占守島に配備されていた艦攻、艦爆は対潜哨戒用の少数のみで、しかも魚雷のストックなしだつたため、実質的に対艦攻撃能力はなかつた。

米艦隊は約30分ほど艦砲射撃を竹田浜付近の陸軍陣地に加えた。戦艦の艦砲射撃の前には陸軍陣地も為す術がなかつた。

竹田浜の陣地に大打撃を与えた米艦隊は、意氣揚々と離脱にかかつた。しかし、最後の最後で彼らは大やけどをすることとなつた。この時、占守島には予想していなかつた敵がいたのである。

千島列島海空戦 上(後書き)

御意見などを待ちしております。

## 千島列島海空戦 中

実はこの時、占守島には義勇海軍と海上護衛總隊所屬の魚雷艇がそれぞれ3隻ずつ駐屯していた。

この6隻は、諸島群における海域での魚雷艇による対潜哨戒能力の研究、ならびに経験豊かな義勇海軍から海上護衛總隊への運用ノウハウ教習のために配置されていた。

義勇海軍の魚雷艇は、いざとなつたら魚雷の代わりに爆雷を積み込んで、駆潜艇としても使えるように設計されていた。

配置されたのは米艦隊奇襲の1週間前の事であった。

米機動部隊捕捉島を空襲の報に接し、特設魚雷艇隊指揮官の有坂大尉は取り敢えず魚雷艇隊にも注意を促すと共に、翌日の艇の装備をどうするか迷った。

空襲に対応するならば、可燃物である魚雷、爆雷を積むのは危険である。しかし、もし敵が直接艦砲射撃するような事態に陥れば、魚雷が必要である。また潜水艦がこの機に乗じて樺太方面に侵入することも有りえる。もしそれに伴う哨戒出動になつたら爆雷が必要である。

「参ったな・・・」

さんざん悩んだ挙句、彼が出した結論は2隻に魚雷を装備し、1隻に爆雷を装備するであった。戦力の分散を招きかねないが、あらゆる事態に対処せねばならない。

もし空襲となつたなら、魚雷や爆弾は海中に投棄する。もつたいい話だが、それ以外に方法はない。

早速、整備兵達が魚雷落射装置と爆雷投下装置に魚雷と爆雷を積み始めた。しかし、この時には空襲に備えて一端魚雷、爆雷は取り外していたから再装備せねばならなかつた。

魚雷艇には魚雷なら4本、爆雷なら20個を積めるが、これらの搭載には最低2時間は必要であつた。人力と簡単な搭載用機械しかないからだ。

整備兵は一艇あたり3人しかいない。そのため乗員8人もこれら搭載作業を手伝う。

全員汗だくになりながら作業を続けた。途中空襲で作業が中断したが、幸い魚雷艇に襲い掛かってきた敵機はいなかつた。

そしてようやく作業の終わりが見え始めた頃であつた。突然遠雷のよつた音と、地響きが伝わってきた。

「なんだ？」

「地震？」

若い兵士たちが口々に呟くが、有坂にはこれが何であるかわかつた。

「艦砲射撃だ！..」

依然義勇艦隊の砲撃訓練に参加した事がある彼には直ぐにわかつた。

「全艇出動準備！！」

号令と共に、各艇のエンジンが始動する。

パックカード・マリーンのライセンス版であるマ式発動機が次々と始動し、排気口から煙を立て始めた。

そしてエンジン始動の5分後、魚雷の調整が終わった。

「御苦労！！」

突貫作業を行つた整備兵に労いの言葉をかけ、彼は魚雷艇に乗り込んだ。

「頼むぞ！！」

「わかつております！！」

小さなブリッジに登ると、操舵手の青中士の肩を叩きながら言った。

対艦攻撃の要領は、既に昨夜の内に全艇長を集め決めてあつた。

出港後は座礁に備えて単縦陣を組み、そして突入寸前までそれを崩さず、最後の最後で傘型で突撃するという物であった。

指揮を執るのは最先任の有坂である。

「出撃！！！航い解け！！！」

桟橋と魚雷艇を繋いでいたがロープが次々と外される。

「帽振れ！！」

残存する魚雷艇の乗員や整備兵が帽子を力一杯振る。それに対し、乗員たちは敬礼で答える。

4隻の魚雷艇は少しづつ速度を上げていく。

幸いにもこの日は、波は風いでいる。また、霧が多少出でているが視界を大きく塞ぐほどではない。むしろ、こちらの接近を敵に悟らせにくくする煙幕のように思えた。

「いいぞ、天候はこちちらに味方している。」

砲撃の音は先ほどより小さくなっているものの、まだ続いている。その音を指して魚雷艇隊は進んでいく。

魚雷艇にはレーダーなどという贅沢品はまだ装備されていない。乗員の目と耳、そして無線の送受信のみが情報を得る手段だった。

「艇長、微弱ながら敵の電波を探知。どうやら衝突を避けるために艦隊内通信を行っているようです。」

電信兵が伝えてくる。

「よつし。その電波をしつかり追え。」

その言葉を待っていたかのように、砲撃音が止んだ。どうやら砲撃を終了したようだ。

「艇長、電波の発信も中断しました！」

電信兵が再び伝えてきた。

「最後に電波を発した方角に走れ！..！」

4隻はとにかく最後の発信地点に舳先を向けた。他に方法はない。

「空振りかな？」

相手が外洋に出られると厄介である。付いていけなくはないが、こちらの運動性能や高速性能を大きく制限されてしまう。

また、こちらも慣れない海域であるから座礁する危険もあった。

数分ほど、気まずい空気が艇を支配した。

しかし、天は彼らに味方した。

風が出てきた。霧がすこしずつ晴れる。

500m程だった視界は一気に4000m近くまで晴れた。すると、後部機銃座の兵士が叫んだ。

「敵マストらしき物見コー！」

十島列島海空戦 中（後書き）

「意見などをお持ちこます。」

## 千島列島海空戦 下

「全艇機関最大船速！…敵艦隊に突撃せよ…」

（命令と共にマストに突撃を指示する旗が上げられる。）

各艇はエンジンの出力を最大にする。

義勇艦隊と海上護衛総隊の使用魚雷艇は同型で、最高速度は42ノットを誇る。凄まじい高速のために艇の前が持ち上がる。

「魚雷戦用意…！」

それとともに有坂は信号弾を空中に向けて発射した。全艇に陣形の変更を伝える物だ。

それまで単縦陣で走っていた4隻はまず傘型に隊形を移行する。

一方、米艦隊も魚雷艇隊の接近に気付いたらしい。迎撃の為駆逐艦が主砲を発射し始めた。4隻のまわりに水柱が立つ。

「ひるむな！…40ノットで走る魚雷艇にそいつ当たるか…！」

むしろ怖いのは砲より機関砲だ。機関砲なら多数の砲弾を短時間でばり撒ける。魚雷艇の船体には装甲など無いから1発の被弾が命取りに成りかねない。

「肉薄しろ！…目標、前方の駆逐艦…！」

敵の迎撃の凄まじさから、とてもではないが戦艦までは近づけそうに無かつた。有坂は生還と攻撃成功の可能性を高める為駆逐艦に目標を定めた。

「鄭上等兵、前部機関砲を撃ちまくれーー！」

この時には、敵艦から40mmや12・7mm機関銃の発射が始まっていた。時折弾が空中を裂く音や、船体に当たるような音がしてくる。

彼はそれに少しでも対抗するため、前部の40mm機関砲の発射を命令した。

もちろん、これで敵を撃沈しようというわけではない。あくまで露出している機関砲等への牽制だ。

「距離7000ー！」

測距儀で距離を測っていた宇都宮准尉が報告する。

「まだだ。5000まで突っ込めーー！」

陸上では5000はかなり距離があるが、海上の砲戦では目と鼻の先である。危険を冒してまでその距離に迫らなければいけない理由が彼らにはあった。

実は、彼らが使用している魚雷は日本の誇る酸素魚雷でも、オソドックスな空氣魚雷でもなかった。彼らが使用していたのは電池魚雷であった。

これは日本海軍が開発した92式電池魚雷の改良型である。本家の魚雷は電池魚雷としては性能優秀で、同時期のHボートが使っていた電池魚雷よりも優れていた。しかし、日本の潜水艦艦長からは嫌われていた。

理由は単純だ。それよりも優秀な酸素魚雷が出来てしまったからだ。速度も速く、場合によつては戦艦や空母にも致命傷を『えられる酸素魚雷を誰もが使いたがつた。

しかし商船相手なら電池魚雷で充分である。それに信頼性や安全性、採算性も良い。実際に日本の潜水艦艦長の中にもその有用性を認める者もいた。しかし、そうした人間は本当に少なく、結局92式酸素魚雷はほとんどの人間から忘れられてしまった。

それに田をつけたのが義勇海軍で、帝国海軍から買取してさつそく改良に移つた。ヨーロッパから亡命した科学者に応援を要請して、より強力な電池を開発し搭載した。

結果、最高速度を40ノットまで引き上げた。しかし、電池魚雷の致命傷ともいえる足の短さだけはどうにもならず。40ノットでの航続距離は6000mしかない。そのため彼らは5000mまで肉薄する必要があった。

「距離6000m!」

「後1000mだ!! がんばれ!!」

操舵手は敵の砲撃を攪乱するために蛇行航行を繰り返す。

「距離5500m!」

5000につくまでがとてもなく長く感じられる。乗員の誰もがそう思った。休憩時、誰かが「俺たちは水上を疾走する雷撃機ですな。」と冗談を言っていたが、あながち嘘ではないかもしれない。もしかしたらそれ以上にきついかもしれない。

しかし、彼らはまだ幸運から見放されてはいなかつた。この時点で脱落艇は0だつたからだ。

そして、ついに。

「距離5000！…」

「発射！…！」

雷撃手が発射スイッチを押した。

魚雷艇の魚雷発射管は火薬を使つた発射方式である。発射した瞬間には炎と硝煙が出る。

「減速！取り舵一杯！…！」

有坂は回避運動に入った。減速するのは魚雷を追い抜いてしまうかもしれないからだ。

この瞬間がもつとも危険な時である。敵に腹を向けるからだ。幸いにも有坂の艇は大丈夫だつた。

発射を済ませた2・3号艇も同様に反転離脱した。

しかし、最後の4号艇だけはそうはいかなかつた。4号艇は敵に腹を向けた瞬間に集中射撃を浴びてしまつた。そして、その内の一発が燃料タンクに命中し、次の瞬間には大爆発を起こして四散した。

「4号艇がやられました！！」

その報告にも有坂は気にしている余裕はなかつた。自分たちが脱出できるかもわからないからだ。

そして魚雷発射から凡そ一分後。

グワーン！－！という鈍い爆発音がした。命中である。そして一瞬敵の砲火が薄くなつた。その瞬間を逃がさず、有坂艇以下2隻はなんとか脱出できた。

だが、結局どのような戦果を上げたかはわからなかつた。

彼らに戦果が伝わつたのは翌日である。4号艇の乗員救助に向かつた魚雷艇からの物で、敵沈没艦の乗員を救助したという事だつた。その捕虜への尋問の結果、命中魚雷はどうやら3発であつたようで、その全てが駆逐艦に命中していた。16発の中の3発だから、初陣にしては決して悪くない成績である。命中した隻数は2隻で、内2発を喰らつた方が沈没したようだ。

ちなみに、これは戦後わかつたことだが、もう一隻も大破し航行が難しくなつたため、ソ連の港に逃げ込み、そこで接收されることとなる。

じつして、一矢報いた魚雷艇隊だつたが、電池魚雷の航続力不足

や少数での襲撃の困難さ等の今後の戦闘の困難さを物語る戦訓も得ることとなり、そのためには尊い12名の犠牲者を出さなければいけなかつた。

千島列島海空戦 下（後書き）

御意見などを待ちしております。

## 英國参戦

1942年8月時点で、日本軍は米軍の反攻がどの方向から来るかわからなかつた。

中部太平洋の島々を飛び石の様に攻めてやつて来るか、それとも北のキスカ・アツツ等のアリューシャン列島方面から千島へ攻めてくるか。

日本軍上層部が考える米軍の侵攻ルートには、この2つのルートが有力視されていた。

しかしながら、これ以外にも政府上層部で出ている意見があつた。それは、米国がイギリスに対日参戦を要請するという物だつた。

この時期、英国は中東ならびに西部戦線において独軍と対峙していた。しかしながら、エジプトは既に突破される寸前で、その先の膨大な油田地帯を持つイラク、イラン方面へ独軍が雪崩れ込む事が予想されていた。また、再び始まつたバトル・オブ・ブリテンでは独軍の最新鋭戦闘機であるFw190が英国戦闘機隊に大きな打撃を与えていた。

英国は独軍に対して圧倒的に海軍力では優位に立つていた。しかしながら独艦隊主力はバルト海に籠つたまま出てこようとなかつた。おかげで、英國主力艦隊はただ指を加えて本土空襲を見ているしかなかつた。

5月に米国が一応対独参戦はしたが、未だ戦力の主力は太平洋方面に向けられていた。

日本の情報機関は、米国が大規模な英國への爆撃隊、戦闘機隊派遣の見返りに、英國やその連邦国による日本への参戦を促しているという情報を掴んでいた。

もし英國が参戦すれば、状況は大きく変わる。なぜなら、米軍がオーストラリア方面からの反撃を行えるようになるからだ。そうなると、今まで黙っていたオランダ政府も日本への参戦を行うかもしない。

実際、チャーチルは迷っていた。英國本土を守るためなら、例えシンガポールやマレー半島を失つても惜しくはない。ただし、日本へ参戦する理由がなかった。

一方で満州国側は、米国がソ連を焼きつけているという情報を手にしていた。

ソ連はこの時点でいずれの国とも戦争状態には入っていなかつた。スターリンはヒトラーと未だにお互い警戒しつつも、剣を抜いてはいなかつたのだ。

これは、スターリンが英米の連合がドイツに勝利する可能性のほうが高いと踏んでいたからだ。それどころか、ソ連にとつてはナチス・ドイツが敗北し、英米が大きく力を消耗する事を望んでいた。そうすれば、歐州における共産革命が容易になると。

スターリン自身は、急速に発展する満州国をソ連の勢力圏にあれば相当なメリットがあると考えていた。ただし、満州と開戦すれば日本とも戦う可能性が高いのも事実だつた。そうなると海軍力で優位に立つ日本軍によってソ連も大きな打撃を被る。

そのため、スターリンは対日参戦については、アメリカに対して幾つかの条件を出していた。

その一つが海軍力の増強、すなわち艦艇の譲渡で、結局米国は日本との開戦前に売った艦艇プラス、新たな艦艇を譲渡している。

また、艦艇だけではなく、航空機、戦車等その他の不足する製品も売却または譲渡していた。ちなみに余談となるが、史実ではソ連は第二次大戦中の兵器貸与に関する支払いを戦後数十年放置し、さらに支払った時も使えない兵器が多くかったといういぢやもんをつけて3分の1まで値切ったという話がある。

#### 閑話休題。

とにかく満州国の情報機関はこうした情報を工作員から得ていた。ただし、満州国の掴んでいない恐るべき情報もあったのであるが、それは後に判明するだろう。

英國かソ連か、どちらが先に日本に出るかが大きな焦点になっていた。最悪なのは両方が一斉に攻めてくる事だった。

そして、8月7日。その情報は日本と満州に届いた。

「英東洋艦隊増強サル。」

シンガポールにある日本領事館からの電報だった。

チャーチルは対日参戦準備に入ったのだ。彼はセイロン島まで下っていた東洋艦隊を再びシンガポールまで進めたのであった。

この日シンガポールに入港したのは戦艦「プリンス・オブ・ウェーブズ」、「リベンジ」、巡洋戦艦「レパルス」、空母「インドミダブル」、「ハーミス」、巡洋艦3隻、駆逐艦5隻だった。

この内、戦艦「プリンス・オブ・ウェーブズ」は最新鋭艦だった。その他の艦と併せて、この艦隊は相当な打撃力を持っていた。ただし、護衛作戦に使うその他の艦種は少なかつた。

そして、この日以降英國は日本の商船に対する臨検を強化した。これが決定的だった。

英國と日本との間が破局する事となる契機となつた事件は8月1日に起きた。英國の臨検を受けた貨物船「足柄丸」が英駆逐艦によって撃沈されたのだ。

英國側は日本商船が停戦命令を無視し、かつ武器を使って攻撃してきたため止むを得ず撃沈したと発表した。

対し、日本側は英國駆逐艦の一方的攻撃として非難し、謝罪要求をした。もちろん、英國は何の返答もしなかった。

8月15日、全陸海軍部隊に対英戦争突入への警戒に入るよう通達が出された。

運命の9月2日、ついに英國は対日戦線布告を行つた。そして、それに連なる形で、9月11日にはオランダが対日参戦布告をした。

一切の石油の輸入源が絶たれた日本には、南方進出という手段以

外に手はなかつた。

だが、その前に英東洋艦隊を壊滅させる必要があった。そしてその戦いに、義勇艦隊も巻き込まれることとなる。

## **英國参戦（後書き）**

御意見等お待ちしています。

## マレー沖海戦 上

英國とオランダが対日参戦した為に、戦争は太平洋中に広がってしまった。とりわけ、オーストラリアが敵に回つたのは、日本にとって頭の痛い問題であつた。

鉄や小麦等の資源の輸入が止まつただけでなく、オーストラリアは米軍にとつて、後方補給基地としてまたとない場所である。また、日本側の制圧地域に近い場所が新たに敵の勢力圏内になつてしまつた。この内、豪領のラバウルはトラック島への爆撃機発進拠点になる可能性が高かつた。

そのため、英國の対日参戦直後に日本軍は第四艦隊と陸戦隊を送つて同地を占領している。ただし、日本軍の計画ではそれ以上の進出は補給線の能力限界として、今回は占領は棚上げにされた。

これが後にソロモンの激戦となる戦いの序盤戦であつた。

一方で、シンガポールへ進出した英東洋艦隊の動静を、日本側は注視していた。

この時期、この方面へ派遣できる艦隊はフィリピンを拠点とする第六艦隊であつた。

この艦隊は潜水艦を中心とする艦隊の為、水上戦力はなかつた。

他に有力な戦力はダバオに進出した陸攻隊であつたが、こちらは蘭領インドシナへの爆撃任務もあるから、おいそれと出撃させられない状況にあつた。

もちろん、日本側もこの状況がまずい事は重々承知していた。そこで、英國参戦2日前には柱島に停泊していた空母「翔鶴」、「瑞鶴」、「瑞鳳」、巡洋艦5、駆逐艦10からなる新編成の第2機動艦隊を出撃させている。

これら空母には正式採用されたばかりの新鋭艦上爆撃機である「彗星」や艦攻「天山」が搭載されていた。零戦も新型の54型であつた。「瑞鳳」もカタパルトを新設して新鋭機の運用を可能にしていた。

司令官は猛将で知られる山口多聞中将であった。

山口中将は、この時世界初の航空機による戦艦撃沈の機会を得んと張り切っていた。この世界では、いまだ航行中の戦艦は航空機に沈められていなかつた。

一方、田の敵にされた英東洋艦隊も参戦前日に出撃し、行方を眩ませようとした。

ただし、彼らの幸先ははつきり言って悪かつた。何故なら出撃してわずか3時間後に日本の「伊65」潜水艦に発見されてしまう。

艦隊はこれに気づき欺瞞進路を取つたが、今度はタイ海軍の飛行艇に発見されてしまった。ちなみに、英國はタイにはまだ参戦していないなかつたため発砲できなかつた。

後に生還した参謀長のキース少将は、度重なる敵の接触に、フリップス提督以下将兵全員に何かしら、口には表せない不安感が蓄積していったようだつたと語つている。

そう、この時の英東洋艦隊はことん運がなかつた。

そして彼らにとつて、3度目の接触者となつた潜水艦がいた。義勇海軍所属の「S6」潜水艦だつた。

同艦は3日前から、オーストラリア方面から迂回してくるアメリカ潜水艦への索敵、そして情報で宣戦する可能性の高い英國軍に対する索敵も同時に行つていた。

台湾を出撃して4日目の夕方、同艦はまず複数のスクリュー音を捉えた。

「艦長、複数の推進器音を探知しました。」

狭い潜水艦の指揮所の中で、聽音手の報告にて、艦長の鄭中尉は顔をほころばせた。

「ほお、獲物かな？ 方位は？」

「左舷3時方向。」

「よし。潜望鏡深度まで無音浮上！ 音を立てるな！！」

潜水艦の強みとは一重に敵に見えないということである。だから、敵に見つかつたら終わりである。ひたすらじつとするか、攻撃を断念して一旦散に逃げるしかない。

鄭は最新の注意を払つよつ命令した。もちろん、乗員一同、そんなことは百も承知だつた。

「うわ」さすがくつと浮上していった。

「艦長、潜望鏡深度です。」

深度計を呼んでいた兵が報告してきた。

「よし、潜望鏡を短く上げる。」

小型モーターが動き、潜望鏡が目線の高さまで上げられた。  
彼がレンズを覗くと、夕日に対して影となつて移る複数の艦船の姿が見えた。

マレー沖海戦 上(後書き)

御意見などをお待ちしております。

マレー沖海戦 中（前編）

思ひおもしておめでとうござります。正月から戦争小説をアップするのもどうかと思いましたが、今年も良き一年になるよう願っています。

## マレー沖海戦 中

「やつたぞー思つた通りだ。敵艦隊だ！！英國の東洋艦隊だ！！」

通常、敵艦の識別は難しい。しかし、この時潜望鏡には艦形まではわからなかつたが、大きな戦艦クラスの艦影が3隻映つていた。

今この海域を航行する戦艦は英國東洋艦隊しかありえない。

「やりましたね艦長。無線連絡しますか？」

先任将校の時田少尉が聞いた。

「いや、既に味方の飛行艇が発見しているからな。その必要はなか  
るづ。」

浮上中の無線傍受で、既に英東洋艦隊が2度発見されているのを鄭中尉は知つていた。だから、自分の艦が英東洋艦隊と接触する可能性が高いことを。

「では攻撃なさるのですか？」

「ああ。本艦はまだ一本も魚雷を使つていない。14本の魚雷が残  
つてゐる。ここで攻撃しない手はない。幸いこちらはまだ気づかれ  
ていない。」

「わかりました。」

時田少尉は魚雷室との電話をとる。

「水雷。」

「はー。」

「魚雷戦用意……。」

「了解……。」

「艦長、魚雷は何を使いますか?」

「空氣魚雷だ、いや、あの新兵器を使おう。」

その途端、時田が表情を険しくした。

「ええ! あれはまだ不完全な兵器です。」

「そうだ。だが、使ってみる価値はある。もし有効な兵器であるなら、この後の戦いが大きく変わることになるぞ。」

「わかりました。水雷。魚雷は空氣魚雷。信管は磁氣信管を使用。用。

」

「了解……。」

今回彼らが積んできた新兵器は、磁氣信管装着の魚雷だった。

磁氣信管とは、文字の「 $\gamma$ 」とく磁気に反応して働く信管である。後に米国はマジックヒューズ、いわゆる $\gamma$ -T信管を実用した。これは40mm機関砲弾にも装着できる物だったが、それと同じである。

ただし、魚雷に積む分装置自体の大きさも大きくなり作りやすくなり、衝撃も小さい。

日本側のV-T信管本格採用は戦後まで待たねばならなかつた。しかし、魚雷に関しては早いうちから研究を重ねていた。それでも採用は昭和18年に入つてからだ。

一方で、義勇艦隊はヨーロッパから「命してきたコダヤ人科学者を高額で採用し、科学技術分野で一步先を行つていた。

そして、それが今彼らが磁気信管魚雷を持つという結果を生んでいた。

ただし、いまだ試作品の域は出でていない。改修を幾度も受けているが、信管の感知率は60%とけつして低くはないが、まだまだ完全とはいえない状態であった。

その新兵器を鄭中尉は使う事にした。ちなみに、後にはじめての音響探知魚雷をはじめて使う事になるのも彼であった。

「魚雷装填完了まで約5分です。」

「よし。舵面舵15度。音を立てずに静かにやれ。」

「了解。」

潜水艦にとつて、敵に発見されることは攻撃が一度と出来なくなる事と同義語である。敵は回避運動を取つてしまつて、場合によつては駆逐艦等からの猛烈な爆雷攻撃を加えられる。

潜水艦は水中では10ノットも出ないから、逃げられる可能性は低い。ひたすら深く潜つて、敵が諦めるか、それとも自分が沈められるのを待つしかない。

そうならないために、なんとしても敵に発見されるのを防がねばならない。

「ようし。敵は気づいていないぞ。まず第一撃は外側にいる駆逐艦。つづいて余裕があれば巡洋艦か空母をやる。」

鄭は4本の魚雷で沈めやすい船を目標に選んだ。駆逐艦は1・2本で沈むし、巡洋艦も当たり所によつては1本で沈む。空母はさすがに沈みはないだろうが、傾斜するだけで航空機の運用が出来なくなる。

「おまたせしました。魚雷装填完了です。」

水雷長からの装填完了の連絡が来た。

「よつし。敵との距離6700m。敵速20ノット。方位右15度方向。」

さつそく管制システムの計算装置に兵がデータを入力する。これで艦の向きや速力の最適値をはじき出す。

データの通りに艦首が向けられた。

「魚雷発射管に注水完了。いつでもどひいぞ。」

「よつし。発射!!」

発射レバーが押され、4本の53cm空氣魚雷が勢い良く押し出され、走り出した。

「S6」潜水艦が発射した魚雷を最初に発見したのは、駆逐艦「テネドス」の見張り員だった。

「右舷に雷跡……距離400……」

この時、ちよつと日入り時であつたために海面は夕日の照り返しによつて見難くなつていた。そのため、魚雷の発見が遅れてしまつた。

「取り舵一杯……それと各艦に通達……」

「テネドス」艦長は直ぐに命令をだした。しかし如何に俊敏な駆逐艦といえど、距離400mは近すぎた。45ノットで走つてきた魚雷はわずか15秒後には「テネドス」に到達した。

鄭中尉が心配していた磁気信管魚雷はきつちりと「テネドス」の竜骨の真下で作動した。

竜骨は船の背骨ともいえる重要な物だ。それが破壊される事は、船体の崩壊を意味する。「テネドス」は魚雷命中30秒後には船体が真つ一つに折れた。

艦長の総員退艦を待つまでもなく、乗員たちは我先に海に飛び込んだが、沈没まで一分ほどしかなかつたため、生存者は吹き飛ばされた2名、なんとか飛び込み、沈没の渦に巻き込まれなかつた11名のわずか13名だった。

もつとも、撃った側の「S6」にしてみれば、そんな惨状はわからぬから、ただ魚雷の爆発音と艦艇の沈没音を聞いて命中を祝い、万歳三唱をしていた。

この時被害を受けたのは「テネドス」だけではなかつた。巡洋艦「エクゼター」も被雷した。ただ「エクゼター」の場合は一本のみであり、さりに爆発したのも信管の誤動作によつて舷側であつた。そのため、若干の浸水をうけたのみですんだ。

2艦が被雷する光景を目の当たりにしたフィリップス提督は、たちに残る駆逐艦に「テネドス」乗員の救助と潜水艦の捜索を命じた。

しかし、ここで誤算が起きた。艦隊の残る駆逐艦は4隻、内1隻を救助に出すと残るのは3隻である。艦隊を丸裸には出来ないから潜水艦攻撃に向かわせられるのはせいぜい1隻だつた。

その一隻にしても、艦隊陣形右側にいた駆逐艦は「テネドス」のみだつたため、この時艦隊の左側にいた、そのため、分離させるのに時間を喰う事となつた。

主力艦偏重の艦隊編成が仇となつてしまつた。

そんなことを知らない「S6」潜は、発射管室で水雷兵たちが汗だくになりながら魚雷の再装填を終えていた。

「艦長！魚雷再装填完了です！！」

「御苦労！！」

驚異的とも思える速さで再装填を終えた水雷兵たちに労いつつ、鄭は再び潜望鏡を覗いて照準を定めた。

「の時、既に一回田の魚雷は命中していた。

潜望鏡には「テネドス」の轟沈によつて隊形を乱す敵艦隊の姿があつた。

「よつし次の目標は空母だ！！4本前部きつちり当てる！！」

この時、艦隊最後尾を走つていた空母「フォーミダブル」がちょうど射線に入つていた。しかも、その後ろにいた駆逐艦は増速して前に出よつとしている。

「田標距離7200！！方位左に10度。速力15から20！！」

管制版にデータが入力された。

ちょうどこの時、ようやく分離を終えた敵駆逐艦がこちらに向かつてくる所だった。

「急げ！！」

「艦長、入力完了です！！」

「発射！！」

再び4本の魚雷が発射された。

「潜望鏡下げる！！急速潜航！！深度100！！敵駆逐艦の動きに

注意！！

「メインタンク注水！！」

「トリム10！速力8ノット！」

鄭の命令のもと、兵達が迅速に動き、艦は急速潜航に入る。タンクに水が入り、艦首が海底へと向けられる。

「深度15！！」

深度計の針が回る。深度は直ぐに30まで達した。

「敵駆逐艦前方、近づく！！」

聴音兵が狂ったように叫んだ。

「とにかく潜れ！！」

「S5」はひたすら潜る。

数分後、爆雷攻撃が始まったが、音は遠かった。そして20分後には完全に駆逐艦を巻くことに成功した。こうしてなんとか危機を脱したが、鄭たちは敵駆逐艦との格闘のため、戦果を確認することは出来なかつた。

「」の時の「S6」の戦果は翌日わかる」となった。

早朝、英機動部隊を発見した山口中将の機動部隊は、見敵必殺とばかりに航空機による全力攻撃を行つた。

3隻の空母から合計124機の攻撃隊が発進した。

攻撃隊隊長の村田重治少佐は敵の航空攻撃能力を殲滅するため、最優先で空母を狙つた。しかし、そこで彼は思わぬ光景を目撃した。

「おや？ 2隻しかいないぞ。」

彼の目に入ったのは、2隻の空母だった。実は「S6」は見事空母「フォーミダブル」を撃沈していたのだ。その事実が日本側に知れた瞬間であつた。

攻撃隊は残る「イングリミダブル」と「ハーミス」をあつという間に撃沈した。敵艦隊にあつた防空戦闘機はわずか24機であつたために、たちまち零戦に蹴散らされてしまい、おまけに護衛艦が不足していたため、日本機の跳梁を許した結果だった。

さらに、戦艦「POW」も推進器と舵に魚雷が命中し、グルグルその場を旋回することしか出来なくなつた。これではただの的である。

航行不能の「POW」を「レパルス」が曳航しようと試みたが、そこへ今度はフィリピンからやってきた陸攻隊が攻撃し、留めを刺した。彼らは波状攻撃の末、「POW」と「レパルス」、そして巡洋艦の「エクゼター」を撃沈した。

こうして、マレー沖海戦と呼ばれた海戦は日本側の大勝利で終わった。その糸口を作った「S6」潜は、後日連合艦隊司令長官から感状を戴くという榮誉に授かる事となる。

## マレー半島電撃戦

英國とオランダが宣戰布告してきたため、日本側の戦線は一気に広がった。

1942年8月時点において、日本軍は既にフィリピン全土を占領し、暫定政権を樹立させていた。日本はそのフィリピンを補給基地として、南方への即時侵攻を図った。

フィリピンの独立は、既にアメリカ時代に決定されていて、1944年に独立予定であった。しかし、その政府は親米派の人物で固められる予定であった。

日本側が作った暫定政権は、親日派の人間を含めたものの親米派の人間もいることによって、フィリピン国民の感情を良くしようとした。

また、この政府はあくまで暫定政権であり、1944年には総選挙を実施する旨を発表した。これも、現地住民の感情を考えての処置だった。

開戦時、フィリピンに上陸したのは3個師団であった。この内の2個師団が抽出される事となつた。

日本陸軍は、満州事変以降大きく変わつたと言える。満州の完全独立と中国への侵攻失敗がその根本にあつた。

中国における戦争が不拡大に終わつて以降は、年度予算における軍への支出が厳しくなつた。これは上記理由に加え、インフラ整備

や世界恐慌後に急増した失業者対策を急ぐべきという声が高くなつたからだ。また、折しもその時期海軍は軍縮条約の真っ只中にあり、艦艇の建造を控えていた時期でもあつたからだ。

日清戦争以来、霸権一辺倒であつた陸軍も戦争相手がなければどうしようもない。特に、それまで仮想敵としてきたソ連との間に満州という防波堤が出来た事も、予算縮小へ拍車をかけた。

結局、昭和10年前後にかけて、陸軍は大幅な軍縮を行わざる得なかつた。それは17個あつた師団の内、2個師団の廃止と、一部師団の旅団への縮小であつた。また、毒ガスなどの兵器の研究、生産も大幅に縮小された。

もちろん、陸軍内部からは反発も起きたが、世間の風当たりが強いと言つて、目をつぶらざるえなかつた。

ただしである、これに伴い解雇された現役軍人の相当数は、軍事顧問として満州や内蒙古、タイ等へ派遣されているから、不満の声はごく短期間で終息したとされている。

また、この時の軍縮は宇垣軍縮同様に、兵員を縮小した分の予算が近代化に回された。

これによつて、38式歩兵銃から早期に99式歩兵銃への更新が完了し、さらに戦車の開発、改良も早期に進められた。

じつした軍の近代化には、インフラや国民生活の向上が後押しした。国が失業者対策や都市整備に回した予算は、国内の生活レベルの向上や大幅な機械化を促進した。特に、道路の舗装率の向上と、自動車産業の発展は軍のトラック配備数を大幅に増やす事となる。

このトラック配備数の上昇は、満州事変において軍隊の速力の速さが大きな武器となつた戦訓の影響もあつたとされている。

南方作戦開始時、日本陸軍の装備は最新式の99式小銃に99式軽機関銃といった最新式に更新されており、また衣服も1式防暑衣という海軍との合同研究で開発された南方戦闘用の服に交換されていた。

また、それまでの飯盒炊飯を取りやめ、専門の調理部隊を付属させたのもこの戦いが始めてであった。

トラックの配備数はこれまで行われたどの作戦よりも充足率が高く、また戦車も75mm野砲を装備した零式中戦車が投入された。

英蘭印軍も日本側の侵攻に供えてはいた。例えば、陸上兵力の装備の更新は進んでいなかつたが、戦車としてはマレー戦線にマチルダ戦車の初期型を、またジャワ島には米軍から急遽買い付けたM3戦車が配備されていた。

航空戦力もB339バッファロー やカーチス・デーモン、フォッカーフW21といった旧式機に加えて新たにアメリカや英から購入、供与されたP40やハリケーン戦闘機を用意して待ち構えていた。

これら新装備と、増援された英東洋艦隊や蘭印艦隊があれば大丈夫という自信が英蘭軍にはあつた。

しかし、これら出来る限りの装備で固めた英蘭軍も、結局日本軍の侵攻を止める事は出来なかつた。

英國があてにしていた東洋艦隊は開戦2日目にして致命的な損害を被りセイロンまで後退してしまい、さらに残るオランダ艦隊もその後進出してきた日本の増援艦隊との戦闘で一方的大敗北を決して全滅した。

また、機種更新を進めた航空戦力は逆にそれが整備員の手間を取り、稼働率を低くしてしまった。おまけときて、日本陸軍の零式戦闘機「隼」は搭乗員の腕と合わせてこれら航空部隊を圧倒した。

戦車部隊も、マチルダはその重装甲を武器に勇敢な戦闘を行つたが、制空権を奪われていた事、さらに日本側戦車が75mm砲を持つていたために一方的な戦闘は行えず、短期間で全滅している。

おまけときて、元々日本との戦争目的が無く、植民地兵の割合が多くつたために戦意に欠けて早々と降伏する部隊も少なからずあつた。逆にインド兵のように英國に反旗を翻したり、サボタージュを起こす兵士たちもいた。

結局、蘭印そしてマレー半島の制圧は、11月にシンガポールの占領が成つて終了し、わずか3ヶ月で終結するという電撃戦となつた。

マレー半島電撃戦（後編）

御意見などをお待ちしております。

## 大慶油田発見！

日本軍の南方における快進撃により、英蘭軍はあつという間に追い出され、代わって南方資源地帯は日本側の制圧下に置かれた。

ただし、これらの地域では占領期間は短く、極力早期に現地政府が樹立され日本との国交を結び、対等な関係での貿易を開始している。

これは、現地の抑圧された人民の解放という、いわば一種のプロパガンダ的な要素を含んだ目的が大きかった。実際の所日本人には、南方の人々を馬鹿にする人間は大勢いた。

事実、現地人に対する日本兵や日本人による蛮行が複数発生したことなどが確認されている。

しかし、これらの蛮行は比較的短期間で鳴りを潜めることとなる。これは、占領後もそのまま現地進駐軍（占領軍ではなく、あくまで現地の防衛体制が整うままで肩代わりするということを強調するための呼称）司令官となつた、今村中将の功績が大きい。

彼はスカルノを始めとするインドネシア政府に対する援助を惜しまず、また日本人による現地住民への蛮行を厳しく断罪した。そして正義感が強い兵士の中にはその考えに同調する人間も多かつた。

これらのおかげで、後に今村中将是インドネシア政府から建国に関わった重要人物としてスカルノ大統領から直々にメダルを授かる事となるのだが、それは別の話である。

また、この今村中将のやり方に対する評価では、内心反発を招く者も軍部にいたが、それによる利益（貿易の活性化や、何より日本に対する住民感情の良好）の方が大きくクローズアップされ、さらに陛下も公にそれを褒める声明を発表している。こうなっては、表立つて言つ者はいなかつた。

そして、満州国やタイ王国はこれら日本の政策を過大に賛辞した。もつとも、この評価には日本に対して今後も同じような政策を続けてくれという、言葉ではない方法で訴えたメッセージが込められていた。

さて、そんな中昭和17年9月、満州国ではある重大事件が起きていた。それはなんと、油田の発見であった。

「何!? 油田とな?」

急遽開かれた内閣の閣議で、張首相は報告してきた資源炭鉱大臣である光大臣に向かつて放つた第一声である。

「はい首相。しかも埋蔵量はとてもない量です。現地調査班の報告では、推定年間産出量は日本と我が国で必要とするあらゆる石油の量の7～8倍です。」

「な、なんと…！」

7～8倍となれば、充分輸出できる量だ。しかし、何故か報告している光の顔色は少しさえなかつた。

それに気づかず、張は悦に浸つていた。

「そりかそりか。それはめでたい。これで我が国の将来も安泰だな。石油という戦略物資が手に入れば、日本に対しても大きな外交カードを持つことになるぞ。」

しかし、それに対する参謀総長の石原は反論した。

「残念ですが首相、逆です。そのような資源が我が国にあると知れば、ソ連や中国が黙つておりますまい。」

その言葉に、張首相もハッとした。

「な！・・・・そうか、確かに石原将軍の言つておりますだ。」

さりに、光も言つ、

「それに、実は・・・この油田。量は凄いのですが、質に問題があります。」

「質だと？」

張より先に質問したのは石原だ。

「はい將軍。実は今回見つかった油田の石油は調査の結果重質油でした。これは粘り気が強く、重油ならともかく、航空燃料には精製しにくい油です。加えて精製するにしても、上質の油を混ぜて行う必要があります。これは最低でも現在蘭印から輸入している石油が必要となります。ですから、完全なる石油の自給自足は不可能です。」

「

その言葉に、閣議参加者は一様に落胆した。

せつかく見つけた石油だといつのこと、商品にするためには石油を輸入しなければいけない。これではたちの悪い皮肉である。

しかし、商工大臣の内田弘樹が聞いてきた。

「光大臣。先ほど重油ならとおっしゃりましたよね？」

「はい。」

「では、重油に精製するだけならあまり問題はないのですか？」

「ええ。そうなります。」

「とすると、完全自給は不可能でも、我が国にとつてはやはり大きなメリットになる事には違いないでしょうね。国内で生産すれば石油価格の値が下がる。さらに重油なら今軍艦でバカ食いしている日本海軍は喜んで買ってくれるでしょう。」

その言葉に、一度は落胆した張も表情を和らげた。

「ふむ、では、採掘可能までにどれくらいかかるかな？」

その質問に、光大臣が報告書をめぐつて答えた。

「現在試掘が既に始まっています。予算さえ度外視すれば、多分半年で可能です。精製工場の整備も不可欠です。」

「わかった。諸君、石油採掘ならびに精製工場建設のための臨時予

算成立に賛成の者は手を上げてくれ。」

すると、全員が手を上げた。

「よし、では後は議会を通して・・・陛下に上奏するだけだ。」

満州国の議会は上院と下院の2院制で、女性の参政権もちゃんと存在する。

この後、臨時予算案は議会でも賛成多数で可決した。そして、皇帝溥儀によつて、油田の地名が新たに定められた。その名も大慶油田であった。

## 大慶油田発見！（後書き）

御意見などをお待ちしています。

## 死闘！南方戦線

昭和17年10月。米軍は思ったよりも早く反攻を開始した。ラバウルからおよそ1000km地点にあるガダルカナル島に上陸し前進基地を設営したのだ。

この時期米太平洋艦隊は再建途上にあつたが、すこしでも日本軍に対して有利に立ちたかった。

そこで、この時点で日本軍の進出南端であるラバウルの基地機能を奪うための作戦を開始していた。

しかしながら、このガダルカナル基地は兵站線の端であるということが問題であった。

実は英國が対日参戦した直後に、オーストラリアとニュージーランドは中立を宣言してしまった。

これに対してルーズベルトはチャーチルに文句を言つたが、元々対日参戦に乗り気ではなかつた英國としては、太平洋方面の利権を少しでも無傷で残して置きたかったのだ。

結局、米国はフランス領のニューカレドニア、それにエスピリット・サントに後方基地を設営したが、それでもオーストラリアが直接使えないことは痛い打撃であった。

ただ、それでもこうした前線基地の存在は開戦以来負け続きの米国としては貴重な日本へ向けての橋頭堡となるべき物だった。

その機械力に物を言わせて、ガダルカナル島に建設されたヘンダソン飛行場は短期間の内に拡張され、最盛期には500機近い米軍機が駐留した。

しかし、いざラバウル爆撃を開始すると問題が起きた。戦闘機の航続距離が足りなかつたのだ。

米軍の戦闘機は軒並み航続距離が2000km程度だつた。つまり、ラバウルまで飛んでいても戦闘は出来ない。

唯一出来るP38にしても、いかんせん数が足りなかつた。

この時期ラバウルには海軍の零戦だけで120機。同じく零戦の陸軍機使用の「隼」が50機近く展開していた。

対して米軍のP38はどんなに揃えても70機程度と大きく劣勢だった。

いくら高性能の重戦闘機であるP38でも、相手が3倍近い数では話にならない。

米軍の爆撃機であるB17やB24がいくら頑丈でも、100機近い零戦に迎撃されではたまらない。

加えて、ラバウルには対爆撃機用の重戦闘機である「ショッキング」「雷電」も60機。双発多目的戦闘機の「屠龍」や「月光」も40機程度配置されていた。

まさにラバウルは大航空要塞となつていた。

米軍は少しでも航空戦力を有効に活用するために、さらに前進したブーゲンビル島ブインにも航空基地建設を始めた。

しかし、この基地はラバウルに近すぎた。建設が始まった日から猛烈な爆撃が始まった。さらに、物資を運ぶ輸送船団や護衛艦隊にはラバウルを本拠地とする第8艦隊や潜水艦隊が襲い掛かり、その運行を妨害した。

米軍は物量に物を言わせて強引に基地建設を推し進め、翌年6月にこのブイン基地を稼動させるが、そのために戦艦1隻、巡洋艦1隻、駆逐艦22隻、輸送船32隻を失った。

もつとも日本艦隊も巡洋艦3隻に駆逐艦7隻、潜水艦5隻などを失っているが、米軍の損害に比べればはるかに少なかつた。

また、日本艦隊はガダルカナル近海にもゲリラ的に出没し、同島に進出した艦隊や輸送船団を襲撃した。

ヘンダーソン飛行場には多数の航空機が駐留していたが、それでも大型機が出払い行動圏内が限られる単発機のみになる時間や、またスコールで出撃できない時間などがあった。

こうした隙をついて日本艦隊は行動した。

特に、昭和17年11月30日に田中頼三中将率いる第2水雷戦隊が行つたガダルカナル東方海戦は、潜水艦や陸軍の偵察機との連携の上、護衛空母を含む大規模な護送船団を襲撃し、駆逐艦「高波」を失うも、護衛空母1隻を含む5隻を撃沈、11隻撃破という大戦果を上げた。

この海戦では本格的なレーダーによる魚雷発射が行われ、日本駆逐艦にレーダーを標準装備する前哨戦ともなった。

もつとも、このガダルカナル方面への出撃はリスクの高い戦闘でもあった。

昭和18年3月3日に大森仙太郎中将率いる第三水雷戦隊が行つた、ガダルカナル東方における海戦（第三次ガダルカナル東方海戦）では、敵が新型レーダーを装備していたため、駆逐艦を双方1隻ずつ失う痛み分けに終わつたが、海戦が長引き、米軍の航空機行動圏内からの脱出が遅れ、攻撃を受ける事となつた。

米軍はこの時新戦法の反跳爆撃を採用したため、旗艦であつた駆逐艦「白雪」を沈められ、他に2隻が損傷する被害を追つてしまつた。大森中将も負傷している。

こうした犠牲が出たのも現実であった。一方的に戦える戦争などないのだ。

また、潜水艦もガダルカナルへの輸送船団を襲撃した。この潜水艦戦は最終的に7隻を失つたが、それでも50隻近い輸送船や護衛艦艇を撃沈している。

特に、「伊19」潜水艦は回航されてきた戦艦「マサチューセッツ」を撃沈する武勲を立てている。

一方、こうした前進基地への兵站戦攻撃で米軍の戦力を消耗させる戦法を取つた日本海軍に対して、義勇艦隊や海上護衛総隊はこれら前進基地から進出してくる潜水艦との戦いに入つていた

## **死闘！南方戦線（後書き）**

御意見などを待ちしております。

物語はしばし時を遡る。

昭和17年6月10日、満州国奉天。ここには奉天国際空港があつた。

この時期、この空港からは大連やソウル、そして日本の羽田や伊丹を結ぶ旅客機や貨物機が行き交っていた。戦時中であるため本数は減便されていたが、それでも満州と日本を行き交う人間や荷物を運ぶために運行されていた。

その奉天国際空港は官民共用空港のため、半分は満州国空軍や訓練のために時折飛来する日本軍機も使用していた。

そしてこの日は空軍基地側がいつも以上に慌しかった。

エプロンに引き出されている機体自体は少なかつたのだが、それを取り囲む人間はいずれも満州国軍や日本軍の高級士官ばかりであった。さらに、数年前まで敵対国であった中華民国の軍服をまとっている人間までいた。

この日行われたのは各企業が作つた新型戦闘機、そして鹹獲や購入した外国戦闘機の性能テストであつた。

このテストは単なる性能の確認だけでなく、満州国（義勇海軍を含む）や日本陸海軍、さらには中華民国への機体売り込みの意味も含んでいた。

実は中華民国もいるのは、この時期中華民国が満州国や大日本帝国からの兵器輸入を行っていたからだ。

中満戦争後共産党軍との内戦に突入した国民党軍は苦境に立たされていた。

まず、それまでの兵器の輸入先の一つであったソ連は敵となつた共産党軍への支援を始めてしまった。これによつて航空機や戦車の供給量がガクンと減つてしまつた。また、もう一つの支援国のアメリカは長く続く政情不安定とヨーロッパへの支援強化や自國軍備の増強のために支援を渋り始めていた。

こうなると支援できる相手が限られてくる。何せ英國やドイツ、フランスといった兵器量産可能国はいずれも戦時下に入つてしまつたため、とても他人の国の戦争に支援をしている余裕などない。そのため、頼りになるのは兵器生産能力を持つ日本と満州国ぐらいであつた。

内心は嫌であつたが、兵器輸入可能国が限られているのに加えて、この時期国民党内も一枚岩でなかつたことも影響した。特に一時期上海に独自の政府を作ろうとした汪兆銘は、共産党を容認する融和派のトップであつた。ただし、それは一政党として活動を認可するという意味であつたが、そういう現状に対する不満分子の存在は頭の痛い問題であつた。

そういうわけで、国民党総統の蒋介石としては早急に共産党を潰す必要があり、なおかつそのために必要な大量の兵器を手に入れる必要があつた。そうなると、ついこないだまで敵だったからという贅沢は言つていられない。

一方、日本側としてはそれなりに予想のつゝことであり、好都合であった。

実は満州事変以降の軍の急速な近代化に合わせて、38式小銃や38式野砲といった余剰兵器が発生していた。これらの多くは満州国やタイなどに輸出されたが、その両国とも数としては少數だった。

満州国は日本軍と歩調を合わせて軍の装備を近代化する方針であつたため、タイはそれほどの需要が無かつたからである。

そういうわけで、これらの旧式兵器はほぼ捨て値に近い値段で中華民国軍に在庫処分品として売却された。

もちろん売却されたのはこれだけではなく、航空機や戦車、装甲車もであつた。

そのため、この時期の国民党軍を写した写真には青天白日旗をつけた89式中戦車や94式装甲車、95式戦闘機の姿が数多くあつた。こうした期間は昭和17年初頭まで続いた。

しかし、同じように在庫処分とばかりに多数の旧式余剰兵器を共産党軍に売り込んだのがソ連であつた。

時期的にはソ連軍の方が遅く（本格化は昭和16年以降）、また戦車や航空機の操縦経験者が少なかつた共産党軍であつたが、時がたつにつれてこれらの兵器を徐々に使いこなすようになった。そのため、中国共産党独特の赤い星をつけたイ-15、16戦闘機やT-26戦車が戦場に現れるようになつた。

その多くは少数での使用であつたために、数に勝る国民党軍の敵

でなかつたが、スペックだけみれば日本製兵器よりも優秀であった。

そのため、国民党軍では航空機や戦車という分野では日満と同等の新兵器をそろえる必要があった。

中華民国軍の兵士がここにいるのもそのためであった。

この日奉天空港に用意されたのは、三菱製の零戦33型。中島製のキ84・川崎製のキ61・そして満州飛行機の「飛龍改」等10機種であった。

零戦33型はエンジンを1500馬力の金星エンジンに強化した大改造版である。キ84は試験段階のハ45を搭載した2000馬力級の戦闘機で、中島の自信作であった。川崎製のキ61はマリンエンジンを模倣したハ140を搭載した優美な戦闘機である。

「飛龍改」は義勇海軍の主力艦載戦闘機である「飛龍」の改良版で、エンジンを零戦33型と同じ金星エンジンに強化し、外付け式の機銃ポットを固定式にしたものだ。

これら新型機以外には、外国製の機体が並べられていた。ブリュースター・F2AバッファローにF4Fワイルドキャット、P40ウォーホークにP39エアコブラ等が並べられていた。

これらの機体は主にフィリピン等の占領地で鹹獲された物や、臨検して捕まつた貨物船に搭載されていた物だ。

その中でひときわ異彩を放つていたのが、ソ連製のラグ3型戦闘機と、ハインケルマンチュリア社製のM1型戦闘機であった。であった。

御意見などを待ちしております。

ラグ3型戦闘機はこの時期のソ連の新鋭戦闘機の1機種である。そのラグ戦闘機が何故敵対国の満州国の飛行場にあるのか。

実はこの機体、越境亡命してきた機体である。パイロットは満州から流れる謀略放送に心を揺られ、スターリン支配下のソ連に見切りをつけて亡命してきたのであった。手ぶらでは亡命後の地位を築く有力な材料にならないと考えて、極東にはごく少数しか配備されていない新鋭戦闘機に乗ってきたのであった。

越境後はチャムス近郊の満州空軍基地に強行着陸し、機もパイロットも無事という奇跡の脱出を演じたのであった。

このソ連新鋭機が手に入ったという報告は満州や日本の航空関係者に衝撃を与えた。

この時期ソ連の航空事情といつのは未知の世界であった。僅かに、ソ連領地内のスペイや東ヨーロッパ諸国の大使館や領事館からの情報しか入ってこず、それらは断片的で具体性を欠いていた。

その状況下で新鋭機が労せず手に入ったのだから、航空関係者の喜びは大きかった。

パイロットはそのまま亡命申請が認められ解放されたが、機体の方は奉天の空軍基地に運び込まれ、徹底的に調査を受けた。

ラグ3型戦闘機は、歐米諸国の機体と同じく水冷の機体であるが機体は木製であった。木製であるのはこの時期のソ連機に共通する。

ただし、新しい工法で作った事により性能にバラツキがあり、悪い機体だと棺おけとまで酷評された。幸運な事に、この機体は出来の良い機体であった。

性能は最高速力575km、航続力1100km、武装が20mmモーター・カノン（プロペラ軸に装備）1基に13mm機銃2基であつた。

満州空軍と日本陸軍のテストパイロットが調べた結果では、性能的には最高速力以外見るべき点はないとした。しかしながらエンジンや機体の構造には見習うべき点が多いと評価された。特に接着剤や高い強度を持たせた木製外版の製造技術は日本ならびに満州に無い物だけに注目を浴びた。

ちなみに、結局練習機等の一線級機以外で日本側で戦中に実用化した木製機はなかった。

一方、もう一つのハインケルマンチュリア社製のM1戦闘機は、幻の戦闘機、He113の生まれ変わりと言える戦闘機である。

設計者はドイツでその名を馳せたハインケル博士である。

彼はHe111爆撃機等の優秀機の設計を手がけたが、ナチス党を嫌っていた。そのため疎んじられ、次期主力戦闘機選定では、出品したHe112戦闘機が性能に劣るMe109戦闘機に敗北するという屈辱を味わっている。

そんな折、彼の元に一通の手紙が届いた。それは満州国が自国内に欧米企業を誘致するために各企業に配った宣伝メールであった。

ハインケルは考えた。

(「のままナチス政権下のドイツについては想つよづて機体の設計が出来ない。」)

彼は思い切ってドイツ国内の工場を全て部下に任せ、自分は少数の部下を引き連れて、見たことも無い東洋の地にやってきた。1937年のことである。

彼は首都新京港外に設計室と工場を構えた。それがハインケルマンチュリア航空機製造会社である。工場が完成し工具一式が届くやいなや、彼は輸送機の生産で経営を立てつつ早速新型戦闘機の設計に掛かった。もっとも、その機体はドイツにいた頃から考えていた物で、設計3ヶ月、製造2ヶ月で完成した。それがHe 111である。

時に昭和15年（1940年）の12月であった。

この機体は試験段階で700km近い速力を出した。また、量産能力を高めた機体も630km以上と驚異的な数値をはじき出した。しかしながら、この機体は日本軍を始め、満州国軍でも不採用となつた。原因はヨーロッパ機特有の航続力の短さにあつた。

ハインケル博士も太平洋地域で使用されている戦闘機の航続力はヨーロッパより高いと聞き、一応設計上では1400kmの航続力を持たせていた。これはMe 109の2・5倍近い値である。

しかし、満州国空軍の審査官は冷たく言い放つた。

「最低でも落下式の補助タンク無しで1500km以上は必要です。それ以外の性能がどんなに優れても、採用することは出来ません。」

まさに欧米と太平洋地域との機体設計思想の差を見せ付けられた瞬間であった。もちろん、これくらいで挫けるようなハインケル博士ではなかつた。すぐに機体の改修に取り掛かつた。

まず、機体その物を一回り大型化してタンクの容量を大きくした。さらに日本軍のテストパイロットの意見を取り入れて、視界を改善するために風防も涙滴型にした。エンジンはそれまでのベンツ製エンジンを取りやめ、満州国内で創業していたロールスロイスの子会社で製造していたマリーンエンジンを搭載した。

このマリーンエンジンは日本や本国に輸出されていたが、敵であるはずのドイツ人であるハインケルにも売却された。理由は、どう考へてもヨーロッパ戦線に持ち込めないからであつた。

ちなみに、マリーンエンジンは奉天航空機製造公司でもライセンス生産され、主に魚雷艇等のエンジンに使われていた。

そして、ハインケル博士の新型戦闘機、仮称M1戦闘機は完成した。それまでのハインケルの名をやめて、心機一転の思い出マンチュリアの頭文字がつけられた機体であつた。そして、ハインケル博士は自信を持つてこの機体を今回の性能テストに出品した。

ところが、同様にマリーンエンジン採用機として、川崎のキ61が今回の性能テストに参加していた。さらに、オーソドックスな設計の零戦や「飛龍」、キ84も手強い相手であつた。

しかし、ハインケル博士はそれでも自信満々であった。

御意見などを待ちしています。なお、ラグ戦闘機が満州に亡命してきたのは実話です。

いよいよ各機体のエンジンが始動した。

ハインケル博士は我が子を見るように、M1 戦闘機を見つめていた。そんな彼に歩み寄る一人の男がいた。

「どうですかな博士、自信は？」

声をかけたのは義勇艦隊大将服を着た男、白根総司令官であった。

「おお、これは白根社長。」

実は一人とも顔見知りである。かつてハインケルがドイツから工具を取り寄せたさい輸送を行つたのが、白根が運営する大亞細亞通運であった。

その時以来、ちょくちょく白根はハインケルに会つていた。また、白根は航空機の補充部品などを、ハインケルの工場に発注するなどして優遇していた。

ちなみに、この会話は通訳を通して話している。

「自信は満々ですよ。あなた方の空母や艦載機を見せてもうつたおかげで随分と設計の参考になりましたから。最高の戦闘機に仕上げたつもりです。」

「そうですか？ 量産性能とかも上がっていますかな？ 我々が欲しているのは芸術品ではなく戦闘機ですから。」

「もちろんですとも。まあ見ていて下さい。」

彼がそう言った時、M1戦闘機が飛び立つていった。

M1戦闘機は空力学的にもよく作りこまれた戦闘機で、その外観はどうなく後に現れる米陸軍のP51を思わせる物がある。

同じ水冷の「飛燕」もそれなりの機体であるが、それにもましてある種の力強さを感じさせるスタイルである。

「飛燕」を流麗な日本刀とするなり、M1は細いながらも相手の急所を一撃で突くサーベルを思わせるものがあった。

M1に続いて、今度は零戦33型が飛び立つた。

そして、高度3000m付近で、低高度模擬空戦が始まった。今回模擬空戦は1対1で低高度、中高度（4000から6000m）、高高度（6000m以上）の3空域で行われる。

零戦33型は、1500馬力と原型機の1.5倍の出力のエンジンで、しかも機体各部を補強している。それまでの特性であった旋回性能を若干犠牲にして、急降下性能や防弾性能を高めていた。

しかし、M1戦闘機は零式戦闘機に優勢とまで行かないものの、互角に戦つた。これは最高速度がM1の方が速く、さらに秘密兵器によって旋回性能を高めていたからだ。

結局、低高度では互角という判定が出た。そして、中高高度では速度で勝るM1の優勢という判定がでた。

第一ラウンドは勝利である。続く、「飛龍改」との対戦でもほぼ同様の判定がでた。これは「飛龍改」が零戦と同じく、軽戦として設計されていた事が大きな要因であった。

そして、いよいよ真打との戦いである。

まず、キ61である。M1と同じく流麗な水冷式の戦闘機である。エンジンの出力もほぼ同じである。ただし、最高速度はM1の方が20km程早い。また、キ61は操縦席後方がフィンバックタイプの機体である。

高高度、中高度での戦いは同列、もしくは最高速度で若干勝るM1の方が有利であった。

しかし、低高度での戦いはM1が一方的な戦いを行つた。キ61はついに一度も後ろを取れず、逆に3回の被撃墜判定を受けて惨敗してしまった。

何故そうなったかといえば、M1の秘密兵器のおかげである。実は、M1には全自动空戦フラップという新兵器が積まれていた。

通常、飛行機がフラップを出すとその分主翼の面積が増し、重量が分散され旋回性能が上がる。しかし、逆に速度が急激に落ちるという欠点もある。これまでのフラップは手動であつたから、パイロットは一々面倒な操作をしなければいけなかつた。しかしながらこの全自动空戦フラップは、名前とおり、水銀と圧を使った仕掛けで、戦闘中最適のタイミングで開く。

後に可変翼のはしりといわれたこの装置は、もともと川西飛行機

が自社製の戦闘機に積む予定だった。（史実の紫電）ところが、航空機開発の整理から紫電の開発は中止されてしまい、この装置はお蔵入りになりかけた。

それを、密かにハインケル博士が手に入れていたのだ。そしてこの新兵器はその性能を如何なく発揮したのだ。

水冷戦闘機同士の戦いはM1の勝利だった。

ところが、続きキ84との戦いは思った以上に苦戦を強いられた。

「Jのキ84、世界一小さい2千馬力級エンジンの誉れを積んでいた。そのため、最高速度は638kmとM1と同等であつた。しかも、旋回性能も重戦闘機としては優れていた。

結果、低高度は同等、中高度はキ84の勝利、高高度も同等という厳しい判定になってしまった。

これはハインケル博士にもショックだった。

「うむ……」

そうつめて、彼は押し黙ってしまった。

こうして、この日の公開性能テストは終わった。この後はそれぞれの整備性や量産性を評価し、採用が決まる。

そして一月後、各マイカーに通知が出された。

まず零戦33型と「飛龍改」は今後の発展性が限界に達していると

判断された。ただし、零戦33型については小型護衛空母の艦載戦闘機としての量産が命じられた。一方の「飛龍改」は中華民国空軍への輸出用機として少数の量産命令が出たに留まった。

キ61は不採用となつた。キ84の方が全般的に優れていたため、こちらを日本陸海軍が積極採用する事となつた。

そしてM1戦闘機は満州駐留日本軍と、満州國軍、義勇海軍への採用が決まつた。日本軍に採用されるほどではないが、久しぶりにハインケル博士にとつての戦闘機大量発注である。彼が大喜びしたのは言つまでもない。

決め手となつたのは、エンジンがただちに大量生産に移れず、満州での需要に答えられない事と、マリーンエンジンの生産は満州内で行われ供給が容易であることだつた。

いづして、昭和17年8月。M1戦闘機は、満州国空軍42式戦闘機「炎龍」として正式採用となつた。

**新鋭機 後編（後書き）**

作者テスト期間中につき、更新が一時ストップします。  
作者の架空戦記は他に流浪の三千院家や幻艦記があります。そ  
ちらも良かつたら見てください。

昭和18年2月。日米間の戦争はほぼ膠着していた。これは主力艦を失つた米軍の本格的な再編が済んでいないことと、反攻拠点がハワイ以外ないために大きくその動きを制限されていた事に起因する。

この隙をついて日本が目指した事はイギリスとの講和であつた。前年の開戦直後、マレー沖開戦で大損害を被つた英東洋艦隊はセイロン島まで後退し、そして英領マレー、シンガポール、ミャンマーが相次いで陥落していた。イギリス軍首脳は日本軍がインドに迫ると読んでいたが、これは杞憂だった。日本軍にそんな余裕はなかつた。

こうした日本軍との戦闘による虎の子の艦艇の損失と、植民地の損失は英國に致命的な損害になりかねなかつた。特に数少ない空母の損失は、地中海戦線に大きな影響を及ぼした。そして、英國にとって悪夢ともいえる事態が起きたのはマレー沖海戦直後のことだつた。

マルタ島陥落。このニュースは英國を震撼させた。マルタ島はこれまで幾度となく独軍からの爆撃を耐え抜き、逆に地中海を航行する補給物資を運ぶ枢軸国艦船に大きな打撃を与えてきた。そのマルタ島の陥落は、地中海における枢軸国の跳梁を大きく許すばかりでなく、補給不足で弱体化した独アフリカ軍団の復活という事になりかねなかつた。そしてそれは、英領エジプトの危機に繋がりかねなかつた。

マルタ島陥落の引き金になつたのはフランス海軍であった。

この世界では、連合軍、特にアメリカ軍の地中海戦線への参加が遅れていた。そのため、史実ではヒトラーのフランス全土占領の引き金となつた北アフリカ駐屯のフランス軍の連合国との和睦が起きなかつた。

地中海での海軍力を増強したかつたヒトラーは巧にヴィシー・フランス政府を煽つた。その内容は主に、占領地の早期返還や、フランスの枢軸国内出の発言力についてであつた。その結果、ヴィシー政府首班のペタン元帥はついに折れ、ヴィシー・フランス海軍が地中海戦線の戦闘に枢軸軍として参加する事になつた。

もつとも、参加するフランス海軍兵の多くは、ナチも嫌いだがイギリスも嫌いと言つ人間が多かつた。それに加えて、この時期アフリカ戦線で活躍するロンメル将軍は国際法を遵守する軍人としてそれなりにフランス人からも人気があつた。さらに、ロンメル将軍はヴィシー・フランス海軍司令官のデスタン提督と会談まで開いている。彼を助けに行くのだから悪い仕事ではない。こついうこともあります、フランス海軍の士氣は高かつたと言われている。

そして2月1日。フランス海軍の誇る戦艦「リシュリュー」を旗艦とする戦艦3、巡洋艦6、駆逐艦11の艦隊がマルタ島に艦砲射撃を浴びせたのである。

この戦闘で戦艦「ダンケルク」が航空攻撃で中破するなどそれなりの代償を払わされたが、フランス海軍はマルタ島の英軍施設をほぼ完全に破壊した。翌日、マルタ島にイタリア軍が上陸し、同島は陥落したのである。

英國にとつてさらなる不幸となつたのは、これに刺激されたイタ

リアとスペインがやる気になってしまったことだった。

イタリア海軍は開戦直後から、一部の部隊を除いて士気が低く装備も劣悪だった。海軍も燃料不足から出撃を渋り、さらには1940年のタラント軍港への空襲以降余計動きは低調になってしまった。

しかし、本来仮想敵国であり敗戦国であるはずのフランス軍が大活躍してしまった。これはイタリア人のプライドを刺激した。特にムッソリーニはフランスの発言力が急進することに非常に大きな危機感を覚えた。とりわけ、イタリアが開戦直後に占領した土地が返還される事にならないか心配した。

この結果、ムッソリーニの指示を受けたイタリア海軍は燃料をかき集め、総力を挙げて英國地中海艦隊との戦闘に挑んだ。この時英國地中海艦隊唯一の空母「イラストリアス」はドック入りしていた。つまり、英國海軍が本来優位に立つための条件であつた航空戦力が欠如していた。

2月21日。後にドデカネス諸島沖にてイタリア本国艦隊と英地中海艦隊は対決した。イタリアは戦艦「ローマ」を旗艦に戦艦4、巡洋艦3、駆逐艦9・英國艦隊は戦艦「ウォースパイト」を旗艦に戦艦1、巡洋艦6、駆逐艦11であつた。

英國艦隊司令官カーニンガム中将是夜戦に持ち込み、中小型艦艇の多さとレーダー技術の優位性で勝利をもぎ取ろうとした。しかし、航空機での一撃を掛けられなかつたことが命取りとなつた。

イタリア艦隊は高速性能を生かして極力砲撃を避けつつ夜が明けるのを待つた。最初にレーダー砲撃を受けた「カイオ・チユリオ・チエザーレ」が大破、後自沈に追い込まれた物の、夜があけて弾着

観測機が行動できるようになると、報復が始まった。「ローマ」級2隻の38cm砲のつるべ打ちに、旧式戦艦の「ウォースペイト」は耐え切れず爆沈。カニンガム提督も戦死した。さらに残存艦艇も勇敢に戦つたが、戦艦部隊の大口径砲弾の前に次々と撃沈されてしまい、最終的に英地中海艦隊は駆逐艦3隻を残して全滅した。

イタリア海軍も戦艦と巡洋艦各1、駆逐艦2隻を失つたが、開戦以来負けっぱなしであつた彼らにとつて、久々の大勝利であつた。そしてこの勝利は地中海が枢軸国の海になつた事を示していた。これ以後、終戦に至るまでついに英國は地中海の制海権を奪回する事ができなかつた。

マルタ島陥落、英地中海艦隊の壊滅によつて進撃が停滞していた独アフリカ軍団とイタリアのアリエーテ装甲師団は、本国から思う存分補給を受けられるようになり、逆に補給ルートを押さえられた英國軍は補給量ががくんと減つた。

そして3月3日。ついに独軍は重要な軍港であり、イギリス軍の拠点であるアレクサン드리亞を占領した。同地のドックに入つていた戦艦2隻と空母「イラストリアス」は枢軸軍の手に渡つてしまつた。

英國は紅海とアジア方面からの戦力抽出を図つた。また、地中海の入り口のジブラルタルの戦力増強を考えた。しかし、英國への最後のパンチを繰り出した者がいた、それが日本とスペインだつた。

御意見などを待ちしております。

地中海戦線への最後のパンチ。それは昭和18年の3月下旬に行われた日本軍とスペイン軍による攻撃だった。

この時期、英國との講和を目指していた日本軍は、英國への最後の大打撃を与える作戦を考えていた。そこで行われたのがGZ作戦と呼ばれるインド洋方面での英國の戦力を一掃する作戦であつた。

この作戦は、空母「隼鷹」を旗艦とする軽空母中心の第7艦隊を臨時編成して行われた。既に相次ぐアフリカ方面戦線への戦力を抽出していた英國軍に、この第7艦隊を止める事は出来なかつた。

この時、第7艦隊には最新鋭戦艦の「信濃」と「飛驥」が同行していた。この2隻は俗に「信濃」級と呼ばれる改「大和」級戦艦だ。46cm主砲9門という主武装は同一だが、機関出力が上げられ、最高速力は29ノットまで出せた。副砲は設計時から削除され、代わりに「大和」級の倍近い対空砲を載せていた。その全てが最新鋭の10cm高角砲だつた。

10cm高角砲というのは、「秋月」型対空駆逐艦の主砲で有名な高角砲で、それまでの八九式12.7cm高角砲より口径こそ劣るが、威力や初速で勝っていた。機構が複雑なため生産が遅延気味だつたが、満州や朝鮮王国の工場にも発注してなんとか必要量を保つ事が出来た。

ちなみに、この対空砲の性能を引き出す高射指揮装置として、二式、三式指揮装置も新たに開発されている。

また、「信濃」級は艦底が一重底から三重底になったため水中防御力も大きく強化されている。これに加えて指揮通信、司令部施設も増強され、代わりに水上機搭載設備が縮小されている。

今回この「信濃」級が艦隊編成に組み込まれたのは乗員の練度上げもあつたが、何よりも対空護衛戦艦としてのテスト運用という意味合いを含んでいた。

戦艦も最新鋭なら航空機も最新鋭だった。搭載された航空機は中島製の三式艦上戦闘機「疾風」、愛知製の艦上爆撃機「彗星」、中島製の艦上攻撃機「天山」であった。それまでの機体に比べて一回り大きい次世代機であつた。艦隊の空母はいずれも中軽空母だが、カタパルトを装備することによってこれら新型機の運用が可能であつた。

「の最新鋭戦艦と新鋭機を搭載する空母で編成された機動部隊は、サイクロンの」とくインド洋で暴れ回った。

まずセイロン島のコロンボとトリニティマリーが襲われた。この2港は英東洋艦隊の基地であり、設備も整っていた。しかしこの時点で東洋艦隊残存艦艇はアッズ環礁に逃げていたため、艦隊はいなかつた。そのため、基地施設と飛行場が徹底的な攻撃を受けた。

英軍の防空戦闘機も飛び上がつたが、旧式のハリケーンやフルマーでは「疾風」の敵ではなく、一方的にやられてしまい、日本機の跳梁を許すしかなかつた。こうしてセイロン島の2軍港は壊滅的な打撃を負つてしまつた。

そして翌日にはアッズ環礁に立てこもつていた英東洋艦隊も日本側に発見されてしまう。この時点で同艦隊の艦艇の多くが地中海に

引き抜かれていたため、戦艦「リベンジ」を中心とした僅かな数の艦艇しか残されていなかつた。

その最後の英東洋艦隊に日本海軍の攻撃隊120機が襲い掛かつた。そして激闘約2時間、戦艦「リベンジ」、巡洋艦「デリー」の撃沈をもって、英東洋艦隊は事実上壊滅した。生き残つた僅かな艦艇はインドのコーチン港に逃げ込むしかなかつた。

一方、第7艦隊の攻撃はこれだけに留まらなかつた。その後2日ほど彼らは行方をくらましたが、今度はカルカッタを空襲した。この時点でカルカッタは日本が占領したビルマから散発的な空襲を受けていたが、未だに多くの戦力が無傷で残つていた。特に、戦車や航空機はそうであつた。

これらの戦力は中東戦線への最後の抽出戦力となる予定だつた。しかし、それらを第7艦隊の空襲が木つ端微塵に碎いてしまつた。この時の空襲には陸軍の最新鋭爆撃機「泰山」が同時参加していた。

「泰山」は三菱製の4発爆撃機で、原案段階で中止された1式陸攻の4発バージョンを大きく改修した機体だつた。もちろん、1式陸攻とは段違いの防弾設備や爆弾等裁量を誇つていた。

この海軍機動部隊と陸軍重爆隊の共同作戦は大成功を収め、カルカッタの英軍は壊滅した。さらに、この攻撃はチッタゴンにも行われ、こちらも壊滅的な被害を被つてゐる。

もちろん、英軍も反撃を試みた。第7艦隊へ向けて放たれた約50機が同艦隊に襲い掛かつた。この攻撃で空母「龍嬢」が撃沈されたが、防空戦闘機と「信濃」、「飛驥」の奮戦によつて英軍機を全滅させる事に成功している。

チッタゴン攻撃によって第7艦隊によるGN作戦は終了した。最終的に英國は航空機500以上をはじめとする戦力を失い、地中海へ送る予定だった戦力の殆どを失ってしまった。こうして、英國が計画していた極東からの地中海への戦力増強は不可能となってしまった。

そしてもう一つの英國へのパンチとなつたのがスペイン軍によるジブラルタル攻撃であった。

スペインはこの戦争では中立を貫いていた。独裁者のフランコ将軍はナチスドイツに恩があったものの、内戦から立ち直っていないスペインが戦争に本格参戦する事は自殺行為であると考えていたのだ。そのため、義勇軍や義勇パイロットこそ送り出してはいたが、正式な枢軸軍ではなかつた。

しかし、この時は状況が違う。スペインにとつて千載一遇のチャンスであった。駐エジプト英軍は虫の息、英地中海艦隊は壊滅。今こそイギリスからジブラルタルを奪い返すチャンスであった。

フランコ將軍は決断した。

「陸海空軍の総力を挙げて、可及的速やかにジブラルタルを占領せよ！」

彼の命令に従つてスペイン軍はジブラルタルに襲い掛かった。

ドイツから購入した空軍のMe109とHe111が飛行場にや基地施設への空襲を行い、英國の「ケント」級重巡を元に設計された海軍の「カナリアス」級重巡が港湾と要塞へ向けて艦砲射撃を行つた。そして英軍の反撃能力が失われた所で、陸軍が直接侵攻した。

ジブラルタルは僅か1日で陥落した。このスピード占領こそ、フランコ將軍の狙いだつた。英國はスペインに嚴重抗議し、スペインに直接参戦する構えを見せた。

しかしスペイン側は、英國からの攻撃（もちろんでっち上げた物）に対する正当防衛と発表した。もちろん戦時下であるため調査などできる筈がない。スペインは休戦の条件として、ジブラルタルのスペインへの割譲を要求した。

英國としては実力行使に出たかつたが、ただでさえ戦力不足である状況でありとてもスペインに構つている余裕はなかつた。この時期再会されたドイツ軍による英本土爆撃に対応するので精一杯であったからだ。結局、スペインの要求を呑むしかなかつた。

こうして、地中海は完全に枢軸軍の物となり。4月18日。エジプトの英軍は全面降伏した。

御意見・御感想をお待ちしています。

日露戦争以来、日本海軍は戦時になると頻繁に民間船を徴用して使用した。いわゆる特設艦船である。日露戦争ではこの内の一隻である特設巡洋艦「信濃丸」がバルチック艦隊を発見し、連合艦隊司令部へ報告を打電し後々の勝利に大きく繋がる働きをしている。

こうした軍が民間船を徴用して使つのはどこの海軍でも同じである。米国は多数の商船に飛行甲板を張つて護衛空母としている。また英国は商船にカタパルトを搭載してハリケーン戦闘機を1機だけ搭載した船を造つた。

しかし、日本軍の場合元々が艦船、特に後方支援任務につく艦船が不足していたため多数の商船や漁船が特設水上機母艦や特設潜水艦母艦、特設監視艇として徴用されている。

その中で特に活躍したのは、やはり空母に改装された船たちである。ちなみに、日本の場合商船改造空母の使用用途が米英とは大きく違つていた。

米英では先にも述べたが、商船改造空母は護衛空母といふ名で使われている。その名の通り、任務は主に大西洋上で跳梁跋扈する独逸海軍のジボートや独逸空軍機の空襲から小船団を守りぬくことが任務であった。その他に航空機の運搬にも活躍している。

一方で日本海軍はこうした商船改造空母は艦隊決戦時の空母不足の穴埋め様として計画されていた。そのため、こうした商船改造空母は英米に比べると本格的な改装を受けている。

しかし、いざ造つてみると問題が続出した。まず速力が遅いこと。一番速い「隼鷹」でも25ノットであった。これは「長門」級戦艦と同等であるが、正規空母の30ノット以上に比べると明らかに遅い。日本郵船の豪華客船である「八幡丸」級を改装した「大鷹」級に至っては21ノットで、もつとも鈍足な戦艦である「山城」級のスピード（24ノット）にさえ及ばない。これではとても艦隊行動は無理である。

さらに、速力が遅いと飛行機を飛び立たせるために必要な合成風力も満足に起こせない。ただでさえ甲板の長さが足りないのでこれでは重量が重い機体を運用するなど夢のまた夢である。幸い、この飛行機の発艦に関する問題はその後英國から導入した技術で油圧力タバールトを完成させたために解決した。

しかし、航空機の発艦可能の是非に加えて、やはり商船改造の防御力の弱さが指摘された。なにせ装甲もない。ダメージコントロール力も低い。場合によつては一発の爆弾、魚雷で致命傷を負いかねないのだ。

結局、こつした改装空母は日本海軍では12隻竣工したが、この内海軍で使われたのは速力の速い「隼鷹」、「飛鷹」、「海鷹」、「瑞鷹」と練習用空母となつた「翔鷹」だけで、その他の船は早々と海上護衛総隊に移管され、護衛空母として使用されている。

海上護衛総隊でのこれら商船改造空母の運用に関するノウハウを授けたのが、義勇海軍である。義勇海軍は商船改造空母の運用では、帝国海軍よりも1歩も2歩も先に進んでいたからだ。

義勇海軍の商船改造空母としては「白虎」級空母が特に有名であるが、その後これらの紛失に備えて一回り小さい「飛翔」級空母が

建造されている。

「飛翔」級は厳密には商船改造空母ではなく、商船の船体を流用して設計された新規建造の空母だ。米国の「カサブランカ」級護衛空母と同じである。排水量は9600tで最高速力は23ノット。搭載機は30機である。

このクラスは義勇艦隊用に2隻建造された他、朝鮮海上警備隊向けに1隻、台湾海上警備隊向けに3隻、中華民国海軍向けに2隻、タイ海軍向けに1隻建造されている。

これららの空母は護衛空母として各方面で大活躍している。特に台湾海軍では3隻合計実に13隻の潜水艦を血祭りに上げたとされている。また朝鮮海軍の2隻はソ満戦争の時に出動して、ソ連潜水艦を撃沈している。

義勇海軍では、「白虎」級の紛失が結局終戦までなかつたため、「飛翔」級の内実戦に使用されたのは1隻のみである。もう一隻は「雛鳥」と命名されて日本海で主に練習空母として使用された。

冬が近づくにつれて海上のうねりは段々激しくなる。甲板は絶えず上下しており着艦する条件としては良くない。しかしながら、戦争はこの瞬間も続いている、一向に終わる気配がない。そのため、搭乗員の養成は急務であり、辞めるわけには行かない。リスクは高いが、一人でも多くの空母発着艦可能な練度を有するパイロットを1秒でも早く前線に送り出す必要があった。

その想いを噛み締めて、空母「雛鳥」艦長の大橋忠彦中佐は上空でグルグル旋回する8機のオレンジ色に塗られた複葉機を見つめていた。

この日は風が若干強く、波も高いが天候は雲量1の晴天である。機影を見つけるのは容易い。複葉機は編隊を作つて綺麗に旋回し続けている。

「大分練度が上がりましたね。」

そう後ろから彼に声を掛けるのは、副長兼砲術長の林少佐だ。中国人である彼は生糸の船乗りである。大橋も彼を大いに信頼していた。

大橋は今年39歳。15歳の頃から飛行クラブに所属していて飛行機の操縦は出来る。その後旅順の海洋学院で船乗りとしての教育を受けたが、その後も航空基地で過ごした時間が長く、船を操るのは今でも不安である。

林は大橋より4つ下であるが、彼は先ほどのように生糸の船乗りであるからその腕は確かである。そのため大橋は、操船の大部分を彼に委託していた。

「」の日、「雛鳥」は乗り込んできて1週間になる飛行練習兵の着艦訓練を行っていた。いずれも飛行時間200時間前後の若鷺である。中には17歳という者までいた。しかしながら、最初こそ少し不安げに飛んでいた連中も、1週間の猛特訓のおかげか、すでに編隊飛行が出来る所までに上達していた。

その彼らが操る艦載用に改修した93式中間練習機、通称赤とんぼを着艦させるタイミングを、大橋らは見計らっていた。

波が高く上下運動が激しいと、とても着艦などさせられない。機体が甲板に叩きつけられてしまうからだ。場合によっては最寄の陸上基地へ向かうよう指示しなければいけない。

「練度が上がつても、この状況での着艦は難しいな。」

そう呟いて彼は腕時計を見る。赤とんぼ隊の燃料残量はまだ余裕があるが、それも永遠に続くわけではない。ある程度余裕を持つて行動させないと危険である。特に、今赤とんぼを操っているのは新兵である。燃料が少なくなるとパニックまではいかないまでも、不安になつて操作を誤るかもしれない。

「30分経つても波が收まらない時は陸上基地へ向かうよう指示する。」

彼はそう決めると上空の赤とんぼとの直接会話可能である無線電話の受話器を取り、今言つた内容を練習飛行隊隊長に伝えた。

練習用曲「雛鳥」上（後書き）

御意見や御感想お待ちしております。

赤とんぼに基地への待避を考えてから30分ほどして、波と風が収まってきた。すると、艦橋に取り付けられた電話が鳴った。飛行甲板指揮所からの回線である。大橋中佐がそれに出た。

「もしもし？」

「艦長、飛行長です。着艦許可を出していただけるよう具申します。」

甲板指揮所の飛行長からだつた。案の定上の飛行隊に着艦許可を与えて欲しいようだ。しかし、波風ともに収まつてきてしまふが、それでも甲板は上下に揺れている。練習生に果たして可能だろうか。

ちなみに、飛行長とは直接飛ぶ役職ではなく発着艦や飛行隊の編成など空母や飛行隊で主に運営を任せられる役職の事だ。

「大丈夫かね？私の見る限りではまだ波も風も強い。練習生には無理せず陸上基地へと向かわせた方が良くなのかな？」

「それは私も承知していますが、連中は着艦が始めてではありません。それに、実戦に比べれば今の状況はまだまだ序の口です。この程度の状況で着艦出来ない者などおりません。」

飛行長は随分と強気であるが、艦全乗員の命をあずかる艦長としては安易に決断できない。

彼は後ろに立っている副長である林少佐の方に振り返った。

「副長。飛行長は随分と強気だ。着艦許可を求めているが、私としてはまだ危険であると思つ。君としての意見はどうかな？」

すると、林少佐は答えた。

「確かに、艦長の危惧も最もだと思います。しかしいざ実戦となつたらあまり甘いことは言つておられません。むしろ、これは彼らや我々を鍛える良い機会であるのかもしれません。私としては許可を与えるべきと思つます。」

「ふむ・・・よろしい。では護衛艦に信号、トンボ釣りに備えるよう信号を送つてくれ。」

大橋は着艦許可を出すこととした。その前に、今回護衛役として付き従つてゐるフリゲートの「丹東」と「當口」にトンボ釣りの準備をさせる。

トンボ釣りとは、空母の後ろを走つて万が一着艦に失敗した機体を素早く救助できるようにする事である。

信号が出されると、早速「當口」が「雛鳥」の後ろに回る。一方で「丹東」はこの2隻を囲むように大回りして走る。こうして対潜警戒を行つのだ。今のところ日本海に潜水艦が侵入したという話は聞かないが、万が一に備えてである。

2隻のフリゲートが位置に着いたところで、大橋は飛行指揮所への電話を取つた。

「待たせて悪かったね。訓練飛行隊への着艦許可を出す。」

「了解しました。」

飛行甲板でも準備が始まった。まず飛行甲板前部のバリケードが上げられた。このバリケードとは、飛行機が着艦ようのフックを掴めず、そのまま海へと落下一しないようにする装置の事である。ネットが付いていて、これで飛行機をキャッチするのだ。

続いて甲板後部にある着艦用のワイヤーが上げられる。このフックは何本か上げられるが、この内の一本を飛行機に取り付けてあるフックが掴み、飛行機を強制停止させるのだ。着艦を制御された墜落というが、まさにその通りである。

さらに、飛行甲板横の無線用アンテナが倒される。空母は戦艦や巡洋艦のような立派な艦橋やマストを持てないので、代わりに飛行甲板側面にこれを取り付ける、ただし上げっ放しでは飛行機がぶつかるので、起倒式となっている。

そして最後に、光学式の着艦指示装置が点灯する。これは現代の原子力空母でも使われている方式で、光でパイロットに角度や速度を指示するのだ。もちろん、誘導員もいて最後は彼らが旗を使って誘導する。

「これで準備完了である。」

「準備完了だな。風上に艦首を向けろ。」

「は、取り舵20度…！」

発艦する時と同じく、艦首が風上に向けられる。

「よし、来い。」

全ての準備が整つてから一分ほどして、それまでグルグル旋回していた赤とんぼの編隊が、編隊を解きバラける。そして最初の機体が着艦コースに入った。

その機体は時折姿勢を直しながら向かってくる。「離鳥」の乗員たちが固唾を飲んで見守る。何度も見ても安心できないワンシーンである。

そして、その赤とんぼが艦尾を通り過ぎた。

「いけるか？」

杞憂だった。赤とんぼは難なくフックを掴み、見事着艦を成功させた。まずは一安心である。

続く2番、3番機も無事着艦した。そして順々に各機が降り立つていく。

ところが、最後の8番機は一度着艦しようとしたもののやり直しだ。その後もなかなか甲板に脚をつかようとしない。見ている全員が心配になってきた。

「どうやらパイロットに恐怖心がついてしまったようですね。」

林が赤とんぼを見つめて言った。

「だが我々としてはそれをなんとしても乗り越えてもらひたくない。」

「

そして、5度目の着艦コースに乗る赤とんぼ。何度も何度も姿勢を修正しながら飛んでくる。見ているだけで危なつかしい。

誘導員は危ないと思つたらしく、着艦中止の赤旗を上げた。しかし、遅かった。パイロットは何が何でも着艦すると決めたらしく。そのまま甲板に脚をつけた。

その瞬間誰もが目を見張つた。赤とんぼは最後のフックを掛け損ねたのだ。もちろん、力は掛からず、そのまま滑走していつてしまう。

「まずい！！」

赤とんぼはそのままバリケードに突っ込んだ。

バキン！－ブチブチ！－

プロペラが折れる音と、バリケードの網が破れる音が響き渡つた。

赤とんぼはなんとかバリケードによつて静止した。ただちに整備兵と救護兵が機体に駆け寄る。パイロットがもしかしたらケガをしているかもしれない。

大橋や林も固唾を飲んでその様子を見守つていた。だが、間もなく乗つっていた2名とも無事という報告が届いた。また機体と艦の損傷も大きい物ではなく修理可能であった。ひとまず一安心である。

「いやあ、冷や汗物でしたな艦長。」

「ああ。だがとりあえず搭乗員が無事で良かったよ。これより本艦は新潟への帰還針路を取る。「丹東」、「當口」にも通達だ。」

「了解！！」

着艦成功で一安心していた艦橋のスタッフが、再びキビキビと動き始めた。そんな中、大橋は考えていた。

（あの搭乗員たちは、また一つ壁を越えた。だが、実戦での壁は先ほどの物よりも遥かに高く険しいだろう・・・彼らの1人でも多くが、この戦争を切り抜けてくれる事を祈るばかりだ。）

練習問題「雑鳥」 下（後書き）

御意見・御感想などをお待ちしています。

## ウェーク島沖海戦 上

緒戦から日本軍に押されっぱなしで良い所のなかつた米軍であるが、いよいよ本格的な反撃開始の狼煙を上げる時が来た。時に昭和18年の9月の事である。

ガダルカナル方面での戦いで戦艦や巡洋艦に消耗が発生したために、米軍の中部太平洋方面での反撃は4ヶ月以上遅れる事となつたが、それでもついに米海軍にとってこれまでの恨みを晴らす戦いであるので、全軍の士気は高かつた。

この時までに米軍は戦艦では最新鋭の「サウス・ダコタ」級戦艦3隻、アイオワ級4隻を竣工させていた。ただし、この内アイオワ級は4隻すべてが大西洋にいた。慣熟訓練が終わっていないためや、フランス海軍を取り込んで増強された枢軸海軍に対抗しなければならなかつたからだ。

この世界では、緒戦のマーシャル沖海戦が艦隊決戦であったため、米海軍は完全に艦隊決戦主義から抜けていなかつた。そのため、正规空母の建造は10隻で打ち止めとなり、代わりにモンタナ級戦艦4隻と、46cm3連装砲4基を持つ「フロリダ」級戦艦4隻が起工されている。

そのため空母では、生き残つた「ホーネット」に加えて搭載機100機、排水量27000tを誇る「ヒセックス」級空母3、巡洋艦改造の搭載機45機の「インディペンデンス」級空母を2隻のみであるが、それでも艦載機500機を誇る。それら空母を揃えて太平洋艦隊は機動部隊を復活させていた。

この新太平洋艦隊とも言える大艦隊は8月終わりに次々と真珠湾を出港し、西へと出撃していった。

この艦隊の動きに、潜水艦の報告から気付いた日本海軍は直ちに各方面に警報を出して、米機動部隊の襲撃に備えた。

そして9月1日、ついに米機動部隊はその牙を日本軍に向けてきた。その最初の標的になったのがウェーク島であった。

ウェーク島は緒戦に日本軍によって占領され、大鳥島と改名されていた。ただし、島自体は小さなサンゴ礁に浮かぶ島で、水も出ないし起伏も余りない島であった。ミッドウェー島とそれは良く似ていた。

戦前派太平洋横断旅客機の給油用飛行場であったが、この時点では潜水艦による日本軍のハワイ方面偵察の基地となっていた。基地と言つても、特設潜水母艦を浮かべているに過ぎなかつたが、それでも丘が在る無しでは天と地ほどの差があつた。

その日、それに気が付いたのは新設されたばかりのレーダーであつた。まだレーダー員も不慣れで、潮風にモロに当たるために故障も多かつたが、この日は正常に動いていた。そのスコープ上にこれまでにないほど巨大な波形が現れた。

「て、敵の大群だ！！」

直ちにレーダー兵の報告が基地司令にもたらされ、戦闘配備命令が下された。

もしこの時、敵機動部隊出撃すの警報がなかつたら、基地上層部

は信頼性の低いレーダーの報告を無視、あるいは軽視した可能性がある。しかし、この時は非常にスムーズに警報を出すことに成功した。

島内の各所に設置された機銃や対空砲に次々と兵員が取り付く。本土から運ばれてきた物資のおかげで、弾薬は充分であり将兵は指揮旺盛であった。

地上部隊にあわせる様に、同地に派遣されていた零戦隊が動き始めた。この時ウエーク島には30機の零戦54型が配備されていた。この内稼動する29機にパイロットが乗り込み、次々とスクランブル発進していった。

また、偵察部隊の零式陸偵6機空中待避する。

そんな中で、丁度この時ウエーク島に物資を運んできていた船団と、さらに潜水艦の補給用に派遣されていた特設潜水母艦「靖国丸」が次々と錨を上げて礁湖内から出港する。ただし、もともと出港予定がなかつた「靖国丸」はボイラーの圧力が充分ではなく、すぐには出港できなかつた。

この時船団は貨物船6隻と護衛艦4隻で、貨物船はいずれも500t級の船で、同型船で固められていた。そして護衛艦は義勇海軍のフリゲート「旅順」と「新京」、そして日本の海上護衛総隊の海防艦である「有珠」と「礼文」であった。

この船団でも、船上では水兵や船員たちが動き回つて戦闘に備えていた。海防艦は日満混合編成であるがいすれも同型船だ。最高速力は24ノットと遅めではあるが、高角砲改造の両用砲を主砲に備え、対空機関砲や爆雷、ソナーといった装備が忠実した対潜対空護

衛艦であった。

また、貨物船は全て大亞細亞通運所属の船で戦時急造船であった。船としての造りは平時の物より若干劣るが、戦場での取りまわしがしやすくなっていた。また、船首、船尾、そして船橋横に設けられた機銃や両用砲は簡易ながら射撃指揮装置を備えたために、普通の商船よりかは高い戦闘力を持つていた。

船団指揮官兼日本海上護衛総隊海防艦「有珠」艦長の佐竹少佐は敵機が現れるはずの北東の空を凝視していた。

「電探からの報告が正しければ、もつそろ見えるはず。」

船団は既にウエーク島から $6\text{ km}$ 程離れているが、この距離ならば飛行機にとってはほんの数分で飛べる距離である。

そして、数十秒後には北東の空にゴマ粒のような塊が現れた。

「来た来た！」

表情が強張る佐竹。しかし、その大編隊は船団にはまだ気付いていない様で、そのままウエーク島への攻撃を開始した。

この時来襲したのは戦爆連合98機。内戦闘機が42機であった。この大編隊を29機の零戦で止めるなど不可能であった。零戦隊奮闘し、戦闘機7機に艦爆5機、そして艦攻1機を撃墜したものの全機撃墜されている。内搭乗員13名はパラシュート降下してなんとか生還できた。

基地の対空陣地も奮戦した。とりわけ、配備されたばかりの2基

の40mmボル式対空機関砲は高い破壊力と射程で低空を機銃掃射しよつとしたF6F2機を立て続けに撃墜した。その代わり、これが仇となり敵の集中攻撃を受け、その3分後には破壊されてしまった。

また、その他の陣地も3機ほど敵機を撃墜したが3分の1が破壊されてしまった。滑走路にも次々と被弾する。さらに出港が遅れた「靖国丸」は一機も撃墜できないま、3発を被弾して大破着底した。

そして、ついに敵攻撃隊は船団に気付いた。20機ほどが船団へ向けて向かって来る。

「来たぞ！ 対空戦闘用意！」

主砲と対空砲が、敵攻撃隊にむけて指向する。まず敵機は主砲の射程に入った。

「撃ち方始め！」

ウェーク島空襲開始から10分後、まず海防艦「有珠」が初弾を発砲した。

ウホーク島沖海戦 上(後書き)

御意見・御感想などをお待ちしています。

## ウエーク島沖海戦 下

船団の対空砲撃を見て、米軍機のパイロットは少しばかり驚いた。船団が予想以上の弾幕を張つてゐるのである。

旗艦である「有珠」をはじめ各艦はそれぞれ3門ずつの12・7cm両用砲を積んでいる。4艦合計12門。さらに中距離対空用火器の40mm連装機関砲が各艦3基6門で、4艦合計24門。そして短距離用として96式25mm機銃を改良した1式25mm単装機銃が各艦12挺ずつ、合計48挺であつた。

また、貨物船にも各船1門の12・7cm両用砲と、2基の40mm連装機銃、4基の25mm単装機銃が載せられていた。

これら機銃や対空砲はさすがに後に米軍が実戦配備する近接信管はついていなかつたが、最新の2式対空射撃指揮装置によつて管制された。そのため、以前よりも若干ではあるが命中率は向上している。

ちなみに余談ではあるが、田満ではそれぞれ近接信管の開発には成功したが、機銃に搭載できるほどの生産能力がなかつたために、魚雷とロケット弾の弾頭にのみ使用されている。

しかし確かに日満側の対空能力はそれなりに高かつたが、米軍機を全て落とせる程の物でなければ、その攻撃を完全に止められる物でもなかつた。やはり艦対空の戦いでは航空機に分があつた。

米軍は最終的に船団に襲い掛かつた20機（戦闘機6機、艦爆14機）の内戦闘機1機と艦爆3機を失つたが、対空砲火を突破して

投弾を行つてゐる。

護衛艦の1隻である「新京」では、空母「白虎」航海士から昇進の上転属した若き艦長の白根護大尉が懸命に操船を行つていた。

「右、弾幕薄いぞ！撃つて撃つて撃ちまくれ！！見張り員、各船の動きに注意しろ！戦闘中に衝突なんかしたら話にならんぞ……」「

船団では回避運動を優先する方法ではなく、個々の距離をギリギリまで近づけて密集し、弾幕を密にする方法を採用している。こうすることで、敵機に弾幕を激しく見せて威嚇するのだ。

もつとも、この方法では衝突の危険も高まる。そのため、操船には慎重に慎重を重ねる必要があった。

「船団旗艦右10度回頭……」

「面舵10度。第2船速……」

旗艦の「有珠」の動きに従つて船団各船は動く。護は速やかにそれにあわせる動きをするように命じる。ちなみに、第2船速とは18ノットのことだ。「新京」はもつと出せるが、貨物船にあわせている為に仕方がない。

米軍機は約20機であるから、9隻の船団に対する空襲としてはそう大した物ではないといえる。それでも、「新京」のようなフリゲートでは爆弾、魚雷の1発が致命傷となりかねない。幸い敵機は艦爆だけで、積んでいるのも対地用爆弾であった。

通常艦船攻撃には、装甲を破るために若干信管の起動を遅らせた

徹甲爆弾を使用する。しかし対地用爆弾なら表面ですぐに爆発するために、艦船には効果が薄い。せいぜい上部構造物を吹き飛ばす程度だ。

もつとも、致命傷とならないからといって当ててよい道理はないので、船団の各船はひたすら逃げ回る。

空襲が始まつて5分ほど立つた時である。この時点では機銃掃射以外で損害を負つた船はなく、爆弾は全て外れていた。しかし、米軍機はめげずに攻撃を仕掛けてくる。

「右舷、貨物船「大河」上空に敵急降下爆撃機2！」

見張り員が絶叫する。今まさに敵ヘルダイバーが貨物船の1隻に投弾せんとしていた。

「右舷側対空火器は「大河」を掩護せよ！！」

とは言つものの、恐らく間に合つまい。案の定、敵機は「新京」の対空砲が撃ち出す前に投弾を終えてしまった。

2発の黒い塊が貨物船に向かって落ちていく。それを見ていた者はひたすら「外れろ！」と祈つた。しかし、1発はなんとか回避できたが、もう1発は貨物船の前部甲板に命中した。

ピカッと閃光が走り、次の瞬間には貨物船の前部甲板で爆発が起きた。

「しまつた！「大河」に信号！被害状況知らせ！」

直ちに発光信号が送られる。そして1分後返答がきた。

「「大河」より信号。我前部甲板に1発被弾するも航行に支障なし。火災発生するも、被害は最小限なり。」

「空船で助かつたな。」

今回貨物船はウェーク島への物資輸送を終えた後だったので、各船とともにその内部は空だった。もし弾薬か燃え易い燃料類を積んでいたら一発でアウトであった。

結局、船団の被害はそれだけで何とか留められた。間もなく。

「敵機引き上げます！！」

の報告が入り、船団の将兵は安堵の息をついたのであった。もつとも、指揮官たちは第二次攻撃が来るのを警戒した。しかし、ウェーク島と船団に対する攻撃は結局これっきりであった。

米軍はこのウェーク島空襲を始めとして、その後タラワ等の諸諸島をヒットアンドランという飛び石的に空襲する予定だったので、空襲は一度きりだったのである。

この攻撃で日本軍はウェーク島の基地機能を紛失し、航空機30機を失い特設潜水母艦1隻沈没、貨物船1隻中は、その他3隻が小破という損害を負った。一方の米軍は最終的に撃墜、不時着、着艦後の破棄機含めて損害は30機であった。

この戦闘は日米両軍に大きなショックを与えた。まず日本側はウェーク島のような外洋基地の防御力の脆弱さを再確認することとな

り、トラックや千島などの基地機能強化に拍車が掛かる事となる。

一方の米軍は、日本軍基地と船団の対空火器の強力さに驚き、さらに自信を持つて投入した最新鋭機で編成した攻撃隊の出撃機の3分の1が失われるという大損害にも驚愕した。これはやはりパイロットの腕がまだ充分ではなかつたのが大きな要因だった。

米軍は緒戦期に戦前からのベテランパイロットの多くを失つている。生き残ったパイロットも本土で訓練教官をするか、大西洋戦線に引き抜かれてしまつたためにその数は少なかつた。そのため、500機近い航空機を保有しているにも関わらず、パイロットの8割が実戦経験を有していなかつた。

この後数日間、米機動部隊は日本軍基地を飛び石戦法で攻撃するが、作戦全期間で100機近い航空機を失う事となる。米軍のパイロットの練度不足が解消するのは、昭和19年初頭に入つてからである。

ウニーグ島沖海戦 下(後書き)

御意見・御感想をお待ちしています。

米軍が太平洋方面で反攻を開始したころ、ヨーロッパでは激変が起きていた。ナチス・独逸の崩壊である。

ナチス・第三帝国はヒトラー総統の元でこれまで成り立ってきたが、そもそもそれを支えていたのは驚異的な不況からの脱出という実績と、親衛隊や秘密警察を使った弾圧によるものであつた。

不況からの脱出が終わると徐々に国民のナチス熱は冷めていった。ナチス政権はその後もヒトラーのカリスマ性で持っていたが、戦争が4年目になると徐々にそれも有効な物ではなくなってきた。さらに、ヒトラーによる軍への介入が増えると軍内部からの批判も大きくなつた。

そうした批判や不満を力で押さえつけようとしたヒトラーを暗殺しようとする人間が出るのはごく当たり前のことだつた。特に、ナチスの考え方を受け入れられないプロイセン精神を持った国防軍の人間は顕著であつた。

そして1943年11月、西部戦線視察から戻るヒトラーの乗る旅客機が墜落（実際は反ナチ派バイロットによる撃墜）し、ヒトラーは死亡。時を同じくベルリンで行われた国防軍によるクーデターによつて第三帝国は崩壊した。

その1ヵ月後、臨時首相に抜擢されたアウデナーがイギリスとの休戦条約に調印し、西部戦線における戦いは一応終結をみた。ちなみに、正式に講和条約が結ばれたのは半年後の1944年6月である。

そして、この休戦条約を待っていたかのよつにヨーロッパに雪崩れ込んだのがスターリン率いるソ連であった。ソ連軍は東部ヨーロッパ諸国の解放と現地の赤色革命支援を旗印に突如としてポーランドやルーマニア駐屯のドイツ軍に襲い掛かつたのである。

ソ連は政治的空白よつてドイツ軍は有効な反撃は出来ないと考えていたのだった。

もつとも、独逸国防軍もバカではなかつた。政治的混乱を狙つて領土欲に駆られたスターリンが侵攻してくるのは予想済みであつた。そのため、ドイツ軍は各地で少ない兵力をやりくりしつつ有効は反撃を行つた。

そうして時間を稼いでいる間に、西部戦線や中東戦線から転用した部隊を新たに誕生した東部戦線に送り込んだ。

後に霸権大戦と呼ばれる戦争の始まりであった。

そんな中で、日米はといふと。まず米国は英國と同じく休戦条約こそ結んだが、正式な講和を1年以上保留にした。これは米国大統領のルーズベルトがソ連と深い結びつきを行つていたために、起きた事だ。

米国としては、新たな脅威となりつづつあつた。満州帝国を是非ともソ連に叩いて欲しかつたのだ。そのため、ルーズベルトはこれまでにソ連に多大なる兵器の供給や売却を行つていた。

一方の日本は膠着していた英國との戦争にけりをつけるために英國に講和を打診。その結果1944年2月。日英講和（実質的には

蘭も含む）が成立した。

日本側の提案した条件には植民地の解放など苦しい物もあつたが、国力が疲弊しており、もともと日本との戦争に乗り気でなかつた英國は喜んでこの申し出を受けたのであつた。その後英國は日本や満州に対して多数の武器を輸出し、ドイツやフランスなどには民生品を輸出する事で大いに儲け、復興している。さすが大英帝国である。

ちなみに、イタリアやフランスの状況も気になるが、ここでは割愛させていただく。

そんな中で、太平洋でも新たな動きがきた。まず英欄との講和がなつたため、日本軍はフィリピンを除く南方地域より撤退。それら地域では日本の肝いりで次々と独立政府が立ち上がつた。

そうした地域から撤退した部隊は、新たに中部太平洋や千島、樺太に転用されて米ソの侵攻に備えた。

日本の動きに併せるかのように、ソ連と国境を接している満州では、急ピッチで対ソ戦の準備が行われていた。既に建国から13年。初期段階で優先して行つた教育等の福祉面での忠実は、国民の帰属意識を生み、国としてのまとまりを作る事に大いに寄与した。おかげで、この時点での国民の愛国心はそれなりに高くなつていた。

満州帝国は戦時下では基本的に徴兵制であり、男女共に徴兵対象となつた。そして集めた戦力は陸軍14個師団（内機械化師団3個、空挺師団1個）、空軍航空機1200機とそれを運用するパイロット。加えて鉄道警備隊（列車砲や装甲列車の運用部隊）2個師団であつた。

ノモンハン戦の教訓から、満州國軍は早く歩兵の機械化も実施した。そのおかげで、歩兵14個師団の内半分の7個師団は移動手段が完全にトラック化されていた。これは日本陸軍以上に高い率であつた。

そして、戦車中心の機械化師団も急ピッチで整備された結果、いずれも75mm野砲、装甲50mmを誇る日本陸軍との共用戦車、1式中戦車であつた。これら戦車480両に、自走砲240両を揃えていた。

しかし、1944年に入つてヨーロッパからソ連軍の情報が入つてくると、満州帝国陸軍の首脳部は衝撃を受ける事となつた。

独逸やソ連が使用している戦車は高射砲改造の長砲身砲をつみ、装甲厚80mm以上は常識であるというのだ。これらかれみれば、満州陸軍が運用する1式中戦車等玩具同然である。

もちろん、日満も戦車の新造を行つてはいた。高射砲改造の75mm長砲身砲に80mmの装甲を備えた3式中戦車が1943年1月からロールアウトを始めていた。しかし如何せん増産が追いつかなかつた。

3式中戦車以外にも、88mm高射砲を固定式にしてオープントップとした3式自走砲も開発したが、こちらも数がそろえるのに時間が掛かつた。

おまけと来て、対戦車砲も75mm機動野砲だけであつた。これだけではソ連軍には勝てない。

そんな満州にとつて救いとなつたのが、英國と独逸だつた。

まず英國は、戦争が終わって余剰となつた17ポンド砲を500門、さらに対地支援攻撃機として木製双発爆撃機、モスキート360機を対米戦には使用しないという条件付で満州に格安で売却したのであつた。

そして独逸は自國が戦争中であるにも関わらず、中東方面に置いていかれた4号戦車や4号突撃砲合せて260両を弾薬つきで売却したのであつた。これは輸送が不可能となつたなつた戦車を乗員だけ本国に引き上げて、不要となつた物として売り払つたのであつた。その代金で彼らはパンサー やタイガー といった新型戦車に置き換えたのである。

## 霸權大戦（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## 日米最終決戦

1944年に入ると、日米は最終決戦への準備を着々と進めつつあった。日本は軍港として重要なトラック、米軍爆撃機の基地となる可能性が高いマリアナ、千島の要塞化と基地機能強化を図っていた。

それに伴い、日本はタラワやウェークから段階的に撤兵し、米軍はそれらの島々を次々と占拠し、飛行場や艦艇の停泊地へとしていった。しかし直接的な戦闘はほとんど起きず、両軍上層部は、マリアナ、もしくはトラック沖で決戦をするものと考えていた。

米太平洋艦隊は新たに太平洋に回航した空母、戦艦をようした一大機動艦隊をよろしくして日本連合艦隊を壊滅せんとしていた。

一方、日本側も機動部隊の整備を進めていた。新たに旗艦用装甲空母の「大鳳」、量産型空母「雲龍」級を続々と竣工させ、さらに戦艦も「大和」級と「信濃」級を揃え、士気練度ともに高かつた。

また基地航空隊も最新鋭の「連山」、「銀河」、「旋風」（史実のキ83）を揃え、米軍の侵攻艦隊に打撃を与えると意気込んでいた。

そして昭和19年6月19日、日米機動部隊はトラック島沖で一大決戦を行った。トラック沖海空戦である。この海戦の始まりは、米軍のトラック島への攻撃からであった。

これは米軍が10月に予定していたマリアナ侵攻の前哨戦として行つた物で、暗号解読からトラックに敵主力無しと判断し、そのト

ラック島の基地機能の破壊が主な目的であった。

しかし、日本側はその裏をかいて機動部隊をトラック沖で待ち伏せさせていた。その結果起きた海戦であった。

米太平洋艦隊は戦艦7、正規空母7、軽空母7、巡洋艦35、搭載艦載機約950機。さらに後方の各諸島軍に建設した航空基地の長距離攻撃機（主にB24やP38）300機。

迎え撃つ日本連合艦隊は戦艦6、正規空母9、改造成母9、巡洋艦36、搭載艦載機約900機、トラック島基地航空隊400機であつた。

艦隊航空戦力共に拮抗していた。そしてこの海戦は両軍共に痛み分けに終わった。

まず日本海軍は旗艦である「大鳳」が航空機の爆撃プラス潜水艦の雷撃によつて撃沈されてしまった。その他に歴戦の空母「飛龍」に軽空母「祥鳳」「龍鳳」が失われた。その他に巡洋艦「摩耶」や駆逐艦3隻が沈められている。加えて、米軍がV-T信管を配備したため、航空機の損耗も機動部隊、基地航空隊併せて320機という甚大な物になつた。

一方の米軍も日本側が最新鋭戦闘機「疾風」、最新鋭爆撃機「彗星」、最新鋭攻撃機「流星」といった高性能機を配備していたのに加えて、ベテランパイロット揃いであったために、大きな被害を受けた。V-T信管も万能兵器ではなかつたのだ。

米軍は空母「ワスプ」「サラトガ」「ヨークタウン」（いずれも先代の名を継いだ2世）、軽空母「プリンストン」「ラングレー

ー」、そして巡洋艦4隻に駆逐艦7隻を失った。航空機の損害も40機と日本側を大きく上回る数を失つた。また、トラック島への攻撃も日本側が充分な戦闘機を上げていたために不十分で、地上撃破30機、艦艇の撃沈破3という僅少な戦果しか残せなかつた。

この海戦では、戦艦同士の砲撃戦は発生せず、艦隊決戦主義が時代遅れであること両国海軍にをまざまざと見せ付けた。さらに、米軍上層部と国民を大きく落胆させる結果となつた。

実はこの時期、米国内では独逸との休戦から非常に厭戦気分が高まつていた。既に経済は十分に回復し、日本との戦いもあまり意義のない物であつたために、米国国民はこれ以上戦争を続ける意味を見出せなくなつていた。

そんな時期に、日本海軍に敗北したのであるから落胆して当然である。

ルーズベルト大統領としては、マリアナを落とし日本本土爆撃を可能にし、自國が原子爆弾を完成させ、さらにソ連が参戦さえしてくれれば、日本を降伏させ、太平洋の霸権をアメリカが勝ち取れると信じていた。しかし国民の反戦意識は日に日に大きくなつていた。

さらに、この時期ソ連軍がヨーロッパ諸国へと侵攻してていため、アメリカ国民のソ連を見る目は冷たい物となり、そのソ連に肩入れするルーズベルト大統領の支持率は落ちる一方だつた。

それでも、ルーズベルトは最後の勝利さえ得られればなんとかなると考えていた。新たに太平洋艦隊に空母を回航し、さらにトラックをそのまま放置しても期日どおりにマリアナ攻略を行つよう海軍に命令した。

海軍のキング作戦部長もルーズベルト政権が倒れれば後がないため、結局この無理な計画を推し進める事となつた。

昭和19年10月20日、米軍はマリアナ諸島への攻撃を開始した。今回は戦力を回復した機動部隊のみならず、上陸部隊とその護送艦隊までつけた本格的侵攻作戦であった。

しかし、この作戦にニミッツ太平洋艦隊司令長官は乗り気でなかつた。回航してきた艦や新しく配備された航空機のパイロットは練度が不十分であり、さらに航空機も後3ヶ月も待てば新型のF8Fを配備できたというのに、F6F、F4Uという前回の戦いと同じ航空機を投入せざる得なかつた。さらに、基地航空隊の支援も受けられない状況での戦いと成つた。

対し、日本海軍は機動部隊の戦力は完全回復させられなかつたものの、代わりに各戦線から抽出した陸海軍の攻撃機と戦闘機をマリアに集中配備して待ち構えた。さらに、後方の硫黄島やパラオから航空機の補充を受けられる体制を整えていた。

そして10月25日から3日間に渡つて行われた海戦は、史上稀に見るほどの大規模な物となつた。

両軍は航空機を計4000機も揃えて戦闘を行つたのである。しかし、準備不足で挑んだ米軍に比べ、日本側は準備万端であつた。特に今回参加した陸軍機は海軍から洋上航法を学んだ渡洋攻撃可能部隊で、しかも最新式の誘導口ケット弾を使用した。

これに加えて、海軍も潜水艦搭載型の超大型自動誘導魚雷「回天」に、対VT信管攪乱兵器等最新鋭兵器を惜しみもなく投入した。特

に、「回天」は一撃で大型艦を屠る兵器で、故障が多発したものの、見事護衛空母2隻を仕留めている。

海戦の結果、日本側はマリアナ基地施設に甚大な被害を受け、艦艇も戦艦「武藏」、空母「天城」「千歳」、その他5隻、そして航空機340機を失つたが、米軍の損害はより甚大で、戦艦5隻、正规空母3隻、軽空母3隻、護衛空母4隻、巡洋艦7隻、駆逐艦12隻、輸送艦32隻に航空機560機を失つた。

特に、上陸部隊1万名が船上で戦死したのは大打撃であった。こうして、日米最後の決戦は終わりを告げた。

## 日米最終決戦（後書き）

とりあえず次話あたりで日米戦争は終わりますが、今度は第一次ソ満戦争となります。

## 太平洋戦争終結

マリアナ上陸作戦の失敗は米国の戦争継続に致命的な打撃となつた。特に戦わずして戦死した海兵隊1万名の損害に、米国国民は激昂した。

二度の決戦に敗北し、作戦目的を果たせなかつた米軍上層部、とりわけルーズベルト大統領への国民の不満は頂点に達した。各地で反戦デモが起つり、政府の支持率は急降下した。

ルーズベルト大統領としては太平洋艦隊の損害は4ヶ月もあれば回復できる範囲であり、マリアナにB29を配備しさえすれば、日本を屈服させられる自身があつた。多額の予算を投じて作った原子爆弾も、後半年で実験にこぎつけられる段階に来ていた。

しかし、国民の反戦意識はそこまでの猶予を許してはくれなかつた。さらに、この時期ヨーロッパ各地に解放名目で侵攻したソ連軍の非道ぶりが英國経由でアメリカに配信されるに及んで、ルーズベルト政権の命運は決まつた。

ルーズベルトはソ連に対しても量の武器や民生品の供与ならびに貸与を行つていたからだ。

1944年12月24日。国民や議会からのバッシングへの対応で疲れ果てていたルーズベルト大統領はついに倒れた。そしてその数時間後に死亡が確認された。

米国政府は法にのつとり、ただちに副大統領のトルーマンを後任大統領とした。国内の情勢を鑑み、さらに反共派であったトルーマ

ンはただちに日本との終戦工作に入った。

そして1945年2月11日。ハワイ真珠湾で日米の正式講和会議が開かれた。この会議では米国は満州帝国をソ連と自由圏国家との緩衝国として残す代わりに米国企業の進出を容認する事。フィリピン等の新興国家の独立を即時認めること。日本は南洋諸島の領有権を破棄する事などが定められた。

ちなみに、丁度この時期開戦前にハワイで起きた日系人テロがアメリカの自作自演であったことが公式発表され、それを容認した高官多数が更迭されている。これによつて米国の戦争継続派はほぼ消滅した。

また、日本でも戦争継続派が軍の若手将校を中心になつたが、昭和天皇が定例の記者発表で、「講和会議がまとまるこことを祈ります。」と言つたことで黙つた。統帥権を政府に委任し、さらには憲法も改正への動きが加速していいたこの時期、その権力は大きく落ちていた天皇であつたが、その発言力はまだまだ極めて大きかつたのだ。

日本と米国が講和した翌日、満州帝国も正式にアメリカと講和した。こうして、環太平洋圏の戦争、いわゆる太平洋戦争は幕を閉じたのであつた。

一方、霸権大戦とよばれるソ連と自由圏国家との戦いは急加速していた。ソ連軍は解放という大義名文を持つて各地に侵攻していく。既に1945年3月時点においてポーランド、ギリシャ、チエコ、ルーマニア等で共産主義政府が発足していた。もちろん、こうした政府は事実上のソ連の傀儡政権であつた。

一方、これに対抗するのは英独等であつたが、英國は先の戦争の損害から正式な参戦が出来ずにいた。また独逸も連合国との戦争の結果から國力が大きく疲弊しており、ソ連軍の自國への侵攻を止めるのが精一杯という有様であった。

イタリアやフランスなど、もとから軍事的に弱体化していた國などもはや論外であった。

また、アメリカは大戦中に作った多数の余剰兵器をこうした國へ売却こそしたが、直接参戦までは出来る雰囲気ではなかつた。国民は戦争に飽き飽きしており、1・2年はとてもできそうになかつた。

一方、日満はソ連が直接侵攻次第反撃に出る予定であった。

満州國はアメリカとの講和が終了すると、ただちに長距離爆撃機（B24を60機）の購入を行つてゐる。これはソ連の兵站線であるシベリア鉄道を攻撃するために用意され、突貫での乗員訓練が開始された、

またトラックやジープ等の後方での補給偵察任務に必要な車両も大量購入を行つてゐる。この数は膨大で、満州國軍は旧式の車両をわずか5ヶ月で交換してゐる。

また航空機もあらたにP63「キングコブラ」やP47「サンダーボルト」を購入し、残存していた97式戦闘機や99式襲撃機を掃討している。

余談ではあるが、この時廃棄された旧式機の多くは映画会社に買取られ、戦争映画で迫力の空戦シーンを撮影するのに活用されている。

また船団護衛任務を解かれた義勇海軍も久しぶりに旅順に終結し、装備の改変を行っている。主に電探や対潜兵器をアメリカから放出された高品質の物に代えたり、これまでに完全に装備できなかつた小型艦艇にも装備するのがその内容であつた。

また、空母や巡洋艦の艦載機もエンジン出力をアップした「炎龍」2型や、日本から購入した「流星」艦攻や、「瑞雲」水偵に代えられている。

義勇海軍では大戦中に艦艇数を大きく増強したが、その殆どが船団護衛任務に使用する小型対潜用艦艇であつた。そのため、アメリカからの艦艇購入で戦力を増強したソ連太平洋艦隊に対抗するには空母や戦艦、巡洋艦が必要であった。

そこで、これらの問題を解決するために、なんと日本海軍から艦隊を乗員込みで貸与してもらつてゐる。これは日本海軍が終戦と共に予算が削られ、大幅な軍事力削減の必要に迫られてことと関係していた。

軍事予算の縮小で、帝国海軍は余剰艦艇の廃棄と乗員の解雇を余儀なくされた。しかし数万人単位での再雇用が直ぐに出来る筈がない。そこで、義勇海軍で対ソ戦争の間だけ再雇用するという手段にでたのだ。

帝国海軍としても乗員がそのまま食つていけて、さらにつの後のスクラップ処理も義勇海軍が行つという提案が出ていたので喜んで引き受けた。

この方法で義勇海軍に貸与されたのは、戦艦が「長門」、「陸奥」

、空母が竣工したばかりの「笠置」、巡洋艦が「妙高」、「那智」であった。ちなみに「笠置」はパイロット込みでの貸し出しである。

これらの艦艇は1945年5月に、菊の紋章を外すなどの処置を施され、旅順に回航されている。ちなみにこれらの艦艇は改名されず引き渡されている。

こうして、義勇海軍は戦艦2、空母8、重巡2、軽巡4、駆逐艦16を即応戦力として整備し、ソ連太平洋艦隊と拮抗する戦力を整備した。

## 太平洋戦争終結（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## ソ連侵攻（前書き）

前話で、沈没した「飛龍」が義勇艦隊に引き渡されていたと書いてしまいました。ただちに訂正しました。読者の方にご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

## ソ連侵攻

旅順の港に日本海軍から義勇海軍へと貸された戦艦や空母が勢揃いしている。乗員もほとんどが帝国海軍からの出向者であるから練度も高いままである。後は義勇艦隊各艦艇との艦隊運動訓練などをを行うのみである。

それら鋼鉄の獰猛たちを義勇艦隊総司令官の白根大将は司令部庁舎から見ていた。

「これでソ連太平洋艦隊に対抗できるだけの戦力が集まつたわけだな。」

「ええ、練度も万全であとは艦隊運動訓練を行つだけです。」

白根の言葉に引き継ぐよつて、現場艦隊司令官の木村大将が言う。

「これでソ連艦隊がたとえ南下してきても恐れるに足りずと言つた所か・・・しかし米国との戦争が終わつて一段落したと思つたら今度はソ連か・・・戦争はまだまだ続きそうだな。」

白根はしみじみと言つた。艦隊を作りたいとこの地に來てもう30年近く経つた。その願いを形にし、亞細亞有数の海軍力を整備した白根であったが、年を追うごとにそれらの艦艇が人が動かしていふといふことを実感させられた。

太平洋戦争中、義勇艦隊は南鳥島海戦以後米海軍と正面から戦うことにはなかつた。主に船団護衛に徹して行動した。

大戦中義勇艦隊は実に50隻近い米潜水艦を撃沈し、さらに撃墜した航空機もかなりの数に昇る。

しかし、一方的に進められる戦争などはこの世にはない。義勇艦隊も帝国海軍ほどではないが犠牲を払っている。大戦中全期間を通して駆逐艦以上で撃沈された艦艇はなかったが、フリゲート2隻と、コルベット3隻と魚雷艇4隻、潜水艦1隻が失われている。また、損傷艦も多数に及んでいる。航空機の犠牲も60機以上に昇っている。

それら損害によって発生した犠牲者は500人以上に昇る。戦争全体から考えれば少ない犠牲者と言えるかもしだれないが、しかしやはり犠牲者が多数出た事に変わりはない。

白根は犠牲者が出たびに艦隊司令部を使って合同葬儀を開き、遺族を呼んで訓示を読み、2階級特進の通達を行った。補償も行っている。

戦争中であるから、遺族から批判が出ることはない。しかし、白根にしてみれば遺族の哀しそうな顔や、無理に虚勢を張っている姿が痛ましくしてしかたがなかつた。

（）に来て、ようやく白根は戦争のつらさをわかつた。しかし、いまさら戦つのを止めるわけにもいかない。

（国を守るために、例え犠牲者が出るとわかつていても戦いをやめるわけにはいかないんだな。）

白根は戦争は望まないが、国を守るために犠牲を払う事は仕方がないと考えていた。さすがに一切の武器をなくして平和を作ると

言つ理想主義的な考へは思いつかなかつた。

そんなことを考へてゐる白根を、木村はただ黙つて見守つてゐた。

さて、彼らの話題に登つてゐるソ連太平洋艦隊は1945年5月現在、ペトロ・ハバロフスク・カムチャツキーにいた。旗艦はアメリカから買い込んだ「アリゾナ」を改名した「ウラジオストク」である。

ウラジオストクとはロシア語で極東を制霸せよといかなり野心的な意味合いを含んでゐる。帝政時代にも、「コレーツ」をいう砲艦が存在したが、コレーツとは朝鮮と言つ意味である。そういう野心的な名前をつけるのは何時の時代も変わつていないのである。

その「ウラジオストク」を含めて戦艦2、軽空母2、重巡洋艦5、軽巡洋艦3、駆逐艦18からソ連太平洋艦隊はなつてゐる。

軽空母はやはりアメリカから買い込んだ「ボーク」級の護衛空母で、F6F戦闘機とセットで購入した物だ。現在は「レーニン」と「スター・リン」に改名されている。

巡洋艦はロシア製の「マキシム・ゴーリキー」級とアメリカから購入した「ポート・ランド」級を改名した「ポルタワ」級。さらに「カリーニン」級にやはりアメリカから購入した「オマハ」級を改名した「キエフ」級巡洋艦である。

ソ連海軍は条約にとらわれてないので、かなりユニークな艦艇を建造してゐる。特に巡洋艦は軽巡とも重巡ともいえる艦艇を造つてゐる。主砲口径180mm、排水量8000tクラスの艦艇がそれだ。

太平洋艦隊はそのソ連独特の艦艇と、条約を遵守したアメリカ製の艦艇が混じつたかなり変則的な編成となっている。

また駆逐艦も同様で、ソ連製の艦艇とアメリカから購入した「シムス」級駆逐艦を混合使用している。

ソ連はスター・リンからの指示で海軍の増強に移っていた。その筆頭であるのが40cm砲9門を持ち、「アイオワ」級を凌駕しさえる「ソビエツキ・ソユーズ」級と30cm砲9門を持つ巡洋戦艦「タシユケント」級であるが。このクラスの戦艦はヨーロッパで対独戦に使用されているために太平洋には存在しない。

しかし、それでもソ連は充分と考えていた。ソ連の戦争計画は満州と南樺太を短期間で占領する計画だった。しかもこの内対日参戦はせず、樺太の方は3日で占領して武力紛争で片付ける魂胆だった。そうすることで強大な海軍力をもつ日本との直接対決を避けるつもりであった。

満州へはやはり中国共産党への革命支援と人民解放を名目に侵攻する計画であった。もちろん、その狙いは同国の石油、石炭資源に優秀な工業技術であった。

ソ連太平洋艦隊は満州への参戦以後は一気にウラジオストクに南下して、その航空打撃力と艦砲能力で沿岸部の満州国軍を攻撃し、さらには北上してくる義勇艦隊を迎撃つ予定であった。

この時点ではソ連は満州国の戦力をかなり過小評価していた。特に、義勇艦隊へ日本海軍が艦艇を貸与しているという事実を全く掴んでいなかった。また満州国の陸空軍が独逸やアメリカ、イギリス製の

兵器を購入して大増強を行つているのも断片的な情報でしか掴んでいなかつた。

そのため、ソ連軍の満州侵攻軍は力チュー・シャロケット等の歩兵支援兵器や砲兵の装備こそ最新だつたが、戦車や空軍力では旧式装備をかなりの割合で含んだままであつた。

そして1945年8月6日。ソ連軍は突如として満州帝国に宣戦布告。それと同時に黒龍江を渡つて雪崩れ込んできた。

## ソ連侵攻（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

## バトル・オブ・マンチュリア

ソ連侵攻軍の攻撃は、まず重砲とスター・リンのオルガンと呼ばれた力チューシャ対地ロケットによる制圧射撃と航空機による国境監視哨、ならびに点在する要塞、飛行場に対して行われた。

しかし、この時点ですれらの陣地や飛行場のほとんどから兵員は撤退しており、飛行場も蛻の殻だった。

これはソ連軍への迎撃を国境線付近での水際迎撃ではなく、若干内陸部へ入ったところで行うと言う満州國軍の戦略方針によるものだつた。この方針には、敵に弾薬と時間の浪費を強いことが目的の中に含まれていた。

事実、この攻撃でソ連軍は重砲と力チューシャロケットの弾薬1会戦分をなんの戦果も得られぬまま浪費している。

ちなみに、国境線付近の村や開拓地の住民は既に避難命令を受けて後方に下がっていた。

そのため、村々での略奪を考えて侵攻したソ連軍先遣隊は肩透かしを喰らう事になつた。住民たちは家財道具の殆どを引き上げていったからだ。

準備砲撃が終わると、いよいよ戦車を中心とした侵攻軍が満州領内に侵入した。これに対して満州國軍も反撃を開始した。

まず分厚いベトンに防護され、砲撃や爆撃の被害を殆ど喰らわなかつた虎頭要塞がその尖兵となつた。

この要塞には日本陸軍から売却された41cm砲が配備された。この砲の射程距離は長く、国境の向こう側を走るシベリア鉄道の鉄橋を破壊する事が出来た。

41cm砲はシベリア鉄道の鉄橋や線路目掛けて砲撃を開始した。ソ連極東地域への物資輸送はこのシベリア鉄道が事実上唯一の手段であった。そのため、虎頭要塞によるシベリア鉄道破壊は戦略上重要だった。

41cm砲は期待に沿い、鉄橋と複数箇所の線路を破壊、分断した。しかし、ソ連軍は既にこの砲の存在はつかんでいたようで、迂回線路を既に建設していた。そのため、シベリア鉄道の運行を完全に止める事は出来なかつた。

虎頭要塞の砲撃に続いて動いたのが、後方基地へと下がっていた航空部隊であつた。ソ連軍大部隊満州領内に侵入すとの報告を受け、彼らも一斉に飛び立つた。

対戦車部隊のP 63、対地襲撃部隊のモスキートにP 47、さらに戦闘爆撃機に格下げとなつた「飛龍」戦闘機、そしてそれらを上空から掩護するハインケル博士自慢の「炎龍」2型戦闘機にアメリカから少數購入されたP 51が次々と獲物を狩人となつて飛び立てていつた。

航空部隊でまず戦闘に入ったのは、敵戦闘機との空戦を行う「炎龍」戦闘機隊であった。この時彼らと戦闘を行つたのは、主にLa 539・Yak 7、といったソ連製戦闘機にアメリカから購入したP 40にP 39という機種であつた。

ソ連戦闘機は、数としては満州国軍側と拮抗していた。しかし、満州国軍の機体に比べ圧倒的に航続距離が短かつた。1000km飛べれば御の字という物が多く、そのため、空戦に入ると短期間で燃料切れとなってしまう機体が続発した。

また、この時点ではソ連の主力部隊はヨーロッパに回されていたために、極東軍に配備された機体自体が旧式機や欠落機が多く、さらにパイロットの練度も劣っていた。

そのため、空中戦で煙を引いて落ちていく機体は圧倒的にソ連戦闘機の方が多い。中には爆弾を落とした「飛龍」やモスキートを襲うとして、逆に反撃され撃墜される機体もあった。

こうして空中戦は満州国側有利で進んだため、爆撃隊は思う存分敵地上軍を攻撃する事が出来た。

もちろん、ソ連軍部隊も戦車に搭載された車載機銃や、トラックを改造した対空用車両で反撃を試みた。もしこの時、攻撃したのが日本陸軍より売却された旧式の99式襲撃機や97式軽爆撃機だったら、かなりの数が撃墜できた可能性がある。しかし、相手が悪かつた。

先陣を切つて攻撃を開始したのは、アメリカ製のP47であった。ヨーロッパ戦線では独逸兵から「ヤーボ」として恐れられた機体はここでも猛威を振るつた。

強力なエンジンと、3t近い重量の機体は旋回性能は他の機種よりも劣るが、かわりに1t近い爆装が可能で、非常に撃たれ強かつた。そのため、この戦闘でもかなりの被弾機は出たが、撃墜された機は

少なかつた。

P 47はソ連軍部隊曰掛けて次々とロケット弾と爆弾で攻撃を行つた。着弾によつて、戦車の砲塔が吹き飛び、トラックがひっくり返り、爆風で兵士が吹き飛ばされる。攻撃は特に対空砲火を浴びせていた車両に攻撃が集中した。

P 47による攻撃が終わると、続いてP 63の部隊が装備した爆弾と、機首に積んだ37mm砲で攻撃を行う。既に対空砲火の妨害はなく、彼らの攻撃を妨害する物はいなかつた。

戦車の上部には装甲が施されていないので易々と37mm砲弾は貫通し、戦車を破壊する。さらに、非装甲のトラックやハーフトラックはズタズタにされた。

さりに、モスキートや「飛龍」の爆撃と銃撃も加えられた。こうした満州空軍の爆撃が終わった後の地上に動く物はほとんどなく、無残に破壊された戦車やトラック、そして死傷したソ連兵の屍だけが残されていた。

もつとも、ソ連軍の数は膨大であるから多少の損害に構わず、彼らは遮二無一進撃した。

さて、こつした激しい戦いが空や地上で繰り広げられる中、河でも戦いの火蓋が切られていた。

黒龍江には満州陸軍管轄の河川艦隊が存在していた。この艦隊には外洋渡航能力がなく、河でしか動けない。おまけに冬に河が凍ると動けなくなるため、乗員は陸戦隊となつて戦うかなり特異な部隊であった。

この艦隊の敵となつたのが、やはりソ連の河川艦隊であった。ソ連軍の河川用砲艦は主砲がT34戦車からの流用品と言づ、これまたかなり特徴的な艇だった。もつとも、ソ連ではこの形態の砲艦はよくある物で、さらに日本陸軍の河川用砲艇も戦車の主砲を使用していた。

史実では、対日不満からこの満州河川艦隊はソ連の宣戦布告後次々と離反し、さらに日本軍と協調して戦闘に加わった艇は撃沈されるなどして大敗している。

しかし、この世界では乗員の練度、士気ともに高くソ連軍と互角の戦いを繰り広げた。

ソ連軍の海軍はあまり有名ではないが、こうした河川艦隊は大河を幾つも持ち、大陸国家であるソ連では大活躍した。そのためソ連軍の士気・練度もそれなりだった。

この戦いは結局痛み分けに終わり、双方に撃沈1と、数隻の被弾艇が出て終わった。ただし、ソ連軍河川艦隊は以後しばらく出撃不能になつたことを考えれば、満州側の戦略的勝利ともいえた。

そして丁度同じ頃、日本海でも戦いの火蓋が切つて落とされようとしていた。数日前に旅順から出撃した我らが義勇艦隊の艦載偵察機が、南下してきたソ連太平洋艦隊を捕捉、航空隊を出撃させようとしていた。

## バトル・オブ・マンチュリア（後書き）

御意見・御感想・要請などお待ちしております。

## 第一次日本海海戦 上

「総員整列！！」

義勇艦隊空母「白虎」の艦橋前の飛行甲板に搭乗員が整列する。その前に設けられた特設の壇上には新任の航空戦隊指揮官である大竹少将が立っている。

「諸君、いよいよ連海軍との決戦の時が来た。相手は空母や戦艦を含む大艦隊である。これまで君たちが相手にしてきた潜水艦や航空機とは桁外れの力を持つている部隊である。しかし、諸君らが日々の訓練から培つた技量を持つてすれば、必ずや敵艦に打撃を与える、大いなる戦果を上げられるものと信じている。普段から我々を2流海軍とバカにしている日本海軍の連中を見返してやれ！！」

「おお！！！」

搭乗員が一斉に叫んだ。

「しかしだ。命は大切にしろ。諸君らは満州国の未来を担う重要な人材である。安易な自爆は決して許さぬ。戦果を上げ、必ず帰つて来い！以上だ。」

「総員敬礼！！」

パイロット達が一斉に敬礼する。

「解散！！機に搭乗せよーー！」

命令と共にパイロットたちは自分の愛機に散つていく。

「司令、行つてまいります！」

飛行隊長で、今回攻撃隊の総指揮を執る光大尉（満州國軍では日本軍との共同作戦が多いことから、階級を日本式に改めた。）が大竹に敬礼する。

「おう…しつかりやつて来い…！」

光大尉は今一度敬礼を返すと、自分の愛機である「炎龍」2型戦闘機に乗り込んだ。

「炎龍」2型は、前作の1型に比べて武装、機銃、エンジン出力を強化した機体である。そのため機体が一回り大きくなり、外観もどことなくP51を思わせるスタイルとなっている。

実戦は今回が初めての機体であるが、速力、武装面ではソ連艦隊のF6F戦闘機を上回っている。パイロットが下手な事をしないかぎり、負けることはありえなかつた。

そして艦爆は日本海軍から購入した「彗星」44型、艦攻は「天山」33型である。どちらとも新型の「流星」攻撃機の投入でお役御免となつていたのを安く引き取つた物だ。

「彗星」44型はエンジンを排気タービン付き新型「金星」エンジンに積み替えた物で、日本海軍では終戦の為に1機も実戦参加せずに終わつている。

その新型「彗星」が800kg爆弾を抱えて出撃していく。もち

ろん、国籍マークは円に5色の配色がなされた満州国のマークだ。

余談であるが、戦後この「彗星」44型のプラモデルが発売されると、多くのモデラー達は満州国時代のカラーで製作したという。

「天山」33型も、やはりエンジンに排気タービンをつけた強化型で、1t爆弾が積載可能となり、さらに機上電探も積んでいた高性能雷撃機だった。

それら3機種が飛行甲板上に整然と並べられ、発進の時を待っている。既に搭乗員が乗り込み、整備兵が車輪止めを外せるように身構えている。

「艦首風上へ！…！」

合成風力を起こすために、艦は風上へ向けて走る必要がある。「白虎」と他の7隻の空母もそのように運動する。

無線用マストが倒され、車輪止めが外される。全機いつでも発進可能な体制に入る。

「発艦始め！…！」

命令と共に、1番機の前にいた士官が合図の旗を振る。そして、一番前に止まっていた「炎龍」戦闘機がエンジン出力を上げて動き始めた。

「白虎」型を始めとして、義勇艦隊の空母にはカタパルトが備えられているが、「炎龍」戦闘機はギリギリその使用が必要のない重量だった。

帽子を振る手空き乗員の姿に見送られながら、光大尉搭乗の「炎龍」は滑走していく。

彼の乗る1番機は飛行甲板の先端から離れると、一瞬沈み込んだが、すぐに上昇していった。1番機に続き、2番機、3番機が次々と発艦し、大空へ向かつて上昇していった。

そして、重い爆弾と魚雷を抱えた爆撃機と雷撃機の番になると、カタパルト担当の兵士が動き、機の発進の補助を行う。

こうして、全機事故も無く発進出来た。今回8隻の空母から発進した機数は183機。日本海軍から借りた「笠置」を除く全ての空母が商船改造の小型空母であつたので、隻数に対して機数は少なかつた。それでも、充分な打撃力を持っている攻撃隊であつた。

その姿を、今回特別に戦艦「長門」に乗り込んだ義勇海軍総司令官白根大将は、艦橋の窓から空を仰ぎ、敬礼しながら彼らを見送っていた。

「がんばれ、そして1機でも多く帰つて来い！」

見送る彼に声を掛ける人物がいた。

「大丈夫ですよ。彼らの腕は我が帝国海軍と充分拮抗しています。きっと戦果を上げて帰つてきますよ。」

今回戦艦「長門」艦長として派遣されてきた早川幹夫大佐だ。

「そう言って頂けると少しは楽になるというものですね。」

(本当にがんばれよ。)

そう祈りながら、彼は蒼穹の彼方へと消えていく攻撃隊を見送つた。

そして約2時間後、攻撃隊はソ連艦隊のレーダーレンジ内に入った。

「全機間もなく敵艦隊に到達する。警戒を厳にせよーー！」

光大尉が無線で全機に注意を促す。すると、間もなく部下の機から連絡が入った。

「左20度上空に敵戦闘機！」

光大尉が目をやると、約40機ほどの機影が一斉に向かってくるのが見えた。今回護衛戦闘機の数は約60機である。

「「白虎」、「蒼虎」、「笠置」戦闘機隊は編隊から分離して敵戦闘機の迎撃を行う。その他の部隊は攻撃隊から離れず直接掩護を続行せよーー！」

彼は命令を伝えると、敵戦闘機との戦いを行うために高度を上げた。それとともに、敵の機種を確認する。

(あの大型の機体に直線的な翼・・・情報どおりF6Fのよつだ。)

彼にとつては初めて会う機種である。太平洋戦争中に彼は7機の撃墜を記録しているが、その多くが爆撃機で、戦闘機も陸軍機しか

会っていなかつた。

「各隊は、各隊長の指揮の元個々に戦闘を行なえ……」

彼はそう命令し、敵戦闘機隊との戦闘に入った。ほぼ反航戦である。F6Fが自慢の6挺の12・7mm機銃を発砲してくる。それを機体を反らして避けながら、空戦フラップを使って得た高い旋回性能を生かして敵機の後ろに回りこむ。

青い機体に、赤い星をマーキングしたF6Fが照準機の真ん中に収まつた。

彼は躊躇せず、合わせて6挺詰まれた12・7mm機銃と20mm機銃を発射した。そして、主翼に集中的に被弾したそのF6Fは、紅蓮の炎を引いて落ちていつた。

第一次日本海海戦 上(後書き)

御意見・御感想・要請などお待ちしております。

## 第一次日本海海戦 中

空戦が始まると、ソ連太平洋艦隊の直掩戦闘機であるF6F戦闘機は、義勇海軍攻撃隊の護衛戦闘機「炎龍」との空戦に手一杯の状態となってしまった。

これはF6F戦闘機の性能が「炎龍」よりも格下であつたことに加えて、パイロットの腕も問題だつた。

ソ連海軍のパイロット達は、F6Fが購入された2年前から操縦してきてた者ばかりであったが、燃料の不足から訓練時間が不足していた。また、F6Fの持ち味である強力なエンジンと馬力を物に言わせての急降下一撃離脱戦法や、編隊による集団戦闘に関する研究も訓練もほとんど行つていなかつた。

このため、数ではほぼ同数で行なわれたこの空中戦は義勇艦隊側の一方的な物となり、最終的に「炎龍」の犠牲が5機であったのに對し、F6Fは43機を失つている。

結局、ソ連戦闘機隊は奮戦したもの、艦隊を守るどころか自分たちの戦力の70%以上を失うという結果になつてしまつた。

その防衛網を、義勇艦隊の艦爆と艦攻は易々と突破し、ソ連太平洋艦隊に襲い掛かつた。もちろん、それに対しても艦隊の対空砲火が一斉に火を噴いた。

駆逐艦から戦艦に至るまで、全ての艦艇があらゆる武器を上空に向けて撃ち放つた。しかし、ここでも練度の不足が露呈してしまつた。

ソ連艦隊には実戦経験がなく、さらに低空で飛ぶ雷撃機や急降下爆撃機への対空訓練に掛けた時間も著しく少なかつた。また、使用する対空火器も VT 信管を内蔵しておらず、旧式の時限信管であった。

これはアメリカ製の艦も同様であった。さすがに最新兵器を売るほどアメリカ人は甘くなかった。さらに、対空射撃指揮装置も一世代古い物だった。そのため、高速で飛ぶ「彗星」や「天山」を追尾できなかつた。

まず最初に犠牲となつたのは、2隻の空母「レーニン」と「スターリン」であつた。この2隻には800kg爆弾で爆装した「彗星」が襲い掛かつた。

2隻は必死に回避運動を行なつたが、最高速力が20ノットもない貨物船改造空母の動きは鈍く、さらに対空砲火も「彗星」に命中弾を与えられず、「レーニン」が2発、「スターリン」が3発の直撃弾を受けた。

ただでさえペラペラの装甲しか持たない護衛空母に、特大級の爆弾が立て続けに命中して無事に済むはずが無い。まず「スターリン」が大爆発を起こし轟沈し、さらに「レーニン」も機関停止し、30分後には「スターリン」の後を追つた。

2隻の空母が被弾した数分後に命中弾を受けたのが、巡洋艦「カリーニン」だつた。同艦は6機の艦爆と4機の艦攻に狙われ、投弾後上昇中の艦爆1機を撃墜したが、魚雷2本と爆弾4発を喰らつて大破し、航行不能となつた。

さらに、同型艦の「ガガノヴィツチ」も10分後には被弾し炎上している。この2艦はソ連製で対空砲火が薄く、良い的となつてしまつた。

さらにアメリカ製の重巡「ポルタワ」も狙われた。同艦は元「ポーツマス」で、40mm機関砲や5インチ対空砲など、それなりの武装を備えていたため、撃墜機こそ少なかつたが、多数の敵機を撃退している。それでも、爆弾2発を後部に受け、速力が半減した。

さらに残る2隻の重巡も戦闘開始30分後にはなんらかの損害を受けていた。

また、3隻の軽巡洋艦も1隻が撃沈され、1隻が大破し、この航空攻撃の終了後戦闘可能な状態で残っていたのは1隻のみと言う状態であつた。

駆逐艦に至つては出港前に国境警戒任務に就いていた艦まで編入し18隻いたにもかかわらず、実に7隻が撃沈され、2隻が戦闘不能となつていた。

それに比べて、2隻の戦艦は最低限の被害で済んでいる。わずかに「ウラジオストク」の3番砲塔に爆弾が一発命中し使用不能となつただけであった。

最終的に義勇艦隊航空隊の攻撃は40分ほどで終わり、軽空母2、重巡2、軽巡1、駆逐艦7隻が撃沈され、重巡1、軽巡1、駆逐艦2隻が戦闘不能のダメージを負つてしまつた。

艦隊の6割が撃沈されるか戦闘不能に陥つてしまつたことになる。さらに、上空掩護の戦闘機隊もウラジオストスクへ向かうか不時着

水し全滅した。これは普通ならこれ以上の戦闘がとても続行できな  
いほどの被害であった。

しかし、艦隊司令官のマリコフ中将は強気だった。

「確かに大きな打撃を被つたが、2隻の戦艦はほとんど被害を受け  
ていない。義勇艦隊には戦艦は無く、一番大型の船でも軽巡クラス  
のはずだ。だから、このまま砲戦に持ち込めば勝機はある。」

この時、マリコフ中将にとつての不幸は、義勇艦隊が戦艦を手に  
入れていることを知らなかつたことにある。もしその情報を得てい  
れば、さすがに艦隊決戦を躊躇つたであろう。なぜなら彼らの乗る  
戦艦は36cm砲で、対36cm防御であり、義勇艦隊の「長門」  
級に対してスペック面で大きく劣つていたからだ。

しかし、彼はそれを知らず、ウラジオストックに護衛戦闘機の発  
進を要請し、戦闘不能艦に同地への回航を支持すると、義勇艦隊目  
掛けて突進を開始した。

もつとも、護衛戦闘機は満州方面の機材消耗の激しさから派遣し  
てもらえなかつたが、これは義勇艦隊からの第2次攻撃がなかつた  
ので幸いにも、それが原因で被害を受ける事はなかつた。

一方、義勇艦隊が第2次攻撃を出さなかつたのは、投入できる全  
ての機体を第1次攻撃に使用したからだ。

パイロット達は再度の攻撃を行えるよう意見具申したが、被弾機  
の数が予想以上に大きく、また帰還予定時刻が夜間になることから、  
結局断念せざる得なかつた。

白根は航空部隊に後方へ下がるよう命じると、ソ連太平洋艦隊との艦隊決戦を行なう事を決めた。

「 いひらの戦艦は 400m 搭載艦であるし、乗員も歴戦の兵士ばかりである。また、巡洋艦や駆逐艦の数も勝っている。負ける要素は何も無い。」

白根は自信に満ちてそう言つた。参謀たちや「長門」の早川艦長らもその意見に賛同し、義勇艦隊は敵艦隊との決戦を求め、北上を開始した。敵艦隊との接触まで 6 時間と見積もられていた。

白根は、考えていた。

（これまで多くの人間を、俺は戦場へと送り込んだ。しかし自分にはまだその経験がない。俺は一度身をもって、彼らが体験した戦場に赴く必要がある。）

**第一次日本海海戦 中（後書き）**

御意見・御感想お待ちしています。

## 第一次日本海海戦 下

夜半、先行する駆逐艦「蒼星」から、レーダーにソ連艦隊を捉えたという報告が入ってきた。「蒼星」はレーダー・ピケット役として、艦隊から30km先を航行していた。

「蒼星」以外にも、レーダーを搭載した夜間偵察機の「天山」も発進している。また、各艦搭載のレーダーも、操作員が目を皿にしてスコープを見つめている。

（）ここまで厳重な哨戒を行なっているのは、もちろんソ連太平洋艦隊を逃がさないためだ。現在ソ連艦隊は空母を失い、その他の艦艇の数も減っているが、まだ2隻の戦艦を中心に南下を続けていた。

義勇海軍はなんとしてもこの艦隊を殲滅しなければならなかつた。それは今行なわれている満州への侵略のみならず、今後も行なわせないためにも。

「総員戦闘配置！！」

「蒼星」からの報告が旗艦「長門」にもたらされた直後、各艦ではブザーが鳴り、乗員がヘルメットと救命胴衣を付けて自分たちの持ち場へと就く。

白根もヘルメットを付ける。既に、艦隊内各艦のレーダーもソ連艦隊の影を捉えていた。そして、ソ連艦隊のレーダー波を逆探が捉えていた。

「距離55000！」

「長門」の40cm主砲の射程は38000m程だが、レーダーと併用しても流石に命中させるのは至難の業だ。有効射程は30000程度と見積もられていた。

「距離35000で射撃開始しますがよろしいですか？」

早川艦長が白根に尋ねてきた。

「わちらの判断に全てお任せします。」

実戦経験が僅かしかない白根に対し、早川は重巡「鳥海」艦長、第2水雷戦隊司令官を歴任してきた歴戦の猛者である。白根は彼に判断を一任した。

「後続の「陸奥」にも信号。目標敵戦艦！距離35000で撃ち方はじめだ！」

かつて戦艦同士の砲撃戦は、弾着観測機を用いて発射される砲弾の命中を確認する方法を取っていた。「長門」も「陸奥」もレーダーは最新式の物を積んできたが、今回の戦いでも一応それを行う。最新式の赤外線暗視鏡を装備した「瑞雲」水偵4機が射出され、敵艦隊へと向かって飛んでいく。

灯火管制を敷いているため、艦隊各艦の様子は全く見えない。今飛んでいった「瑞雲」の翼端灯もすぐに闇の中へと消えていった。

乗員は一刻と迫る戦いを前にして沈黙し、白根の立つ艦橋に聞こえてくるのはエンジンと、波の音だけである。

(本当にこの先にソ連太平洋艦隊がいるのだろうか？それよりも、本当に今我々は海戦に挑もうとしている所なのか？)

白根は内心そう思つた。闇と、静けさが幻想的な気持ちを白根に抱かせたのだ。

だが、そんな彼を現実に引き戻すかのように、続々と艦橋へ報告がもたらされた。

「敵艦隊との距離、49000！」

「先行した「瑞雲」より入電。敵艦隊上空に到達。これよりも任務を開始す。」

相変わらずの沈黙が場を包んでいるが、スタッフ全員に緊張が走る。

「いよいよですね。」

白根の言葉に、早川は無言のまま答えた。

義勇艦隊は、2隻の戦艦を先頭にして単縦陣で進んでいる。既に、空母は護衛の駆逐艦と共に後方に下がり、完全な砲撃と雷撃のみでの打撃艦隊となっている。

白根が低速であり、旗艦である「長門」を先頭にしたのはその40cm砲の威力で敵戦艦を早期に撃破するためというのが理由であったが、実際には彼自身が指揮官先頭の法則を実践しようとしたいう理由が大きい。

指揮官先頭は、士気向上といつてはまたとない物である。しかし、司令部が被弾しやすいといつリスクも負っている。

もちろん、白根はそれを承知の上でこの戦法を取っていた。

対するソ連艦隊は偵察機とレーダーの情報を信じながら、やはり同じ単縦陣を取っていた。

ソ連艦隊が単縦陣を取ったのは、別に指揮官先頭とか敵戦艦の早期撃滅を目指したためではなく、単に練度不足で、夜間の複雑な陣形航行に自信がなかつたからだ。

もちろん、白根らはそんな事情は知らない。

「距離42000！」

お互い20ノット(37km/h)で近づいている。つまり、相対速度は70km近いスピードとなり、このまま行けば、約5分で射撃開始距離となる。

「白根司令官、距離35500で例の運動を行ないますがよろしいですか？」

早川が白根に確認する。

「ええ、頼みます。」

傍から見れば見れば一体何を言つているのかわからないが、既に計画を知っている参謀達の中で、疑問を口にする者などいない。

「しかし、日本海海戦とは逆向きでの決戦となりましたな。かつてのバルチック艦隊は対馬沖で南下してきた連合艦隊に打ち破られましたが、今度は北上してくる我々が彼らと戦つのですね。」

早川がそんなことをしみじみと言つ。さらば、白根も言つ。

「それだけではないよ。この海域は確か、かつて東郷提督が対馬沖砲戦を潜り抜けたロシア第三艦隊を捕獲し、日本海海戦の勝利を搖ぎ無い物にした地点でもある。我々も、今回の戦争の勝利を搖ぎ無い物にしたい物だね。」

「そうですな。」

そんな会話をしている間にも、両艦隊の距離は近づいていく。

「距離400000!」

「ここで、早川は主砲に攻撃準備を発令する。

「主砲砲戦用意!目標敵先頭を走る戦艦!弾種徹甲弾!」

命令を受け、主砲射撃指揮所、主砲塔内が慌しくなる。

射撃指揮所では、操作員が偵察機やレーダーが伝えてくる敵艦との距離や速度、風向きなどを計算機に入力し、最適な主砲発射仰角などをはじき出す。

また主砲塔内では、揚弾機が弾薬庫から砲弾と装薬を主砲塔内に上げる。さらに、砲塔要員が見守りながら、その両方を砲身内に装

填装置を使って入れる。

「第一砲塔装填完了！」

「第二砲塔装填完了！」

「第三砲塔装填完了！全砲塔装填完了！主砲射撃準備！」

既に距離38000を割っている。4基の砲塔が旋回し、暗闇の彼方にいる敵戦艦に照準を合わせる。

「主砲、射撃準備完了！いつでもビリビリ！」

射撃指揮所の砲術長が威勢の良い声で知らせてくる。

「距離36000！」

両艦隊の距離はさらに縮まった。この時、ソ連艦隊は義勇艦隊の右手前方を反航する形で接近していた。

そして、運命の距離へと近づいた。

「距離35500！」

その報告が入ると、艦長の早川が高らかに宣言した。

「面舵一杯！丁字戦法開始！！後続艦に信号！」

これこそ白根の秘策であった。そしてこの戦法を行なった事により、鬼が出るか蛇がでるか、それを知る者は存在しなかつた。

そして、海戦が始まる。

**第一次日本海海戦 下（後書き）**

御意見・御感想お待ちしております。

義勇艦隊は一斉に右へと舵を切つた。40年前東郷提督が行なった丁字戦法を、再びロシアの艦隊に向けて行なつたのである。

そして、先頭の「長門」と「陸奥」回答が始まり、全砲門が敵に指向した所で砲撃を開始する。日本海海戦の時は全艦の回答が終わつた頃に打ち出したが、白根は各艦の砲撃能力の性能が違うために、今回は撃てる艦から射撃を開始するよう通達していた。

「撃ち方始め！…！」

早川艦長の命令の元、8門の40cm砲から轟音を上げて砲弾が打ち出された。発射の際に起きるマズルフラッシュが一瞬「長門」と「陸奥」を明るく映し出す。

一方、ソ連艦隊のマリコフ中将はレーダーで義勇艦隊が、自分たちの艦隊の進路を塞ぐよつて回頭するのを知つた。

「東郷ターンの真似か？連中は猿真似しか出来ないのか？バカめ、私はロジェストベンスキー（バルチック艦隊の司令官）とは違うぞ！…！」

丁字戦法には大きな欠点がある。それは敵が逆に回頭すると距離が離れてしまい、逃がす恐れがあるので。実際、東郷提督も黄海海戦で辛酸を舐めている。

マリコフは直ちに逆向きへの回頭を支持し、さうして砲撃開始を命

令した。

しかし、その瞬間水平線の彼方に発砲炎が見えた。

「先手を取られたか。だが、初弾など当たりはしない！」

マリコフはそう吐き捨てたが、間もなくそれが大きな間違いであるに気付いた。何故なら数十秒後に着弾したその砲弾は、旗艦「ウラジオストク」を狭叉した。

すさまじい衝撃が艦を襲い、さらに水柱が崩れ、その水が甲板に降り注ぐ。これによつて剥き出しの機銃座や、甲板の各所に備えられた備品が損傷する。

「バカな！！この闇の中での砲撃精度だと…？」

マリコフにとっての不幸は、義勇艦隊が既にレーダー射撃を装置を開発していたという事実を知らなかつたことだ。

既にこの時点ではアメリカやイギリス、そしてドイツも優秀なレーダー射撃装置を開発していた。一方、日本も初步的な物を開発していたがこれはまだ数が少なく、しかも性能が一定しないと彼は聞いていた。

しかし、ソ連軍は義勇海軍を保有する大亞細亞造船が独自にこうした装置を開発している事を軽視していた。

この時「長門」と「陸奥」は、突貫の改造工事でこの最新兵器を積んでいた。その性能はアメリカやドイツのものと比べても遜色ない物だった。

さらに、ソ連艦隊上空を飛ぶ「瑞雲」の群は、やはり最新装備の暗視スコープを積んでいた。初步的で、故障が頻発し寿命も短かつたが、先頭の戦艦に振り注いだ砲弾の確認は何とかできた。

その情報を元に、「長門」と「陸奥」は砲塔の旋回各と砲身仰角を修正する。

約30秒後、第2弾が発射された。

一方、ソ連艦隊も砲撃開始したが、航空攻撃で「ウラジオストク」は砲塔が1基破壊されており、さらに砲撃訓練の不足もあって兵士の練度は低く、またレーダー射撃も義勇艦隊が行なっている物より遙かに低い精度の物しか出来なかつた。

加えて、弾着観測機も出していなかつたために、弾着確認を行なう事が出来なかつた。これでは修正射撃を出来る筈がなかつた。

そこへ、第2弾が着弾する。「ウラジオストク」は至近弾だけであつたが、2番艦の「ハバロフスク」に、「陸奥」より発射された2発が命中した。

砲弾は1発が艦尾のカタパルトを全壊させ、もう1発は左舷側の対空火器を全滅させた。さらにそれによつて火災も発生した。

この火災によつて、「ハバロフスク」は闇の中に煌々と自分の姿を照らし出した。幸運といえたのは、この時両艦隊がそれぞれ回頭を終えて砲撃の死角に入つてしまつたことであつた。

そのため、義勇艦隊は2回、ソ連艦隊は1回砲撃をしただけで、

一端砲撃戦は中断した。その間にマツコフは一端距離を取つて、形勢の建て直しを図った。

「敵艦隊離脱を図ります……」

レーダー室からの報告が入る。それに答えるよつて、白根は命令を出す。

「全艦再回頭、その後「長門」、「陸奥」の最大船速25ノットまで增速し敵の追尾に入る。」

白根の命令により、義勇艦隊は再回頭し敵艦隊の追尾に入る。40年前の黄海海戦では、この時連合艦隊はロシア旅順艦隊を逃がしかけた。幸い、戦艦の1隻を落伍させて敵の陣形を崩せたが、危うい勝利であった。

白根は今回そのような失敗はしないと確信していた。敵より優秀なレーダーに加えて、5ノット近く早い艦速を持つていたからだ。

アメリカ製戦艦である「ウラジオストク」、「ハバロフスク」はいずれも同時期の戦艦と同じく最高速度が20ノットしか出せなかつた。

既に距離は39000程度まで離れていたが、全速で追いかければ1時間で再び砲撃を開始できた。

「絶対に逃がしあんぞ……！」

白根は闇の向こうで「あらう」と敵艦隊に向けてそう呟いた。

一方、この時ソ連海軍にはあるアクシデントが起きていた。潜水艦による襲撃である。この時、日本海には義勇海軍、朝鮮海軍、そして日本海軍の潜水艦が潜んでいた。日本はソ連とは正式に宣戦布告はしていなかつたが、樺太が侵攻を受けていたため、事実上敵同士だつた。

この時ソ連海軍を襲撃したのは、舞鶴を出撃した日本海軍の潜水艦「イ52」だつた。

同艦が発射した魚雷は、1本が燃える「ハバロフスク」に、2本が駆逐艦に命中し、駆逐艦は轟沈、さらに「ハバロフスク」は機関室に浸水し15ノットまで速力を落とした。

これによつてただでさえ襲い艦隊速力はさらに落ちた。慌てて駆逐艦が爆雷を落とすが、既に「イ52」は逃亡した後だつた。

「なんたることだ！」

マリコフは眼前で繰り広げられる光景を信じられない思いで見ていた。格下と見ていた義勇海軍にここまで追い詰められているからだつた。

そして追い討ちを掛けるよつて、レーダー室から報告が入る。

「敵艦隊、急速に再接近しています。既に距離37000を切っています！――」

そして間もなく、彼らの頭上に40cm砲弾が再び降り注いだ。数回狭叉や至近弾を出したが、5回目の砲撃で、ついに「ウラジオストク」3発の命中弾が出た。

御意見・御感想お待ちしています。

「主砲打ち方始め！！」

再びソ連艦隊を有効射程に治めた「長門」と「陸奥」が砲撃を開始する。今回の目標は2艦とも被弾し速力の落ちている「ハバロフスク」だ。義勇艦隊は手負いの艦を先に片付けることにしたのである。

結果、速力が15ノットに落ち、旋回力も落ちていた戦艦「ハバロフスク」は2艦からの集中射撃を浴びた。そして、第2射撃でついに3発の40cm砲弾を浴びた。その内の1発が、4番砲塔の天蓋を貫いて、弾薬庫内で爆発した。

「ハバロフスク」は元がアメリカ製の「ペンシルヴァニア」級戦艦の「アリゾナ」で、武装は36cm砲12門であった。戦艦は自艦と同じ口径の砲に耐えられるだけの装甲しか持たない。結果砲弾の貫通を許してしまったのだ。

40cm砲弾が爆発した数秒後には、弾薬庫内にあつた数百発の36cm砲弾が誘爆した。その爆発が持つ破壊エネルギーに艦体が耐えられるはずがなく、次の瞬間には竜骨が折れ、「ハバロフスク」は真つ二つに折れて沈んでいった。

轟沈である。

旧式とはいって、3万近くもある戦艦がまるで飴細工の様に折れ曲がり沈んでいく姿に、その他の艦艇の乗員達はただ呆然と見ているしかなかった。

一方、撃沈した側である義勇艦隊各艦ではこの光景に多くの兵士たちが万歳した。

そんな中で、白根は早川に命じる。

「目標を至急敵1番艦に変更！連中に反撃の隙をとえるな！それと巡洋艦ならびに水雷戦隊に突撃を命令！――！」

「了解――！」

ただちに「長門」と「陸奥」の2隻では目標を「ウラジオストク」に変更し、射撃指揮所では操作員が射撃管制板に新たな数値を打ち込む。

「目標との距離およそ3万――！」

「敵速17ノット――！」

兵士たちが再び慌しく動く。

そんな2艦の横を、命令を受けた巡洋艦と駆逐艦が追い越し、敵艦隊へ向けて突入していく。これらの艦は残存するソ連軍中小艦艇に留めを刺すのだ。

それらを見送りながら、白根は真っ暗な水平線の向こう側を凝視していた。すると、チカチカッと光が発せられるのが見えた。発砲炎である。

直ぐに見張りの兵士もそれを発見し、早川が回避運動を命令する。

そして1分後には、敵の砲弾が着弾する。当たりはしなかつたが、先ほどの砲撃戦の時よりは近い位置に着弾していた。距離が近づいた分正確になつていいようだ。

「早くケリをつけなければな。」

白根がそう呟いた直後、主砲の装填作業終了の報告が来る。

「砲撃開始！目標敵1番艦！…」

早川の命令の元、砲撃が再開された。先ほど「ハバロフスク」を撃つた時は敵に対し正面を向けていたために、前部の2基しか砲塔が使えなかつたが、今度は全砲門を敵艦に指向して撃つ。

両艦から発射された16発の砲弾が、夜空を切り裂き飛んでいく。まだ周りは暗闇が覆つていて、白根の目では敵艦の姿を視認するのは難しい。

だが、間もなく向こうの方でパツパツと閃光が数回光るのが見えた。

「観測機より報告、敵戦艦に命中弾2！…」

通信室からの報告がスピーカー越しに、艦橋へ伝えられる。

「いいぞ！」

確実に彼らはソ連艦隊を追い込んでいた。

ところが、好事魔多し、まもなく彼らを大いに冷やりとさせる事態が発生した。「ウラジオストク」が発射した砲弾の一発が艦橋基部に命中したのである。

グワーン！！

凄まじい衝撃が艦橋を揺さぶった。しかし、その後の爆発は起きた。奇跡的に不発弾だったのだ。もし爆発していたら大惨事になつてゐるところであつた。

もつとも、これによつて「長門」艦内の士氣はさらに高まつ、せらに数発の命中弾を「ウラジオストク」に叩き込んだ。

しかし、「ウラジオストク」もロシア人らしい粘り強さを發揮し、果敢に反撃してきた。「長門」被弾の数分後には、「陸奥」がメインマストの先端を叩き折られた。これによつて一時的に「陸奥」は無線がお釈迦となつた。

さらに、その1分後には「長門」の一番主砲に命中弾を出したが、これは天蓋の分厚い装甲版にはじき返された。

しかし勇猛果敢に反撃を行なう「ウラジオストク」であったが、それもほんの僅かの間だつた。砲口径が一回り上の砲を持ち、練度に勝る戦艦を、しかも倍の数相手するのはきつすぎた。

「ウラジオストク」が「長門」、「陸奥」に反撃し命中弾を出したのはこれが最後であった。その後は砲撃しても当たらなくなり、さらに2艦から40cm砲弾を数発受けると、砲の発射感覚自体が長くなり、ついにはその砲撃さえ止んだ。

大量の命中弾を受けた「ウラジオストク」は、海上に浮かぶ松明となり、漂流し始めた。もはや「ウラジオストク」に戦闘能力はなかつた。

白根はそれを確認すると、新たなる命令を下した。

「敵戦艦への砲撃はもはや不必要だ。後は駆逐艦の魚雷に任せよ。」

「わかりました。砲撃中止!」

こうして20世紀最後の戦艦同士の砲撃戦は終わりを告げた。最終的に「ウラジオストク」は14発の40cm砲弾を喰らい、その内の1発が機関室に深刻なダメージを与えた事によって、戦闘、航行能力を紛失した。

数時間後、黎明の空のもと魚雷で処分される事となつた同艦が沈む時、義勇海軍、そして救助されたソ連海軍両軍の兵士は敬礼で、奮戦した戦艦の最後を見取つた。

戦艦同士の砲撃戦は終わつたが、巡洋艦と駆逐艦による砲撃戦は続いていた。しかし、この対決も戦艦同士の対決同様義勇海軍有利で進んだ。

優秀な電探を持ち、さらに練度で勝る義勇海軍艦艇は次々とソ連軍艦艇を討ち取つていった。もつとも、こちらも一方的な戦いが行なわれたわけでなく、義勇海軍艦艇にも損害が出ている。

一方的なワンサイドゲームなど滅多にないのだ。

まず先陣を切つて突入した重巡「妙高」が2番、3番砲塔に駆逐艦の砲弾を受けて一時火災を起こしている。幸いだったのは初期消火のおかげで弾薬庫への延焼を防げた事だ。

その他に、駆逐艦「流星」がソ連駆逐艦の集中砲撃を受けて撃沈された。義勇艦隊創設以来活躍してきた同艦は、その活躍分の代償を一気に払わされたかのごとく、ボロボロとなり、最終的に曳航不可と判断され、乗員がキングストン弁を抜いて自沈処分された。

御意見・御感想お待ちしています。

## 戦いの終焉

海戦が義勇艦隊の勝利で終わつたため、ソ連軍は海上からの支援を受けられなくなつた。義勇艦隊は損傷艦を下げる、空母艦載機による日本海封鎖を開始し、ウラジオストク軍港から日本海を航行して満州国へ侵攻するルートを完全に締め上げたからだ。

そして陸上で戦闘も、ソ連軍は当初こそ国境線から数十キロの地点まで進軍したが、満州国空軍の総力をあげた航空攻撃によつて大損害を被つた。

ソ連空軍機は航続距離が短く、充分な航空支援が出来ず、また対空戦闘に使用可能な車両も西部戦線へ優先配備されていたため不足しており、ソ連軍機甲部隊は満州国空軍機の跳梁をただ許すしかなかつた。

それでも、ソ連軍は全体主義国家の軍隊である。下手に退却や撤退をすれば政治将校によつて肅正の対象となり、将官でも厳罰を免れない。彼らはスター・リンの命令なくば、ただひたすら前進するしかなかつた。

ソ連軍は数に物を言わせ、遮二無一進撃を続けた。だが満州内陸部へ入れば入るほど、満州国軍の反撃は苛烈を極めた。飛んでくる航空機の感覚は短くなり、各地には英國から購入された17ポンド砲を要した砲兵陣地が気付かれていて、次々とソ連軍戦車を討ち取つた。

また、満鉄沿線を進撃した部隊の中には24cm列車砲の攻撃を受けた部隊もあつた。

しかし、そうした攻撃による損害にもげず、多大な損害を出しながらもソ連軍は一つ、また一つ満州国軍の防衛線を抜いていった。

しかし、進撃開始10日後ついにソ連軍は進撃不能になった。度重なる戦闘の損害が極致に達し、さらに後方からの補給が完全に途絶したからだ。

満州国空軍のB24爆撃機がソ連極東地域の生命線とも言えるシベリア鉄道を各地で分断し、ヨーロッパから運ばれてくる支援物資の流れをほぼ完全に止めてしまった。また、それさえも搔い潜つた少量の補給物資も、輸送中に満州国軍の襲撃を受け失われてしまつた。

現地での略奪をしようとも、住民の殆どは後方に引き上げており、村々には食料も燃料も、衣服や家財道具なども殆ど残されていなかつた。

占領した満州国軍の前線陣地や基地も同様で、燃料や弾薬はほとんど残されていなかつた。こうしてソ連軍はもはや補給が絶望的な状況に追い込まれた。

さりに、シベリア鉄道への空爆は満州侵攻軍のみならず、ソ連極東地域が干上がる可能性さえも浮上させた。

ここに至り、スターリンはシベリア鉄道守備の方が現段階では重要として、ついに満州侵攻作戦の一時中断を命令した。侵攻開始2週間後のことであった。

だが、時既に遅く、ソ連軍の侵攻部隊の一部にはついに政治士官

の言つ事を聞かず、降伏する部隊が出始めた。また、撤退する部隊にも大きな苦難が待っていた。

満州國軍は、今後ソ連の満州侵攻の意志を挫くために、徹底攻撃に移つたのである。その主力となつたのが、これまで重要な局面意外出撃を控えていた戦車や自走砲の部隊であつた。

彼らは満鉄で各地へと運ばれると、一直線にソ連へ向けて撤退する部隊を側面から攻撃した。戦車の主力はドイツから購入した長砲身砲装備の4号戦車に、4号突撃砲、対空砲を主砲に流用した日本軍との共用車両の3式中戦車、3式自走砲であつた。

これら戦闘車両はソ連軍戦闘車両の戦闘力を大きく上回つていた。この時、ソ連軍が保有していた車両はT26やBT7といった旧式車両が中心で、お披露目程度にT34やSU152が配備されるのみだつた。しかもそれさえも、連続した戦闘で弾薬や燃料がつきかけ、車体もボロボロであつた。

「突撃！ 敵は虫の息だ！！ 満州國陸軍の底力をを見せ付けてやれ！！」

そう指揮車両に指定された3式中戦車の上で喚くのは、盧溝橋事件の責任を取られ日本陸軍を放逐された牟田口中将だ。

職業軍人であつた彼は、日本陸軍を予備役編入された直後に満州へと渡り、そこで満州陸軍に移籍した。しかし、当時の満州陸軍は未だ発展途上の段階であり、とくに將軍や士官には軍閥から移籍した経歴の怪しい人間が多数含まれていた。

そのため、総司令官に就任した石原の手によつて能力のない者は有無を言わさず首にされた。牟田口もその時、「旧來の戦闘思想に

「固執している頭の古い軍人」という評価を受け、危うく2度目の予備役編入の危機に遭っている。

そんな彼を救つたのがノモンハン事件であった。その時前線の部隊指揮官を務めた彼は、戦車を使つた戦いに惚れこみ、2年ほどドイツに留学して戦車線を学び、現在は戦車師団の師団長を務めていた。

「側面から攻撃しろ、敵に反撃の暇を与えるな！！スピードこそが命だ！！」

ドイツ軍の電撃戦から学んだ彼の高速での戦車運用は、各地でソ連軍を撃滅していく。中には、その報告を聞いて恐れをなし、満州国軍戦車部隊を見た途端降伏したり味方を見捨てて遁走したり、車両を捨てて敗走する部隊さえ出た。

牟田口中将率いる満州陸軍戦車部隊は、まさしくソ連軍にとつて、会いたくもない悪魔となつて、台風のごとく暴れ回つた。

最終的に、この撤退戦の最中に破壊されたソ連軍戦車は560両、捕獲された車両も120両にのぼつた。

そして侵攻開始3週間目のその日、最後のソ連軍部隊が満州領内から撤退し、満州とソ連の間に戦われた短くも激しい戦争は幕を降ろした。

この戦争でのソ連軍側の被害は兵員戦死3万、降伏2万、負傷2万、戦車1400両、車両2800両、航空機2200機、ソ連太平洋艦隊壊滅という甚大な物であった。

結局これ以後、ソ連軍はその戦力を東部戦線に集中することとなり、満州国への侵攻が行なわれる事は2度となかった。

一方、満州国側はソ連軍を撃退こそしたが、国境線地域の村や町は大きく荒廃し、多額の予算を掛けてその復興を行なわなければいけなかつた。また、人員面でも戦死5千、負傷1万2千という決して無視できない損害を受けた。

ただし、ソ連軍が満州への再侵攻を行う予兆はないために、取りあえず満州国は戦争といつ重い肩の重荷をようやく下ろすことが出来た。

正式な講和こそまだであつたが、事実上太平洋戦争から数えて3年9ヶ月に渡る長い戦争はようやく終わりを告げた。

**戦いの終焉（後書き）**

御意見・御感想お待ちしています。

## 終わりと始まり

1945年11月、世界は大きく動いた。ドイツならびにイギリスの奇襲爆撃隊がモスクワのクレムリンに夜間爆撃を加えた。この結果、ヒトラーと並ぶ稀代の独裁者は突然の死を迎えることとなつた。

スターリンの死は、ソ連を含む全ての国に大きすぎる衝撃を与えた。特にソ連と戦っていた満州やドイツ・イギリスと言った国々は講和する相手が消えてしまった。爆撃によつてスターリンのみならず、政府の幹部が全て消えてしまつたからだ。

その後数週間に渡つて混乱が続いた。ただソ連軍は当初の命令を律儀に守つて各地で戦闘を継続した。もつとも、これは逆にさらなるソ連本土への爆撃や、南樺太侵攻後反撃に転じた日本の北樺太侵入を許す事となつた。

結局、ソ連が次の動きに出られたのは1ヵ月後の事だつた。地方の行政委員長から急遽首相に抜擢されたフルシチヨフ率いる新政府がソ連全軍に対する停戦命令と、ドイツ・イギリス・満州などへの交戦国に対して講和を打診した。

既に戦争に疲れていた各国は早速この提案に飛びつき、講和会議に入った。満州とソ連との講和会議は、日本も含むために東京のソ連大使館で行なわれた。

約1週間に渡る会議は、互いが強気で挑んだために調整に難航したが、最後はソ連側が妥協する形で結ばれた。その条件は日本に対しては北樺太の譲渡、満州に対してはこれまで一部不確定だった国

境線の満州側の提案する線での確定であった。ちなみに、当初日本と満州は賠償金も要求したが、結局これは国際法違反による重犯罪のみに対する物意外は全て棄却された。

満州にしてみれば、国境線沿いの多くの村や町が焼かれたからこの程度ではとても納得出来る額ではなかつた。しかし、条約の瓦解を恐れて飲まざるえなかつた。

こうして昭和20年11月20日に日満ソ講和条約が締結され、太平洋戦争から足掛け3年11ヶ月続いた戦争は終わりを告げた。

日本や満州では市民1人1人がようやく訪れた平和に狂喜した。しかし、それはある意味、つい昨日まで戦場に身を置いてきた戦士たちの役目が終わつた事を意味していた。そしてそれは我が義勇海軍でも同じことだつた。

建国以来、満州国の海の守り神として働いてきた彼らであつたが、戦後急速に進む軍縮の流れには勝てなかつた。義勇海軍は一応大亞細亞造船の持ち物であつたが、その維持費の多くは国から出ていた。その補助が極限まで削減されでは、もはや維持する事は出来なかつた。

昨日までの戦いが夢幻のことく、義勇海軍艦艇はその多くが居場所を失つた。最終的には、軽巡2、駆逐艦4、フリゲート4、コルベット4、潜水艦2、練習艦1、補給艦1を除いて全ての艦の退役が決定した。空母は全て貨物船へと復旧し、その他の軍艦は解体処分される。また、航空隊も大幅に縮小された。

その決断を、白根は素直に下した。

「彼らは充分に戦い、その使命を全うしたと考えている。義勇海軍艦艇としての奉公はもう充分だろ。」

これが彼のコメントであった。ただし、そうした艦艇の多くは義勇海軍を退役したものの、その後売却されフィリピンやインドネシアといった新興国海軍の艦艇として余生を送る事となつた。また、旅順で記念艦となつて永久保存される船もあつた。

白根は、それら艦艇が新たなる使命を帯びて、海の向こうへ旅立つていくたびに港へ赴き、敬礼をして見送つた。

そして昭和21年4月、最後のフリゲート艦がインドネシアのスラバヤに向けて旅立つ時も、白根は港の桟橋から敬礼をして見送つた。

こうして、事実上栄光に包まれた義勇海軍の歴史は終わりを告げたのであつた。しかし、それは新たなる始まりである。小規模になつしまつたが、義勇海軍は今後も満州國を守る防人としての使命があつた。

戦争はいつまた起ころかわからない。現在も中国大陸の政治状況は流動的で、一時的に勢力を伸ばした中国共産党も、その後多量の援助を受けた国民党軍の反撃で、その勢力拡大は足踏み状態となつてゐる。満州國にとつては、未だ余談を許さぬ状況と言えた。

しかし、それでも束の間になるかもしぬないが平和が訪れたのも現在中国大陸は海南島、華南地域を中心に支配権を持つ中華人民共和国と、香港までの沿岸部と華北地域を抑える中華民国に色分けされている。満州國にとつては、未だ余談を許さぬ状況と言えた。

しかし、それでも束の間になるかもしぬないが平和が訪れたのも

事実であった。

消え行く物があれば、新たに生まれる物がある。それが世の道理であつた。

「白根大将。」

桟橋で一人感傷にふけっていた白根に、声をかける人間がいた。

「やあ、八島中将。」

太平洋戦争中は航空戦隊司令官として活躍し、今回航空隊総司令官に就任した八島文幸中将だつた。

「やはりここにおられたのですね。」

「ああ、旅立つ船を見送つていた。」

「そうですか。」

「なあ、八島君。私のやつたこと・・・義勇海軍を作り戦つたことは意味があつたのかな? 戦争には勝つたかもしぬないが、結果的に多くの若者を死地へと送つてしまつた。」

「それについては・・・私にはなんとも申し上げられません。意味があつたのかもしれませんし、なかつたのかもしれません。それは、今後の歴史が証明してくれるでしょう。」

戦争は人が起こす最悪の犯罪かもしれない。だが、そこに意味があるかないかはそれを決める人次第なのだ。

(いや、むしろやうこつことだからこそ、歴史上の出来事として意味を持たせる必要があるのであります。)

ハ島はそんなことを一瞬考えたが、すぐに頭を切り換えた。

「や、司令官。まもなく白根少佐と加古少尉の結婚式ですよ。」

戦争中は航海士官と戦闘機パイロットとして戦つた二人は、ようやくこの日挙式を迎える。

「ああ、そうだったな。じゃあ、行こうか。」

「はい。車を待たせてありますから。」

「つむ。それにしても・・・まったく護の奴もつ子供を作るなんて。」

「

先日、結婚式の招待状を届けに来た彼は、加古少尉が既に妊娠してこられるのを告げた。

「ははは・・・まあ、子供が既に出来てしまったのはともかく、その子は満州のあたらしい未来を担う子供になるんですね。我々は、武器を使う因果な仕事をしていますが、彼らが平和に生きていくける国を、しっかりと守つてあげたい物ですね。」

「そうだな。平和は非武装によって成り立つという者もいるが、私としてはまだそれは早すぎると思っている。我々は我々の信念を持つて、国を、そこに住む人々を守つていきたいね。」

そして彼らは車に乗り込んだ。まだ見ぬ、新しい未来を作るため  
に。

## 終わりと始まり（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。なお、本編は完結です。後1話、総解説をもってシリーズ完結となります。

## 総解説後編とあとがき

### 義勇海軍航空母艦「飛翔」級

全長160m 速力20ノット 武装8cm連装高角砲4基、40mm連装機関砲4基、25mm連装機関銃6基

搭載機24機

義勇海軍が主力空母である「白虎」級の損失に備えて建造した軽空母。商船の船体を流用して建造された。速力、航空機搭載能力、武装などは貧弱で、当初から船団護衛空母としての運用のみ考えられて建造された。一応力タパルトを備えていたために重い機体でも運用可能だった。

義勇海軍向けに2隻、その他輸出用に7隻が建造されたが、その他に練習用の「雛鳥」が存在する。

### 義勇海軍練習航空母艦「雛鳥」

全長160m 速力20ノット 武装8cm連装高角砲4基、40mm連装機関砲4基、25mm連装機関銃6基

搭載機18機

上記の「飛翔」級の順同型艦。空母配備のパイロット養成のために建造された。基本的に同スペックだが、練習生用の講堂を開設した関係で搭載機は少なくなっている。なお、同型艦は存在しない。

### 義勇海軍フリゲート「新京」級

全長85m 排水量850t 速力24ノット 武装12・7cm連装両用砲1基、同単装砲1基、40mm連装機関砲3基、25m

m 単装機銃12基、爆雷多数

遠洋での船団護衛用に新規設計されたフリゲート。日本の海防艦を参考にしつつ徹底的な省力化が図られた。ただし、ある程度の対艦戦闘も考慮されたために速力は24ノットが確保された。旅順の大亞細亞造船だけで100隻近くもマスプロされ、日本の海上護衛艦隊や同盟国海軍にも輸出された。

戦後、義勇海軍用の多くが退役して売却されたが、使い勝手が良く戦後も小改良を加えながら建造が続けられた。

各国で使用されたため、欧米の軍事雑誌の中には「アジアの標準型艦艇」と評した。また、武装を減らして海上保安庁の巡視船や、海上警察のパトロール船、気象台の気象観測船に改装されたり、建造を変更した艦もあった。

#### 義勇海軍艦上戦闘機「炎龍」（量産型）

全長9.2m 全幅10.8m 自重20000kg 速力640km  
m 航続力1600km（増槽なし） 武装20mm機関銃2基、  
12.7mm機関銃2基  
発動機「猛虎2型」液冷エンジン1450馬力

満州に移住してきたハインケル博士がHe100を元設計にして開発した。量産性と航続力を上げる事に設計の重点が置かれた。最高速力こそ落ちたが、整備性、生産性、航続力は飛躍的にアップした。また、川西より購入した自動空戦フラップを装備して高い空戦能力を誇った。搭載した「猛虎2型」は輸入したマリーンエンジンのライセンス版。エンジンを出力アップした2型戦闘機も製作されている。

## あとがき

この作品は、昨年まで掲載していた「幻艦記」シリーズに続く長編架空戦記として書きました。もちろん、市販の作品に比べれば分量、中身、考証等は及びませんが、それでもかなり資料を調べて書いたつもりです。

一応ここに記しておきますが、作者はこの作品を戦争賛美のために書いたつもりは毛頭ありません。むしろ、作中の数箇所に反戦的なメッセージを込めて書きました。

架空戦記とは、あの長く厳しい悲惨な大戦をショミレーションする作品のことですが、それを書く意味とは、もちろん歴史にありえたかもしれない流れに興味を持つて調べていく事でもあります。が、それ以外にも戦争の現実や戦争の中にあって忘れ去られた事実、今後も生かしていく事実を人々に知らしめる手段の一つでもあると考えています。

今後は、新たに掲載を開始した「異次元世界大戦」でこの分野の小説を続けていくつもりです。約8ヶ月もの長きに渡つての御愛読ありがとうございました。

平

成20年4月11日

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4806c/>

---

義勇艦隊奮戦録

2011年6月3日09時19分発行